

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書34

—成田市大安場Ⅰ遺跡・辰巳ヶ入遺跡・大安場Ⅳ遺跡・大安場Ⅴ遺跡・
水の上Ⅰ遺跡・一坪田入Ⅱ遺跡・夜番Ⅱ遺跡・夜番Ⅰ遺跡—

平成31年2月

東日本高速道路株式会社
公益財団法人 千葉県教育振興財団

首都圏中央連絡自動車道 埋蔵文化財調査報告書34

なりた おおやすば いち たつみ がいり おおやすば よん おおやすば ご
—成田市大安場 I 遺跡・辰巳ヶ入遺跡・大安場IV遺跡・大安場V遺跡・
みず かみいち ひとつば たりに やばんに やばんいち
水の上 I 遺跡・一坪田入 II 遺跡・夜番 II 遺跡・夜番 I 遺跡—



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（千葉県文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として、昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第776集として、首都圏中央連絡自動車道建設事業に伴って実施した成田市大安場Ⅰ遺跡ほか7遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、旧石器時代の石器をはじめ、縄文時代の土器や石器・耳飾等が出土し、この地域の歴史を知るうえで貴重な成果が得られております。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成31年2月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 平 林 秀 介

凡　例

- 1 本書は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社による首都圏中央連絡自動車道（大栄～横芝）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の8遺跡を収録したものである。

大安場I遺跡	成田市吉岡字大安場 1343-8 ほか	(遺跡コード 211-092)
辰巳ヶ入遺跡	成田市吉岡字大安場 1343-3 の一部ほか	(遺跡コード 211-095)
大安場IV遺跡	成田市吉岡字大安場 1125-8 ほか	(遺跡コード 211-093)
大安場V遺跡	成田市吉岡字大安場 1124-18	(遺跡コード 211-094)
水の上I遺跡	成田市水の上 962-9 の一部ほか	(遺跡コード 211-096)
一坪田入II遺跡	成田市多良貝 245-534 ほか	(遺跡コード 211-090)
夜番II遺跡	成田市川上 245-506 の一部ほか	(遺跡コード 211-089)
夜番I遺跡	成田市川上 245-1931 の一部ほか	(遺跡コード 211-091)
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社の委託を受け、公益財團法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の期間、担当者などについては、第1章第1節に記載した。
- 5 本書の執筆は、新田浩三・城田義友・大久保奈奈が担当し、編集は新田が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所および東日本高速道路株式会社、成田市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第3図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「新東京国際空港」(NI-54-19-10-1)、「成田」(NI-54-19-10-3)、「多古」(NI-54-19-10-2)、「酒々井」(NI-54-19-10)

第4・18・20・21・25・26・44・45・47・92・93図 国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所による現況図
- 8 図版1の航空写真是、国土地理院空中写真 KT831X-C8-11 (昭和58年6月撮影) を使用した。
- 9 本書で使用した座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標 (国家標準直角座標第IX系) で、図面の方位は全て座標北である。
- 10 土器断面図内の「●」は、胎土中に纖維を含有していることを示す。
- 11 各遺跡の調査次数については、1次調査を(1)、2次調査を(2)というように、遺跡名の後、または遺構名・トレンチの前に、次数をかっこ内に記し略記する場合がある。
- 12 旧石器時代のブロック・ユニットの大きさの表現は、(南北) m × (東西) m に統一してある。

本文目次

序 文	
凡 例	
第1章 はじめに	1
第1節 調査の概要	1
第2節 遺跡の位置と環境	3
第2章 大安場Ⅰ遺跡	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 遺構と遺物	6
第3章 辰巳ヶ入遺跡	24
第1節 遺跡の概要	24
第2節 遺構と遺物	25
第4章 大安場Ⅳ遺跡	26
第1節 遺跡の概要	26
第5章 大安場Ⅴ遺跡	27
第1節 遺跡の概要	27
第2節 遺構と遺物	28
第6章 水の上Ⅰ遺跡	29
第1節 遺跡の概要	29
第2節 遺構と遺物	29
第7章 一坪田Ⅱ遺跡	30
第1節 遺跡の概要	30
第2節 遺構と遺物	32
第8章 夜番Ⅱ遺跡	56
第1節 遺跡の概要	56
第2節 旧石器時代	61
第3節 繩文時代	115
第4節 近世	118
第9章 夜番Ⅰ遺跡	119
第1節 遺跡の概要	119
第2節 遺構と遺物	122
報告書抄録	卷末

挿図目次

第1章 はじめに

第1図 対象遺跡位置概略図	1	第34図 縄文土器(7).....	41
第2図 グリッドの呼称例	3	第35図 縄文土器(8).....	42
第3図 遺跡の位置と周辺の地形	4	第36図 縄文土器(9).....	43
		第37図 縄文土器(10).....	45
		第38図 縄文土器(11).....	48
		第39図 縄文土器(12).....	49
		第40図 縄文土器(13).....	50
		第41図 土製品.....	51
		第42図 縄文石器(1).....	53
		第43図 縄文石器(2).....	54

第2章 大安場I遺跡

第4図 大安場I遺跡調査区割図	7	第44図 夜番II遺跡調査区割図と上層確認調査範囲.....	58
第5図 上層本調査範囲と遺構・遺物出土状況	8	第45図 夜番II遺跡調査区割図と下層確認・本調査範囲.....	59
第6図 大安場I遺跡基本土層図	9	第46図 夜番II遺跡調査基本土層図.....	60
第7図 陰穴・土坑	10	第47図 夜番II遺跡下層ブロック・ユニット位置図.....	62
第8図 縄文土器(1)	13	第48図 1aユニット器種別分布.....	64
第9図 縄文土器(2)	14	第49図 1aユニット石材別分布.....	65
第10図 縄文土器(3)	15	第50図 1aユニット第1ブロック遺物分布.....	67
第11図 縄文土器(4)	16	第51図 1aユニット第1ブロック出土石器(1).....	68
第12図 縄文土器(5)	17	第52図 1aユニット第1ブロック出土石器(2).....	69
第13図 縄文土器(6)	18	第53図 1aユニット第1ブロック出土石器(3).....	70
第14図 縄文土器(7)	20	第54図 1aユニット第1ブロック出土石器(4).....	71
第15図 縄文土器(8)	21	第55図 1aユニット第1ブロック出土石器(5).....	72
第16図 縄文土器(9)	22	第56図 1aユニット第2ブロック器種別分布.....	74
第17図 縄文石器.....	23	第57図 1aユニット第2ブロック母岩別分布.....	75

第3章 辰巳ケ入遺跡

第18図 辰巳ケ入遺跡調査区割図	24	第58図 1aユニット第2ブロック出土石器(1).....	76
第19図 基本層序と陰穴	25	第59図 1aユニット第2ブロック出土石器(2).....	77

第4章 大安場IV遺跡

第20図 大安場IV遺跡調査区割図	26	第60図 1aユニット第3ブロック遺物分布.....	79
-------------------	----	----------------------------	----

第5章 大安場V遺跡

第21図 大安場V遺跡調査区割図	27	第61図 1aユニット第3ブロック出土石器.....	80
第22図 大安場V遺跡基本土層図	28	第62図 1bユニット器種別分布.....	82
第23図 縄文石器.....	28	第63図 1bユニット石材別分布.....	83

第6章 水の上I遺跡

第24図 縄文土器.....	29	第64図 1bユニット第4ブロック器種別分布.....	84
第25図 水の上I遺跡調査区割図	29	第65図 1bユニット第4ブロック母岩別分布.....	85

第7章 一坪田II遺跡

第26図 一坪田II遺跡調査区割図	30	第66図 1bユニット第4ブロック出土石器(1).....	86
第27図 遺構配置・基本層序・陰穴	31	第67図 1bユニット第4ブロック出土石器(2).....	87
第28図 縄文土器(1)	34	第68図 1bユニット第5ブロック器種別分布.....	89
第29図 縄文土器(2)	35	第69図 1bユニット第5ブロック母岩別分布.....	90
第30図 縄文土器(3)	36	第70図 1bユニット第5ブロック出土石器.....	91
第31図 縄文土器(4)	37	第71図 1bユニット第6ブロック器種別分布.....	92
第32図 縄文土器(5)	39	第72図 1bユニット第6ブロック母岩別分布.....	93
第33図 縄文土器(6)	40		

第73図	1 b ユニット第6ブロック出土石器(1).....	94	第85図	単独出土石器.....	108
第74図	1 b ユニット第6ブロック出土石器(2).....	95	第86図	旧石器時代主要石器.....	110
第75図	1 b ユニット第7ブロック器種別分布.....	97	第87図	窓穴.....	115
第76図	1 b ユニット第7ブロック母岩別分布.....	98	第88図	縄文土器(1).....	116
第77図	1 b ユニット第7ブロック出土石器.....	99	第89図	縄文土器(2).....	117
第78図	1 b ユニット第8ブロック器種別分布.....	101	第90図	縄文石器.....	118
第79図	1 b ユニット第8ブロック母岩別分布.....	102	第91図	錢貨.....	118
第80図	1 b ユニット第8ブロック出土石器(1).....	103	第9章 夜番I 遺跡		
第81図	1 b ユニット第8ブロック出土石器(2).....	104	第92図	夜番I 遺跡調査区割図(1).....	119
第82図	1 b ユニット第8ブロック出土石器(3).....	105	第93図	夜番I 遺跡調査区割図(2).....	120
第83図	第9ブロック出土石器.....	106	第94図	夜番I 遺跡基本土層図.....	121
第84図	第9ブロック遺物分布.....	107	第95図	上層出土石器.....	122

表 目 次

はじめに

第1表 至標調査一覧.....2

第8章 夜番II 遺跡

第2表	文化層ブロック別器種組成表.....	61
第3表	文化層ブロック別石材組成表.....	61
第4表	第1文化層器種石材組成表.....	63
第5表	1 a ユニット器種石材組成表.....	66
第6表	1 a ユニット第1ブロック組成表.....	66
第7表	1 a ユニット第2ブロック組成表.....	73
第8表	1 a ユニット第3ブロック組成表.....	78
第9表	1 b ユニット器種石材組成表.....	81

第10表	1 b ユニット第4ブロック組成表.....	81
第11表	1 b ユニット第5ブロック組成表.....	88
第12表	1 b ユニット第6ブロック組成表.....	91
第13表	1 b ユニット第7ブロック組成表.....	96
第14表	1 b ユニット第8ブロック組成表.....	100
第15表	第9ブロック組成表.....	106
第16表	単独出土器種石材組成表.....	108
第17表	旧石器属性表(1).....	111
第18表	旧石器属性表(2).....	112
第19表	旧石器属性表(3).....	113
第20表	旧石器属性表(4).....	114

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺航空写真(昭和58年6月撮影)
図版2	大安場I 遺跡調査状況・出土状況(1)
図版3	大安場I 遺跡出土状況(2)
図版4	辰巳ヶ入・大安場V・水の上I・一坪田入II 遺跡調査状況・出土状況
図版5	一坪田入II 遺跡調査状況・出土状況
図版6	夜番II 遺跡調査状況・出土状況(1)
図版7	夜番II 遺跡出土状況(2)
図版8	夜番II 遺跡出土状況(3)・夜番I 遺跡調査状況・出土状況
図版9	夜番II 遺跡旧石器時代出土石器(1)
図版10	夜番II 遺跡旧石器時代出土石器(2)
図版11	夜番II 遺跡旧石器時代出土石器(3)・縄文時代出土石器
図版12	大安場I・大安場V・一坪田入II・夜番I 遺跡出土上層石器
図版13	大安場I 遺跡出土縄文土器(1)
図版14	大安場I 遺跡出土縄文土器(2)
図版15	大安場I 遺跡出土縄文土器(3)

図版16	大安場I 遺跡出土縄文土器(4)
図版17	大安場I 遺跡出土縄文土器(5)
図版18	大安場I 遺跡出土縄文土器(6)・水の上I 遺跡出土縄文土器
図版19	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(1)
図版20	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(2)
図版21	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(3)
図版22	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(4)
図版23	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(5)
図版24	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(6)
図版25	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(7)
図版26	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(8)
図版27	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(9)
図版28	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(10)
図版29	一坪田入II 遺跡出土縄文土器(11)・土製品
図版30	夜番II 遺跡出土縄文土器・錢貨

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）は、首都圏の道路交通の円滑化・環境改善などを目的として、国土交通省が、都心から半径およそ40km～60kmの範囲に計画した総延長約300kmにもおよぶ高規格幹線道路である。首都圏の広域的な幹線道路網整備の一環として、神奈川県・東京都・埼玉県・茨城県・千葉県内の沿線諸都市を環状に連絡する圏央道は、茨城県稲敷市から利根川を渡って千葉県内に入り、香取郡神崎町から南下して木更津市まで90km以上延伸する。国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所は、圏央道千葉区間建設事業実施にあたり、平成26年3月12日に事業地内における埋蔵文化財の所在の有無およびその取扱いについて、千葉県教育委員会へ照会した。これに対し千葉県教育委員会は、平成26年3月25日付け教文9号の84で、複数の埋蔵文化財包蔵地が所在する旨的回答を行った。これを受け、それらの取扱いについて関係諸機関で慎重な協議を重ねた結果、事業計画の変更が不可能な部分は、やむをえず記録保存の措置を講ずることとなり、調査を公益財団法人千葉県教育振興財團が実施することとなった。

なお、発掘調査委託契約は、平成26年度～平成29年度が国土交通省関東地方整備局千葉国道事務所、平成30年度からは東日本高速道路株式会社との間で締結された。

2 調査の概要（第1図、第1表）

圏央道千葉区間のうち、東関東自動車道と接続する大栄JCTから、銚子連絡道に接続する松尾横芝ICまでの18.5km（大栄～横芝）区間については、平成26年度に発掘調査を開始し、現在も調査を継続中である。本書では、平成26年度～平成28年度に実施した圏央道（大栄～横芝）区間北部に位置する成田市大安場I遺跡ほか7遺跡について報告する（第1図）。

各遺跡の発掘調査期間および担当者は第1表に示した。また、整理作業の期間・担当者は、以下のとおりである。

平成28年度

文化財センター長 上守秀明

整理課長 山口典子

担当職員 上席文化財主事 萩 淳一

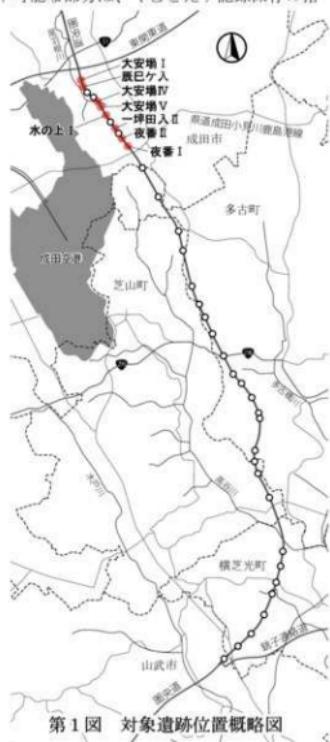
内 容 水洗・注記の一部

平成29年度

文化財センター長 上守秀明

整理課長 田井知二

担当職員 主任上席文化財主事 新田浩三、



第1図 対象遺跡位置概略図

第1表 発掘調査一覧

大安場Ⅰ遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長 (調査研究部長)
			上層	下層	上層	下層				
平成26	(1)	1,907	311	40	0	0	27.3.2~27.3.16	太田 敬宏	今 泉 潔(伊藤 智樹)	
平成28	(2)	12,210	1,320	124	5,298	0	28.4.5~28.10.28	小林 昂博 太田 敬宏	蜂屋 孝之	上 守 秀明

辰巳ヶ入遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長
			上層	下層	上層	下層				
平成27	(1)	2,642	276	52	0	0	27.7.7~27.8.7	太田 敬宏	今 泉 潔	小久賀 隆史

大安場Ⅳ遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長
			上層	下層	上層	下層				
平成27	(1)	3,110	320	60	0	0	27.4.13~27.5.8	太田 敬宏	今 泉 潔	小久賀 隆史

大安場Ⅴ遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長
			上層	下層	上層	下層				
平成27	(1)	2,324	262	60	0	0	27.5.12~27.6.9	太田 敬宏	今 泉 潔	小久賀 隆史

水の上Ⅰ遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長
			上層	下層	上層	下層				
平成27	(1)	854	90	20	0	0	27.8.17~27.9.24	太田 敬宏	今 泉 潔	小久賀 隆史

一坪田入Ⅱ遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長 (調査研究部長)
			上層	下層	上層	下層				
平成26	(1)	568	106	12	0	0	26.12.11~26.12.15	藤 淳一	今 泉 潔	伊藤 智樹
	(2)	1,533	128	8	356	0	27.1.14~27.3.2	藤 淳一	今 泉 潔	伊藤 智樹

夜番Ⅱ遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長 (調査研究部長)
			上層	下層	上層	下層				
平成26	(1)	1,059	110	20	0	0	26.12.15~27.1.13	藤 淳一	今 泉 潔	伊藤 智樹
	(2)	536	59	24	0	0	27.3.3~27.3.17	藤 淳一	今 泉 潔	伊藤 智樹
	(3)	773	80	36	0	0	27.3.17~27.3.23	藤 淳一	今 泉 潔	伊藤 智樹
平成27	(4)	637	64	48	0	526	27.4.13~27.5.8	藤 淳一	今 泉 濵	小久賀 隆史
	(5)	2,053	246	90	0	306	27.5.28~27.10.13	藤 淳一	今 泉 濱	小久賀 隆史
	(6)	2,480	280	76	0	0	27.9.24~27.10.15	太田 敬宏	今 泉 濱	小久賀 隆史
平成28	(7)	5,308	532	174	0	478	27.10.14~27.12.15	太田 敬宏	今 泉 濱	小久賀 隆史
	(8)	3,791	492	256	0	825	28.6.16~28.8.31	麻 生 正信	蜂屋 孝之	上 守 秀明

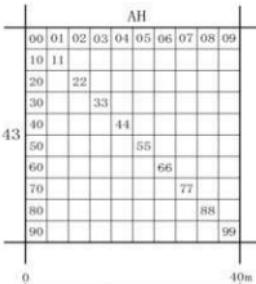
夜番Ⅰ遺跡

年 度	調査次	対象面積 (m ²)	確認調査(m ²)		本調査(m ²)		調査期間	担当者	調査課 長	文化財センター長 (調査研究部長)
			上層	下層	上層	下層				
平成26	(1)	2,394	366	64	0	0	27.2.3~27.2.27	太田 敬宏	今 泉 濱	伊藤 智樹
	(2)	2,392	240	48	0	0	27.6.11~27.6.30	太田 敬宏	今 泉 濱	小久賀 隆史

城田義友、文化財主事 大久保奈奈
 内 容 記録整理、水洗・注記の一部～編集の一部
平成30年度
 文化財センター長 島立 桂
 整理課長 田島 新
 担当職員 主任上席文化財主事 新田浩三
 内 容 分類・選別～刊行

3 調査の方法（第2図）

首都圏中央連絡自動車道（圏央道）大栄～横芝区間建設予定地内に所在する遺跡群の調査は、世界測地系（平面直角座標第IX系）に基づく方眼網に従い、北西隅に起点を置く40m区画（大グリッド）を設定して実施した。グリッドは、全体の起点（1A-00）をX=-20,920.000、Y=+50,520.000に置き、この点から40mごとに南へ1・2・3・・・を、東へA・B・C・Z・AA・AB・・・を割り当て、両者を組み合わせた5A・54Mなどを大グリッドの呼称とした。本書で報告する南北に細長い遺跡範囲を大グリッドで示すならば、北端が1E、南端が55Mとなる。また、大グリッド内を一辺4mの方形区画に100分割して小グリッドを設定した。小グリッドの呼称は2桁の番号とし、43AH-55のように大グリッド名と小グリッド番号を組み合わせて、調査地の平面的位置を示す。小グリッド番号は、大グリッドの北西隅を起点00とし、北東隅が09、南西隅が90、南東隅が99となるように順次割り当てた。



第2図 グリッドの呼称例

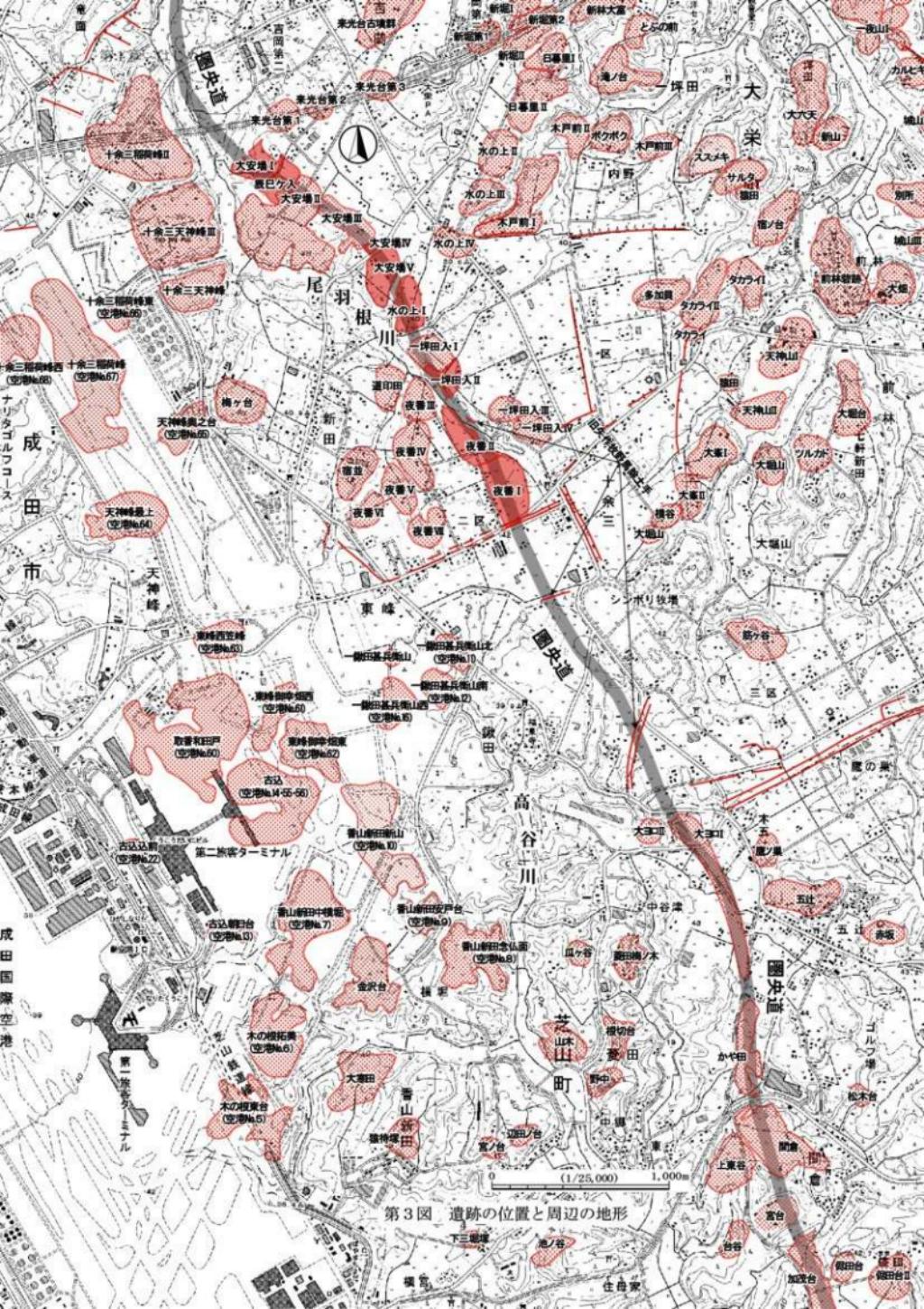
第2節 遺跡の位置と環境（第3図、図版1）

1 地理的環境

圏央道大栄JCTから松尾横芝ICに至る延長18.5kmの事業区間に、成田市（旧香取郡大栄町）、山武郡芝山町、香取郡多古町、山武郡横芝光町（旧山武郡横芝町）、山武市（旧山武郡松尾町）の2市3町には、調査対象埋蔵文化財包蔵地が38遺跡ある。遺跡の多くは、台地上に立地するが、調査対象地域は、利根川水系と栗山川水系の分水界を擁し、かつ、谷津が複雑に入り込んだ下総台地中央部を南北に縱貫していることから、個々の遺跡をとりまく地理的環境は多様である。具体例として、成田市一坪田入II遺跡のように傾斜する台地縁辺部に立地する遺跡、直下の谷との比高が30m近い急斜面に囲まれた瘦せ尾根上に立地する多古町五反田清水沢遺跡、高谷川沿いの水田地帯に山武郡芝山町・横芝光町の町域を越えて広がる高谷川低地遺跡などをあげることができる。

本書で報告する8遺跡は、旧香取郡大栄町域西南部にあたる成田市域に所在する。これらの遺跡は、成田市（旧香取郡大栄町）多良貝付近に源を発し、成田市磯部付近で根木名川と合流したのち利根川に流入する尾羽根川上流域の谷津を囲むように分布している。

8遺跡中、最も北に、すなわち合併前の成田市域との境界付近を北西方向に流下する尾羽根川下流側の大安場I遺跡は、尾羽根川の右岸、標高40m前後の下総台地上に立地する。遺跡西方の狭隘な谷津（標高27m前後）から、おおむね南東方向に遡る谷津の最奥部（標高33m前後）を経て、太平洋に向かって南流する栗山川水系高谷川との分水界（標高42m前後）までは約2.5kmである。なお、香取郡域と山武郡域の境界ともなっている利根川水系と栗山川水系の分水界沿いには、主要地方道成田小見川鹿島港線（千葉県



第3図 遺跡の位置と周辺の地形

道44号線)が通っている。また、大安場Ⅰ遺跡から台地上を3kmほど東方へ進むと、尾羽根川流域と同様に複雑な小支谷の開析がみられる大須賀川(利根川水系)上流域の谷津に出る。

8遺跡の位置関係について、北から順にあげるならば、右岸台地上に大安場Ⅰ遺跡、辰巳ヶ入遺跡、大安場Ⅳ遺跡、大安場Ⅴ遺跡、水の上Ⅰ遺跡の5遺跡が、その南南東、右岸台地の縁辺部に一坪田入Ⅱ遺跡が、さらにその南方、谷津を挟んだ対岸、すなわち尾羽根川最上流域左岸の台地縁辺部から台地上にかけて夜番Ⅱ遺跡が、その南東側に続く台地上、分水界の北辺に接して夜番Ⅰ遺跡がある。なお、最上流域左岸の夜番Ⅱ・夜番Ⅰ遺跡の立地に関して、現況では台地や谷というよりも緩やかな斜面地形をなしているが、調査により斜面下部に厚い客土が確認され、旧地形はより急な斜面であったことが判明している。

2 歴史的環境

圏央道(大栄～横芝)区間事業地内の38遺跡のうち、尾羽根川上流域の成田市(旧香取郡大栄町)域には、本書で報告する8遺跡以外に、大安場Ⅱ遺跡・大安場Ⅲ遺跡・一坪田入Ⅰ遺跡、および分水界周辺の3地点にある旧矢作牧野馬除土手がある¹⁾。この地域の西隣には成田国際空港があり、また、北隣には東関東自動車道が敷設されていることから、これらの建設事業等に伴う発掘調査が多く実施されてきた。また、大栄JCT以北の圏央道事業地内の成田市(旧香取郡下總町)域においても調査成果が蓄積されている。

旧石器時代では、空港用地内でX層からⅢ層までの石器集中が多数検出されている²⁾。空港関連の調査では金沢台遺跡・一鎌田甚兵衛山北遺跡・菱田梅ノ木遺跡が、東関東自動車道関連の調査では新堀第1遺跡・新堀第2遺跡・新林大富遺跡が報告されている。なお、圏央道(大栄～横芝)区間建設事業に伴い、平成28年度に実施した大安場Ⅱ遺跡の調査で、旧石器時代終末の「本ノ木型尖頭器」が15点まとめて出土したほか、駐機場整備に伴い平成28年度から29年度に行われた香山新田新山遺跡の調査で、IV層上部からⅢ層下部にかけて石器集中がみつかり、ナイフ形石器終末期の「月見野型」に特徴的な「小型幾何形ナイフ形石器」が出土するなど、注目される資料が蓄積されつつある。

縄文時代では、早期の炉穴・陥穴のほか、前期(十余三稻荷峰Ⅱ遺跡・水の上Ⅳ遺跡)・中期(新林大富遺跡・新山台Ⅱ遺跡・キサキ遺跡)の竪穴住居跡が検出されている。後期・晚期について当該地域内に目立った遺跡はみられないものの、尾羽根川が根木名川と合流する地点付近に晩期の荒海貝塚がある。

弥生時代以降では、弥生時代後期の竪穴住居跡が東峰御幸畑西遺跡・東峰御幸畑東遺跡で、古墳時代の竪穴住居跡がキサキ遺跡・東峰西笠峰遺跡・東峰御幸畑西遺跡・東峰御幸畑東遺跡・香山新田中横堀遺跡でみつかっている。奈良・平安時代では、天神峰奥之台遺跡で竪穴住居跡がみつかったほか、東峰御幸畑西遺跡・東峰御幸畑東遺跡・取香和戸田遺跡・一銀田甚兵衛山北遺跡で竪穴住居跡とともに製鉄・鍛冶関連遺構が検出されている。

注1 圏央道(大栄～横芝)区間事業地内の38遺跡のうち、尾羽根川上流域の14遺跡以外の香取郡多古町、山武郡芝山町・横芝光町域に分布する24遺跡を北からあげると、大ヨロⅠ遺跡・かや田遺跡・間倉遺跡・宮台遺跡・加茂台遺跡・一つ塚遺跡・大塚台遺跡・五反田栗島遺跡・五反田清水沢遺跡・長者屋敷遺跡・水戸塚ノ後1号塚・水戸塚ノ後2号塚・千田の台遺跡・境砦跡・儘田台遺跡・殿部田古墳群・高谷川低地遺跡・向田城跡・木戸台遺跡・吹揚遺跡・大山遺跡・山武姥山貝塚・遠山天ノ作遺跡・四ツ塚遺跡となる。

2 永塚俊司 2000「新東京国際空港予定地内遺跡群」『千葉県の歴史 資料編 考古1』(財)千葉県史料研究財団

第2章 大安場I遺跡

第1節 遺跡の概要（第3～6図）

成田市（旧香取郡大栄町）吉岡字大安場1343-8ほかに所在する大安場I遺跡は、尾羽根川（利根川水系根木名川支流）上流域右岸、標高40m前後の台地上に立地する（第3図）。

本書では、平成26年度および平成28年度に実施した第1・2次調査（計14,117m²）の成果を報告する。調査区割およびトレント配置は第4図のとおりである。対象範囲を大グリッド表記で記すと、1E・2D・2E・3C～3F・4B～4F・5A～5F・6A・6D・6Eとなる。遺跡の周囲は、北辺以外、小支谷により画されている。また、遺跡中央部に、遺跡西辺を画する小支谷に向かって北西に開く比高5m前後の小さな谷が入っている。

第1次調査（以下(1)と略記）は、遺跡中央部に北西から入る深い谷奥の南側、緩やかに傾斜する1,907m²を対象として実施した（第4図）。トレント調査の結果、広範囲において煙草のトレントチャによる擾乱をうけていることが判明し、上層において縄文土器が少量出土したものの、遺構は検出されず、また、下層についても、遺構・遺物が検出されなかつたことから、確認調査の範囲で調査を終了した。なお、関東ローム層上面も現地表と同じく北東側に向かって傾斜していることを確認した。

第2次調査（以下(2)と略記）は、遺跡中央部の谷を挟んだ南北の2地区、計12,210m²を対象として実施した（第4・5図）。上層では、トレント調査の結果、南区・北区それぞれにおいて縄文時代遺物包含層の存在を確認したことから、南区・北区の計2地点（5,298m²）について本調査を実施した。下層は、斜面部を除く6,100m²を対象として実施したが、出土遺物はなく、確認調査の範囲で調査を終了した。基本層序は、第6図に示したとおりである。本調査の結果、北区の本調査地点で、縄文時代早期の陥穴2基・土坑9基を検出し、縄文土器や石器が出土した（第5図）。縄文土器は、早期（鶴ヶ島台式）を主体とする。南区の本調査地点では、遺構は検出されず、縄文時代早期遺物包含層1か所を確認した。包含層は、数点の礫片で構成され、図示可能なものは出土しなかった。

第2節 遺構と遺物

1 遺構（第5・7図、図版2・3）

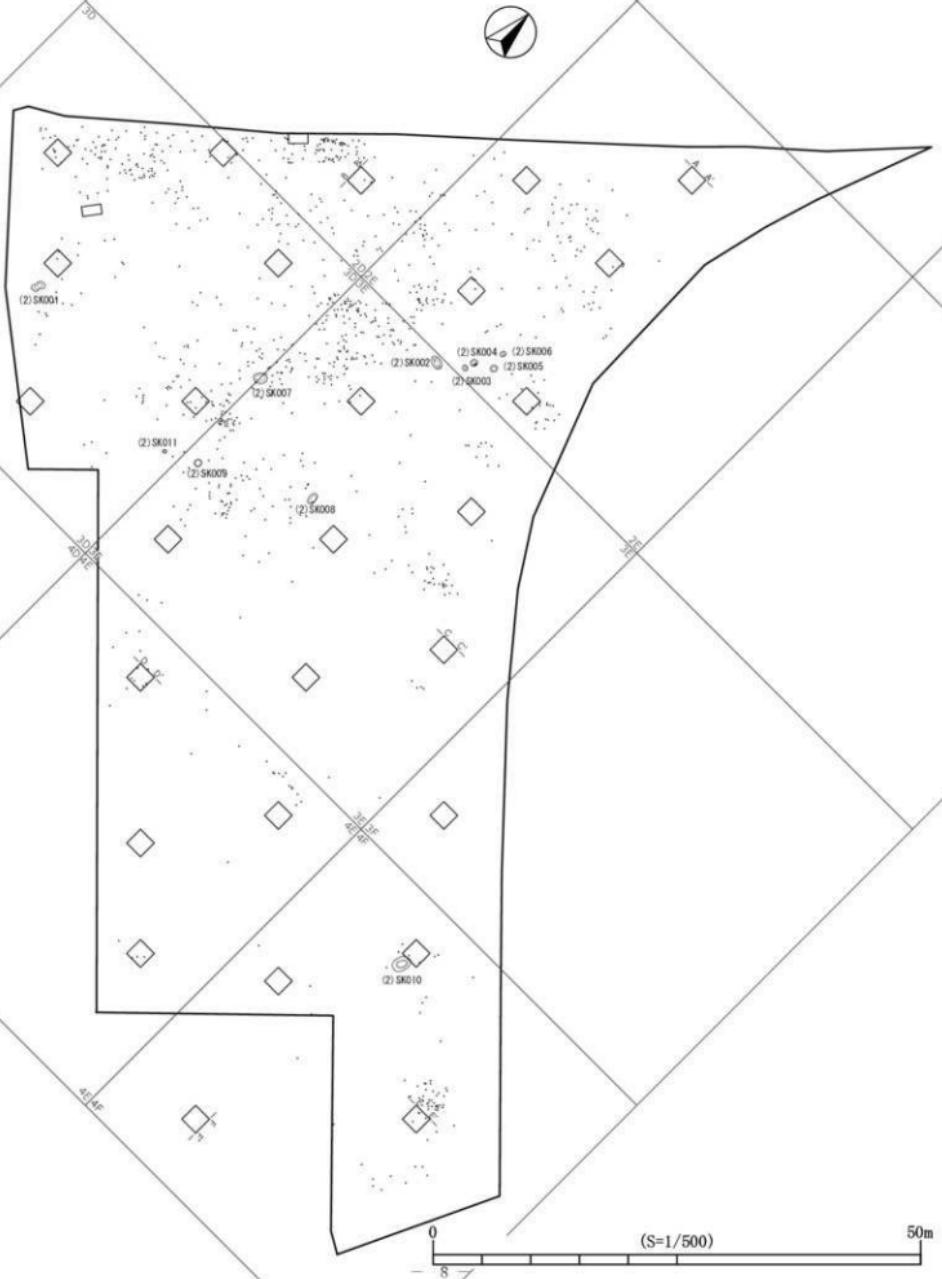
縄文時代早期の陥穴2基・土坑9基が(2)北区の本調査範囲から検出された（第5図）。東部に単独で検出された陥穴1基【(2)SK010】以外は、北半部でみつかった。北半部の遺構の分布状況については、西端付近に位置する土坑1基【(2)SK001】、中央部にやや散在する土坑4基【(2)SK007～SK009・SK011】、その北方に集中して分布する陥穴1基【(2)SK002】と土坑4基【(2)SK003～SK006】の3群に分けて捉えることができる。

(2)SK001 3D-54・64グリッドに位置する長楕円形の土坑である。長軸1.43m、短軸0.72m、確認面から底面までの深さは0.31mである。平面形の輪郭は、円形が切り合った形とみることができるもので、長軸方位はN-17°-Eを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。

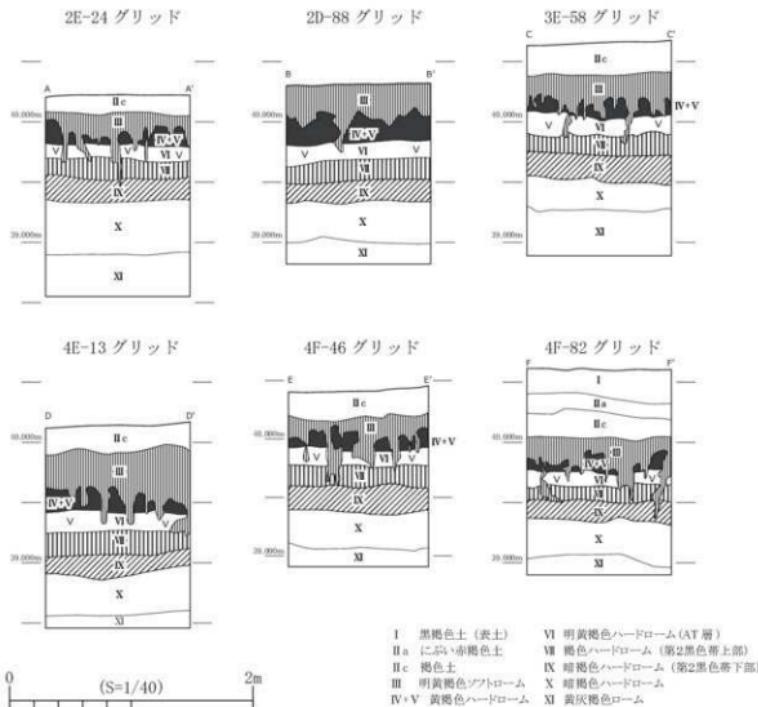
(2)SK002 3E-02・03グリッドに位置する長楕円形の陥穴である。長軸1.49m、短軸0.97m、確認面から底面までの深さは1.02mである。長軸方位はN-104°-Eを指す。底面は平坦で、長軸上、東西方向に0.6m



第4図 大安場I遺跡調査区割図



第5図 上層本調査範囲と遺構・遺物出土状況



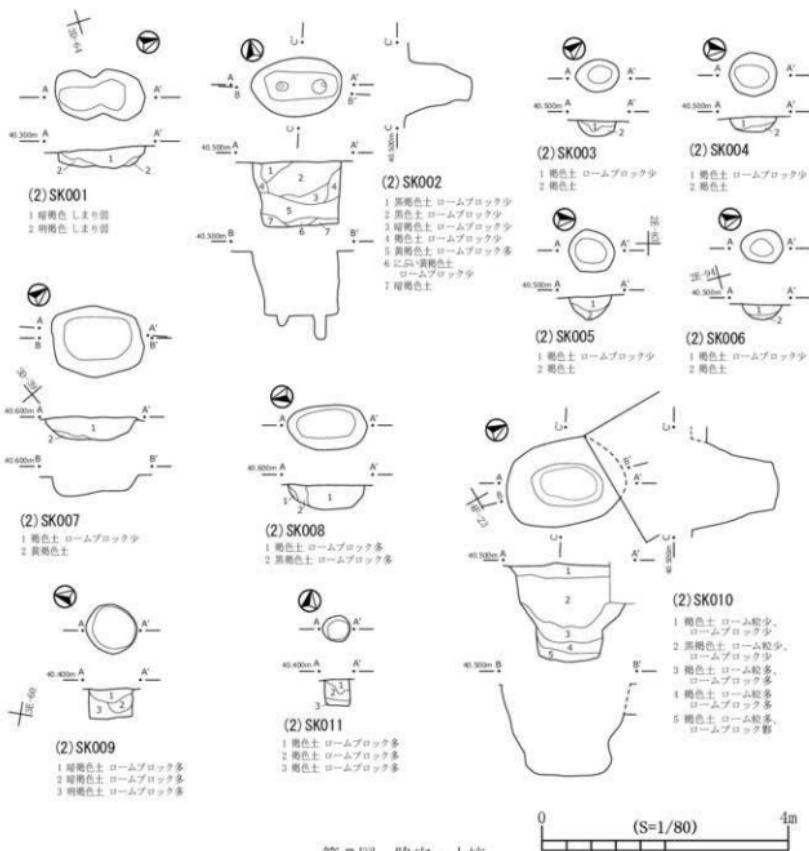
の間隔をあけて2つのビットがある。西のビットは径0.18m×0.15m、深さ0.18m、東のビットは径0.24m×0.22m、深さ0.39mである。覆土は、ローム粒・ロームブロックを包含するが、5層は特に多くのロームブロックを含む。

(2)SK003 2E-93グリッドに位置する楕円形の土坑である。長軸0.71m、短軸0.53m、確認面から底面までの深さは0.24mである。長軸方位はN-57°-Wを指す。覆土は褐色土を主体とする。

(2)SK004 2E-93グリッドに位置する楕円形の土坑で、前述(2)SK003の北0.43m地点にある。長軸0.76m、短軸0.70m、確認面から底面までの深さは0.19mである。長軸は方位北を指す。覆土は(2)SK003と同じである。

(2)SK005 2E-93・94グリッドに位置する楕円形の土坑で、前述(2)SK004の北東1.40m地点にある。長軸0.74m、短軸0.69m、確認面から底面までの深さは0.38mである。長軸は方位北を指す。覆土は(2)SK003と同じである。

(2)SK006 2E-84グリッドに位置する楕円形の土坑で、前述(2)SK005の北北西1.10m地点にある。長軸



第7図 隕穴・土坑

0.70m、短軸0.53m、確認面から底面までの深さは0.24mである。長軸方位はN-15°-Eを指す。覆土は(2)SK003と同じである。

(2)SK007 3D-39・3E-30グリッドに位置する不整な長方形の土坑である。長軸1.45m、短軸1.15m、確認面から底面までの深さは0.35mである。長軸方位はN-40°-Eを指す。覆土は褐色土を主体とする。

(2)SK008 3E-43グリッドに位置する楕円形の土坑である。長軸1.28m、短軸0.72m、確認面から底面までの深さは0.40mである。長軸方位はN-10°-Wを指す。覆土は褐色土を主体とする。

(2)SK009 3E-60グリッドに位置するほぼ円形の土坑である。長径0.82m、短径0.78m、確認面から底面までの深さは0.48mで、平坦な底面から壁面がほぼ垂直に立ち上がる。覆土は下部が明褐色、上部が暗褐色である。

(2)SK010 4F-12・13グリッドに位置する楕円形の陥穴である。長軸1.90m、短軸1.40m、確認面から底面までの深さは1.58mである。長軸方位はN-30°-Eを指す。ほぼ平坦な底面は、長軸1.00m、短軸0.75mで、壁面は約50cm垂直に立ち上がったのち漏斗状に開く。覆土は下部と上部が褐色土、中部が黒褐色土である。

(2)SK011 3D-69グリッドに位置するほぼ円形の土坑で、先述(2)SK009の西南西3m地点にある。長径0.45m、短径0.42m、確認面から底面までの深さは0.42mで、平坦な底面から壁面がほぼ垂直に立ち上がる。覆土は褐色土を主体とする。

2 遺物

縄文時代の土器・石器は、遺物包含層から出土した。分布密度は第2次調査北区の北半部が高い。

(1) 縄文土器（第8～16図、図版13～18）

北側から谷が入り込む台地の右岸にあたり、現況は竹藪となっていた。竹の繁茂が激しく、竹根による遺物包含層であるII層への擾乱が進んでいた。

本調査のために重機による表土の掘削を実施した際、竹根の撤去を完全に行うと遺物包含層まで失いかねないため、II層の上層部におよぶ竹根を残しつつ表土除去を実施した。

遺物包含層は、本調査全域に散布している状況ではなく、主に調査区北側を主体に縄文土器が出土している。

確認調査および本調査によって出土した縄文土器は、早期・前期・中期・後期・晚期のものである。主体となるのは早期の鶴ガ島式土器で、前期・後期・晚期の土器は微量であった。

出土した縄文土器を以下のように5群に大別し、各群の中でさらに類別を行うこととする。

第1群 早期の土器

第2群 前期の土器

第3群 中期の土器

第4群 後期の土器

第5群 晩期の土器

第1群 早期の土器

出土量が最も多かったのが貝殻条痕を施した鶴ガ島式である。わずかに野島式土器と考えられる土器が出土している。

1類 野島式土器（第8図1、図版13）

本類に含まれる土器は、わずかに1個体のみである。1は円錐状に聞く深鉢で、胴部下半が屈曲ともいえるかもしれない緩い膨らみがある。口唇上端には棒状工具による刻み目が密に施され、口縁部外面に幅の狭い無文帯があり、その下端は微隆起線となって、胴部文様とを区画している。胴部外面は貝殻条痕の施文方向を変えて上半は横位、下半は縱位となっている。さらに胴部上半は棒状工具による5条～6条の太い沈線による鋸歯状文が施されている。鶴ガ島式にみられる縱位区画文がみられないことや胴部の明瞭なくびれがないことなどから、野島式と考えられる。

2類 鵜ガ島台式土器

a種 有文のもの（第8～11図2～72、図版13～15）

典型的な鵜ガ島台式の文様を伴うものが主体である。完形の復元個体が少なく、器形については、2段のくびれがあり、口縁が波状線ないしは4単位の突起がつくものが主体と思われる。平縁のものがどの程度あるかは、破片が多くわからない。文様は、ミミズ腫れ状の細隆起線（あるいは微隆起線）で文様帯を区画するものと沈線で文様を区画するものの2種類がある。量的には細隆起線の区画文が多かった。遺物の説明をするにあたって、鵜ガ島台式土器の特徴である区画状文は、文様帯を縦位に分割するものを縦位区画状文、さらにそれをタスキ状またはそれに近い形で文様帯を細分するものを横位区画状文とに分けて便宜的に呼称する。單に区画状文と呼ぶ時は、両方のものを表す。胎土に纖維を含むものの、纖維の混入が目立つものは少ない。胎土が粗い砂粒を多く含み、雲母の混入が認められ、赤味の強い焼成がよいものがある。2～25は縦位・横位区画状文が、細隆起線文によるものである。2・3は比較的器形が復元された個体であり、a種の典型例である。

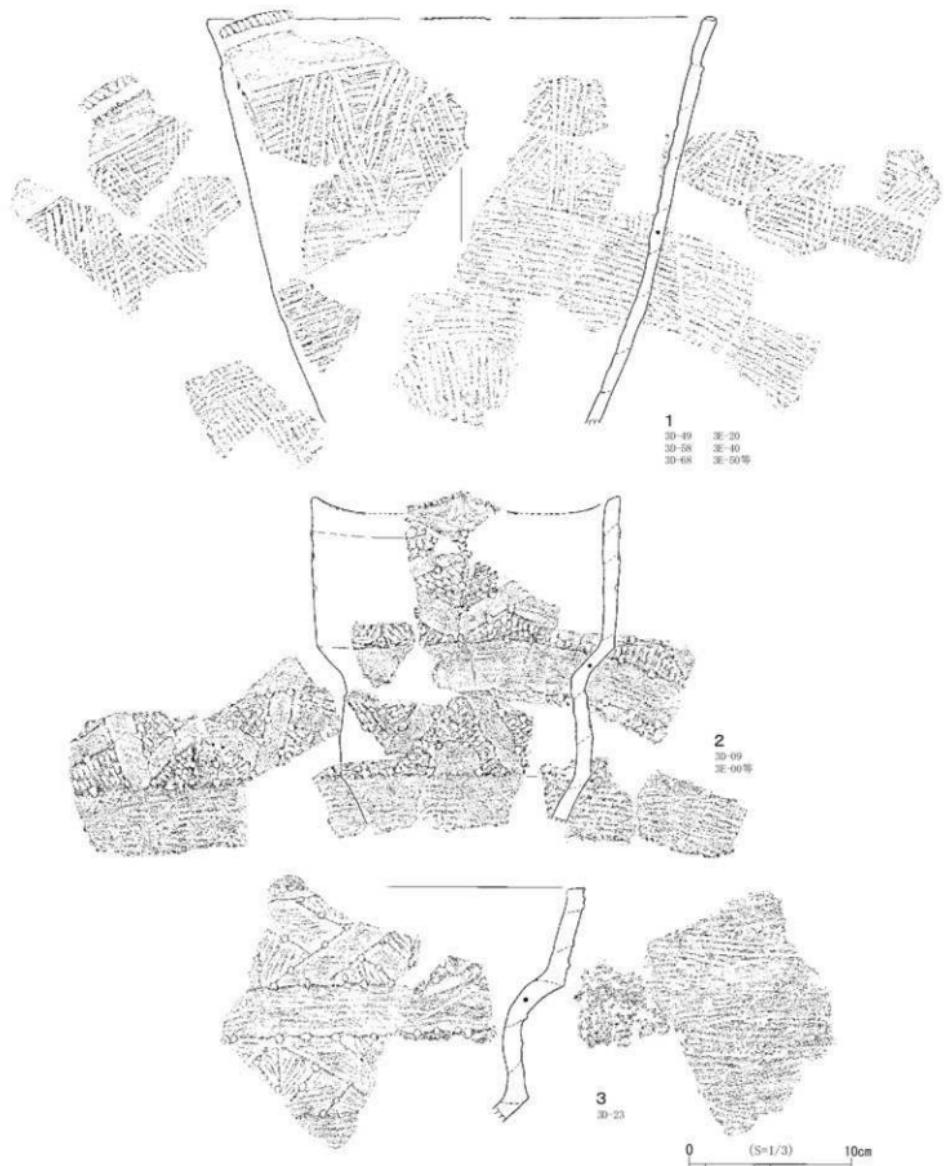
2は胴部上半に2段のくびれがあり、2段の文様帯を持つ。口縁は内削状の波状を呈し、波頂部に4単位の突起がつく深鉢である。口唇上端には棒状工具による刻み目が施され、口縁部に無文帶がある。細隆起線文により区画状文され、タスキ状の横位区画状文により構成されている。区画内は押引沈線文が充填されている。区画の交点等に円形刺突文が押捺されている。2段のくびれ部下半は磨消が施され、内面は横位の貝殻条痕文が施されている。器面はやや黒味を帯びており、器厚は3よりもやや薄い。

3は胴部上半に2段のくびれがある深鉢である。口縁は全体の器形が明確ではないが、2と同様に4単位の突起がついているものと思われる。口唇上端には棒状工具による刻み目が施され、口縁上部は指頭により幅の狭い無文帶が施されている。細隆起線文により区画状文され、タスキ状の横位区画文により構成されている。区画内は太い沈線が充填されている。区画の交点等に円形刺突文が押捺されている。2段のくびれ部下半は磨消が施されている。内面に横位の貝殻条痕文が施されている。焼成がよく、器面は赤味を帯びている。器厚は2よりも厚い。

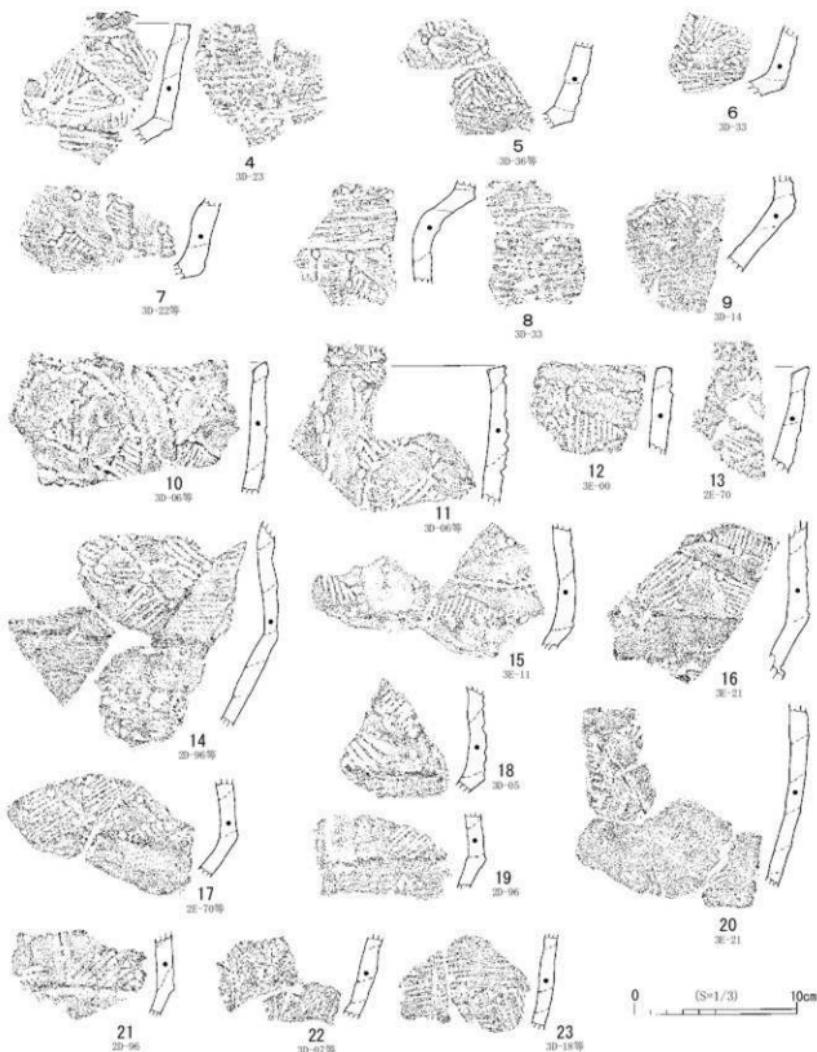
4～25は復元率の低い個体で、全体形状が不明な点もあるが、細隆起線文により区画状文され、タスキ状の横位区画状文により構成されている。沈線が充填されており、基本的に2・3と同様の施文方法により製作されている。4～9は赤味を帯びており、器厚が厚い。3と類似している。胴部上半に1段のくびれがあるが、器形の特徴から、2・3と同様に2段のくびれで構成されていると思われる。くびれ部下半は磨消が施されている。4は口唇上端に棒状工具による刻み目が施されている。10～25は黒味を帯び、器厚がやや薄い。2と類似する。10～13は口縁が内削状を呈し、口唇上端に棒状工具による刻み目が施されている。

26～34は沈線文により区画状文され、タスキ状の横位区画状文で構成されている。26～30は同一個体である。押引文によって充填されている。口縁は棒状工具により刻み目が施されている。31は押引文と沈線によって充填されている。口縁は内削状を呈し、口唇上端に棒状工具による刻み目が施されている。32～34は押引文が充填されている。

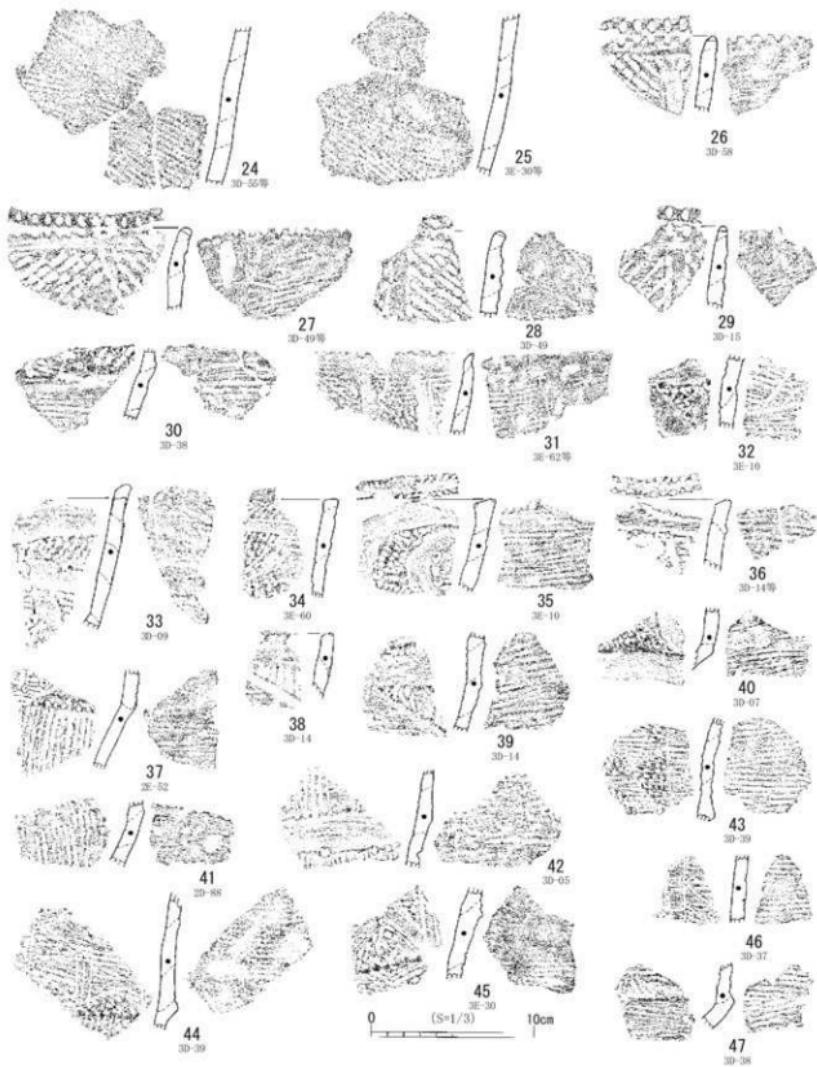
35～42は細隆起線文により区画状文されている。35・40は藤手状に、36～39・41・42はタスキ状に横位区画状文で区画されている。35～37・40・41が押引文、38・39が沈線、42が押引文と沈線によって充填されている。



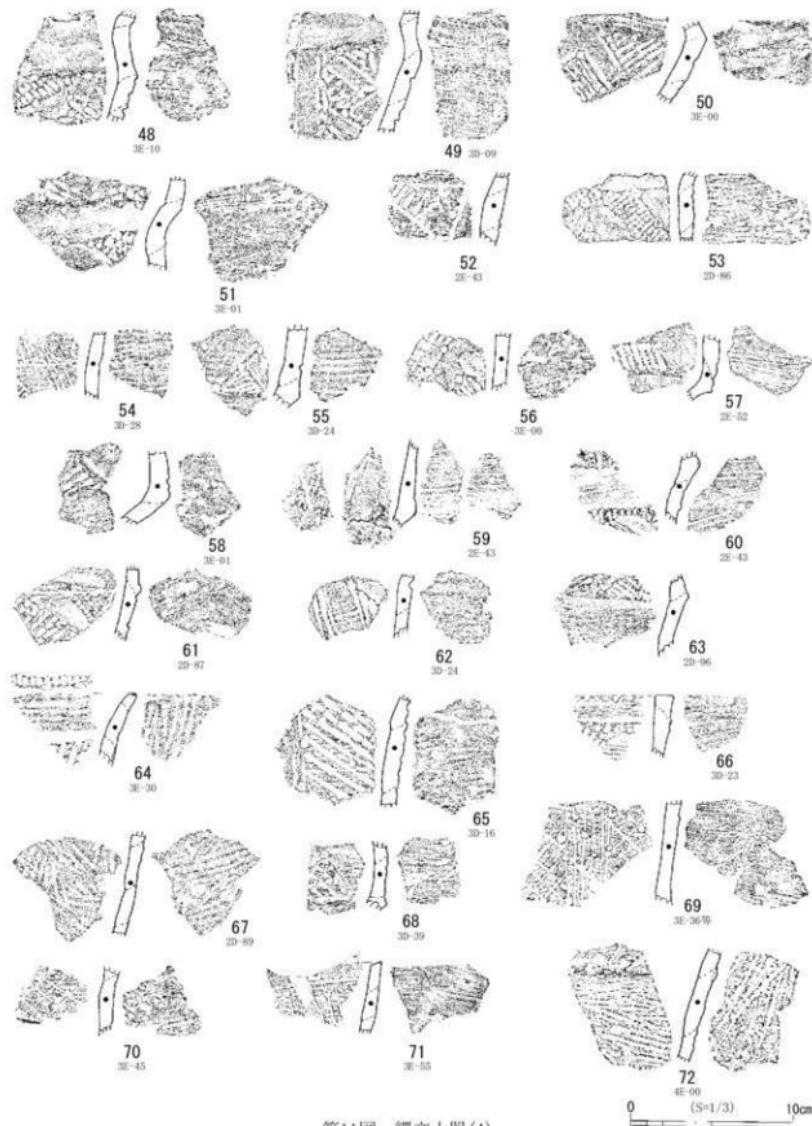
第8図 繩文土器(1)



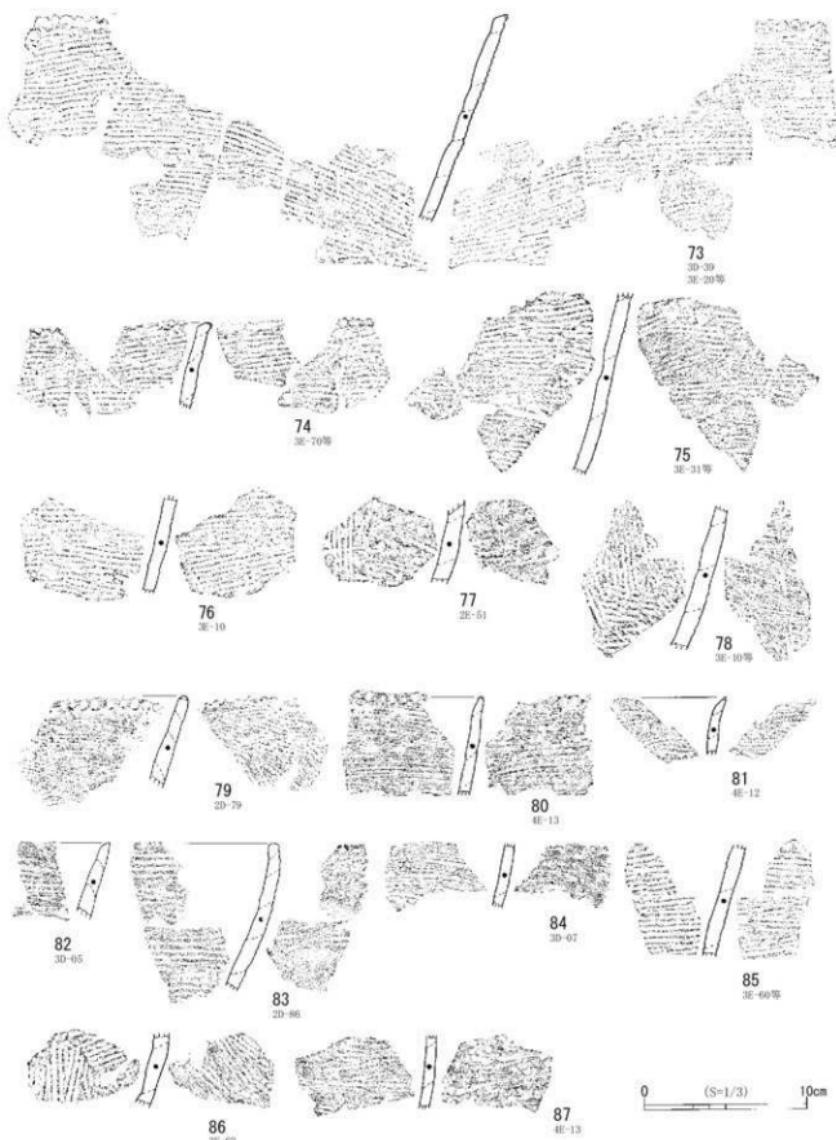
第9図 繩文土器(2)



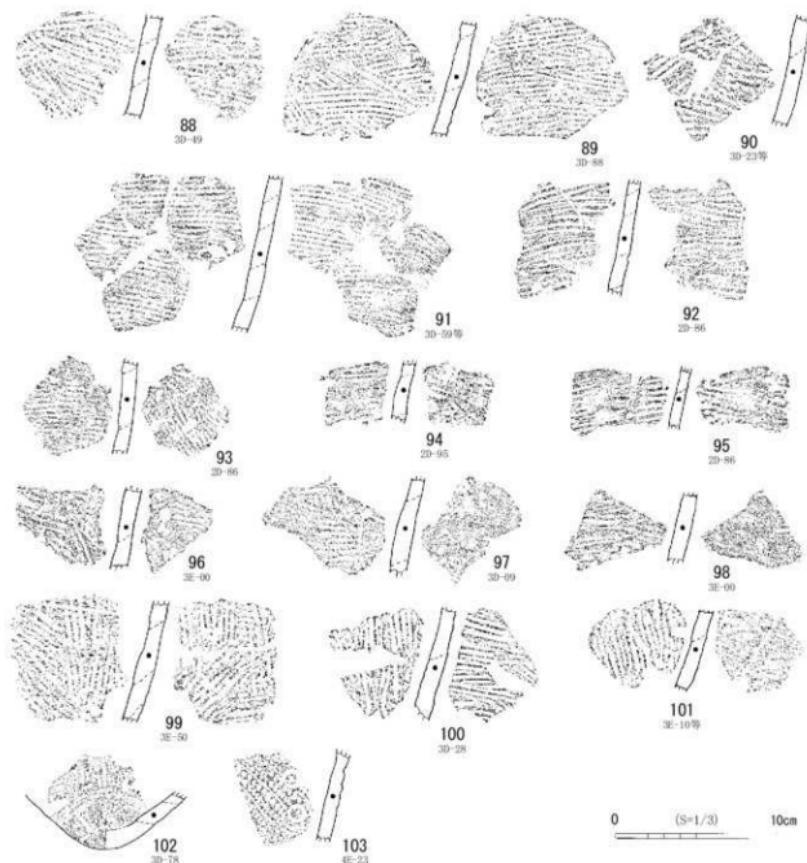
第10図 繩文土器(3)



第11図 繩文土器(4)



第12図 繩文土器(5)



第13図 繩文土器(6)

43～68はタスキ状の横位区画状文により構成され、押引文が充填されている。43～47・51・52・54・58・61・62・64・65・67は沈線により区画状文され、48～50・53・55～57・59・60・63・66・68は細隆起線文により区画状文されている。59・60は同一個体で、細隆起線文上に刻み目が施されている。64・66は口唇上端に棒状工具による刻み目が施されている。

69～71は同一個体である。口唇上端はヘラ状工具による刻み目が施されている。沈線により区画状文され、タスキ状の横位区画状文により構成されている。格子状文が充填されている。

72は細隆起線文により区画状文され、沈線が充填されている。

b種 貝殻条痕のみのもの（第12・13図73～102、図版15・16）

有文の土器に伴うと考えられる条痕のみのものを一括した。いわゆる「粗製土器」と呼ばれるものが主体を占める。この中には有文土器の胴部下半も含まれていると考えられる。肋のある貝殻の大きさにより太い条痕、中位の太さの条痕、細い条痕に分けられる。

73～78は中位の太さの条痕が施されている。73・74は平縁口縁をなし、口唇上端にヘラ状工具による刻み目が施され、口縁は内削状を呈する。条痕文は、73～76が横位、77・78が斜位に施されている。

79～98は細い条痕が施されている。口縁部の形状は、79・80・83が棒状工具により刻み目が施されている。81・82は内削状の調整が顕著に施され、表面からも調整されているため口唇部の断面形が尖頭状になっている。条痕文は、79～85・91～95・98が横位、86～90・96・97が斜位に施されている。

99～101は太い条痕が施されている。条痕文はいずれも斜位に施されている。

102は尖底の底部である。胴部から緩く曲線を描きながら、そのままぼまたた形状をしている。

第2群 前期の土器**黒浜式土器**（第13図103、図版16）

103の1点のみが該当する。附加繩文が縦位に施され、環状の刺突文が2か所押捺されている。

第3群 中期の土器**1類 加曾利E式土器**（第14・15図104～148、図版16・17）

104～127は加曾利E I式土器である。104～107は同一個体で、平縁口縁をなしている。R L繩文を地文としている。口縁部文様帶は隆帯と沈線によって長方形区画され、R L繩文が充填されている。胴部は沈線により縦区画されている。108～111は口縁部破片で、平縁口縁をなしている。R L繩文を地文としている。110は口縁部文様帶に2本隆帯による横に流れる文様に満巻文が施されている。112～122は胴部破片である。繩文を地文とし、沈線により縦区画されている。123・124は底部である。平底の形状をしている。123は底部近くまで繩文が施されている。125～127は同一個体で、平縁口縁をなしている。口縁部文様帶に2本隆帯による流れる文様に満巻文が施されている。

128～130・132は加曾利E II式土器である。いずれも胴部破片で、繩文を地文とし、無文帯と沈線で縦区画されている。

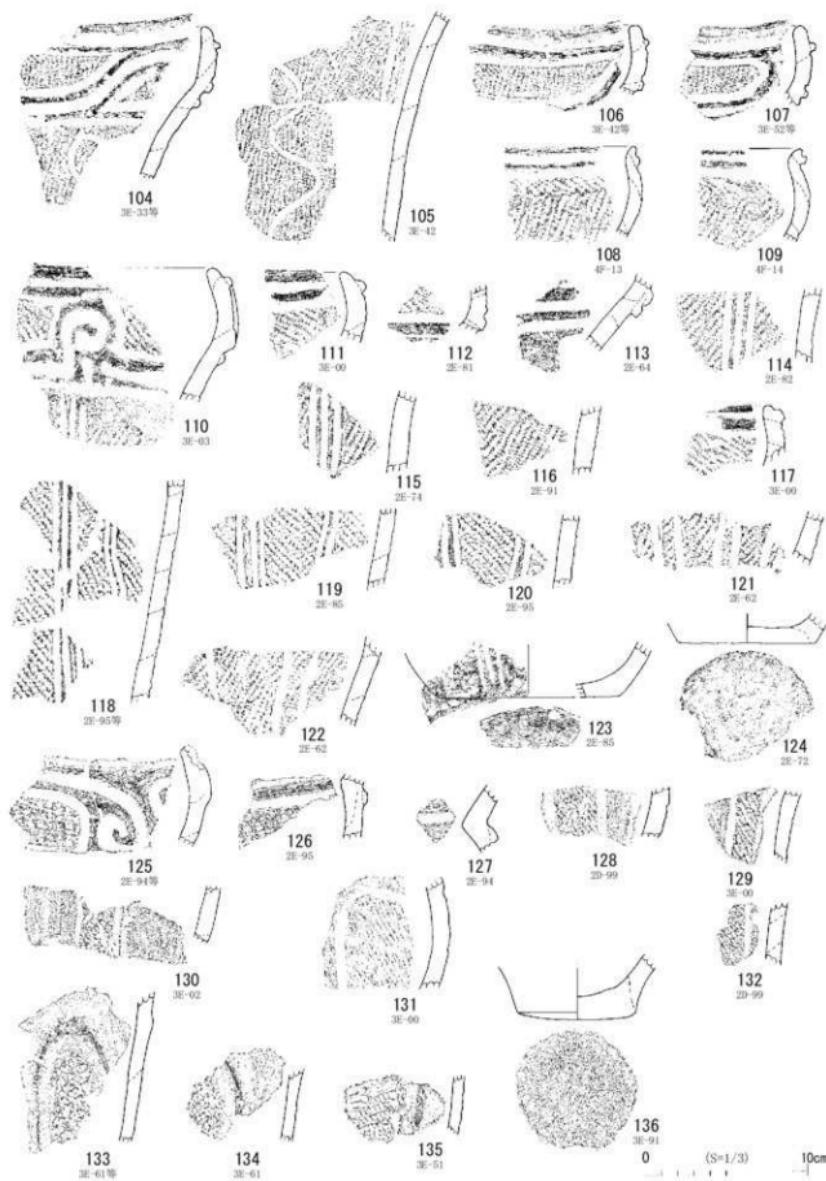
131・133～135は加曾利E III・IV式土器である。いずれも胴部破片で、磨消繩文が施されている。131は沈線により長楕円形の区画文が配置されている。133～135は同一個体で、隆起線により長楕円形の区画文が配置されている。

137～148は本類に帰属するが、土器型式を特定できないものを一括した。137～142は胴部に繩文が施されるものである。137は平縁口縁で、頸部にR L繩文が施されている。138は緩い波状口縁で、口縁直下からR L R繩文が斜位に施されている。139～141は胴部破片である。142は底部付近の胴部破片である。

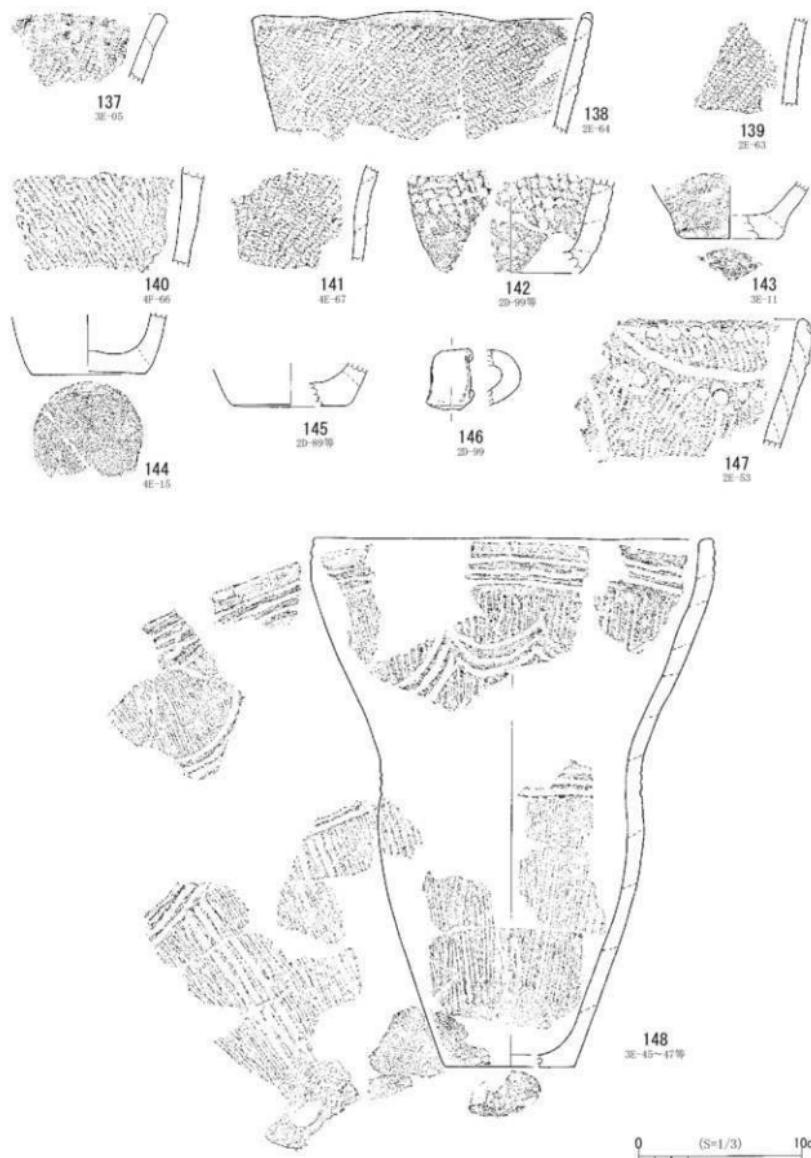
136・143～145は底部である。いずれも平底の形状をしている。

146は深鉢ないしは、鉢の口縁に付けられる耳状の突起がつくものである。

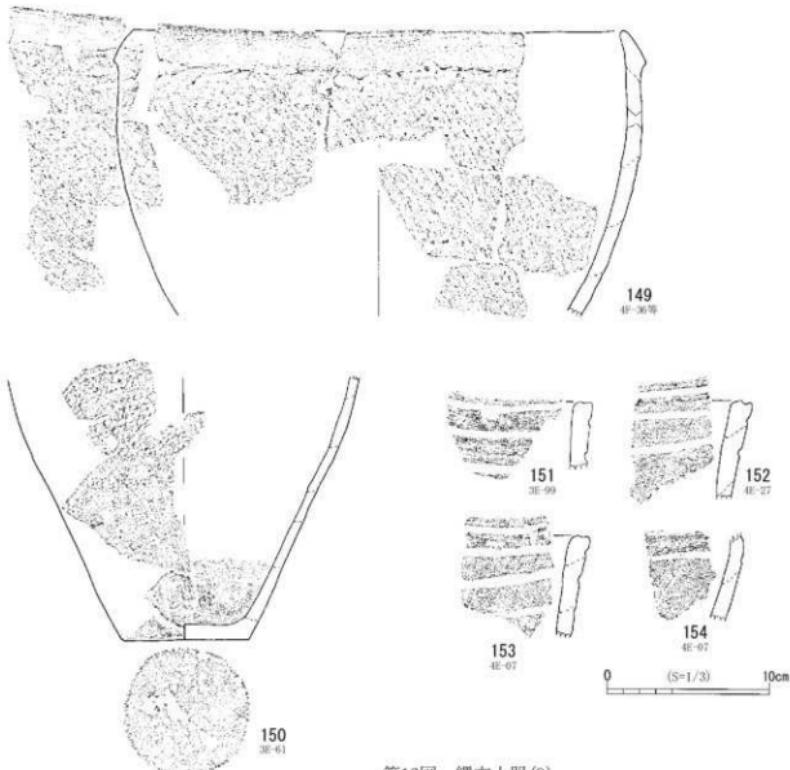
147・148は連弧文系土器である。147は平縁口縁をなし、口縁部から胴部にかけて連弧文、口縁部と頸部に棒状工具による円形刺突文列が押捺されている。148は平縁口縁をなし、底部は円筒が突出したよう



第14図 繩文土器(7)



第15図 繩文土器(8)



第16図 繩文土器(9)

な不安定な形状をしている。口縁部と胴部は横位の沈線で区画され、沈線間に連弧文が施されている。胴部下半は縦位に沈線が施されている。

2類 中期末の土器（第16図149、図版18）

149は中期末の粗製の鉢である。口唇部は幅広の無文帶で、地文は縄文が斜位に施されている。

第4群 後期の土器（第16図150、図版18）

150は加曾利B 1ないしはB 2式の粗製土器であろう。胴部は横位のL R 摒糸文が施されている。底部は平底の形状をしている。

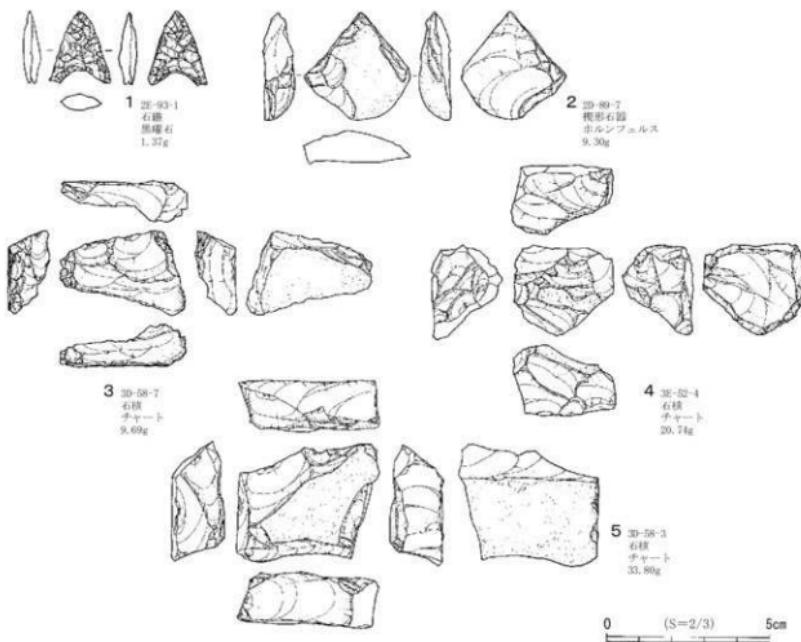
第5群 晩期の土器（第16図151～154、図版18）

151～154は同一個体である。外面はこげ茶色を呈する。口唇部上端に沈線が施され、胴部には太い横位の沈線が間隔をおいて施されている。安行3d式土器と思われる。

(2) 繩文石器 (第17図、図版12)

1は石鏃である。灰白色半透明の良質な黒曜石が用いられている。全体形状が正三角形を呈し、基部の抉りは比較的深い。全面に細かい平坦剥離が施されている。2は楔形石器である。幅広の剥片を素材として、上下両端と左右両端に両極剥離が施されており、先端部が尖った形状をしている。石鏃の未成品の可能性がある。

3～5は石核である。3は裏面に大きく自然面を残した板状の剥片を素材としている。剥離順序は、表面上部を打面として上面方向に横長剥片を剥離→裏面左部を打面として右面方向に横長剥片を剥離→上面を打面として表面方向に横長剥片を剥離→裏面右部を打面として表面方向に細かい剥離→右面左部を打面として表面方向に細かい剥離が施されている。後半に細部調整加工がみられることから、石核を素材とした削器と分類することも可能である。4は分割礫を素材としている。分割面は裏面に大きく残っている。剥離順序は、上面右部を打面として右面方向に横長剥片を剥離→裏面下部を打面として下面方向に横長剥片を剥離→裏面上部を打面として表面方向に横長剥片を剥離→表面左部を打面として左面方向に横長剥片を剥離している。打面転移が頻繁に行われており、サイクロ状の形態を呈する。5は節理面に沿って剥離された板状の剥片を素材としている。剥離順序は、表面上部を打面として裏面方向に横長剥片を剥離→下面右部を打面として右面方向に縦長剥片を剥離→裏面右部を打面として左面方向に横長剥片を剥離→左面下部を打面として下面方向に縦長剥片を剥離→上面を打面として表面方向に横長剥片を剥離している。



第17図 繩文石器

第3章 辰巳ヶ入遺跡

第1節 遺跡の概要（第3・18・19図）

成田市（旧香取郡大栄町）吉岡字大安場1343-3の一部ほかに所在する辰巳ヶ入遺跡は、尾羽根川上流域右岸、小支谷の谷奥にあたる標高39m前後の台地上に立地する（第3図）。



本書では、平成27年度に実施した第1次調査の成果を報告する。調査区割およびトレンチ配置は第18図のとおりである。対象範囲を大グリッド表記で記すと、6G~6I、7H~7J、8I・8Jとなる。

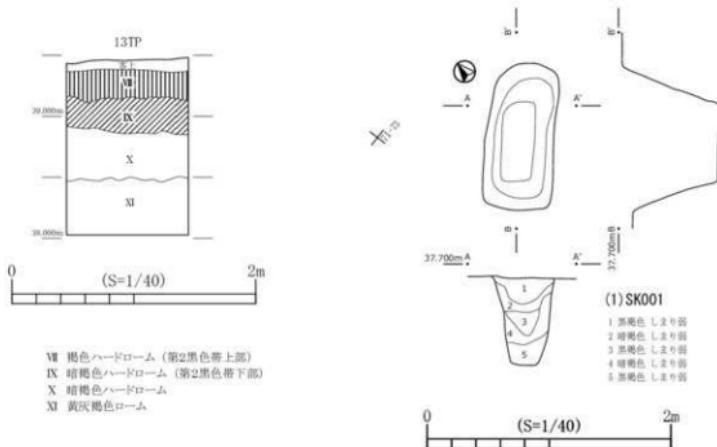
北西に向かって緩やかに傾斜する2,642m²を対象としてトレンチ調査を実施した。その結果、広範囲において畑作のトレンチャーによる擾乱をうけていることが判明し、縄文時代の陥穴1基【(1)SK001】がみつかったものの、縄文土器・石器が少量出土したにとどまった。また、下層についても、遺構・遺物が検出されなかつたことから、確認調査の範囲で調査を終了した。基本層序は第19図のとおりである。なお、関東ローム層上面は、西側の谷に向かって傾斜していることを確認した。

第2節 遺構と遺物

縄文時代の陥穴を1基検出した。遺物については掲載可能な遺物は出土していない。

(1)SK001 (第19図、図版4)

7I-73グリッドに位置する長方形の陥穴である。長軸1.22m、短軸0.57m、確認面から底面までの深さは0.71mである。長軸方位はN=41°-Eを指す。底面は平坦で、壁は開きながら直線的に立ち上がる。覆土は黒褐色土と暗褐色土が交互に埋積する（第19図）。



第19図 基本層序と陥穴

第4章 大安場IV遺跡

第1節 遺跡の概要（第3・20図）

成田市（旧香取郡大栄町）吉岡字大安場1125-8ほかに所在する大安場IV遺跡は、尾羽根川上流域右岸、標高39m前後の台地上に立地する（第3図）。

本書では、平成27年度に実施した第1次調査の成果を報告する。調査区割およびトレント配置は第20図のとおりである。対象範囲を大グリッド表記で記すと、16T・16U、17S～17U、18T・18Uとなる。

北西側の谷に向かって緩やかに傾斜する3,110m²を対象としてトレント調査を実施した。その結果、広範囲において畑作のトレントによる擾乱をうけていることが判明した。奈良・平安時代の土師器片が少量出土したもの、遺構は検出されなかった。下層についても、遺構・遺物が検出されなかつたことから、確認調査の範囲で調査を終了した。なお、関東ローム層上面についても、現地表と同様に北西側に若干傾斜していることを確認した。



第5章 大安場V遺跡

第1節 遺跡の概要（第3・21・22図、図版4）

成田市（旧香取郡大栄町）吉岡字大安場1124-18に所在する大安場V遺跡は、尾羽根川上流域右岸、標高39m前後の台地上に立地する（第3図）。



本書では、平成27年度に実施した第1次調査の成果を報告する。調査区割およびトレンチ配置は第21図のとおりである。対象範囲を大グリッド表記で記すと、18T～18V、19U～19W、20V・20Wとなる。

ほぼ平坦に広がる2,324m²を対象としてトレンチ調査を実施した。その結果、広範囲において畑作のトレンチャーよによる擾乱をうけていることが判明した。

上層では、遺構は検出されず、擾乱中から縄文土器・石器が少量出土したため、石鐵出土地点を中心につれんチを拡張したが、追加資料はなかった。下層については、遺構・遺物はなかった。上記の結果を受け、上層・下層とも確認調査の範囲で調査を終了した。

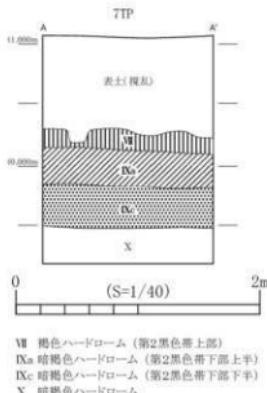
基本層序は、第22図・図版4のとおりである。なお、関東ローム層上面について、ほぼ平坦であることを確認した。

第2節 遺構と遺物

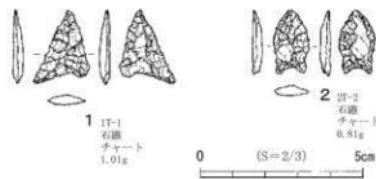
遺構は検出していない。縄文石器を2点図示した。土器は図示可能なものが出土しなかった。

縄文石器（第23図、図版12）

1・2は石鐵である。1は良質なチャートが用いられている。器体のほぼ全面に細かい平坦な調整加工が施されており、裏面中央部に素材剥片の主要剥離面がわずかに残っている。全体形状は正三角形を呈し、脚部の抉りは浅い。右脚部は破損している。2は2トレンチから出土している。1と同様に良質なチャートが用いられている。横長剥片を斜位に用い、脚部は小さく抉りが浅い。脚部より上部は尖頭器のような形状をしており、全体形状は五角形の形態をしている。



第22図 大安場V遺跡基本土層図



第23図 縄文石器

第6章 水の上I遺跡

第1節 遺跡の概要（第3・25図）

成田市（旧香取郡大栄町）水の上962-9の一部ほかに所在する水の上I遺跡は、尾羽根川上流域右岸、標高40m前後の台地上に立地する（第3図）。

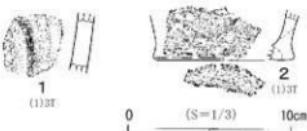
本書では、平成27年度に実施した第1次調査の成果を報告する。調査区割およびトレーニング配置は第25図のとおりである。対象範囲を大グリッド表記で記すと、23Y、24Y、25Yとなる。

南西方向に向かい緩やかに傾斜する854m²を対象としてトレーニング調査を実施した。その結果、広範囲において烟突のトレーニングによる擾乱をうけていることが判明した。上層では、土器が少量出土したもののみ、遺構は検出されず、また、下層で遺構・遺物がなかったことから、確認調査で終了した。なお、関東ローム層上面は、西側の谷津に向けて傾斜していることを確認した。

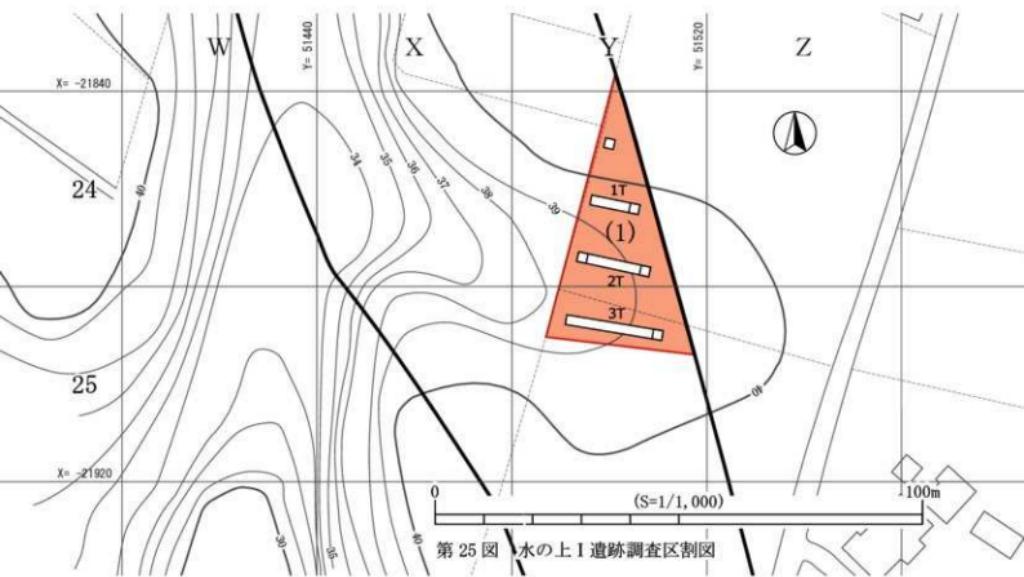
第2節 遺構と遺物（第24図、図版4・18）

遺物は確認トレーニングから出土した。遺構は検出されなかった。第24図は3トレーニング上層出土の縄文土器である。

1は縄文土器深鉢の胴部で、縫合による波状文である。加曾利EIV式である。2は底部で、外面にヘラケズリ、内面にナデ調整がみられる。



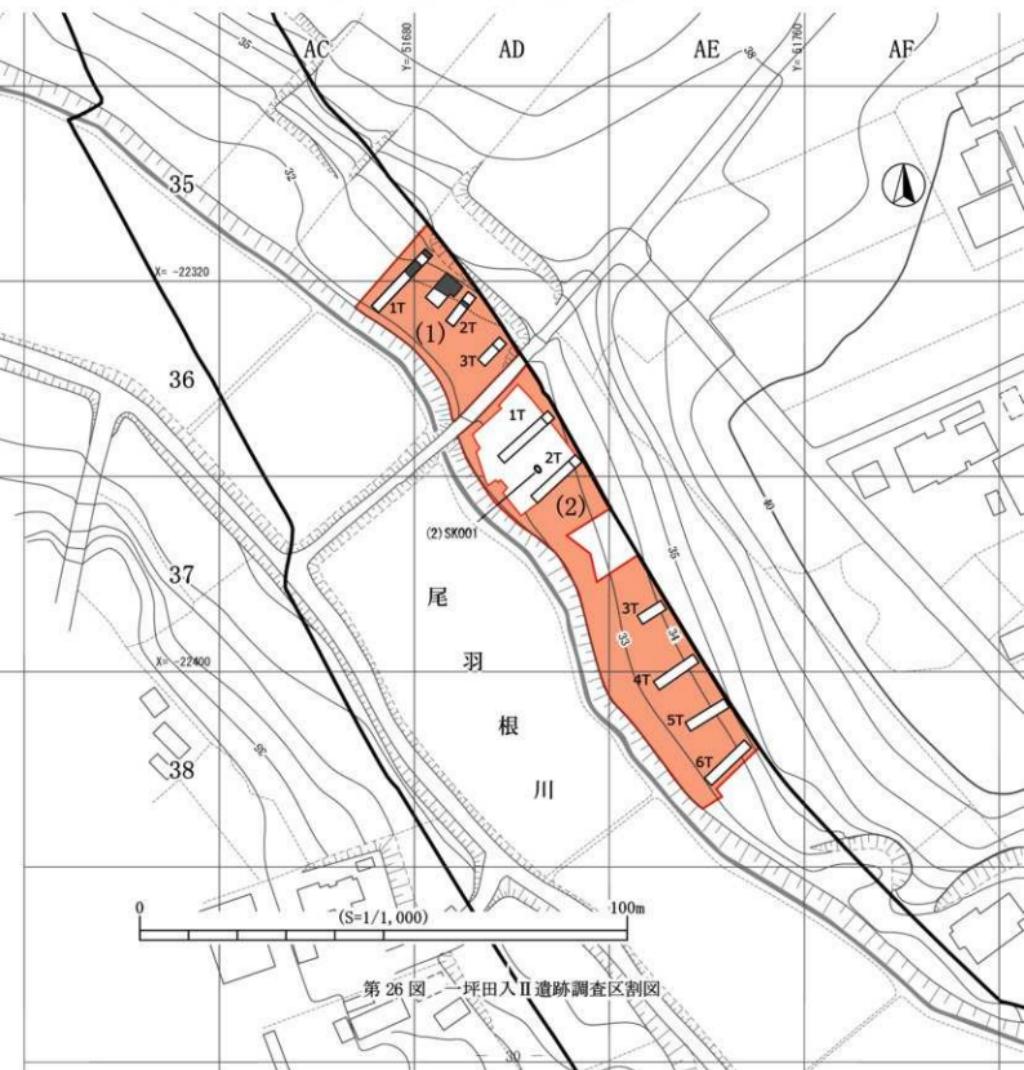
第24図 縄文土器

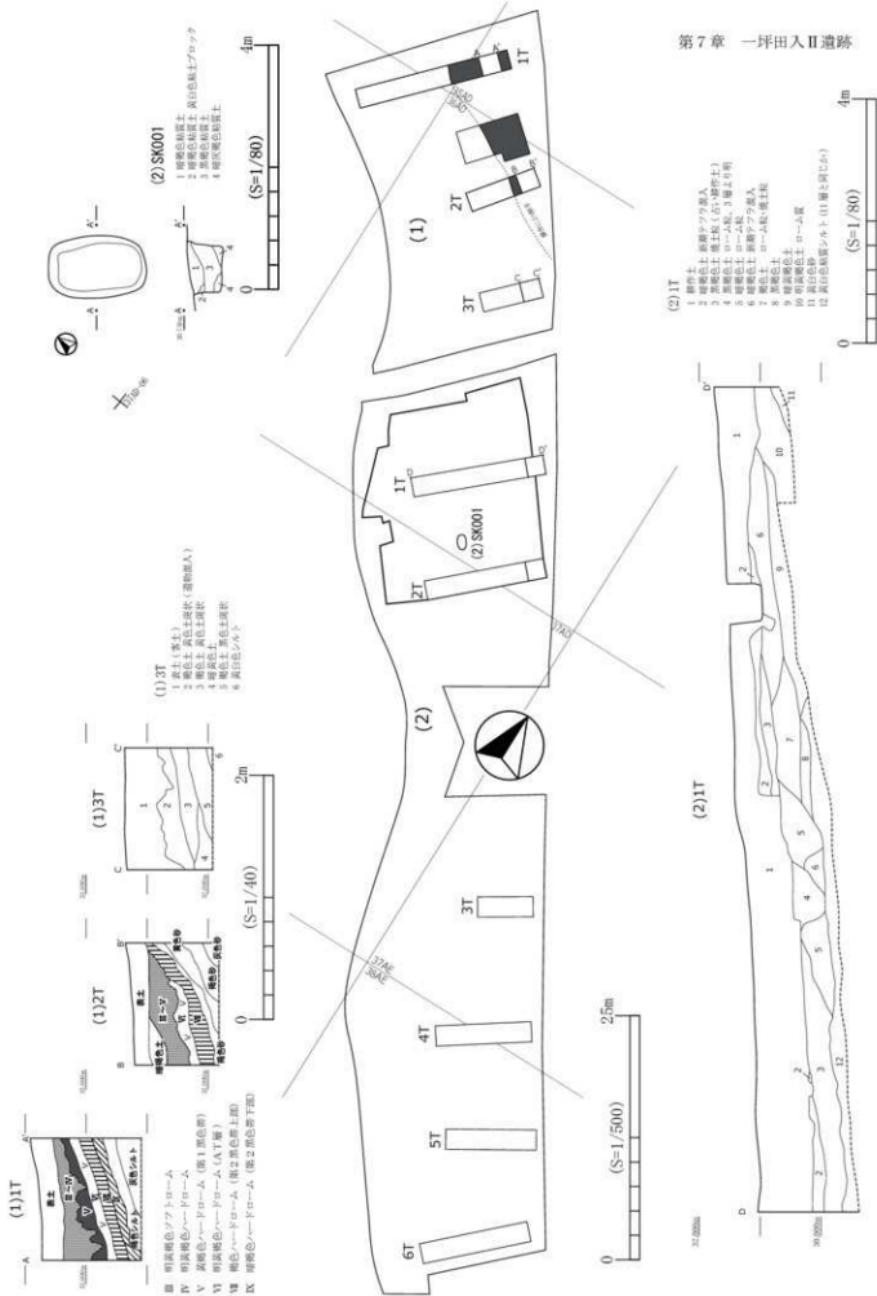


第7章 一坪田入II遺跡

第1節 遺跡の概要（第3・26図）

成田市（旧香取郡大栄町）多良貝245-534ほかに所在する一坪田入II遺跡は、尾羽根川上流域右岸、台地縁辺斜面裾部低位段丘上（標高33m前後）に立地する（第3図）。





第27図 遺構配置・基本層序・陥穴

利根川水系と栗山川水系との分水界まで約0.7km地点、尾羽根川が最上流域で二股に分かれる地点の右岸に位置している。なお、遺跡西方の谷津の標高は30m前後、遺跡東方の台地上平坦面の標高は40m前後である。

本書では、平成26年度に実施した第1・2次調査（計2,101m²）の成果を報告する。調査区割およびトレレンチ配置は第26図のとおりである。台地縁辺沿いに北西から南東へ帯状に広がる対象範囲を大グリッド表記で記すと、35AC・35AD、36AC・36AD、37AD・37AE、38AD・38AEとなる。

第1次調査（以下(1)と略記）は、市道北側の568m²を対象として実施した。トレレンチ調査の結果、(1)調査区南西部は谷津を埋め立てた区域であること、北東部は削平された区域であることが判明した（第27図）。(1)調査区北東部の上層で、縄文時代早期を中心とする土器が出土したため、ややまとまって出土した部分を拡張したところ、当区域内から出土した縄文土器・弥生土器の出土状況に関して、北東側台地上からの流れ込みであることが明らかとなった。下層では、遺構・遺物は検出されなかったことから、上層・下層とも確認調査の範囲で調査を終了した。

第2次調査（以下(2)と略記）は、市道南側の1,533m²の低位段丘面を対象として実施した（第27図）。トレレンチ調査の結果、(2)調査区北西部において、縄文時代早期と晩期を中心とする遺物包含層1か所を検出した。これを受け、356m²について本調査に移行した結果、遺物包含層の下から縄文時代早期の陥穴1基を検出した〔(2)SK001〕。なお、遺物包含層は本調査範囲北側の市道の下へ続くと推測される。下層については、遺構・遺物とも出土せず、確認調査の範囲で調査を終了した。

第2節 遺構と遺物

1 遺構

縄文時代の陥穴を1基検出した。

(2)SK001（第27図、図版5）

36AD-96グリッドに位置する長方形の陥穴である。黄白色粘質シルト層上面から掘り込まれている。長軸1.58m、短軸1.04m、確認面から底面までの深さは0.53mである。長軸方位はN-41°-Eを指す。底面は平坦で、壁は開きながら直線的に立ち上がる。覆土は黒褐色土と暗褐色土が交互に埋積する。

2 遺物

縄文時代の土器・石器は、遺物包含層から出土した。

（1）縄文土器（第28～40図、図版19～29）

出土した縄文土器は、早期から晩期におよんでいる。最も多いのは早期の撚糸文系土器であった。出土した縄文土器を以下のように5群に大別し、各群の中에서도類別を行うこととする。

- ① 第1群 早期の土器
- ② 第2群 前期の土器
- ③ 第3群 中期の土器
- ④ 第4群 後期の土器
- ⑤ 第5群 晩期の土器

① 第1群 早期の土器（第28～32図1～188）

最も多かったのが、早期の土器である。撚糸文系土器・子母口式土器が出土しており、そのうち撚糸文系土器が主体を占める。

1類 井草式土器（第28図1～57）

1～4は井草I式土器である。1は口縁部破片で、口唇部が肥厚している。口唇部文様がR L横繩文である。口縁下は横位の撚糸文が施されている。胎土は砂粒を多く含み、焼成が良好である。2は胴部破片である。口縁下は横位、胸部は縦位の撚糸文がそれぞれ施されている。3は口縁部破片で、口唇部が肥厚している。口唇部と口縁にはR L繩文が施されている。4は胴部破片である。胸部は斜位にR L撚糸文が施されている。

5～43は井草II式土器の口縁部破片である。口唇部に押圧繩文が施されている。口縁端部の肥厚および外反が弱くなり、頭部の横位施帶がほぼ消失しているものが相当する。井草I式土器よりも胎土中の砂粒がやや少なくなるが、総じて特徴は類似する。5は口唇部はR繩文である。胸部は縦位の撚糸文が施されている。6は口唇部はR L繩文が施されている。口縁下は無文で、胸部は縦位の撚糸文が施されており、表面から補修孔が穿孔されている。7～43は口唇部文様が横繩文である。胸部は縦位の撚糸文が施されている。7～11は口縁下が縦位の撚糸文が施されている。12～43は口縁下に指頭圧痕が施されている。

44～57は井草式土器の胸部破片である。いずれも縦位に撚糸文が施されている。上記の両型式に属するものが混在していると思われるが、分別が困難なため一括して取り扱うこととした。ただし、大半のものが井草II式のものである可能性が高い。

2類 夏島式土器（第29・30図58～145）

58～98は夏島式土器の口縁部破片である。58～68は口縁部が外反している。口縁端部の形状は、円頭状のもの（58～70・72～75・81～95・97・98）が大半を占めており、角頭状のもの（71・76～80・96）もみられる。59・82は表面から補修孔が穿孔されている。61～67・69～75・77～80・82・84・86～88・90・92・94・95・98は口縁下に指頭圧痕が施されている。

99～145は夏島式を主体とする胸部破片である。ほとんどのものは、器面全体に縦位の撚糸文が施されている。145は斜行あるいは横位の撚糸文が施されていることから、大浦山式土器の可能性がある。

3類 無文の土器（第30図146～153）

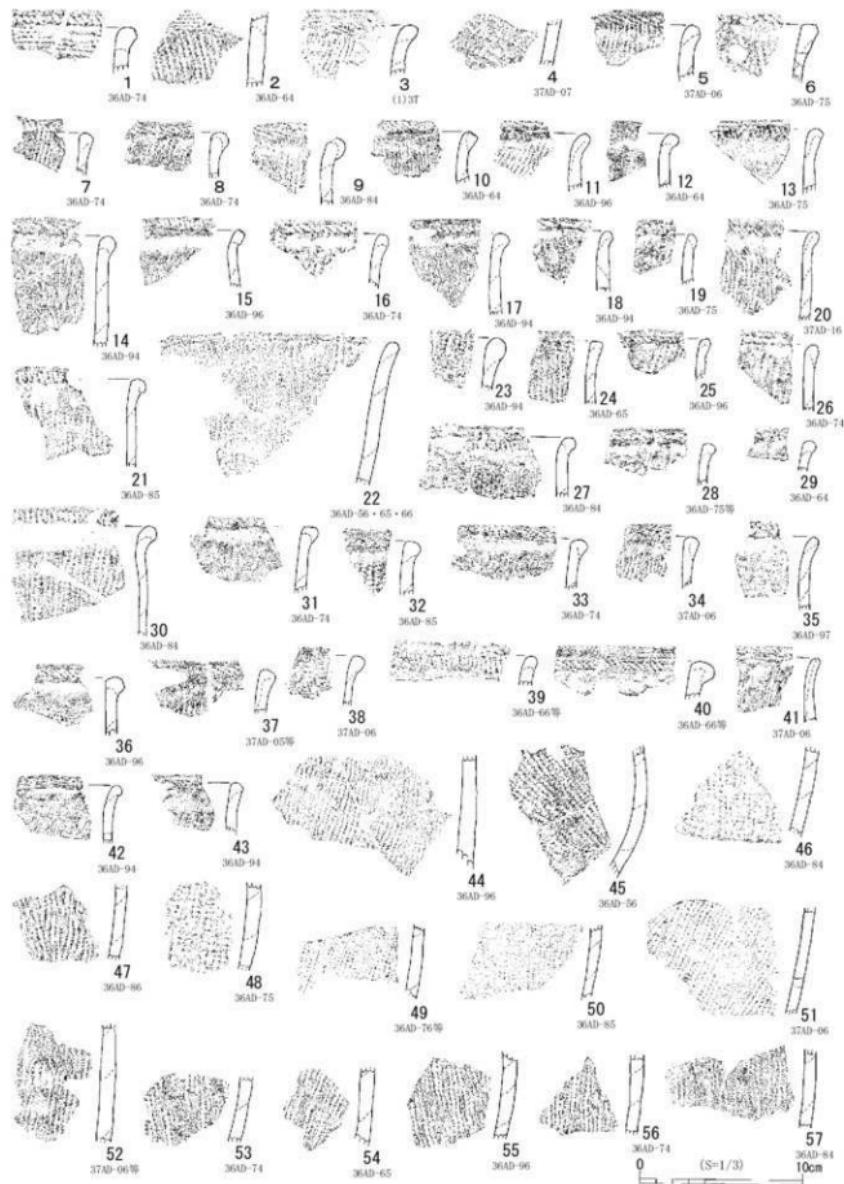
146～153は口縁部破片で、文様をもたない無文の土器を一括した。口縁上端部がわずかに外反している。口縁端部の形状は、円頭状のもの（146～149・152・153）が大半を占めており、外削状のもの（150）、角頭状のもの（151）がわずかにみられる。口縁部の形状は、2類の夏島式土器と類似する。

4類 子母口式土器（第31・32図154～188）

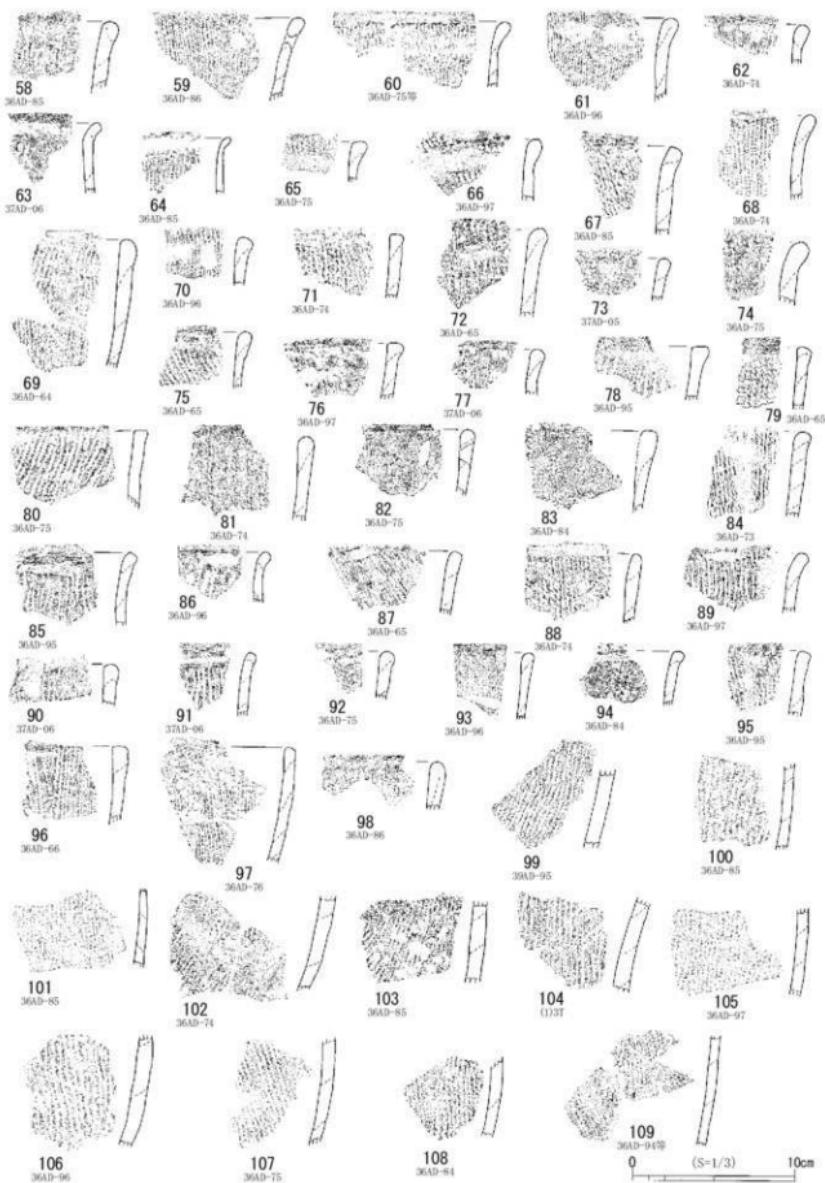
154～159は絡条体圧痕を伴う土器である。154～157は同一個体と思われる。154は口縁部破片である。口唇部と口縁部に絡条体が斜位に施されている。155～159は口縁下に絡条体が横位に施され、沈線が縦位に施されている。

160～162は円孔文または突瘤文を伴う土器である。口縁部破片で、直立気味に開口している。160は緩い波状の口縁をなすものである。160・161は棒状工具による刺突によるもので、貫通しておらず内面が盛りあがる突瘤文が施されている。162は刺突によって貫通している。

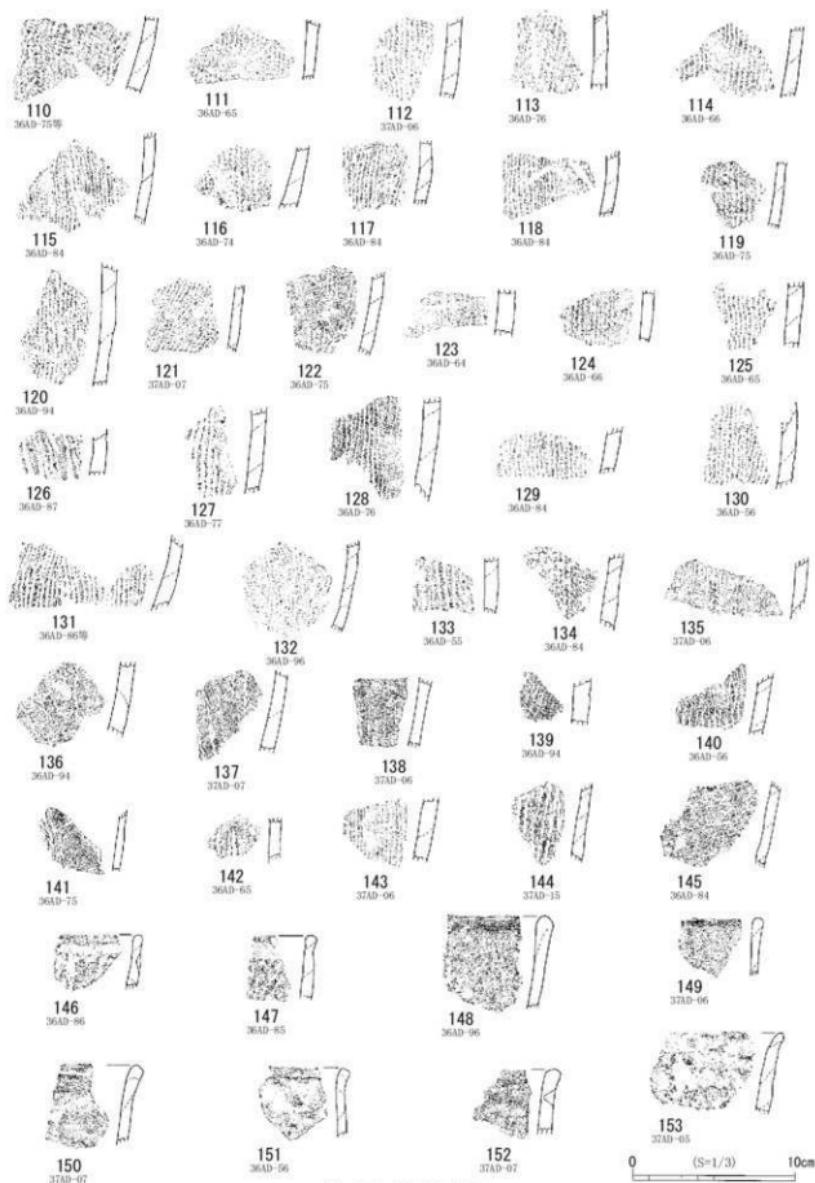
163～165は回線を伴う土器の胸部破片で、同一個体と思われる。回線は斜位方向に施されている。



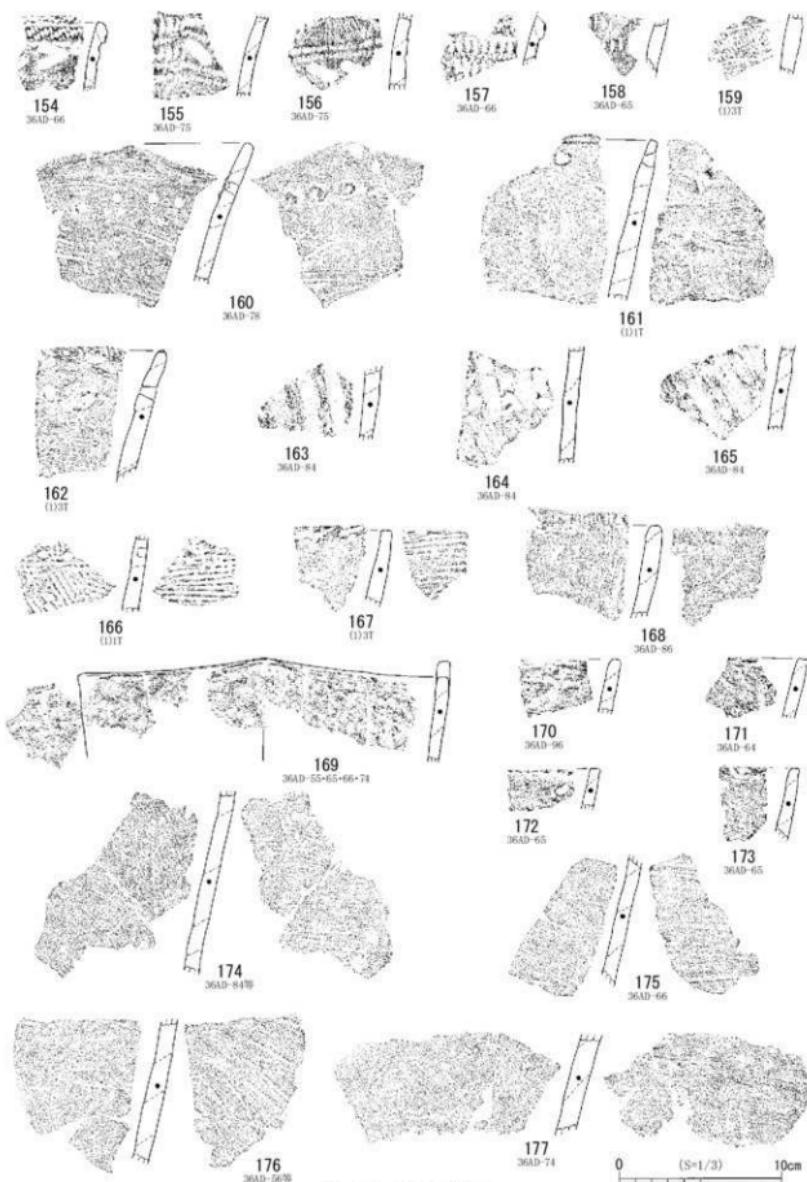
第28図 繩文土器(1)



第29図 繩文土器(2)



第30図 繩文土器(3)



第31図 繩文土器(4)

166～186は内外面に条痕ないしは擦痕状の調整痕がみられる。166は160・161と同様に棒状工具によるもので、貫通していないが内面の盛りあがりはみられない。167～173・178～181は口縁部破片で、直立氣味に開口している。167は内面に条痕がみられる。168は口縁部にキザミ痕がみられる。169は緩い波状の口縁をなすものである。174～177・182～186は胴部破片で、内外面に条痕が施されている。

187・188は尖底部破片である。細かい繊維が多量に含まれる。

② 第2群 前期の土器（第32～36図189～285）

1類 諸磯b式土器（第32図189～216）

189～203は半截竹管により文様が施されたものである。器厚が厚く、外反して大きく開く深鉢が主体を占める。189～195は幅広の爪形文により文様が施されている。文様は口縁部と胴部中段に横位の爪形文を施し、その間を弧線や直線の爪形文で埋めている。189・192は口縁部破片で、口唇部は斜位に丸棒工具により施されている。190・191・193～195は胴部破片である。196～203は半截竹管により平行沈線が巡り、その間に鉗齒状の沈線が施されている。196・197・200～203は同一個体である。196・197は口縁部破片で、緩い波状の口縁をなすものである。

204～216は密な繩文が施されたものである。204～206は同一個体で、R L繩文が施されている。204・205は口縁部破片で、外反して大きく開く深鉢である。207～211は同一個体で、R L繩文が施されている。すべて胴部破片である。212はR繩文が施されている。213・214はR L繩文が施されている。215・216は同一個体で、器厚が厚い。L R L繩文が施されている。

2類 浮島式・興津式土器（第33～35図217～249）

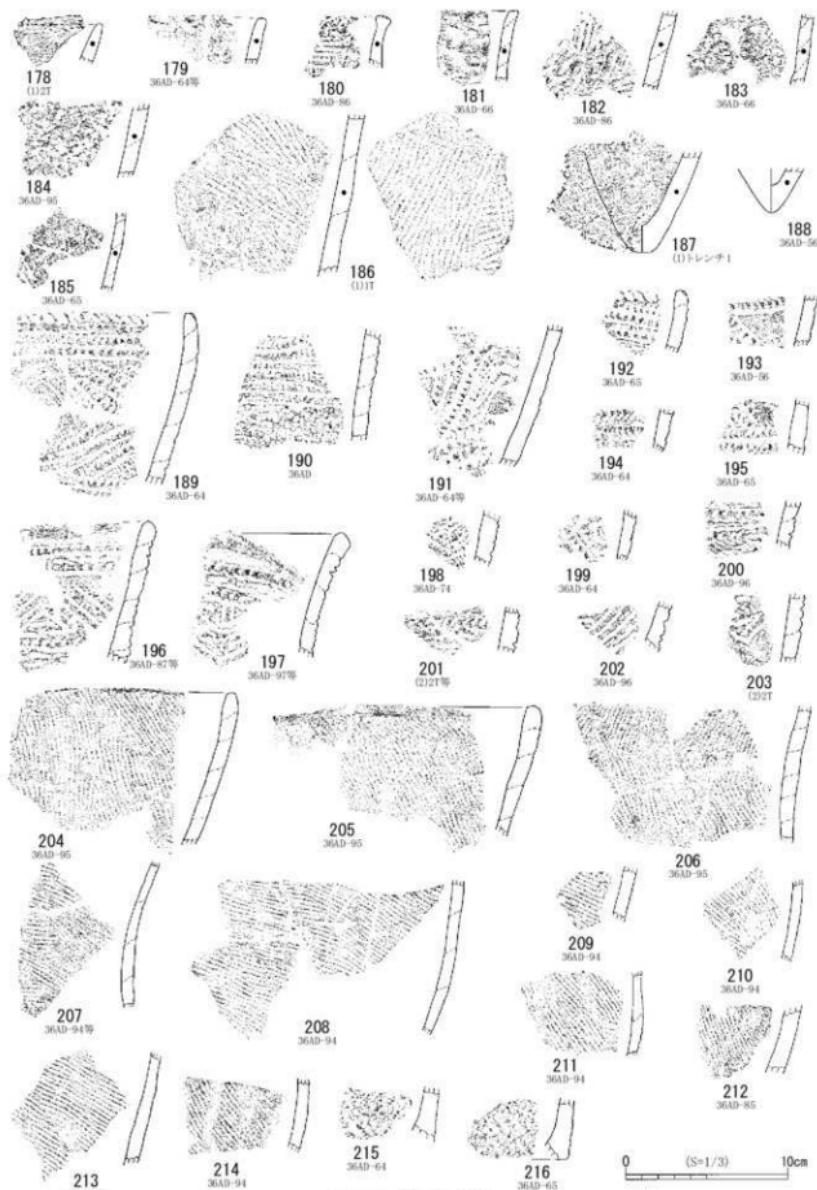
本類は、浮島I式～III式・興津式土器が含まれる。

217～220は浮島I式土器である。平縁で胴上部でくびれ、口縁が強く外反する。口径に比べて底径が小さい。217・218は同一個体で、胴部上半に地文連結木葉文が施され、胴部下半に波状貝殻文が施されている。219は口縁が波状を呈し、胴部上半に半截竹管による平行沈線と押引が横位に施され、胴部下半に貝殻文が継位に施されている。220は半截竹管による平行沈線が巡り、その間に爪形文が施されている。

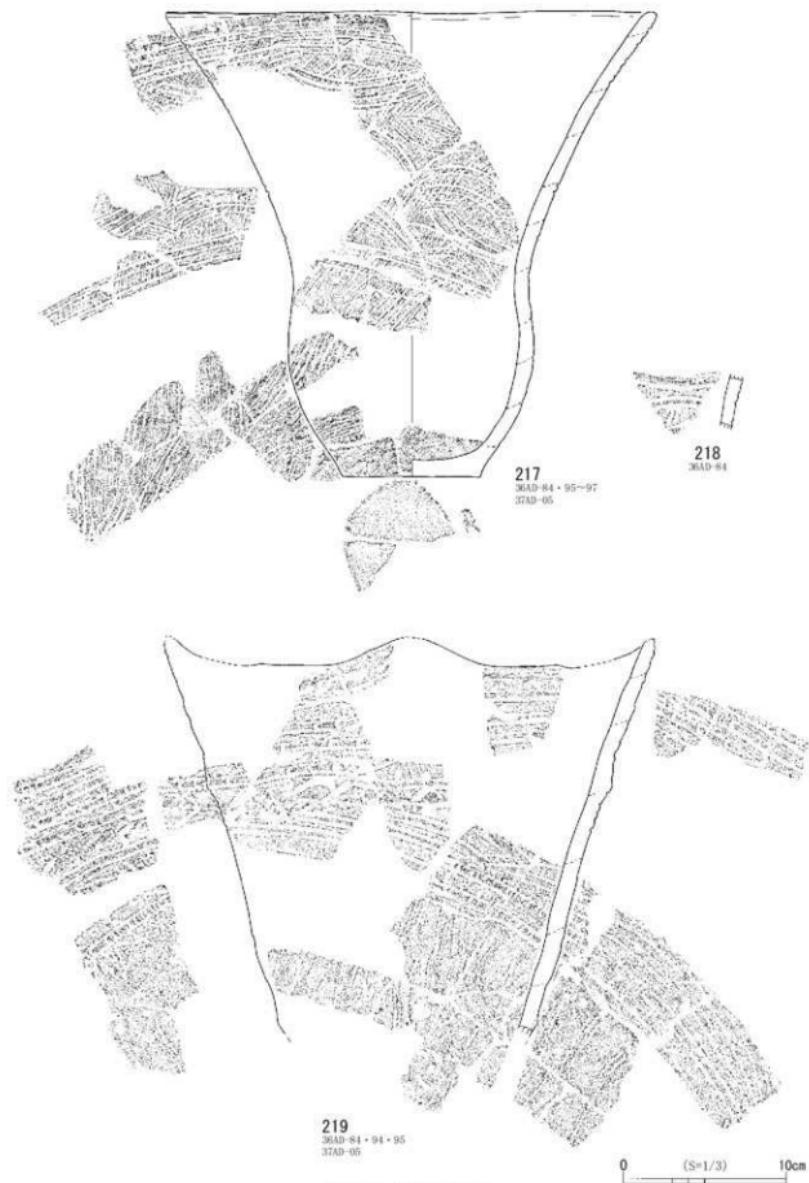
221～224・230は浮島II式土器である。口縁上端は半截竹管により平行沈線が施され、口縁下端は山形の沈線が施されている。221～223は同一個体と思われる。221は口縁部破片で、口縁が外反している。224は波状口縁である。口唇部に丸棒工具による刻みが施されている。230は口縁が外反し、口縁下部に変形爪形文、胴下部に貝殻腹縁文がそれぞれ施されている。

225～229・231・242は浮島III式土器である。225～229・231は羽状の貝殻腹縁文が横位に施されている。242は輪積痕部分に焼成前に穿孔した2か所の孔がみられる。口唇部は外削されている。器厚が厚く、外反して開く器形をしている。口縁部に無文帶が巡り、横位に指頭圧痕が施され、胴部は斜位の条線が施されている。

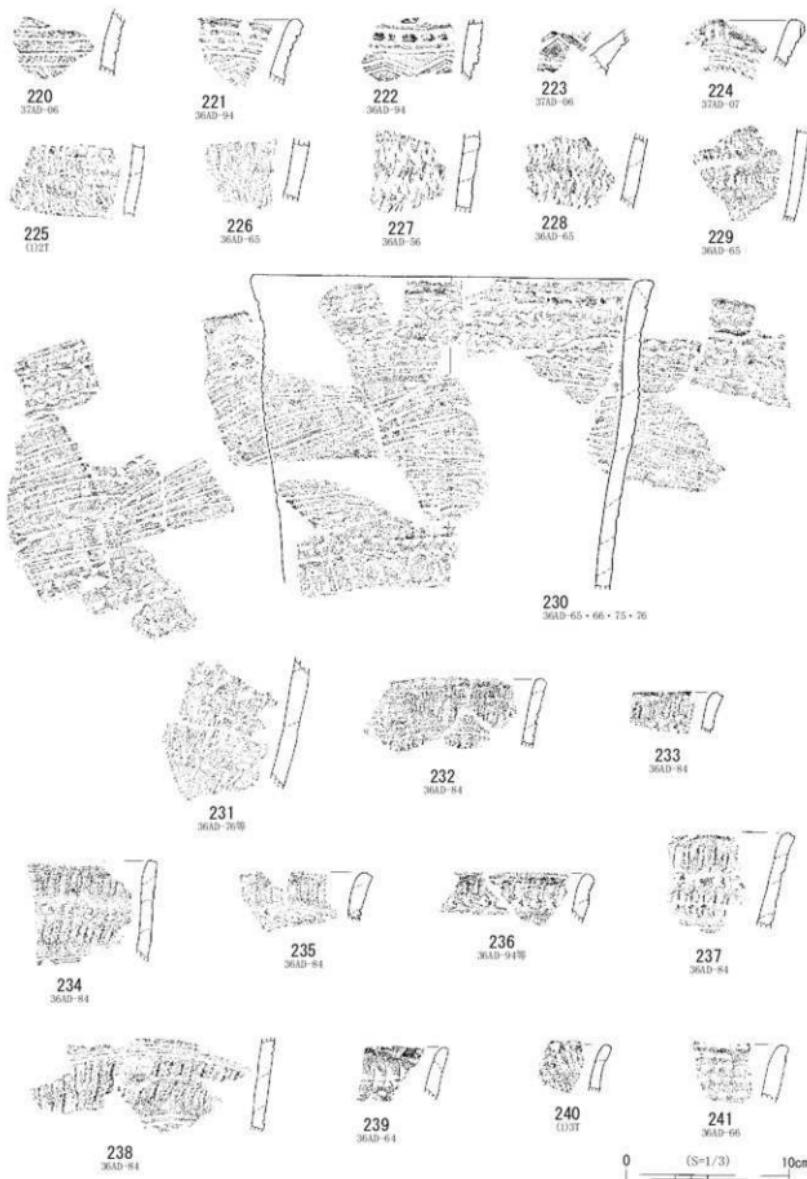
232～241・243～249は興津式土器である。232～241は貝殻腹縁文を帯状に施した両端を平行沈線で区切り、外側を磨消して文様が施されている。243～246は口縁上部に無文帶が巡り、口縁下部に凹凸文が施されている。247は口縁部に間隔がやや密な波状貝殻文が施されている。248は口縁部に無文帶が巡っている。249は貝殻腹縁文が施されている。



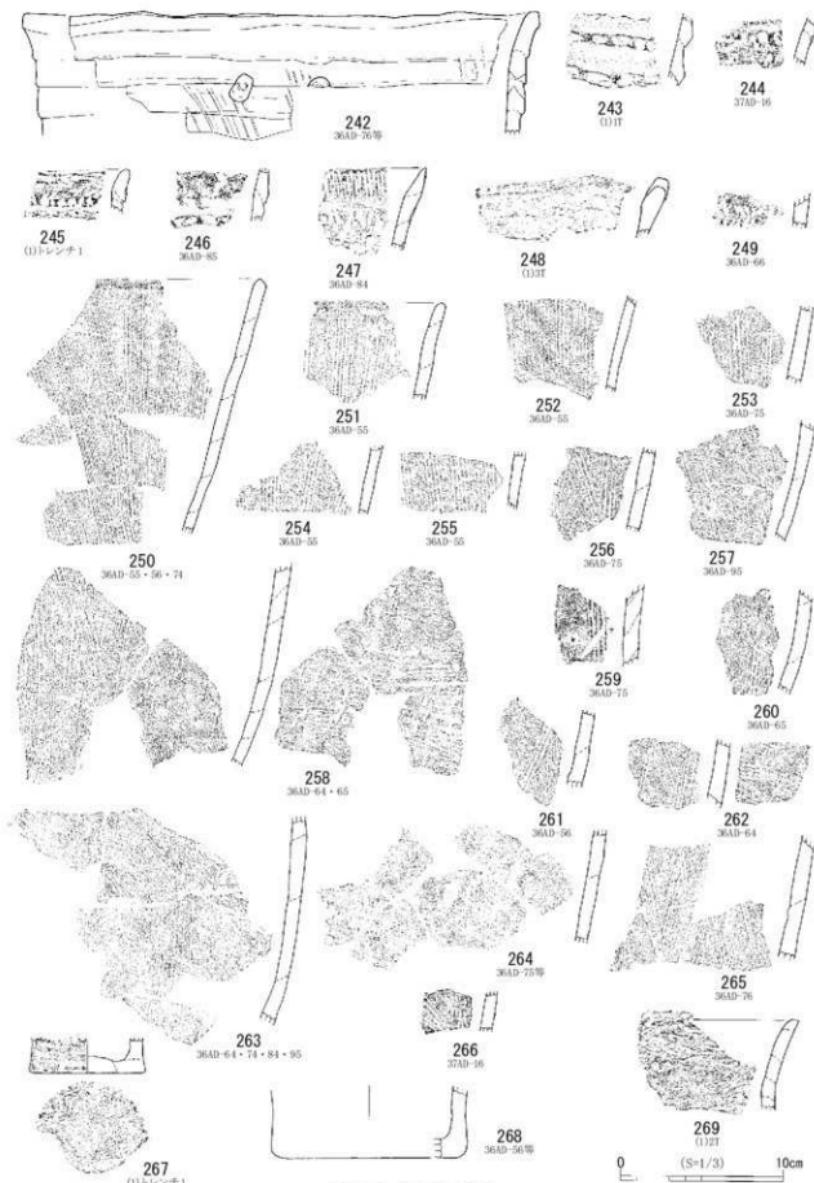
第32図 繩文土器(5)



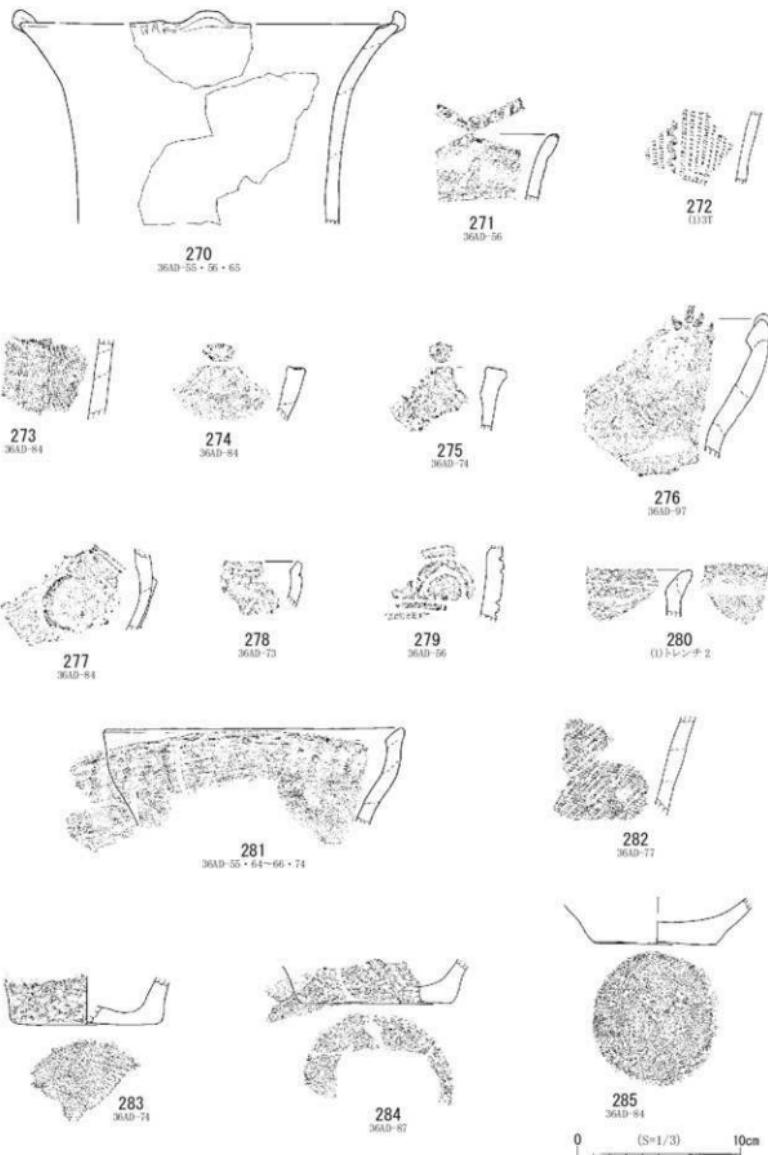
第33図 繩文土器(6)



第34図 繩文土器(7)



第35図 繩文土器(8)



第36図 繩文土器(9)

3類 その他の土器 (第35図250~268)

250~266は櫛状の工具による条線が縦位に施されている。量的には微量である。258・262の内面は条線が横位に施されている。263・264は同一固体と思われる。267・268は平底の底部である。おそらく2類の底部で、無文である。底部まで文様が施されていなかったものと思われる。

4類 前期末葉の土器 (第35図269)

269の1個体のみが該当する。横位に波状の条線が施されている。口縁が外反する。

③ 第3群 中期の土器 (第36図270~285)**1類 中期初頭から阿玉台・勝坂式土器** (第36図270~282)

270・271・276・278・280・281は口唇部が内湾し、内削状で稜をつくる。270・271・276は口唇部上端に刻み目が施されている。270は平縁口縁で、波頂部に隆帯が付いている。口縁部と胴部は無文である。271は波状口縁で、R L 摺糸文が縦方向に施されている。272は勝坂式で縦位に太沈線で、区画された内側には、鋸歯状刻みと縦位の交差刺突文が施されている。273は中期初頭の胴部で、縦位のS字状結節文が施されている。274~276は波状口縁で、波頂部に突起が付いている。突起は274・275が渦巻文、276が太沈線が施されている。277は口縁下部にC字隆帯が貼付けられている。278は口縁下部に横位に押引による凹み文が施されている。279は横位に太沈線で区画された内側には、梢円文の沈線が施されている。280は平縁口縁で、口縁部は内削状である。口唇部内側には繩文が施されている。281は無文である。平縁口縁で、横位にナデとミガキが施されている。282はR L 調文が縦方向に施されている。

2類 その他の土器 (第36図283~285)

283~285は平底の底部である。283は無文で、上げ底状の底部である。284は繩文が施されている。285は無文である。

④ 第4群 後期の土器 (第37図286~322)**1類 精製土器** (第37図286~305)

286~305は精製土器である。加曾利B 2 ~ B 3式で、内面は丁寧なミガキが施されている。口縁部は、287~289・291が外反、290・292・294・296が直立、297~299が内湾する。286は頭部に刺突文が施される。胴部は繩文を地文とし横位の沈線が施されている。内外面に煤が付着している。287~289は浅鉢である。同一個体と思われる。口唇部上端には半截竹管による刻み目が施されている。口縁部は無文である。頭部は紐線文が貼り付けられ、棒状工具により刺突文が施されている。胴部はL R 繩文が施されている。290は口唇部にR L 繩文が施されている。口縁下部は横位に沈線、頭部は押引による沈線、胴部はR L 繩文が横方向に施されている。291は浅鉢である。口縁部は無文で、胴部は平行の沈線が施されている。292は口縁部が肥厚し、口唇部上端には半截竹管による沈線が横方向に施されている。口縁部は無文で、胴部はL R L 繩文が横方向に施されている。293は口縁下部に沈線が巡り、頭部に紐線文が貼り付けられ、棒状工具により刺突文が施されている。胴部は斜位に半截竹管による沈線が施されている。294は口縁下部が無文である。頭部に紐線文が波状に貼り付けられ、棒状工具により刺突文が施されている。胴部は沈線により区画された内側にR L 繩文が横方向に施されている。295は口縁部が無文で、頭部に横位沈線・連続刺突文が施されている。胴部は弧線文の内側にR L 繩文が施されている。296は口縁部に横方向に平行沈線



第37図 繩文土器(10)

が施され、胴部は連弧文の沈線で区画された内側にLR繩文が施されている。外面に煤が付着している。297～299は口縁内側が折り返されたように肥厚している。297・298は同一個体である。口縁部は平行沈線の内側に押引による沈線が施されている。胴部はRL繩文が施されている。297の口縁部左端に突起が付いている。299は口唇部上端に丸棒工具によって連続した刺突文が施されている。頭部は平行沈線で区画された内側にRL繩文が施され、胴部上半は無文である。300・301はRL繩文が施されている。302・303は弧状沈線で区画された内側にRL繩文が施されている。304は平行の太沈線が施されている。305は口縁が丸みがあり肥厚している。口縁部は無文である。

2類 粗製土器（第37図306～312）

306～312は粗製土器である。306～311は加曾利B2～B3式である。306～308は口縁部に紐線が貼付けられ、指頭圧による押捺がしっかりと行われている。口縁上部に刺突文が巡り、その下に斜位に沈線が施されている。309は斜格子文が施されている。310は口縁が肥厚する。半截竹管による平行沈線が横位に施されている。311は頭部と胴部に横位の太沈線と斜位の細い沈線を施した後、頭部に紐線を貼付け指頭により押捺が行われている。312は安行1～2式と思われる。口縁が内側に肥厚している。口縁下部にRL繩文が横方向に施されている。頭部に太沈線が巡り、胴部は無文である。

3類 底部（第37図313～322）

313～322は平底の底部である。すべて無文である。317・321・322は底面に網代圧痕が残されている。

⑤ 第5群 晩期の土器（第38～40図323～447）

1類 前浦式土器（第38図323～345）

繩文を地文とし太い沈線との組み合わせを特徴とする。「X」字状、あるいは「の」の字状など、それらを組み合わせることにより文様を構成している。器種と精製度の関連をみると、浅鉢の330・343は精製度が高く、深鉢の323～329・331～342・344・345は精製度が低いことがうかがえる。

323・324は本類のなかで最も精製度の低い土器である。繩文を地文として、太い沈線で区画された内側に、X字状を入組ませた文様をしている。三叉状入組文が施されているものは、325～327・332・335～337・340・344・345である。325は口縁下半が穿孔されている。327の口唇上端は沈線が施されている。332は口縁部内面に沈線が巡っている。舟形棒状文が施されているものは、329・331・333・334・339である。328は口縁に突起が付けられている。口縁部に横位のR撚糸文、胴部に継位のR撚糸文が施されている。330は浅鉢で口縁に突起が付けられている。口縁内側に2条の太い沈線が巡っている。338は口縁部にRL繩文が施されている。341は横位に平行沈線が施されている。342は口縁部にL撚糸文が施され、頭部に沈線が巡っている。343は波状口縁をなす浅鉢である。外面は弓形の沈線で区画された内側にLR繩文が充填され、内面は渦巻沈線文が施されている。

2類 千綱式土器（第38～40図346～436）

本類は千綱式土器の古い段階のものである。全体的な特徴は、メガネ状浮線文を浅鉢の口縁または壺の肩部に多用すること、後段階の変形工字文にもつながる三分岐浮線文がみられないことがあげられる。典型的な千綱式土器（群馬県千綱谷戸遺跡¹⁾、四街道市池花南遺跡²⁾など）の構成とは異なっている。明らかに古い要素で、神奈川県杉田遺跡³⁾の内容に近いといえる。東北との並行関係では大洞A式相当で、その前半に並行すると思われる。

346～399は工字文（あるいは浮線網状文）が施されている。多様の器種で構成されており、浅鉢が346～350・358・362～366・368・369・373・375・376・398・399、甕が354～357・360・395・396、壺が353・359・367・370～372・374・387・394、これ以外が深鉢に分類される。

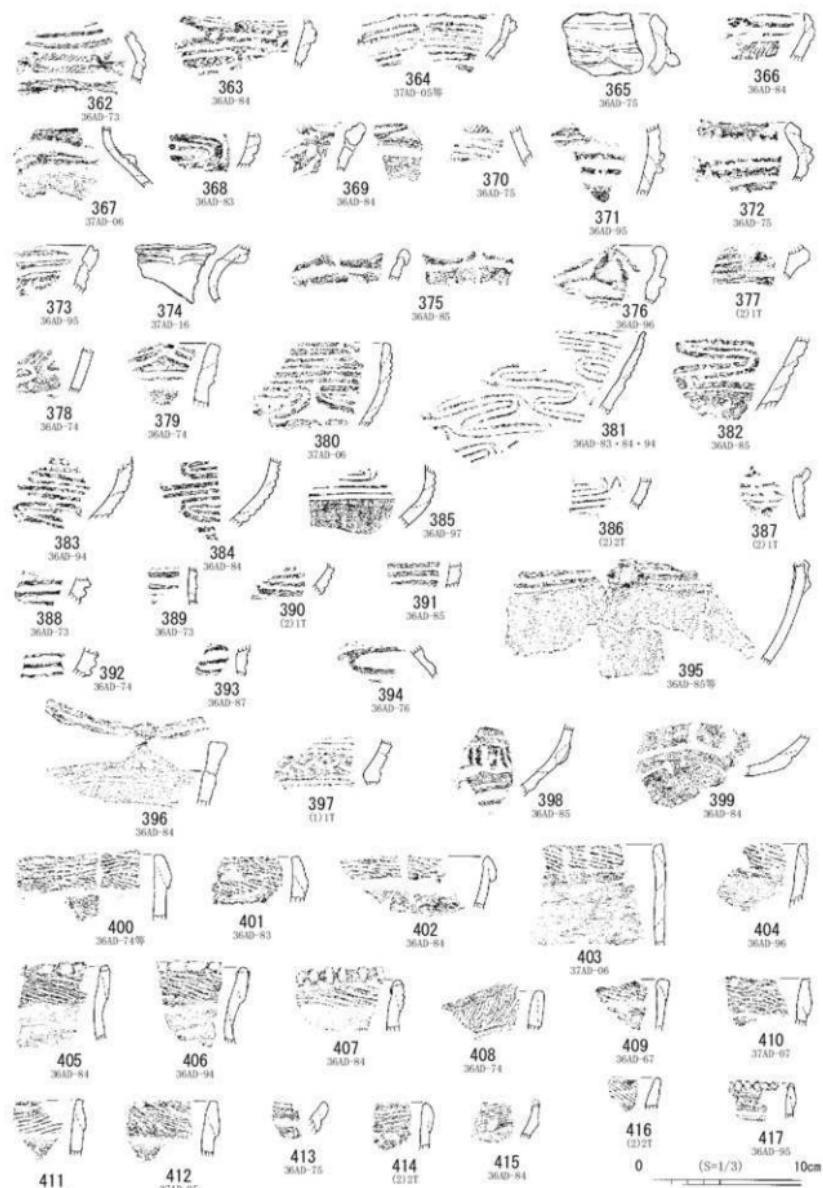
工字文が施された土器は、大きくみると下記の二種の浮線文で形成されている。

一つ目は、346～361でやや幅広2条の浮線を単位として上下に交互して文様が入り組むものである。346～350は直線的に開く器形を持つ浅鉢である。346は波状口縁をなし、口唇部に突起が貼付けられている。複合（折り返し）口縁を持ち、口縁部の内面から外面にかけて幅広の沈線が施されている。沈線間に研磨された無文帶がみられる。347は工字文で区画された内側に、L R 摨糸文が施されている。348は波状口縁をなし、口唇部上端に沈線が施されている。口縁部の内外面に幅広の沈線が巡り、口縁上半にL R 繩文が施されている。349は波状口縁をなし、2条の幅広の沈線が巡り、口縁上半に撚糸が施されている。350は口縁部の内外面に2条の幅広の沈線が巡っている。口縁上半と頸部にL R 繩文が施されている。351は幅広の沈線が巡り、上半が無文帶で下半にL R 摢糸文が施されている。352は口縁部の内外面に幅広の沈線が巡り、口縁上半にL R 繩文が施されている。353は壺である。数条の幅広の沈線が巡り、沈線間にL R 摢糸文が施されている。354～357は甕である。頸部と胴部の区分が明確な器形を持つ。354は頸部上半は外反し、胴部はL R 摢糸文が施されている。355・356は複合（折り返し）口縁を持ち、口縁部に幅広の沈線が巡っている。沈線間は355が無文で、356がL R 摢糸文が施されている。357は頸部に幅広の沈線が巡り、胴部に工字文で区画された内側にはL 摢糸文が施されている。358は直線的に開く器形を持つ浅鉢である。上半に工字文、下半にL R 摢糸文が施されている。359は壺である。数条の幅広の沈線が巡り、沈線間にL R 摢糸文が施されている。360は甕である。頸部は無文で外反し、胴部はL 摢糸文が施されている。361は複合（折り返し）口縁を持ち、器厚が厚みがある。口縁部は2条の幅広の沈線が巡り、沈線間に刺突が等間隔に施されている。

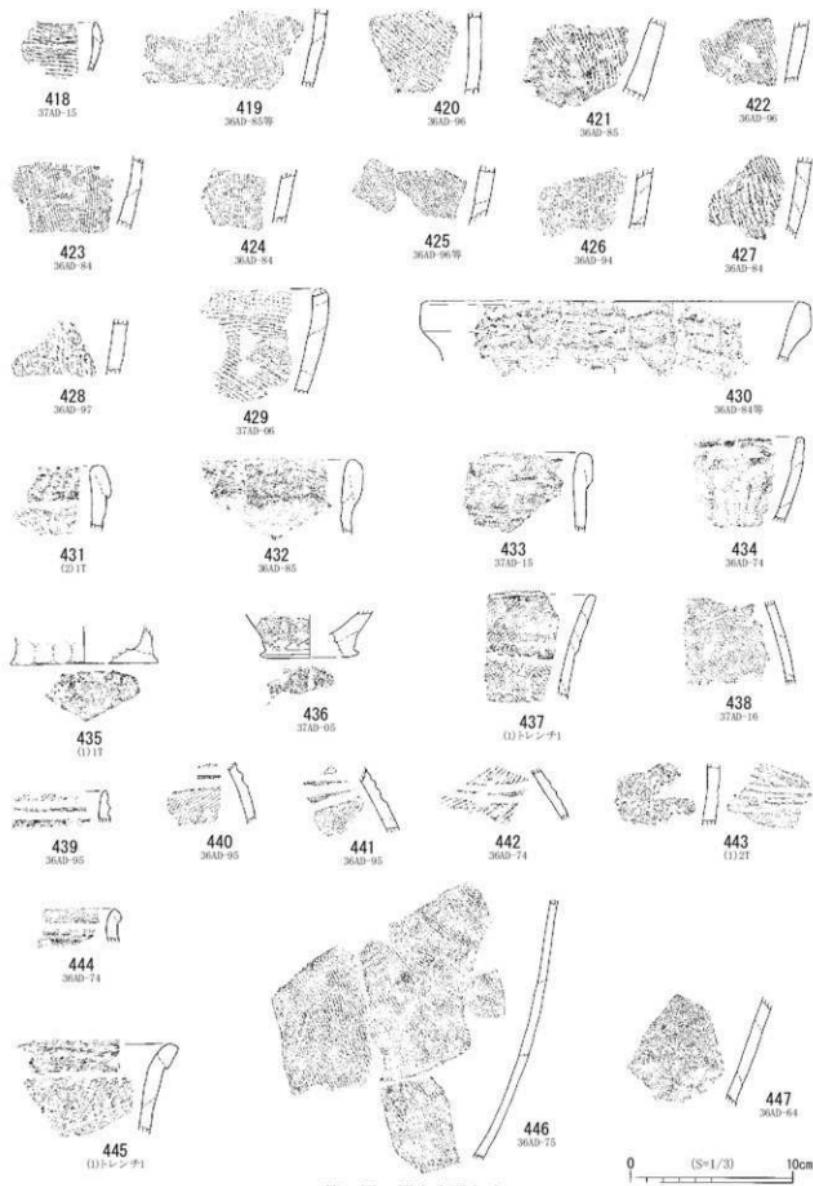
二つ目は、362～399で繊細な2条の浮線を単位として階段状に文様が入り組み、1条の浮線を斜めに渡すものである。362～366は浅鉢の口縁にメガネ状浮線文が貼付けられている。362・363は付帯文上に撚糸文が施されている。366は頸部にL R 繩文が施されている。367は壺で肩部にメガネ状浮線文が貼付けられている。付帯文の上下は無文である。368は工字文が施されている。369は口縁部の内外面に2条の沈線が巡っている。外面から棒状工具により1か所穿孔されている。370～372は壺である。370は口縁部にL R 繩文、肩部に工字文が施されている。371・372は肩部にメガネ状浮線文が貼付けられている。373は外面に工字文、内面に沈線が施されている。374は壺である。肩口にメガネ状浮線文が貼付けられている。375・376は波状口縁の浅鉢である。375は口縁部の内外面に沈線が施されている。376は口縁上半は隆帯が貼付けられ指頭圧されている。377は口縁下半にメガネ状浮線文が貼付けられている。378は工字文により区画された上部にL 摢糸文が施されている。379は口縁部に工字文が施されている。380～394は口縁から頸部にかけて繊細な2条の浮線を単位として浮線網状文が施されている。385・386・388は内外面とともにミガキが頗著にみられる。387は壺で肩部にメガネ状浮線文が貼付けられている。394は壺で、焼成が石製品とみまがうほどの堅緻さをみせ、全面が丁寧に研磨されている。395・396は甕である。395は肩部に環状の隆帯が貼付けられ、2条の浮線文が横位に巡っている。胴部は無文である。396は口縁に突起が加えられている。口唇上端には丸棒工具による幅広の沈線が施されている。口縁は横位に沈線が巡っている。397は頸部に沈線が巡り、沈線間に山形の沈線が施されている。398・399は浅鉢である。398は頸部に隆帯



第38図 繩文土器(11)



第39図 繩文土器(12)



第40図 繩文土器(13)

が貼付けられ沈線による刻みがみられる。399は頸部に入組文が施されている。

400～429は撚糸文を施すいわゆる「粗製土器」である。ほとんどが複合（折り返し）口縁を持つ。器種はほとんどのものが深鉢で構成され、413・415・416・420が甕と思われる。前述の工字文が施されているものに比べて、器厚に厚みがある。400・401は同一個体である。口縁部に横位のL撚糸文、頸部に斜位のL撚糸文が施されている。402は口縁部に横位のL撚糸文が施され、頸部は無文である。403・404は口縁部に横位のR L撚糸文が施され、頸部から胴部は無文である。405～407は口縁部に横位のL撚糸文が施され、頸部は無文である。口唇部上端は、405・406が指頭、407が丸棒工具によりそれぞれ押捺されている。408・409は波状口縁をなし、口縁上半に撚糸文、口縁下半に沈線が施されている。410～418は口縁部に横位の撚糸文が施されている。頸部は410・412・414が無文で、411に斜位のL撚糸文が施され、413は横位の沈線が巡っている。417は口唇部上端に丸棒工具によって押捺されている。418は口唇内側に横位の沈線が巡っている。419～428は胴部破片で、斜位あるいは継位の撚糸文が施されている。429は口縁下半に継位の撚糸文、頸部に横位の撚糸文、胴部に斜位の撚糸文が施されている。

430～434は無文のものである。複合（折り返し）の口縁を持つ。430～433が深鉢、434が甕である。

435・436は丸底の底部である。435は外面底辺はナデにより調整されている。436は外面底辺はヘラナデにより調整されており、底面には木葉痕が残されている。

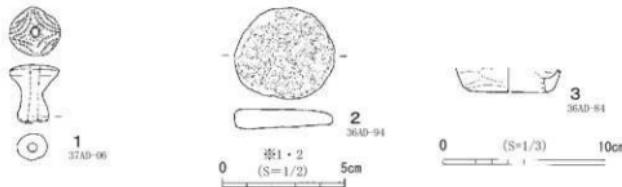
3類 晩期末葉の土器（第40図437～447）

本類は千網式土器よりも新しい段階のものを晩期末葉の土器として一括した。弥生時代前期にわたる土器も一部含まれると思われる。

437～442は壺である。437は広口壺で、口縁部から頸部は横位のL R繩文、胴部に横位のR L繩文が施されている。438は胴部に横位のL R撚糸文が施されている。439～442は荒海式土器である。繩文地文に整然とした変形工字文が施されている。443は深鉢である。胴部は細沈線が施され、内面は横位の刷毛目状条痕により調整されている。444・445は壺で、複合（折り返し）口縁を持つ。444は無文で、445は胴部に斜位の沈線が施されている。446・447は甕の胴部で、斜位の撚糸文が施されている。

（2）土製品（第41図、図版29）

繩文時代の土製品が3点出土した。1は37AD-06グリッドから出土した土製耳飾（耳栓）である。群馬県千網谷戸遺跡1号住居跡からまとまって出土している土製耳飾と類似した形態をしている⁴¹。千網式土器（繩文土器第5群2類）と分布範囲が一致することから、千網式土器と同じ時期の所産の可能性が高い。



第41図 土製品

い。中空の鼓形につくられた小型品で、文様が施された表面は径2.0cm、無文の裏面は1.25cm×1.03cm、全体の高さ2.36cm、貫通孔の径は0.4cmを測る。耳染孔内装着部の最もくびれた部位は0.85cm×0.95cmで、くびれ部から裏面にかけてヘラで押されたような弱い稜があり、断面は不整な7角形に近い。胎土は白色砂粒を多く含む。文様面は、緩やかな甲盛状で、穿孔部を中心として4区画に割り付け、全面を使って2ないし3重の外に聞く弧文を施す。穿孔部の縁には列点を巡らせるが、一部弧文により途切れるなど、不鮮明な部分がある。

2は36AD-94グリッドから出土した土器片円板である。縄文土器胴部の破片を円板状に加工したもので、横4.0cm、縦3.7cm、最大厚0.7cmを測る。全体的に摩耗しており、凸面の縄文は不明瞭である。後期加曾利B式期であろう。

3は36AD-84グリッドから出土したミニチュア土器の底部である。無文で、焼成は非常に良好である。時期は後期から晩期であろう。

注1 薙田芳雄・中沢孝一郎・大川恵三 1949「群馬県千網皆戸遺跡調査概報」『両毛古代文化』第1集 両毛考古学研究会

薙田芳雄 1950「群馬縣川内村千網谷戸石塚調査予報」『両毛古代文化』第2集 両毛考古学研究会

伊藤晋祐・増田 修・白石典之 1988「千網谷戸遺跡」『群馬県史 資料編1 原始古代1』群馬県史編さん委員会

増田 修・小菅将夫ほか 2007『第44回企画展 千網谷戸遺跡発掘60年 展示図録』岩宿博物館

2 渡辺修一 1991「西街道市内黒田遺跡群」『内黒田特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター

3 杉原莊介・戸沢充則 1963「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』第2卷第1号 東京考古学会

4 江坂輝伸 1950「板倉・千網谷戸両遺跡発見の耳栓」『両毛古代文化』第2集 両毛考古学研究会
増田 修 1990「縄文時代の耳飾り」『月刊文化財』326 第一法規

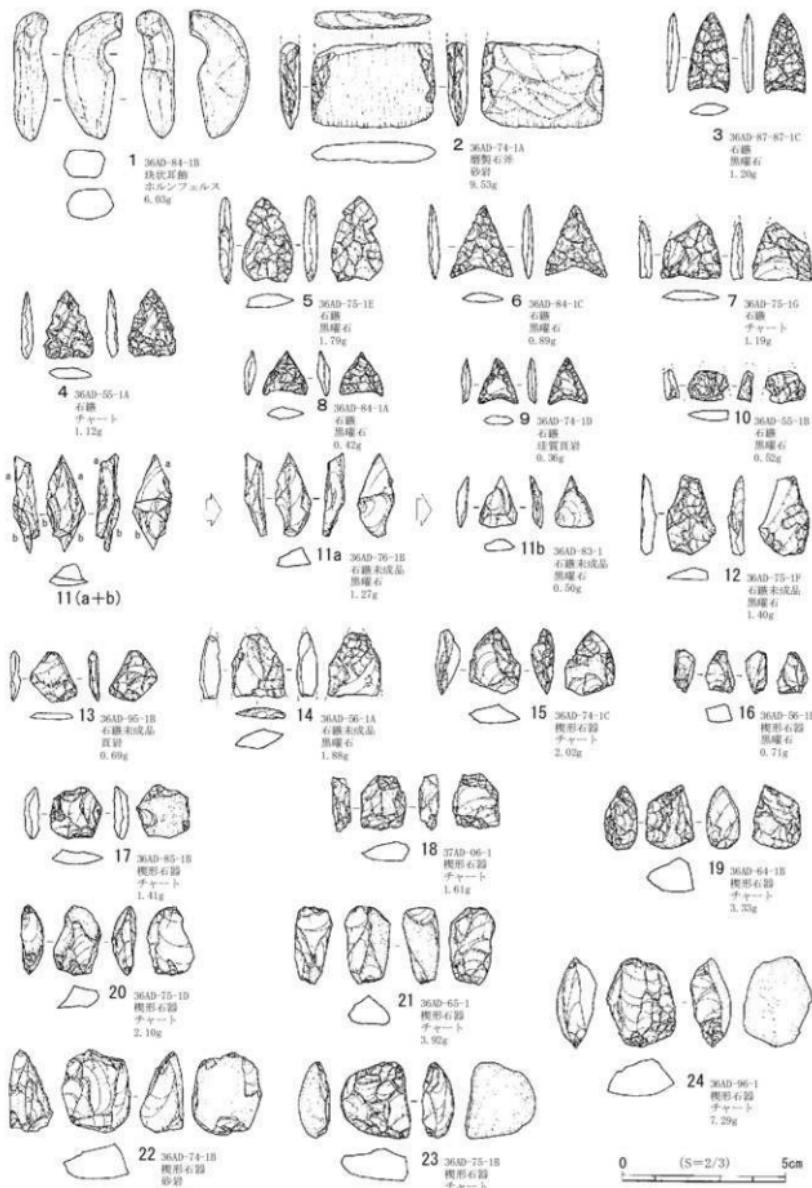
(3) 縄文石器 (第42・43図、図版12)

包含層から出土した縄文石器を35点図示した。遺構内から石器は出土しなかった。

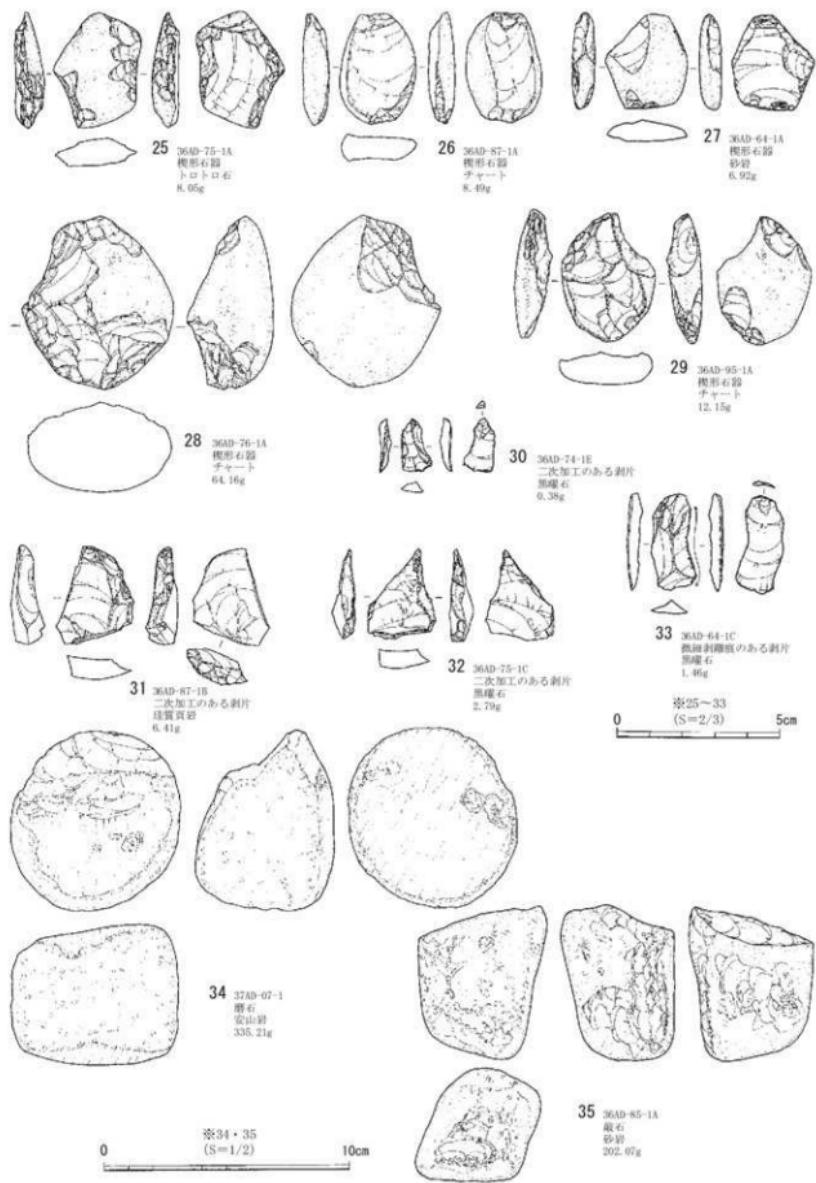
1は块状耳飾である。左半部が残存している。中央部よりもやや上部に円形の穴があり、下端から切り込みが入れられている。断面形は扁平で、角が丸みを持つ。研磨痕は、表面が縦方向、裏面が斜め方向に顯著にみられる。ホルンフェルスが用いられている。時期は出土土器から前期後半と考えられる。

2は磨製石斧である。細粒の砂岩が用いられている。幅広の剥片を素材としており、裏面に素材剥片の主要剥離面が残っている。器体の下半部付近から折れており、下端部の刃部が残存している。両側縁には細かい調整加工が表裏両面に施されている。表裏面の平坦面は縦方向に研磨されている。

3～10は石鏨である。3～5は全体形状が二等辺三角形を呈し、脚部の抉りがほとんどみられない。3は器体全体に平坦剥離が入念に施され、側縁の形状は丸みを持つ。4はやや粗い調整加工が施され、側縁の形状が鉗歯状を呈している。5は平坦剥離が器体全体に施されている。左下部は下端部からの櫛状の剥離がみられる。6～9は全体形状が正三角形を呈している。6は脚部の抉りが深い。7～9は脚部の抉り



第42図 繩文石器(1)



第43図 繩文石器(2)

が浅い。7は先端部が破損している。8は平坦剥離が器体全体に入念に施されている。9は周縁部に細かい調整加工が施されている。10は先端部と両脚部が破損しており、全体形状が不明である。

11~14は石鏃未成品である。11(a+b)は石鏃未成品の接合資料で、11(a+b)の状態で先端部と基部の大まかな成形加工を行った後に、右側縁中部を打面として裏面方向に加擊して器体の厚みを除去しようとしている。剥離された11aと11bはともに石鏃の素材として適した形状をしているが、その後の調整加工は行われていない。12は素材を斜位に用いて平坦剥離によって成形されているが右側縁上部から破損している。13は厚みのない剥片を素材として、平坦剥離が行われているが、左下部が破損している。14は厚みのない剥片を素材として周縁部に細かい調整加工が施され成形されているが、上下両端部が破損している。

15~29は楔形石器である。大半のものが自然面を部分的に残して両極剥離が行われており、先端部が尖った形状をしていることから、石鏃の製作途中のものが多く含まれると思われる。15~20は小型であり、石鏃とほぼ同じサイズのものであることから、石鏃未成品と分類することも可能である。21~29はややサイズが大きくなり、片面に自然面を大きく残していることから、石鏃製作の初期段階のものである可能性が高い。15はやや厚みのある剥片を素材として、周縁部に細かい調整加工が施され、先端部が作出されているが基部の調整加工はわずかに施されている。16は小型の剥片を素材として上下両端から両極剥離が行われている。17~19は片面に自然面を大きく残し、上下両端と左右両端から両極剥離が行われている。全体形状が五角形を呈している。20・21は上下両端から両極剥離が行われており、全体形状が長方形を呈する。22~24は片面に自然面を大きく残し、上下両端から両極剥離が行われている。全体形状が四角形を呈する。25は表面に自然面を大きく残し、上下両端と左右両端から両極剥離が行われ、全体形状が五角形を呈する。26・27は上下両端から両極剥離が行われている。28・29は上下両端と左右両端から両極剥離が行われ、先端部が尖った形状をしている。

30~32は二次加工のある剥片である。30は小型の縱長剥片を素材として、左側縁に細かい調整加工が施されている。31・32は先端部が尖った形状をしていることから、石鏃の未成品と捉えることも可能である。31は厚みのある横長剥片を素材として、右側縁に急角度の調整加工が施されている。左側縁は折れている。32は厚みのある横長剥片を素材として、左側縁と下端部を折断した後に、右側縁に調整加工が施されている。

33は微細剥離痕のある剥片である。縱長剥片を素材として、右側縁に微細剥離痕がみられる。

34は磨石である。多孔質の安山岩が用いられている。表面上部から輪切り状に剥離が行われている。表裏両面の平坦面の研磨が顕著に行われ、側面と平面の縁辺が角張った形状をしている。特に表面の研磨が顕著で、素材の多孔質部分が全て研磨されている。

35は敲石である。梢円形礫を素材として、敲打痕は弱いものを含めるとほぼ全面にみられるが、強い敲打によるものは、下端部・右側縁・表裏両面の平坦面にみられる。上面は右側縁から敲打した際に破損したものと思われる。

第8章 夜番II遺跡

第1節 遺跡の概要

1 調査状況（第3・44・45・47図、図版6）

成田市（旧香取郡大栄町）川上245-506の一部ほかに所在する夜番II遺跡は、尾羽根川源流域の左岸、台地縁辺斜面部から台地上（標高34m～40m前後）に立地する（第3・44・45図）。遺跡東方の谷津の標高は31m～32m前後で、調査時の台地縁辺部の現況は緩やかな斜面であった。しかしながら、調査の結果、調査区東側の斜面下部に厚い客土が確認され、旧地形の崖線は、より急斜面であったことが明らかとなっている。

本書では、平成26年度以来断続的に実施した第1～8次調査（計16,637m²）の成果を報告する。なお、調査次数は以下(1)等と略記する。(1)～(8)の調査区割およびトレンチ配置は第44・45図のとおりである。谷津に面して長さ400m、幅15m～95mの帯状に広がる対象区域を大グリッド表記で記すと、39AD・39AE、40AD～40AF、41AE～41AG、42AF～42AH、43AG～43AI、44AH～44AJ、45AH～45AK、46AI～46AL、47AJ～47ALとなる。

北西から南東方向に延伸する調査範囲は、谷津に直交するように入り込んだ浅い谷2筋によって、北部・中央部・南部の3区に分けて捉えることができる。北部と中央部を画する浅い谷は、(6)調査範囲南端付近の41AFグリッドから43AEグリッドに、中央部と南部を画する浅い谷は、(7)調査範囲を南北に二分する44AIグリッドから46AHグリッドに入る。断続的に実施した調査範囲を北から整理すると、北部は(6)のほとんどの部分、中央部は(6)南端部分から(1)・(2)・(5)・(7)北半部分まで、南部は(7)南半部分から(3)・(4)・(8)となる。

なお、次項で記すように、夜番II遺跡では、(1)・(6)以外の調査区から、旧石器時代の文化層（IX a層上部）計9ブロックが、複数の調査次数に跨って検出された。これらについて、浅い谷で画された台地上の3区に分布域をあてはめるならば、遺跡中央部の中心域に1aユニット（第1～3ブロック）、遺跡南部の中心域に1bユニット（第4～8ブロック）、遺跡南部の東側区域に単独の第9ブロックがあると整理できる。

第1次調査は、遺跡北部、標高35m前後の台地縁辺部1,059m²を対象として実施した。トレンチ調査の結果、上層では、縄文土器と石器が少量出土したものの、遺構は検出されず、谷津に近い調査区東部で表土が2mを超えることが判明した。谷津側の関東ローム層上面が現地表の傾斜より急である状況を確認したことから、安全対策上、下層については、調査区西部に確認グリッドを設定した。その結果、遺構・遺物とも検出されず、上層・下層ともに確認調査の範囲で調査を終了した。

第2次調査は、遺跡中央部、標高35m前後の台地縁辺部536m²を対象として実施した。上層では、各トレンチから縄文土器が出土した。加曾利E式の大型の破片が出土した地点の周囲を拡張したところ、さらに大型の破片が出土したが、遺構は検出されなかったため、上層は確認調査の範囲で調査を終了した。下層については、グリッド内で、IX層を中心とした石核・剥片からなる遺物集中地点2か所を確認したことから、集中地点の周囲306m²について本調査を行なうことが確定した（第5次調査の項参照）。

第3次調査は、遺跡南部、標高40m前後の台地上773m²を対象として実施した。上層では、トレンチ内

で縄文時代の石器が出土したが、遺構はなく、確認調査の範囲で調査を終了した。下層では、グリッド内でIX層を中心とした石核・剥片からなる遺物集中地点1か所、遺物単独出土地点2か所を検出したことから、周囲526m²について本調査を行なうことが確定した（第4次調査の項参照）。

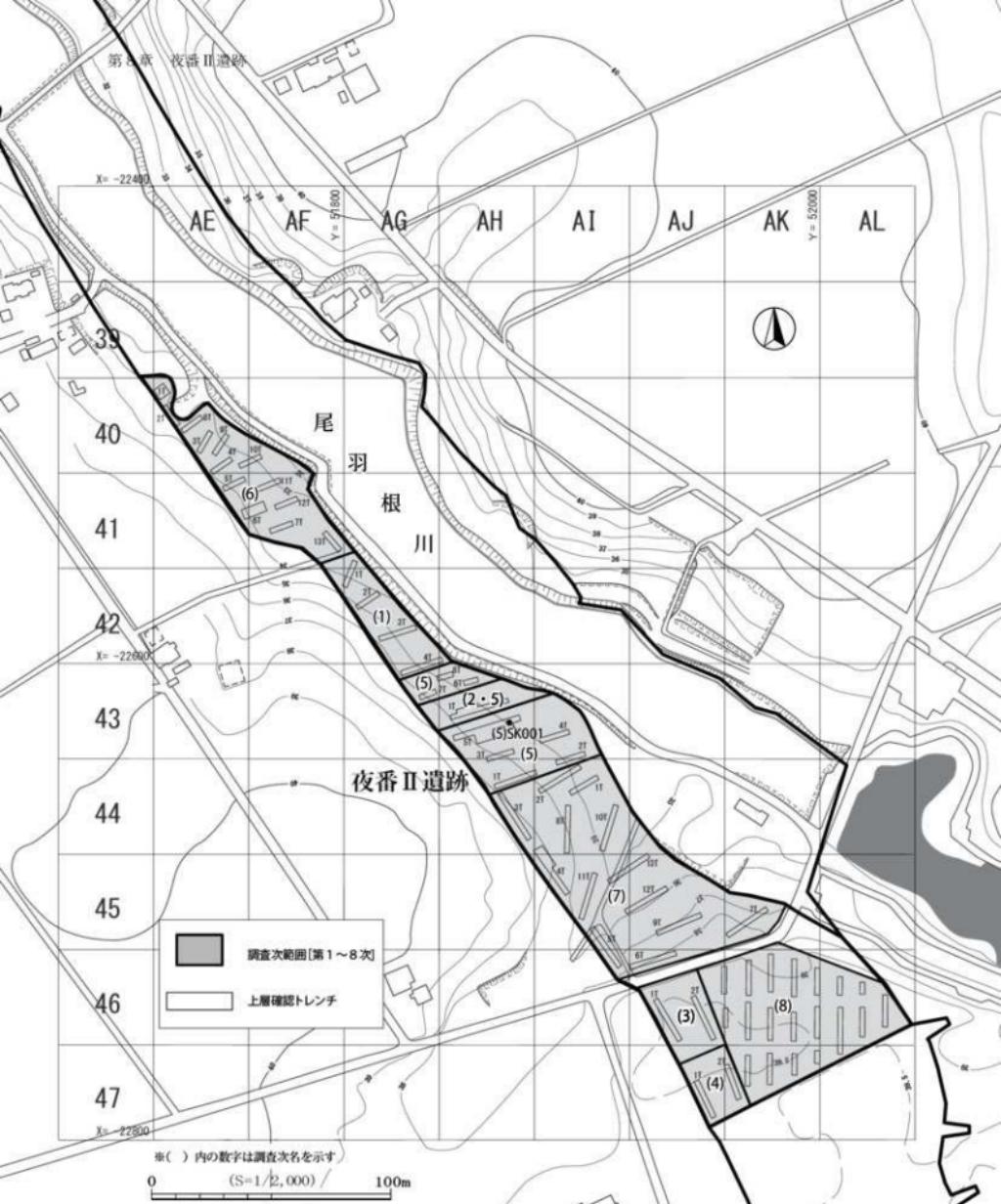
第4次調査は、遺跡南部、標高40m前後の台地上637m²を対象として実施した。526m²は第3次調査を受けての下層本調査範囲である。（4）で新たに対象となった確認調査範囲637m²においては、上層では遺構・遺物とも検出しなかった。下層では、上層確認調査トレンチ底面から旧石器時代石器が出土したため、周囲を拡張したが新たな石器の出土はなかったことから、確認調査で終了した。一方、（3）の結果を受け設定した下層本調査範囲では、耕作による擾乱を受けているものの、広範囲からIXa層上部を中心とする石器が集中して出土した（第47図）。一部の石器集中について、東方調査区外へ続く様相を確認した（1bユニット第4・5ブロック、第6・7ブロックの西半部分）。

第5次調査は、遺跡中央部、標高35m前後の台地縁辺2,053m²を対象として実施した。うち306m²は第2次調査を受けての下層本調査範囲である。確認調査上層では、トレンチ内において縄文時代の陥穴1基【（5）SK001】と石器集中地点1か所を検出したが、石器集中は小規模であることから、確認調査の範囲で調査を終了した。確認調査下層では、グリッド2か所において石器が単独出土した。うち北側の石器出土地点は、（2）における確認調査の結果を受けて本調査となった範囲（306m²）に隣接することから、周囲220m²をあわせて本調査を実施した。その結果、計526m²を対象とした下層本調査内、IXa層上部で文化層（1aユニット第1～3ブロック）を検出した（第47図）。一方、南側の石器出土地点については、周囲を拡張したが新たな石器の出土はなく、確認調査の範囲で調査を終了した。

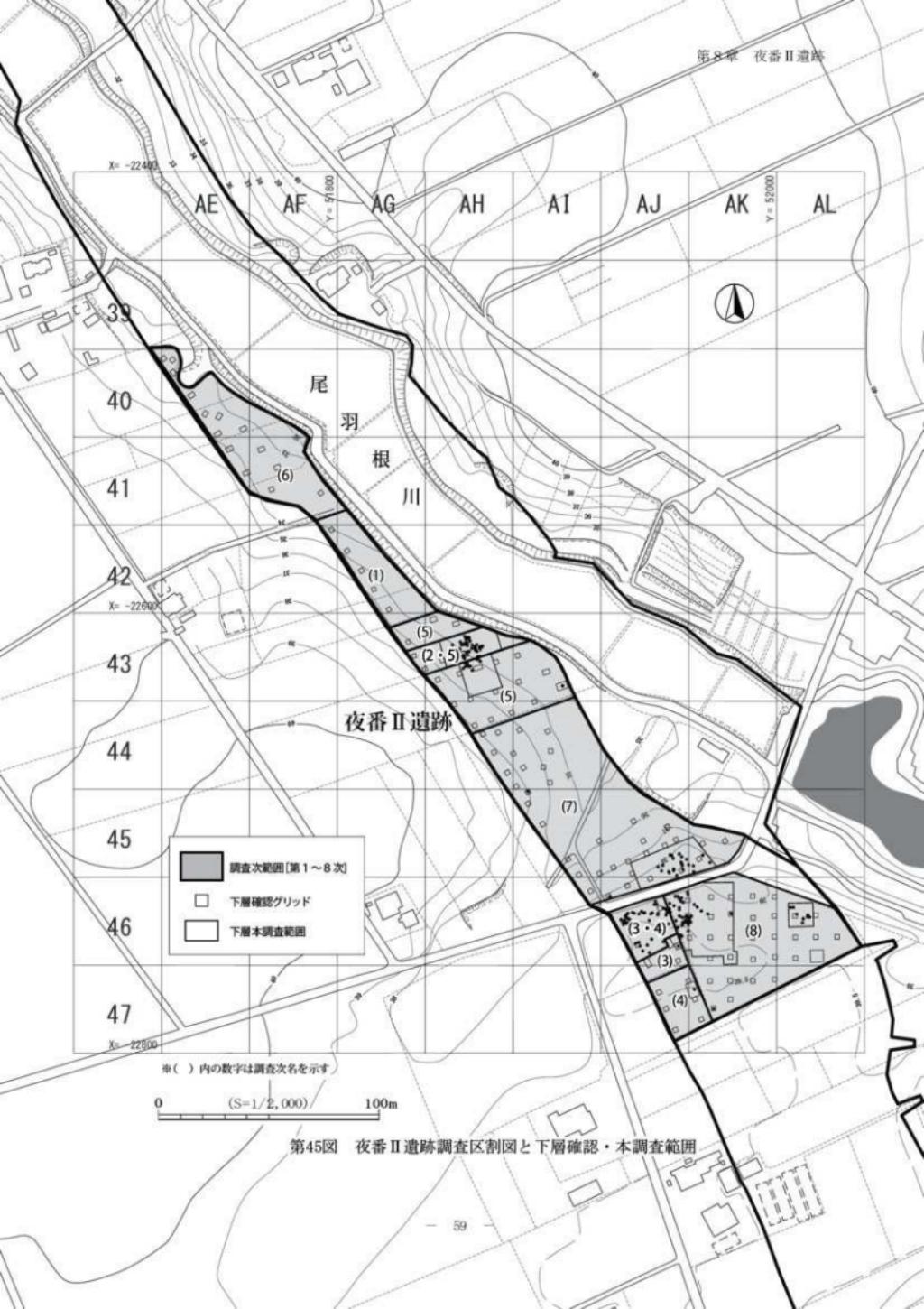
第6次調査は、遺跡北部、北東に向かって緩やかに傾斜する標高35m前後の台地縁辺2,480m²を対象として実施した。トレンチ調査の結果、上層では、畑作（ゴボウ）のトレンチャーによる擾乱が広範囲におよんでおり、少量の縄文土器と石器、近世銭貨が出土したもの、遺構は検出されず、下層調査においても遺構・遺物とも検出されなかったため、確認調査の範囲で調査を終了した。なお、関東ローム層上面も、現地表と同様に北東に向かって緩やかに傾斜していることを確認した。

第7次調査は、遺跡中央部、谷津に向かって緩やかに傾斜する標高35m～38m前後の台地上5,308m²を対象として実施した。上層では、トレンチ調査で縄文時代の土器と石器が出土したが、遺構は検出されず、確認調査の範囲で調査を終了した。下層では、遺物集中地点を1か所検出した。この集中地点は、南西に隣接する（4）で確認した石器集中地点（1bユニット第4～7ブロック）と同一文化層と判断できるものであり、周囲について本調査を実施したところ、遺物集中地点（1bユニット第8ブロック）を検出した（第47図）。

第8次調査は、遺跡南部、標高39m前後の台地上3,791m²を対象として実施した。上層の確認調査では、トレンチ内から縄文時代の土器と石器が出土したが、遺構は検出せず、確認調査の範囲で調査を終了した。下層では、8か所の確認調査グリッド内から石器が出土した。このうち、石器が集中して出土したグリッド5か所の周囲825m²について本調査を実施したところ、石器集中地点2か所を検出し、西側の石器集中地点については、（4）下層本調査で検出した石器集中の続きと判断される出土状況を確認した（IXa層上部1bユニット第6・7ブロックの東半部分）。東側の石器集中地点は、IXa層上部の単独ブロック（第9ブロック）と捉えられた。



第44図 夜番II遺跡調査区割図と上層確認調査範囲

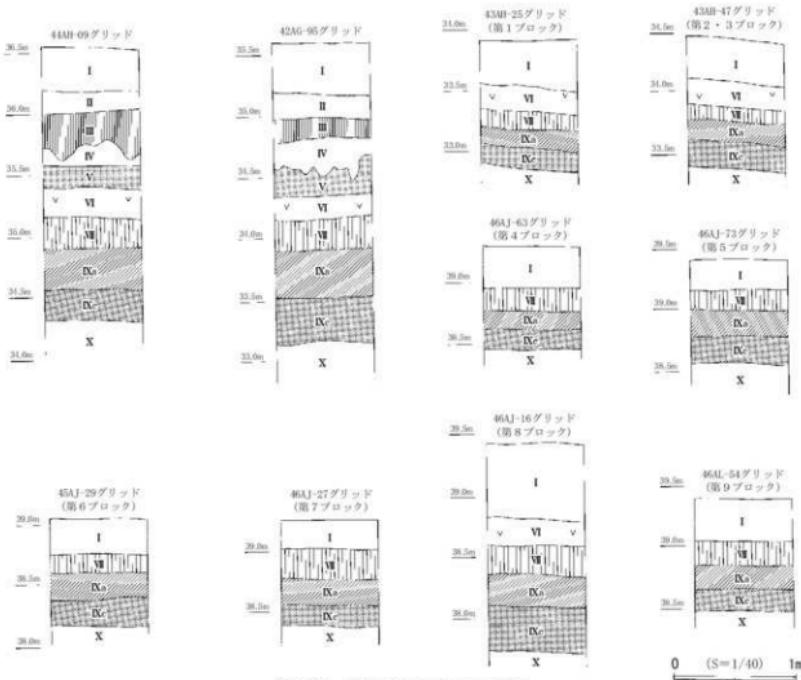


第45図 夜番II遺跡調査区割図と下層確認・本調査範囲

2 基本層序 (図46図、図版8)

本遺跡の基本層序は第46図のとおりである。旧石器が分布する範囲は、急斜面の縁辺に立地しており、V層(VI層も含む)まで削平され、客土が埋められている状況であった。

- I 層 客土を含む表土である。
- II 層 暗色土である。II層を細分することはできなかった。
- III 層 明黄褐色ローム土である。立川ローム層最上層に相当する。いわゆる「ソフトローム層」である。下部に向かってソフト化が進行している。赤色スコリアを少量含む。
- IV 層 明褐色ローム土である。硬質のローム層でいわゆる「ハードローム層」である。
- V 層 黄褐色ローム土である。第1黒色帯に相当する。
- VI 層 明黄褐色ローム土である。A T (始良丹沢火山灰)がブロック状に含まれる。
- VII 層 褐色ローム土である。第2黒色帶上部に相当する。赤色スコリアを少量含む。
- IXa 層 暗褐色ローム土である。第2黒色帶下部の上半である。VII層よりも黒ずんでいる。
- IXc 層 暗黄褐色ローム土である。第2黒色帶下部の下半である。赤色スコリアを微量含む。
- X 層 暗褐色ローム土である。スコリア粒がほとんど含まれない。立川ローム最下部層と捉えられる。



第46図 夜番II遺跡基本土層図

第2節 旧石器時代

1 概要 (第45・47図、第2・3表)

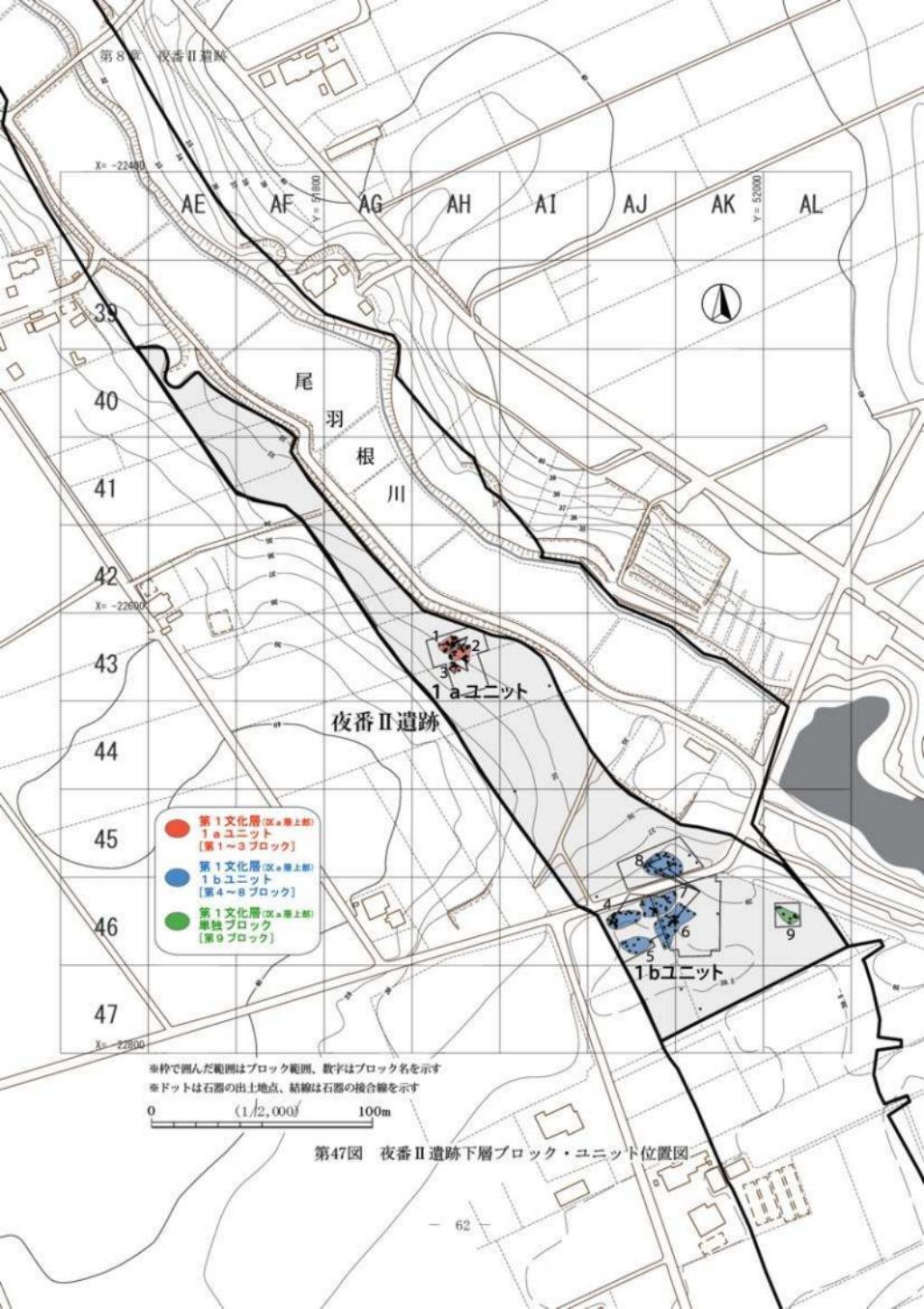
確認・本調査範囲とブロック・ユニット位置図は第45・47図のとおりである。調査区の中央部と南部に遺物が集中して検出された。石器総数は209点である。第1文化層(IXa層上部に生活面を持つ石器群)から石器総数201点、9か所のブロックが検出された。このほか、いずれの文化層に帰属するか明確でなく、単独で出土した石器が8点出土している。文化層ブロック別の器種組成・石材組成は第2・3表のとおりである。

第2表 文化層ブロック別器種組成表

文 化 層	ユ ニ ツ ト	ブ ロ ッ ク	ナイ フ 形 石 器	尖 頭	模 形	影	二 次 加 工 の 有 る 制 片	微 細 剥 離 痕 の 有 る 制 片	剝 片	碎 片	石 核	石 片	原 石	硬 膜	總 計		
1	1								16	3	1	2	1	8	31		
	2								22	3	2		1	2	30		
	3								7	1	1				9		
1aユニット合計									45	4	6	1	3	1	10	70	
	4	2			1	2	2	6	1		2				15	31	
	5								7						2	9	
	6			1		2			22	1	4		1		4	35	
	7	2				3			17		1				4	27	
	8			2			2		12		2		1	1	2	22	
1bユニット合計				4	3	1	9	2	64	2	7	2	2	1	27	124	
	9								1	5	1					7	
第1文化層合計				4	3	1	9	3	114	6	14	3	5	2	37	201	
単独出土合計									4		1				2	8	
総計点数				4	1	3	1	9	3	118	6	15	3	5	2	39	209

第3表 文化層ブロック別石材組成表

文 化 層	ユ ニ ツ ト	ブ ロ ッ ク	黒 曜 石	ガ ラ ス 質 黑 色 安 山 岩	ト ロ ト ロ 石	安 山 岩	貢 山	珪 質 貢 岩	硬 質 貢 岩	玉 質 貢 岩	綠 質 貢 岩	ホ ル ン フ エ ル ス	チ ヤ ー ト	砂 灰 岩	流 紋 岩	總 計	
1	1		2	3						6		8	1	7	4	31	
	2		18						4	1	2	1		4	30		
	3		7						1			1			9		
1aユニット合計				27	3				11	1	10	3	7	8	70		
	4	6		3	2			2	3		1	1	1	12	31		
	5	4						2	1				2		9		
	6	1	26					1			2	2	1	2	35		
	7	1	10					3	3	3	1	1		5	27		
	8	14	3						2			2	1		22		
1bユニット合計				2	60	3	3	2	3	8	9	4	6	5	19	124	
	9	1	2							1		3			7		
第1文化層合計				3	89	6	3	2	3	8	21	1	14	12	27	201	
単独出土合計									2	1		1	3			8	
総計点数				3	90	6	3	2	3	10	22	1	15	15	12	27	209



2 第1文化層

(1) 概要 (第4表)

第1文化層の石器群は総計201点出土し、第1～9ブロックの9か所の集中地点で構成される。IX a層上部に生活面を持つ石器群と推定される。調査区中央部と南部にそれぞれブロック群が形成されており、中央部を1 aユニット、南部を1 bユニットと呼称した。

器種組成はナイフ形石器4点、楔形石器3点、彫器1点、二次加工のある剥片9点、微細剥離痕のある剥片3点、剥片114点、碎片6点、石核14点、敲石3点、原石5点の石器類162点と礫2点、礫片37点の礫・礫片39点で構成される。ナイフ形石器・楔形石器・彫器が本文化層を特徴づける器種である。

石材組成は石器類がガラス質黒色安山岩89点、玉髓21点、ホルンフェルス11点、流紋岩10点、硬質頁岩8点、トロトロ石6点、チャート6点、黒曜石3点、珪質頁岩3点、頁岩2点、安山岩1点、緑色凝灰岩1点、砂岩1点でガラス質黒色安山岩・玉髓・ホルンフェルス・流紋岩を主体とする。礫・礫片は流紋岩17点、砂岩11点、チャート6点、ホルンフェルス3点、安山岩2点で流紋岩・砂岩を主体とする。

第4表 第1文化層器種石材組成表

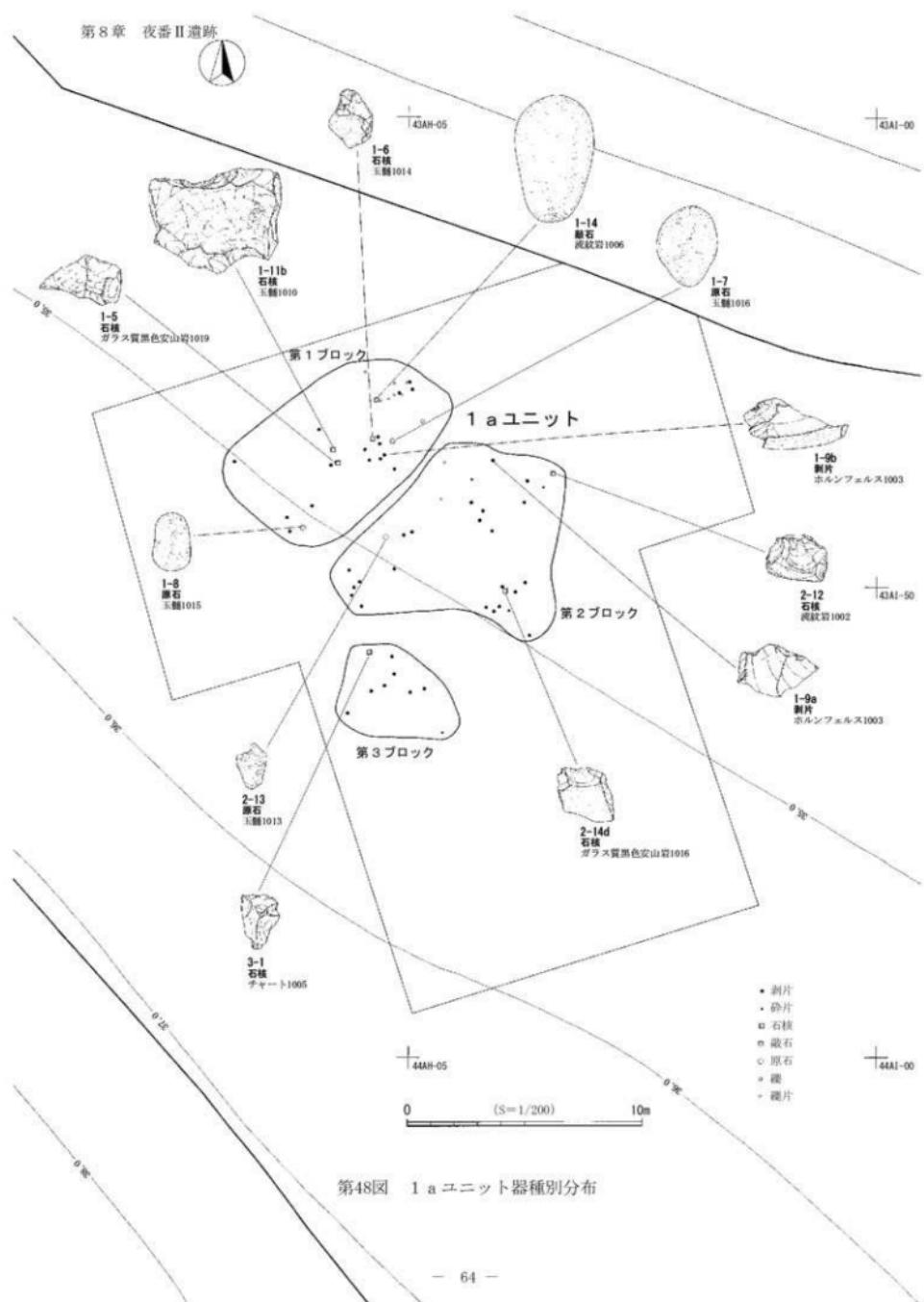
石材 器種	ナイ フ 形 石 器	楔 形 石 器	二 次 加 工 の あ る 剥 片	微 細 剥 離 痕 の あ る 剥 片	剥 片		碎 片		石 核		原 石		礫 片	計
					片	片	片	片	核	石	石	石		
黒 曜 石	1					2								3
ガ ラ ス 質 黒 色 安 山 岩		2	4		70	2	9						2	89
ト ロ ト ロ 石					6									6
安 山 岩													1	2
頁 岩				1		1								2
珪 質 頁 岩			1			1								3
硬 質 頁 岩	1	1	1	1	3	1								8
玉 髓	2		1	1	11	1	2						3	21
綠 色 凝 灰 岩					1									1
ホ ル ン フ エ ル ス					10	1							3	14
チ ヤ ー ト		1		1	3		1					2	4	12
砂 岩													11	12
流 紋 岩			1		6	1	1						17	27
全 体 点 数 合 計	4	3	1	9	3	114	6	14	3	5	2	37	201	

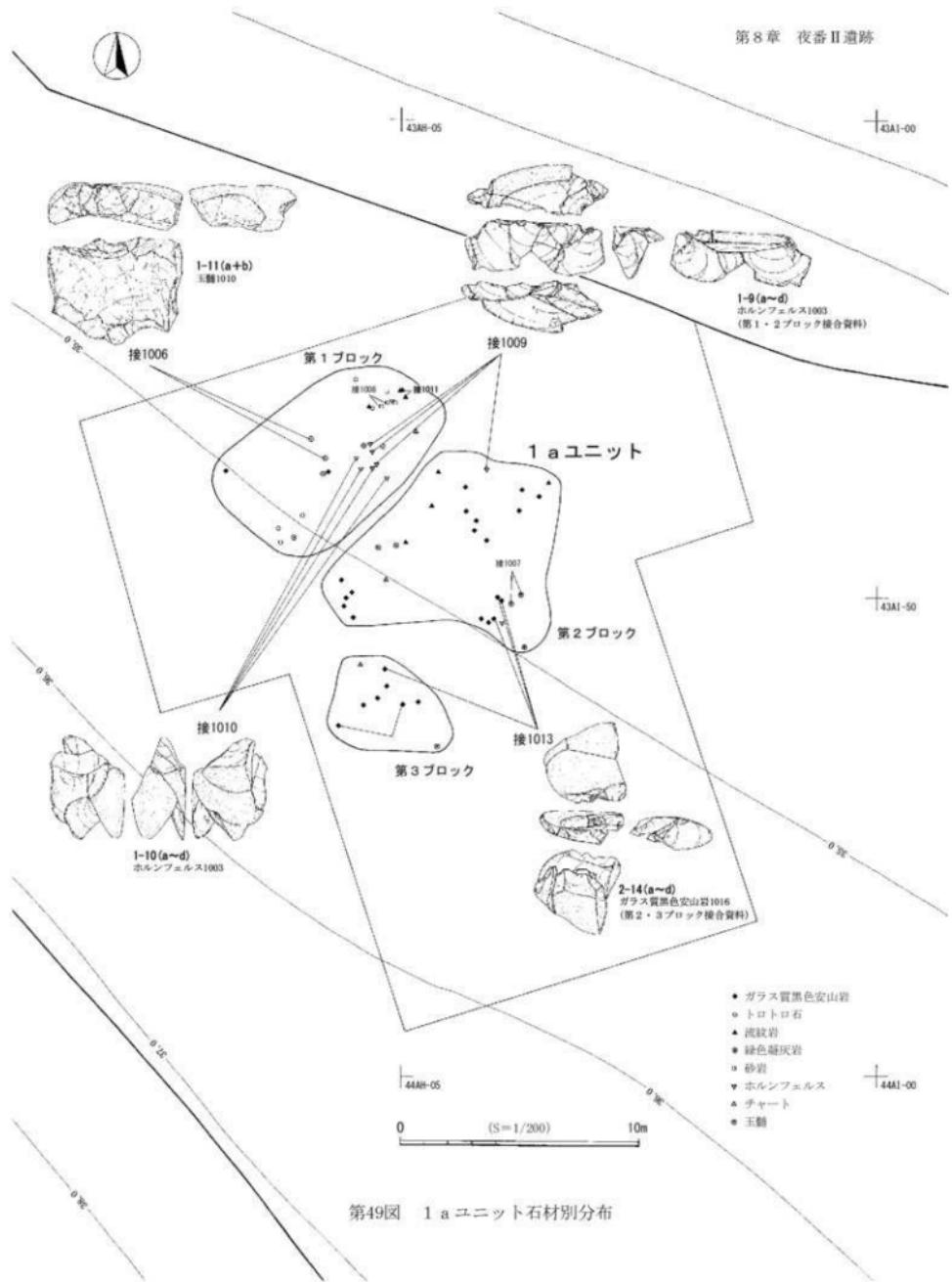
(2) 1 aユニット (第48・49図、第5表)

1 aユニットの石器群は、15.4m×13.6mの範囲から70点出土し、第1～3ブロックの3か所の集中地点で構成される。IX a層上部に生活面を持つ石器群と推定される。調査区中央部に位置し、標高34.0m～36.0m(現地表面)に分布し、北東に傾斜する斜面の縁辺に立地している。ブロック間接合資料は、第1・2ブロック接合資料の接1009と第2・3ブロック接合資料の接1013の2個体である。

器種組成は剥片45点、碎片4点、石核6点、敲石1点、原石3点の石器類59点と礫1点、礫片10点の礫・礫片11点で構成される。石核と原石の割合が高く、製品がみられないことが特徴である。1 bユニットではナイフ形石器・楔形石器・彫器などの製品がみられたのにに対して異なる組成を示す。

石器類の石材はガラス質黒色安山岩27点、玉髓11点、ホルンフェルス10点、流紋岩5点、トロトロ石3点、チャート2点、緑色凝灰岩1点でガラス質黒色安山岩・玉髓・ホルンフェルス・流紋岩を主体とす





第49図 1 a ユニット石材別分布

る。礫・礫片の石材は砂岩7点、流紋岩3点、チャート1点で砂岩・流紋岩を主体とする。1aユニットと類似した石材組成を示す。

第5表 1aユニット器種石材組成表

石材 器種	剥	碎	石	敲	原	礫	片	計
	片	片	核	石	石			
ガラス質黒色安山岩	23	2	2					27
トロトロ石	3							3
玉髓	5	1	2		3			11
緑色基灰岩	1							1
ホルンフェルス	9	1						10
チャート	1		1			1		3
砂岩							7	7
流紋岩	3		1	1			3	8
全 体 点 数 合 計	45	4	6	1	3	1	10	70

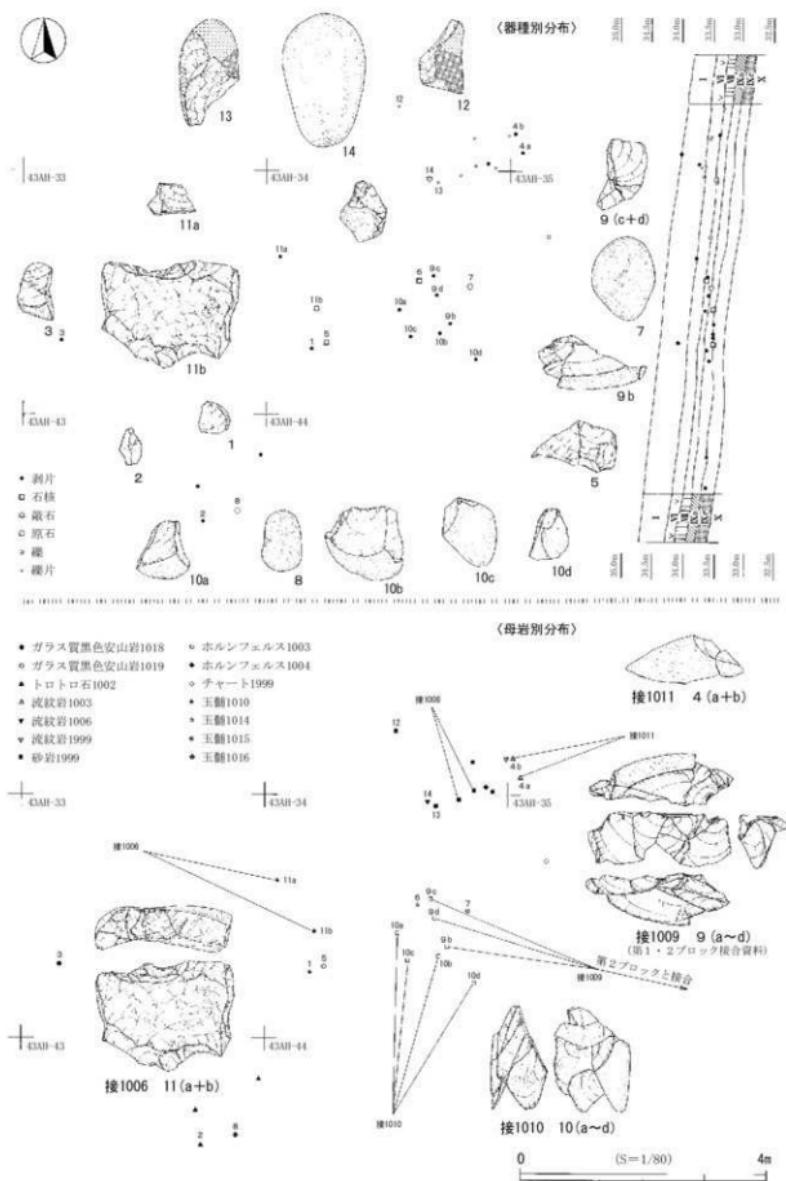
① 1aユニット第1ブロック（第50~55図、第6・17表、図版7・9）

出土状況 1aユニット北西部の43AH-24・25・33~35・43グリッドに分布している。6.9m×8.1mの範囲から31点の石器が出土した。南東に隣接する第2ブロックとの接合資料が1個体（接1009）出土している。北東部・中央部・南西部の3か所の集中地点がみられる。北東部・中央部が密集し、南西部が散漫に分布している。ホルンフェルス1003が中央部にまとまって出土している。北東部に焼けた痕跡のみられる小型の礫・礫片がまとまって出土しており、礫群を伴うブロックと捉えられる。IXc層からI層にかけて出土しており、IXa層～VII層下部に集中する。

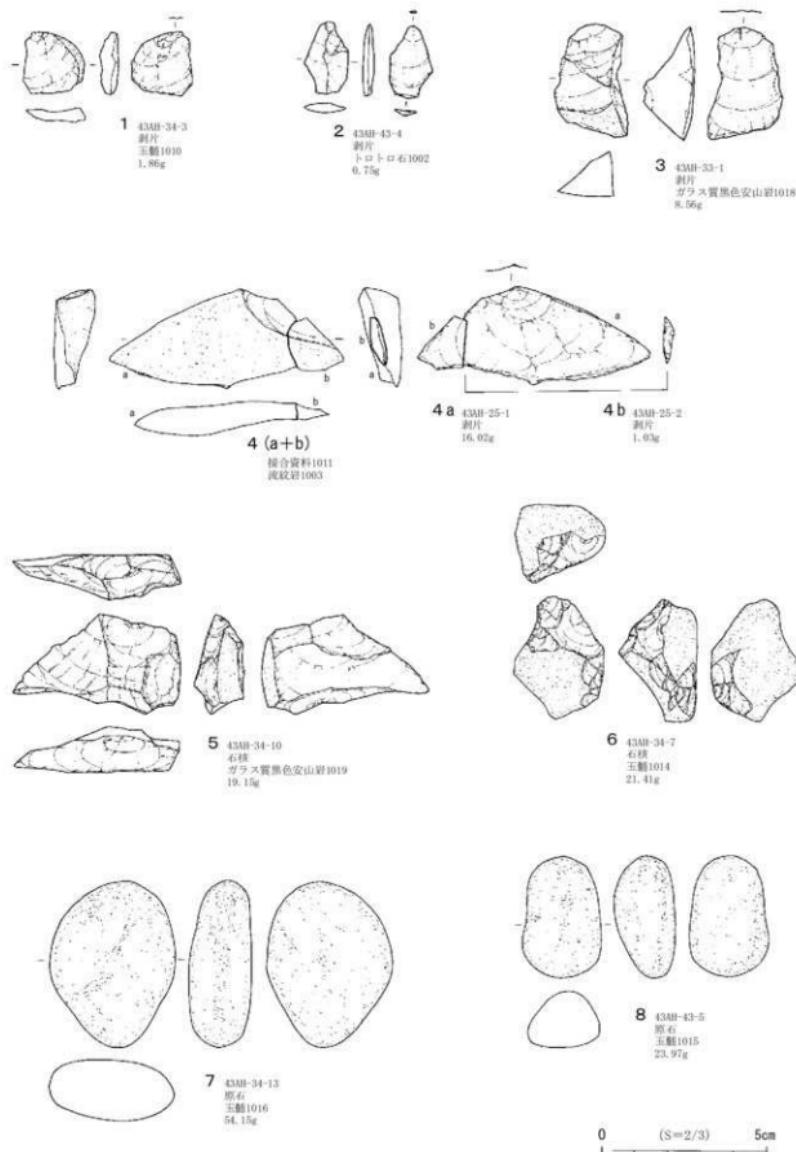
出土遺物 器種組成は剥片16点、石核3点、敲石1点、原石2点の石器類22点と礫1点、礫片8点の礫・礫片9点で構成される。石器類の石材はホルンフェルス8点、玉髓6点、トロトロ石3点、流紋岩3点、

第6表 1aユニット第1ブロック組成表

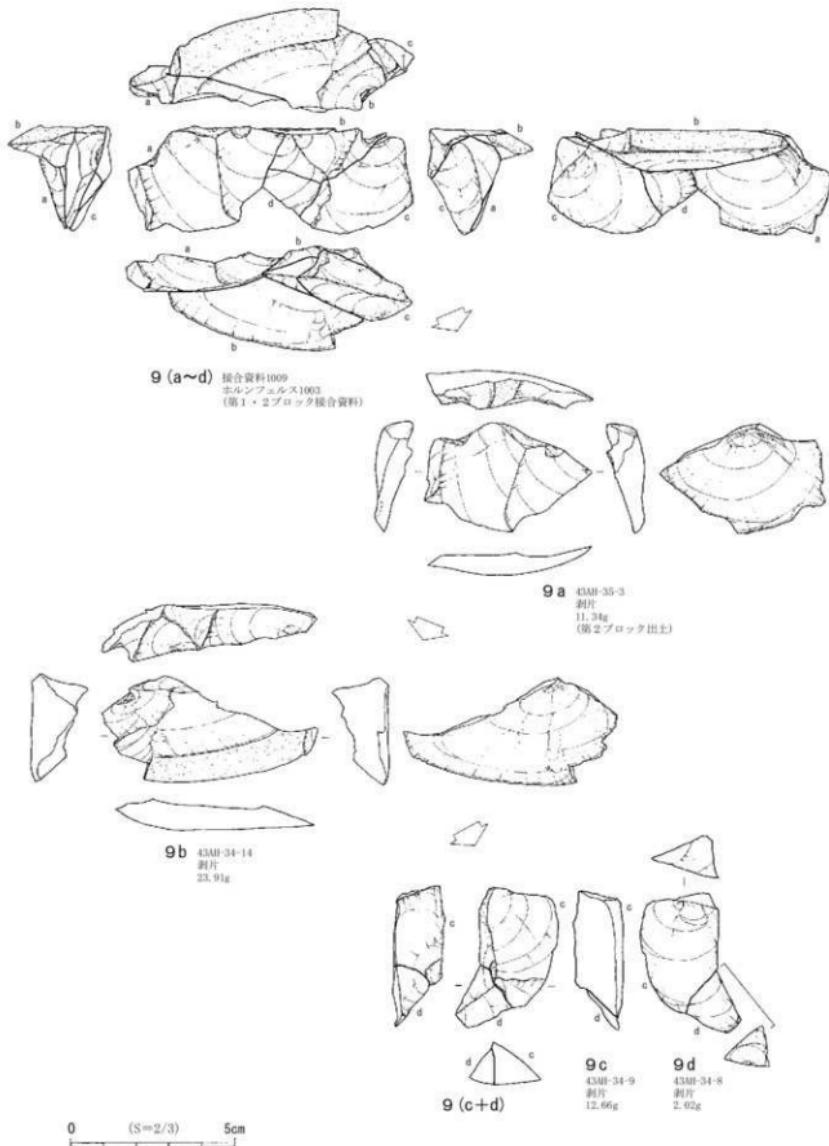
母岩 器種	母岩番号	剥片	石核	敲石	原石	礫	礫片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	1018	1						1	3.23	856	0.73
	1019		1					1	3.23	1915	1.62
ガラス質黒色安山岩 合計		1	1					2	6.45	2771	2.35
								3	9.68	1.80	0.15
トロトロ石	1002	3						3	9.68	180.13	15.26
	1010	2	1					1	3.23	21.41	1.81
	1014		1					1	3.23	23.97	2.03
	1015			1				1	3.23	54.15	4.59
玉髓 合計		1						6	19.35	279.66	23.70
			2	2	2			7	22.58	108.08	9.16
ホルンフェルス	1003	7						1	3.23	20.82	1.76
	1004	1						8	25.81	128.90	10.92
ホルンフェルス 合計		8						1	3.23	26.06	2.28
								1	3.23	22.58	293.32
チャート	1999				1			7	22.58	17.05	1.44
	1999							2	6.45	400.58	33.94
	1006			1				1	3.23	4.30	0.36
	1999							1	3.23	412.93	35.75
流紋岩 合計		2		1				4	12.90	1.180.18	100.00
			3	1	2	1	8	31	100.00		
全 体 点 数 合 計		16		1							



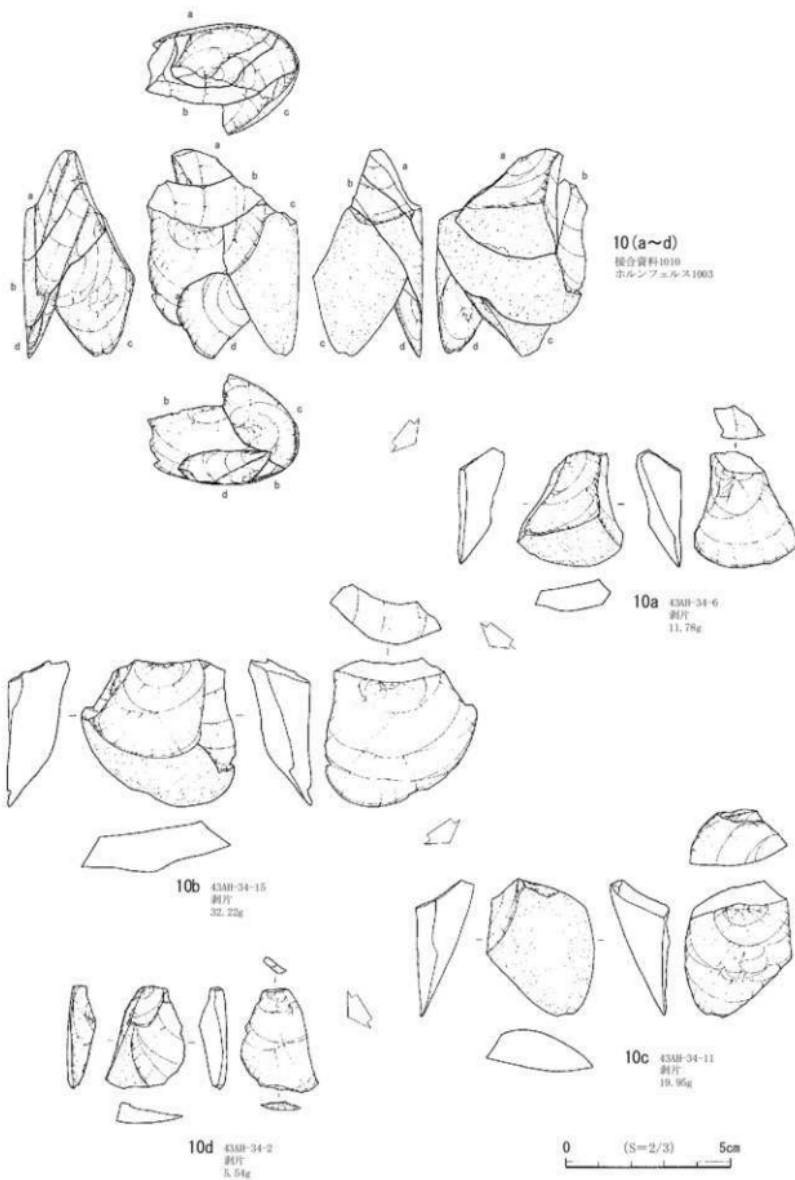
第50図 1 a ユニット第1ブロック遺物分布



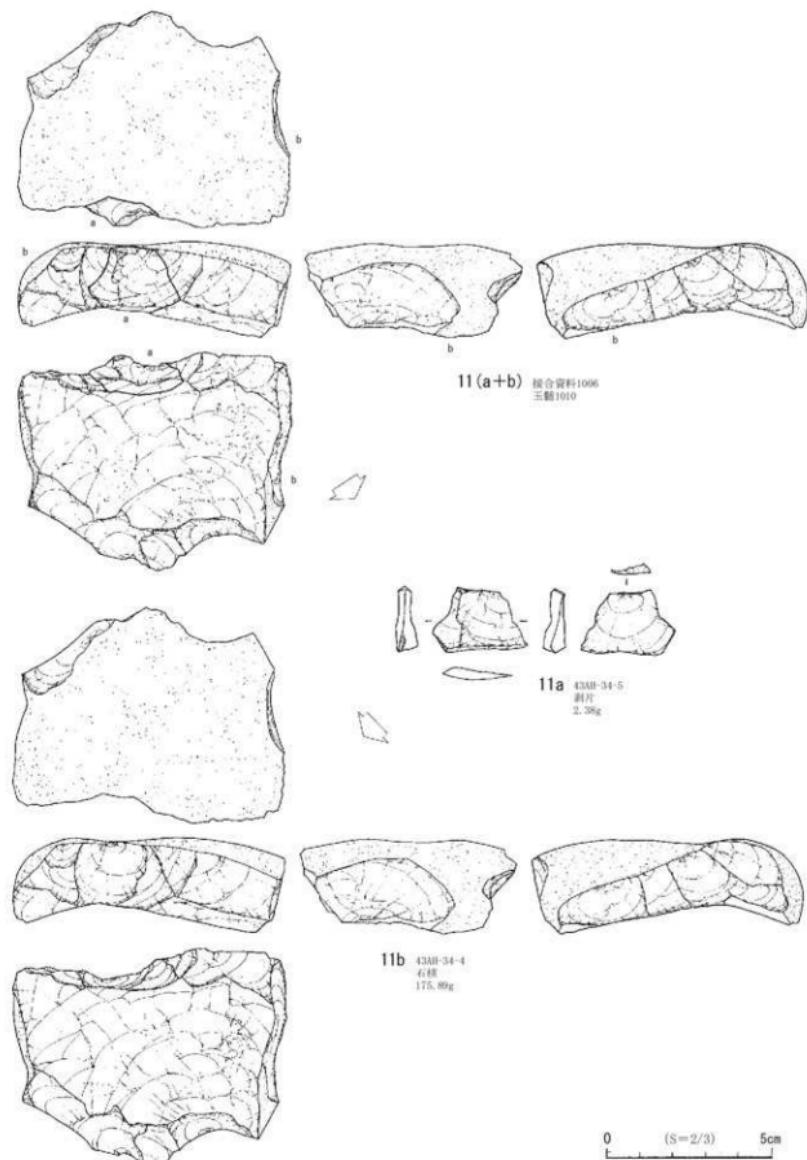
第51図 1 a ユニット第1ブロック出土石器(1)



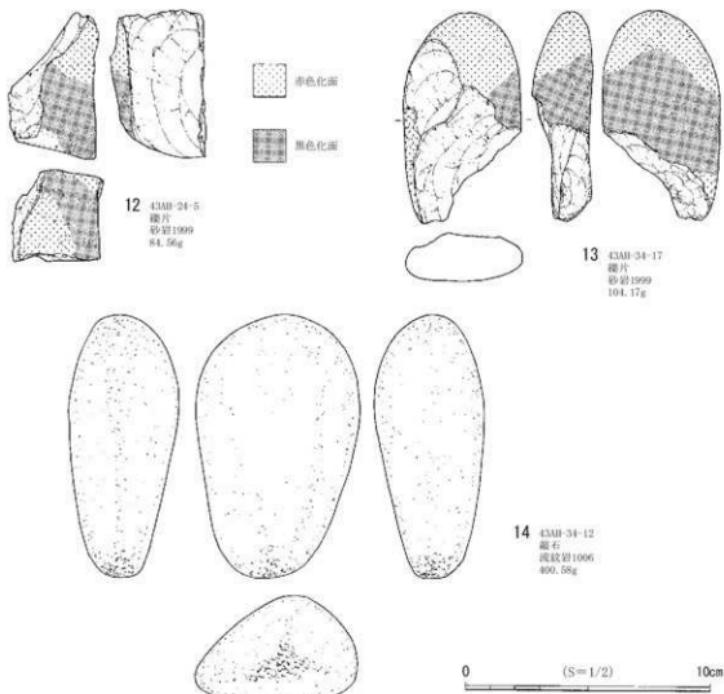
第52図 1 a ユニット第1ブロック出土石器(2)



第53図 1 a ユニット第1ブロック出土石器(3)



第54図 1 a ユニット第1ブロック出土石器(4)



第55図 1 a ユニット第1ブロック出土石器(5)

ガラス質黒色安山岩 2点である。礫・礫片の石材は砂岩 7点、チャート 1点、流紋岩 1点である。

1～4は剥片である。いずれも線状の打面を呈している。1～3は縦長剥片で、背面の剥離面は腹面と同じ剥離方向で構成されている。4(a+b)は横長剥片で、背面の大半が自然面で構成されている。右側面側の細い部位は、折れており剥離時に同時割れしたものと思われる。

5・6は石核である。5は厚みのある板状の剥片を素材としている。剥離順序は、上面を打面として腹面方向に幅広の剥片を2枚剥離→腹面上部を打面として背面方向に縦長剥片を剥離→右側縁下部を打面として背面方向に横長剥片を剥離→背面下部を打面として下面方向に横長剥片を剥離している。6は梢円形礫を素材としている。剥離順序は、右上面部を打面として表面右上部に横長剥片を剥離→裏面右上部を打面として表面左上部に小型の剥片を剥離→右面下部を打面として表裏両面に小形剥片を剥離している。

7・8は原石である。どちらも玉軸が用いられ、梢円形をしている。6の石核の素材と同じ形状をしており、母岩が枯渇した時に備えて原石を保持したものと思われる。

9～11は接合資料である。9・10は同一母岩のホルンフェルス1003が用いられている。ホルンフェルス1003は自然面の形状などから、大型の梢円形礫を素材としている。打面調整は行われず、頭部調整をわず

かに施して、鋭利な縁辺を持つ剥片が剥離されている。

9 (a ~ d) は第1・2ブロック間の接合資料である。剥離順序は、表面上部を打面として上面方向に横長剥片を剥離→上面左部を打面として表面方向に横長剥片9 a (接合資料の内9 aの資料のみが第2ブロックから出土している) を剥離→表面上部に打面を再度転移して、上面方向に横長剥片9 bを剥離→上面右部に打面を再度転移して縦長剥片9 (c + d) を剥離している。打面転移を頻繁に繰り返しながら剥離が行われていることが観察される接合資料である。

10 (a ~ d) の剥離順序は、上面の分割面を打面として、10 a から 10 c を連続して剥離→10 c の剥離面を打面として 10 d を剥離している。

11 (a + b) は大型の盤状の剥片を素材としている。剥離順序は、下面右部を打面として右面方向に横長剥片を剥離→上面上部を打面として裏面方向に横長剥片を数枚剥離→上面下部を打面として表面方向に 11 a を含む数枚の横長剥片を数枚剥離している。大型の盤状剥片から、節理面に沿って規格的な小型の横長剥片が量産されていることを示す接合資料である。

12・13は礫片である。楕円形礫が用いられており、被熱により全面が赤化するとともに、帶状に黒色化している部位がみられた。

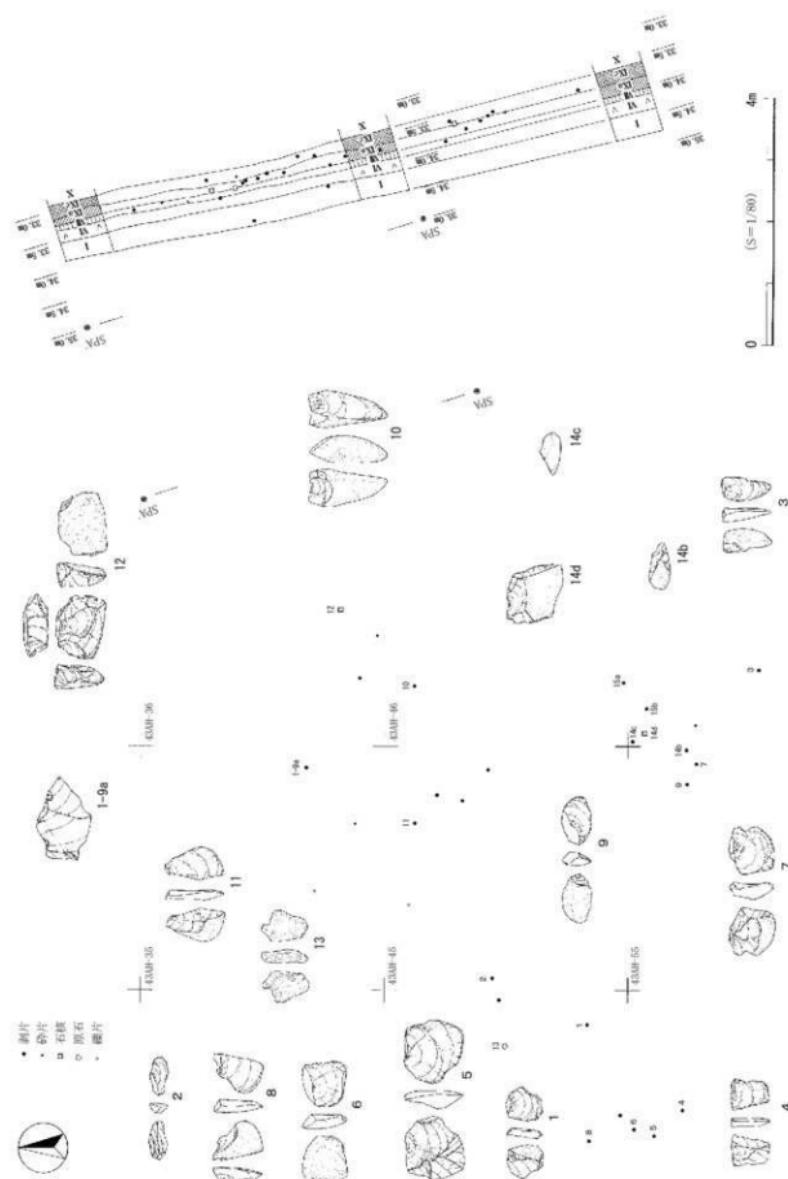
14は敲石である。下端部が突出した楕円形礫が用いられている。下端部の突出部に強い敲打による凹み痕がみられる。上端部と側縁部にも弱い敲打痕がみられる。

② 1 a ユニット第2ブロック (第56~59図、第7・17・18表、図版7・9)

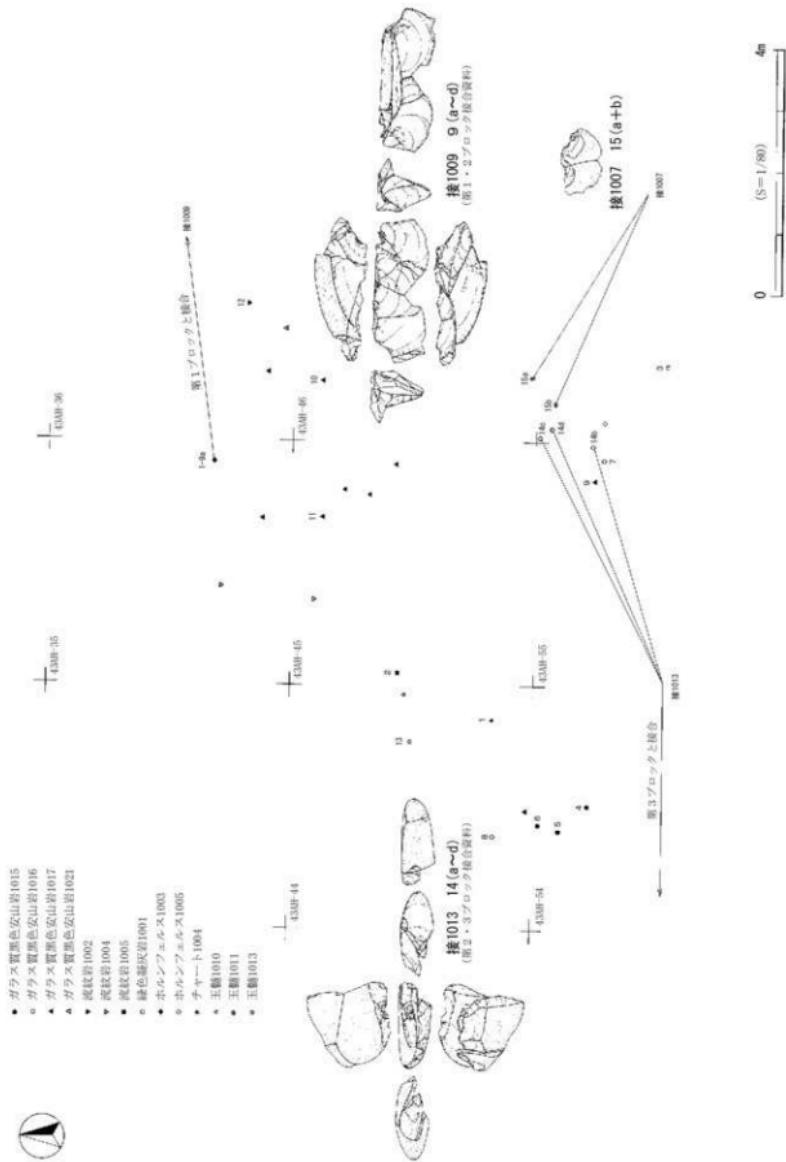
出土状況 1 a ユニット中央部の43AH-35・36・44~46・54~56グリッドに分布している。7.5m × 8.7m の範囲から30点の石器が出土した。北西部に隣接する第1ブロックとの接合資料が1個体(接1009)と南西部に隣接する第3ブロックとの接合資料が1個体(接1013)出土している。南東部・北東部・南西部の3か所の集中地点がみられる。南東部が密集し、北東部・南西部が散漫に分布している。ガラス質黒色安山岩1017が北東部にまとまって出土している。IX c 層から I 層にかけて出土しており、IX a 層~VII層下部に集中する。

第7表 1 a ユニット第2ブロック組成表

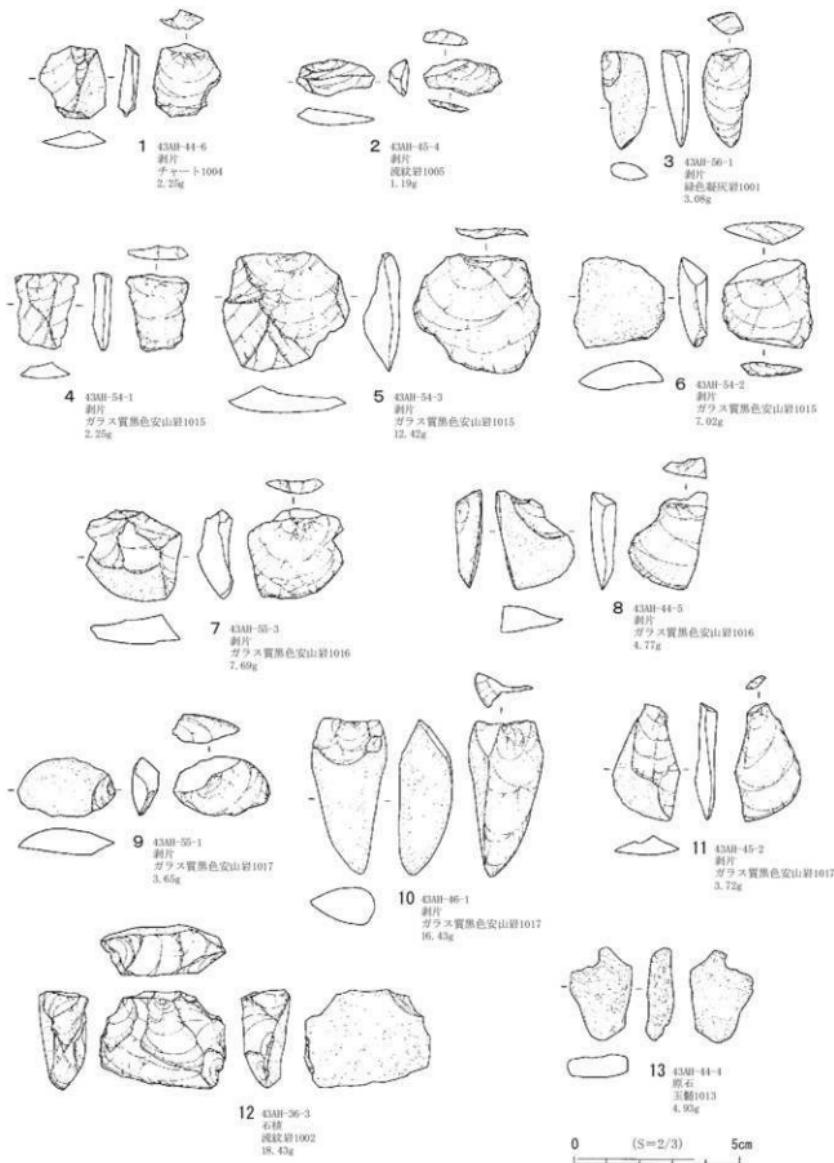
母 岩	器 種	母岩番号	剥片	碎片	石核	原石	礫片	総計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	1015	3						3	10.00	21.69	14.91
	1016	4		1				5	16.67	47.42	32.60
	1017	8	1					9	30.00	27.64	19.00
	1021		1					1	3.33	0.19	0.13
玉	1010	1						18	60.00	96.94	66.63
	1011	2						1	3.33	1.79	1.23
	1013				1			2	6.67	4.90	3.37
	合 計	15	2	1				1	3.33	4.93	3.39
緑色凝灰岩	1001	1						4	13.33	11.62	7.99
	1005							1	3.33	3.08	2.12
ホルンフェルス	1003	1						1	3.33	11.34	7.79
	1005		1					1	3.33	0.21	0.14
ホルンフェルス	合 計	1	1					2	6.67	11.55	7.94
	1004	1						1	3.33	3.08	2.12
流紋岩	1002			1				1	3.33	18.43	12.67
	1004						2	6.67	0.42	0.29	
	1005	1					1	3.33	1.19	0.82	
透紋岩	合 計	1		1			2	6.67	20.04	13.78	
	全 体	22	3	2	1	2	2	30	100.00	145.48	100.00
点 数 合 計											



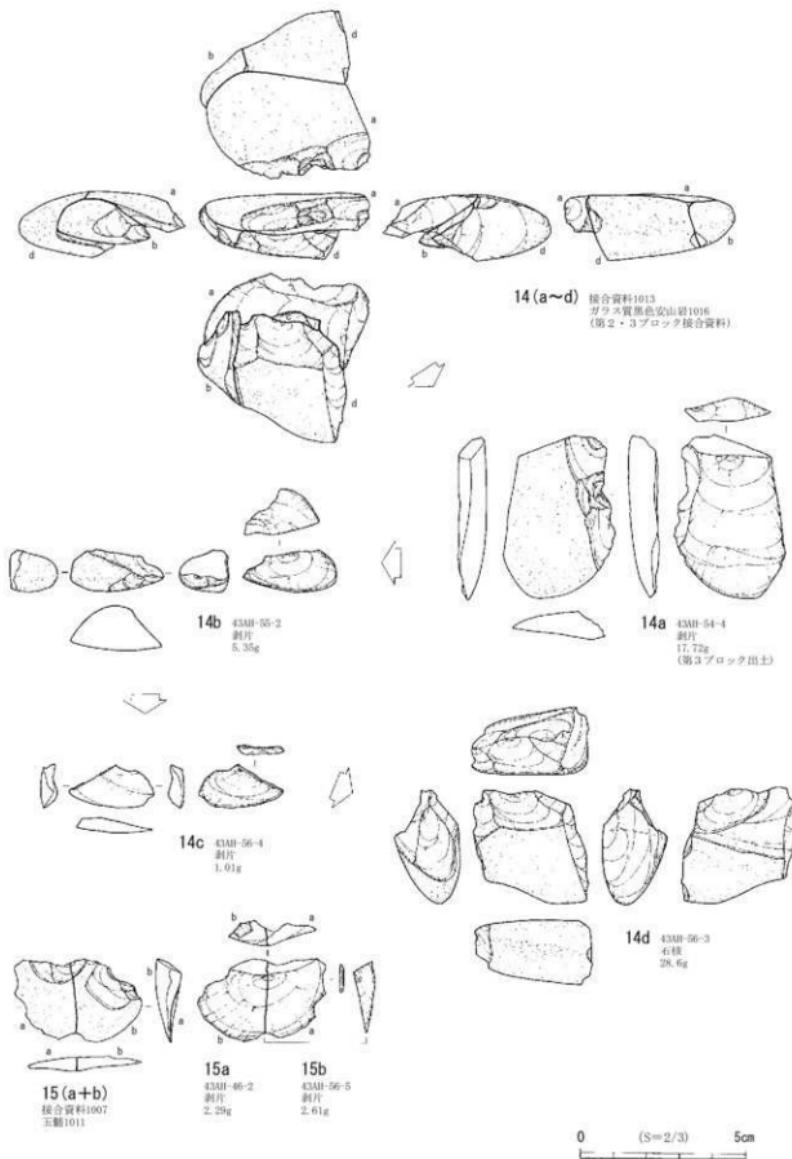
第56図 1 a ユニット第2ブロック器種別分布



第57図 1aユニット第2ブロック母岩別分布



第58図 1 a ユニット第2ブロック出土石器(1)



第59図 1 a ユニット第2ブロック出土石器(2)

出土遺物 器種組成は剥片22点、碎片3点、石核2点、原石1点の石器類28点と礫片2点で構成される。石器類の石材はガラス質黒色安山岩18点、玉髓4点、ホレンフェルス2点、流紋岩2点、緑色凝灰岩1点、チャート1点である。礫片の石材は流紋岩2点である。

1～11は剥片である。いずれも打面調整は行われていない。頭部調整が行われているものは、1～5・7・8・10である。背面に自然面を有するものは、1・3・5～11である。自然面の形状などから、12の石核や14の接合資料のように比較的小型で扁平な楕円形礫から剥離されたものと思われる。背面の剥離面は、主要剥離面と同一方向のもので構成されているが、剥片の形状は規格的な形状ではなく、不定型な形状のもので占められる。1・4～8は幅広の縦長剥片である。1は末端部が丸みを持ち蝶番剥離になつている。2・9は横長剥片である。3・10・11は細長の縦長剥片である。2・6は末端部が折れており、8は縦方向に折れている。いずれも剥片を剥離した際に同時に割れたものと思われる。

12は石核である。厚みのある横長剥片を素材としており、主要剥離面側（実測図では表面側）で剥片が剥離されている。剥離順序は、裏面左部を打面として表面方向に横長剥片を剥離→裏面右上部を打面として表面方向に横長剥片を剥離→上面中央部を打面として表面方向に縦長剥片を剥離している。

13は原石である。玉髓の楕円形礫で、第1ブロックから出土している原石も玉髓製の楕円形礫が用いられている。

14・15は接合資料である。14（a～d）は第2・3ブロック間の接合資料である。扁平な楕円形礫を素材としている。剥離順序は、右面左部を打面として表面方向に14aの縦長剥片を剥離→14aの剥離面を打面として下面方向に14bの横長剥片を剥離→下面中央部を打面として14cの横長剥片を剥離→14dは石核として用いられており、表面左上部と中央部に横長剥片が剥離されている。

15（a+b）は横長剥片の接合資料で、横長剥片を剥離した際に縦方向に折れた資料である。縦方向に折れた資料は、1aユニットにおいて多くみられ、ガラス質黒色安山岩で顕著にみられる。

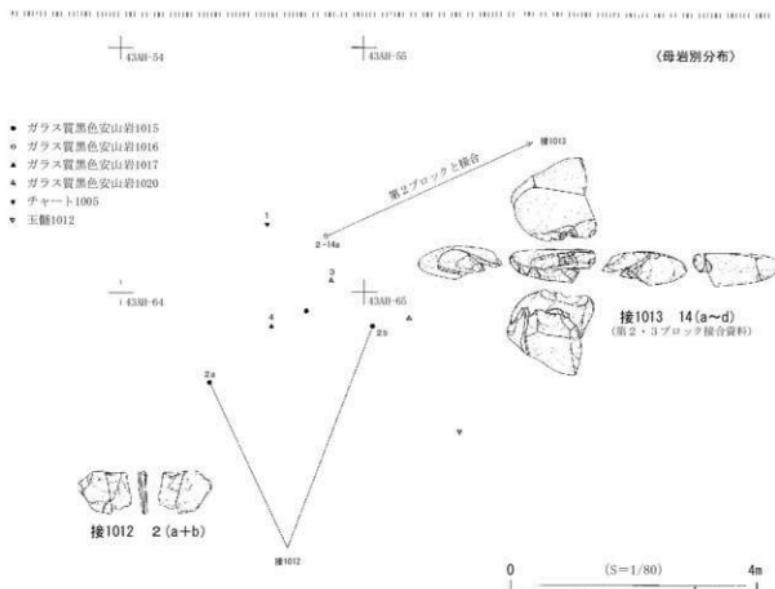
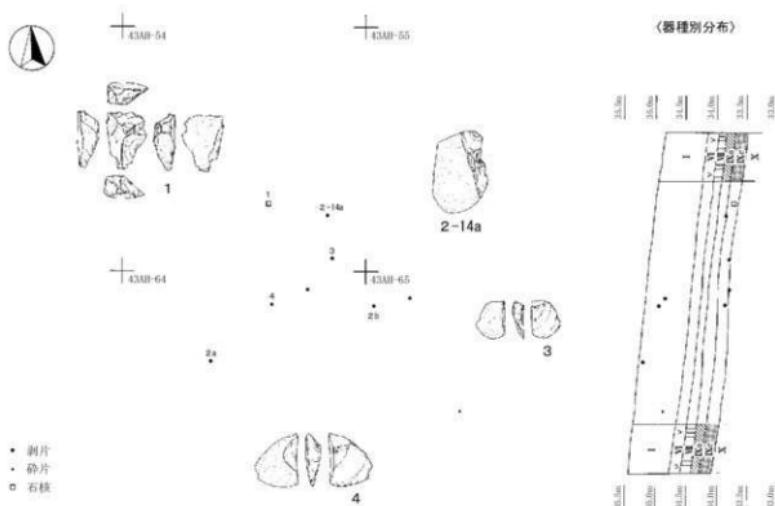
③ 1aユニット第3ブロック（第60・61図、第8・18表、図版7・9）

出土状況 1aユニット南西部の43AH-54・64・65グリッドに分布している。3.4m×4.1mの範囲から9点の石器が出土した。北東に隣接する第2ブロックとの接合資料が1個体（接1013）出土している。北西部に集中地點がみられ、南東部に碎片が単独で出土している。IXc層からI層にかけて出土しており、IXc層～IXa層に集中する。

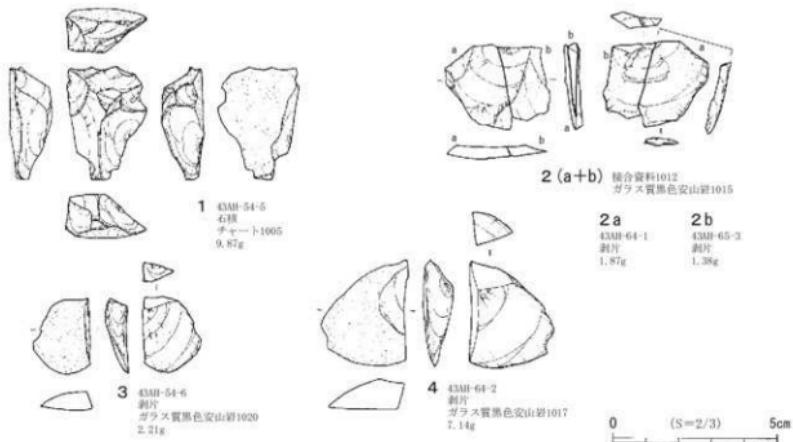
出土遺物 器種組成は剥片7点、碎片1点、石核1点である。石材はガラス質黒色安山岩7点、玉髓1点、チャート1点である。

第8表 1aユニット第3ブロック組成表

母岩 器種	母岩番号	剥片	碎片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	1015	3			3	33.33	3.75	8.91
	1016	1			1	11.11	17.72	42.11
	1017	1			1	11.11	7.14	16.97
	1020	2			2	22.22	3.52	8.37
ガラス質黒色安山岩合計		7			7	77.78	32.13	76.35
玉髓	1012		1		1	11.11	0.08	0.19
チャート	1005			1	1	11.11	9.87	23.46
全 体 点 数 合 計		7	1	1	9	100.00	42.08	100.00



第60図 1 a ユニット第3ブロック遺物分布



第61図 1 a ユニット第3ブロック出土石器

1は石核である。厚みのある幅広の剥片を素材としている。素材の主要剥離面は表面下半部に残っている。剥離順序は、表面左下部を打面として左面方向に横長剥片を剥離→裏面左下部を打面として表面方向に横長剥片を剥離→裏面上部を打面として左上部から右上部へと打点を順次移動して、表面方向に小型の横長剥片を剥離している。第2ブロックの12の石核と素材の形状や剥離の進行形態が類似する。

2～4は打点直下の衝撃により縦方向に折れた横長剥片である。第1・2ブロックにおいても同様の資料がみられ、ガラス質黒色安山岩において顕著にみられる現象である。2 (a+b) のような厚みのない横長剥片を剥離した際に、節理に沿って紙折れしたものと思われる。

(3) 1 b ユニット (第62・63図、第9表)

1 b ユニットの石器群は、45.1m×39.5mの範囲から124点出土し、第4～8ブロックの5か所の集中地点で構成される。IX a層上部に生活面を持つ石器群と推定される。調査区南部に位置し、標高38.0m～39.5m(現地表面)に分布し、北東に傾斜する斜面の縁辺に立地している。ブロック間接合資料は、第4・7ブロック接合資料の接1001と第6・8ブロック接合資料の接1004の2個体である。

器種組成はナイフ形石器4点、楔形石器3点、彫器1点、二次加工のある剥片9点、微細剥離のある剥片2点、剥片64点、碎片2点、石核7点、敲石2点、原石2点の石器類96点と礫1点、礫片27点の礫・礫片28点で構成される。

石器類の石材はガラス質黒色安山岩60点、玉髓9点、硬質頁岩8点、流紋岩5点、トロトロ石3点、珪質頁岩3点、黒曜石2点、頁岩2点、安山岩1点、ホルンフェルス1点、チャート1点、砂岩1点である。礫・礫片の石材は流紋岩14点、チャート5点、砂岩4点、ホルンフェルス3点、安山岩2点である。

第9表 1 b ユニット器種石材組成表

石材 器種	ナイフ形石器	鉈器	二次加工の ある剥片	微細剥離 度のある 剥片	剝 片	碎 片	敲 石	融 石	原 石	種	総 計
					石 器	器	器	石 器			
黒理安山岩	1				1						2
ガラス質黑色安山岩	2	4	46		6				2		60
トロトロ石			3								3
安山岩							1		2		3
頁岩			1	1							2
珪質頁岩			1	1	1						3
蛭質頁岩	1	1	1	3	1						8
玉髓	2		1	1	5						9
ホルンフェルス				1						3	4
チヤー	1								1	4	6
砂岩							1			4	5
流紋岩			1	3	1					14	19
全 体 点 数 合 計	4	3	1	9	2	64	2	7	2	2	124

① 1 b ユニット第4ブロック (第64~67図、第10・18表、図版7・10)

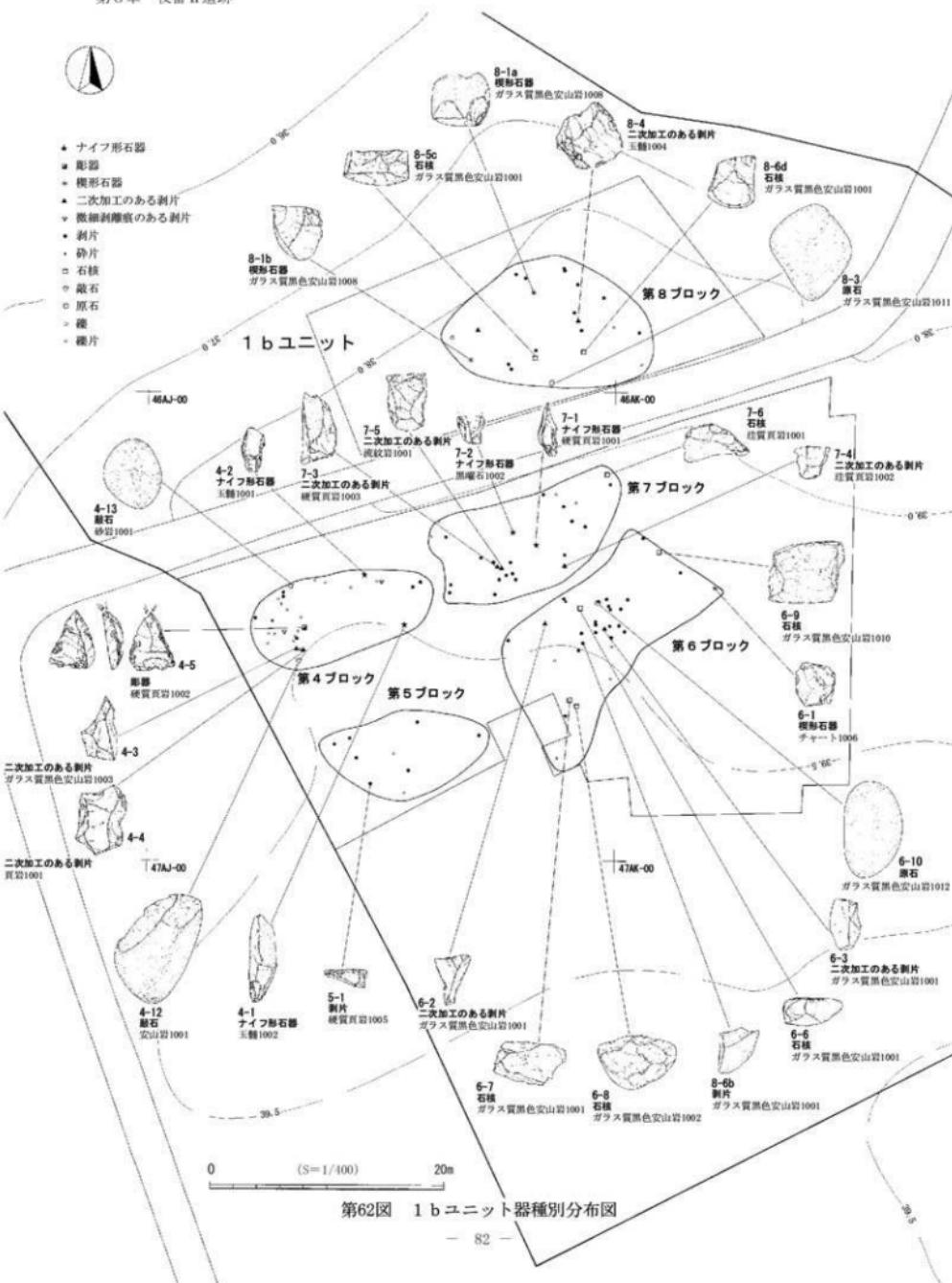
出土状況 1 b ユニット西部の46AJ-34・42~45・52・53グリッドに分布している。7.3m×14.2mの範囲から31点の石器が出土した。南西部・北西部・北東部の3か所の集中地点がみられる。南西部は密集しており、北西部・北東部は散漫に分布する。ナイフ形石器2点が北東部から出土し、礫片は南西部・北西部に集中する。東隣接する第7ブロックとの接合資料が1個体(接1001)出土している。IX c層からI層にかけて出土しており、IX c層~IX a層に集中する。

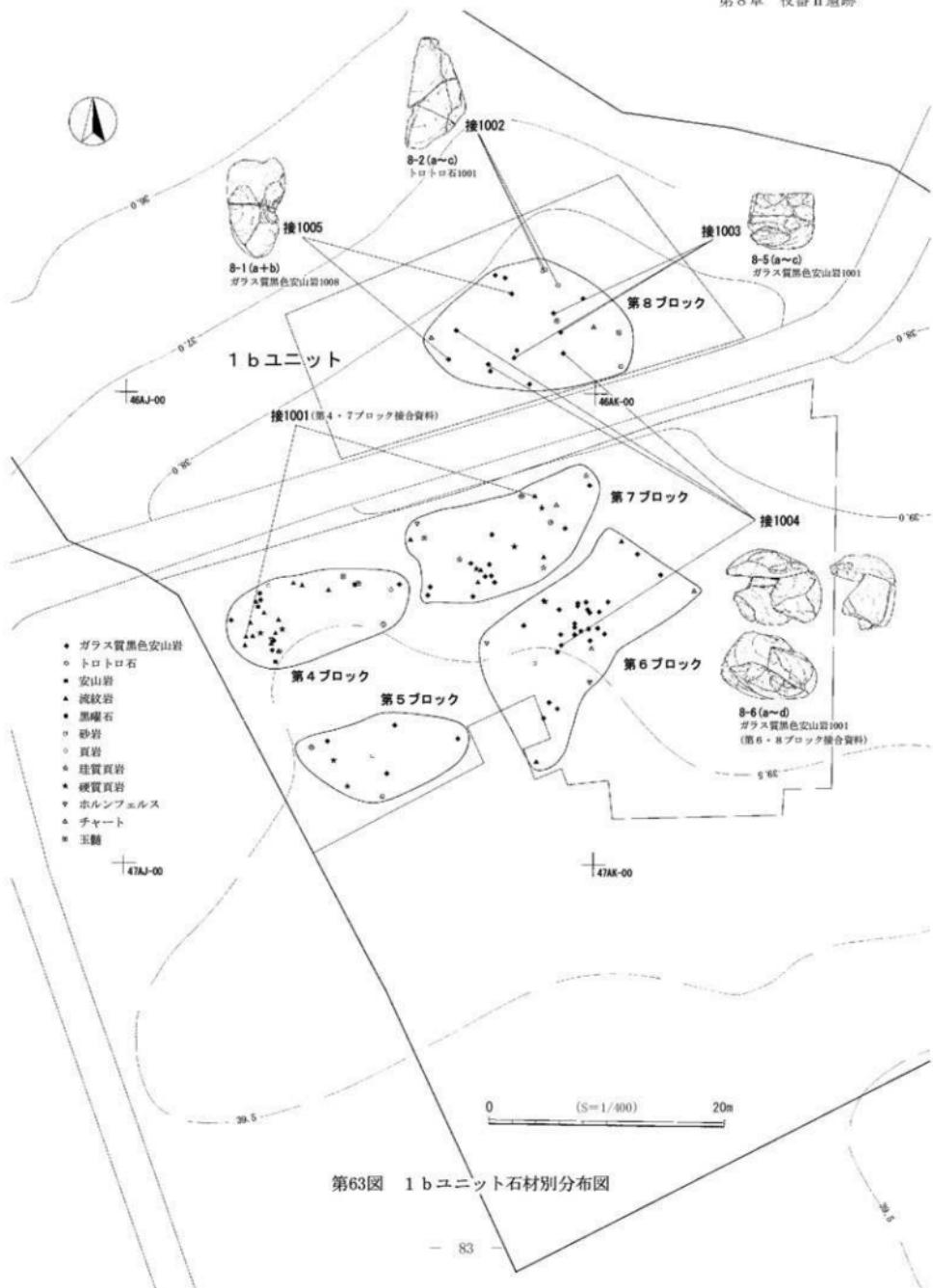
第10表 1 b ユニット第4ブロック組成表

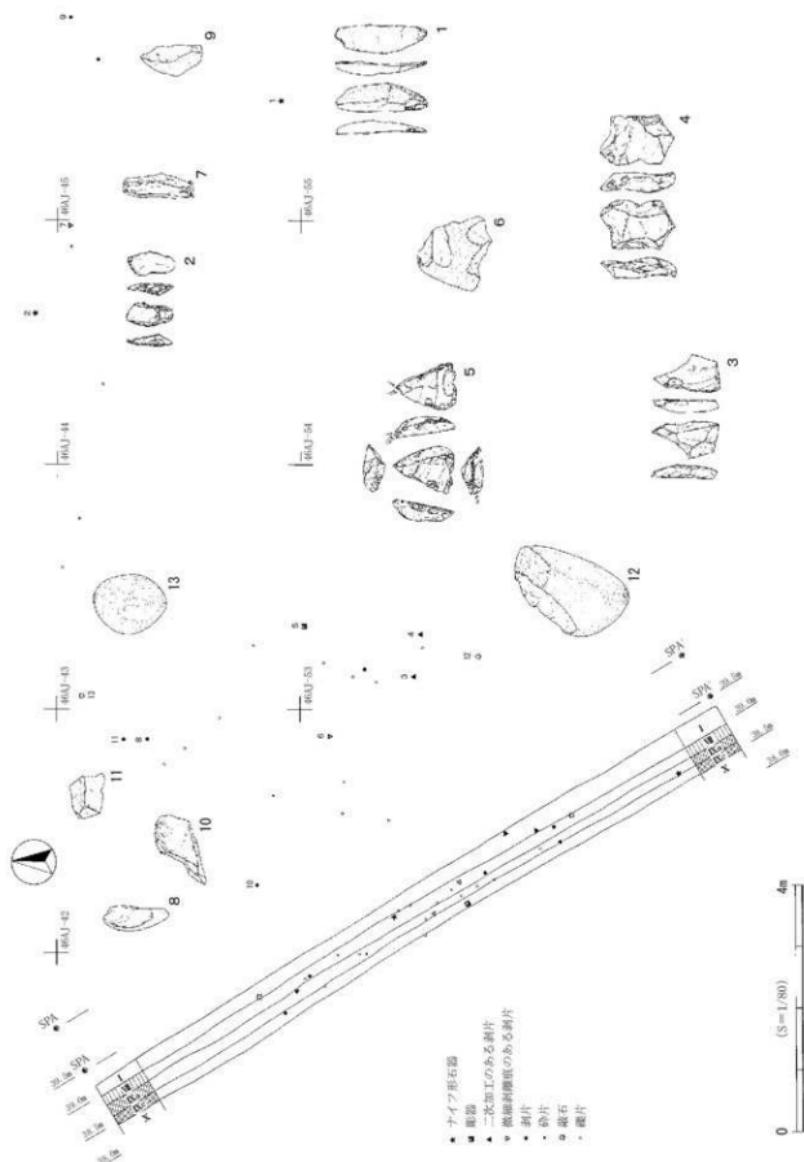
母岩 器種	母岩番号	ナイフ形 石器	鉈器	二次加工の ある剥片	微細剥離 度のある 剥片	剝 片	碎 片	敲 石	融 石	種 合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)	
ガラス質黑色安山岩	1003			1	3					4	12.90	20.78	2.24	
	1004				1					1	323	9.47	1.02	
	1006				1					1	323	3.10	0.33	
ガラス質黑色安山岩 合計			1	5						6	19.35	33.35	3.59	
安山岩	1001					1				1	323	365.75	39.36	
	1002						1			1	323	130.50	14.04	
	1999						1			1	323	15.9	0.17	
安山岩 合計				1	5					1	9.68	497.84	53.58	
頁岩	1001		1							1	323	17.37	1.87	
	1002				1					1	323	1.21	0.13	
頁岩 合計			1	1						2	6.45	18.58	2.00	
硬質頁岩	1002		1							1	323	10.79	1.16	
	1004				1					1	323	20.20	2.17	
硬質頁岩 合計			1	1						2	6.45	30.99	3.34	
玉髓	1001	1								1	323	2.97	0.32	
	1002	1								1	323	5.88	0.63	
	1006				1					1	323	4.53	0.49	
玉髓 合計		2		1						3	9.68	13.38	1.44	
ホルンフェルス	1999									1	323	1.15	0.12	
チヤート	1999						1			1	323	4.08	0.44	
砂岩	1001						1			1	323	109.91	11.83	
	1999							1		1	323	0.20	0.02	
流紋岩	1001							1		11	11	35.48	219.70	23.64
	1999							1		11	12	38.71	219.90	23.67
流紋岩 合計								1		15	31	100.00	929.18	100.00
全 体 点 数 合 計	2	1	2	2	6	1	2							



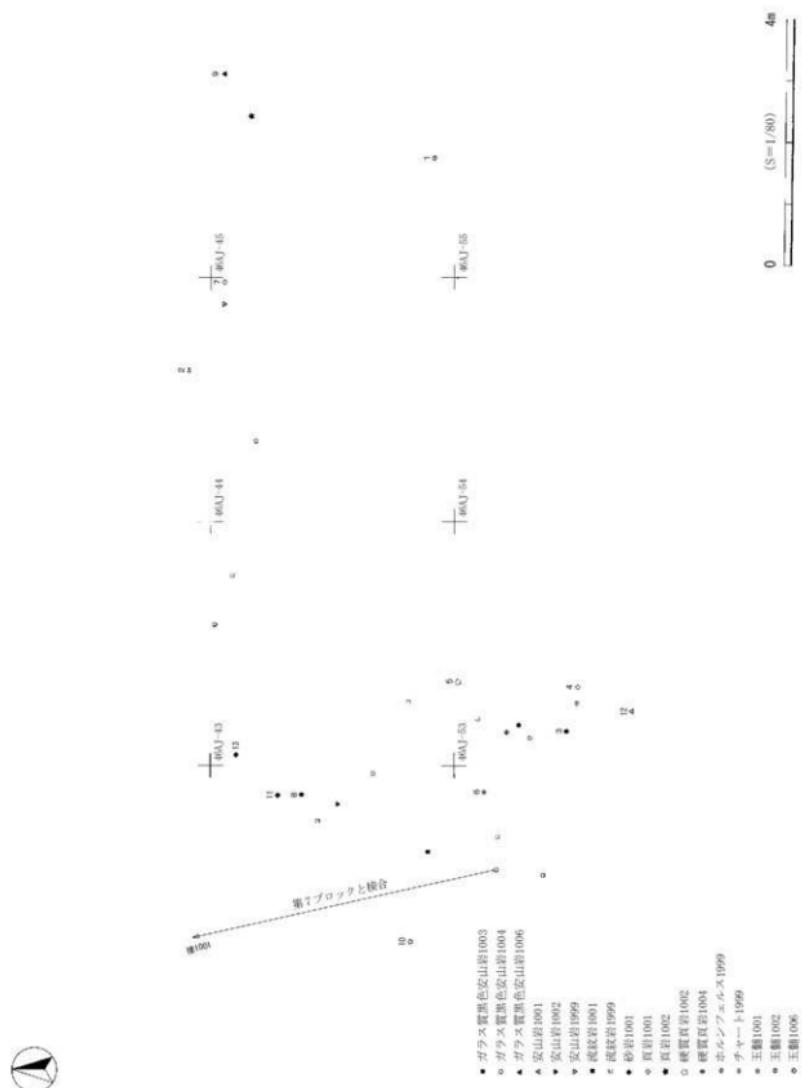
- ナイフ形石器
- 鋸器
- ▲ 横形石器
- ◆ 二次加工のある剥片
- ❖ 微細剥離痕のある剥片
- △ 剥片
- 砕片
- 石核
- 薄石
- 原石
- △ 磨
- △ 繊片



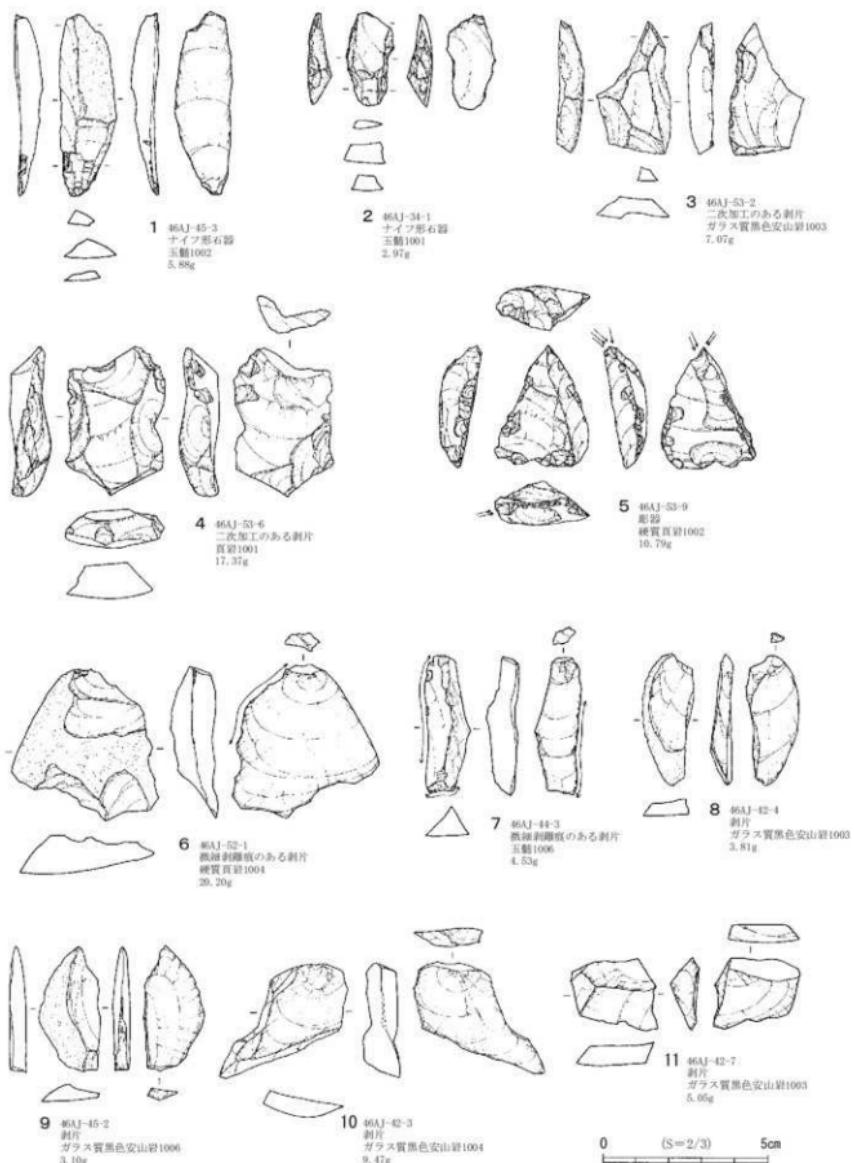




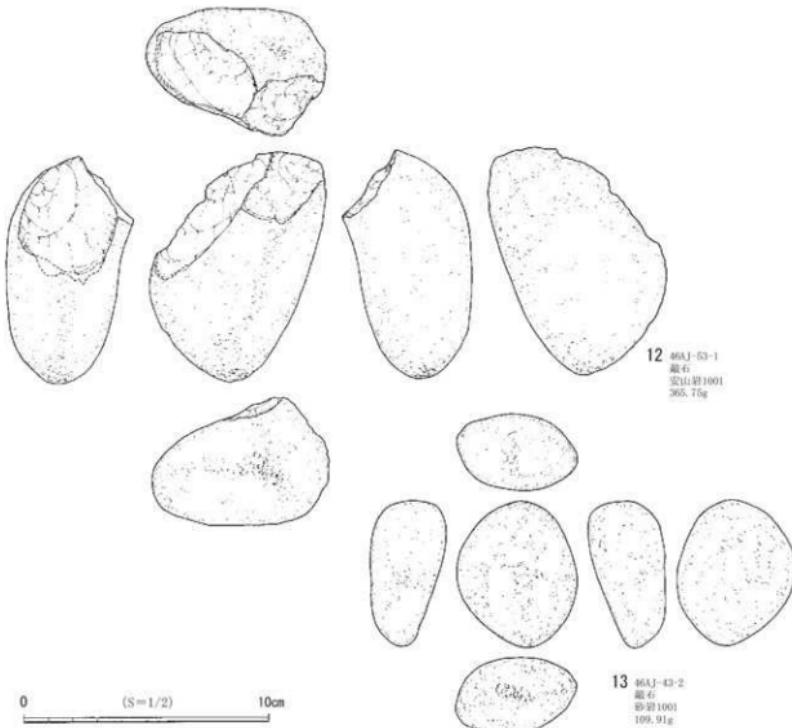
第64図 1 b ユニット第4ブロック器種別分布



第65図 1 b ユニット第4ブロック母岩別分布



第66図 1 b ユニット第4ブロック出土石器(1)



第67図 1 b ユニット第4ブロック出土石器(2)

出土遺物 器種組成はナイフ形石器2点、彫器1点、二次加工のある剥片2点、微細剥離痕のある剥片2点、剥片6点、碎片1点、敲石2点の石器類16点と礫片15点で構成される。石器類の石材はガラス質黒色安山岩6点、玉髓3点、頁岩2点、硬質頁岩2点、安山岩1点、砂岩1点、流紋岩1点である。礫片の石材は流紋岩11点、安山岩2点、ホルンフェルス1点、チャート1点である。

1・2はナイフ形石器である。いずれも製品として搬入されている。1は頭部調整が入念に施された縦長剥片を素材としている。基部側に調整加工が集中している。背面側への調整加工は両側縁下部に細かい調整加工が施され、腹面側の調整加工は両側縁下端部に平坦な調整加工が施されている。柳葉形の形態を呈する。先端部と右上部の縁辺はわずかに折れている。使用時の先端部の衝撃により破損した可能性がある。2は横長剥片を素材として両側縁に調整加工が施され、右側縁上部に素材の縁辺が残されている。切出形の形態を呈する。左側縁は、節理面に沿って大きく折断し、下部を深く抉る加工により成形した後に、左側縁の縁辺部に細かい調整加工が施されている。右側縁は中央部付近に鋸歯状の調整加工により成

形した後に、右側縁下半部に細かい調整加工が施されている。先端部は裏面側に細かい剥離痕がみられ、この剥離は1のナイフ形石器と同様に使用時の衝撃痕と思われる。

3・4は二次加工のある剥片である。3は幅広の剥片を素材として左側縁と下縁部と右側縁上部を折断した後に、腹面左側縁に細かい調整加工が施されている。4は厚みのある幅広の剥片を素材としている。調整加工の剥離順序は、腹面右下部を平坦剥離→背面方向に鋸歯状の調整加工を全周に施している。小型の剥片を剥離した石核と捉えることも可能である。

5は彫器である。厚みのある幅広の剥片を素材としている。調整加工の剥離順序は、左面を背面方向に折断剥離→腹面左下部を打面として背面右部に桶状剥離→背面下部に細かい調整加工→腹面下部に深い調整加工→左側縁下部を打面として下面方向に2条の短い桶状剥離→背面右上部を打面として腹面右部に2条の桶状剥離→左面上部を打面として右面方向に2条の短い桶状剥離を施している。上端部と左下端部は、2条の短い桶状剥離によって彫刀面が作出され尖った形状をしている。

6・7は微細剥離痕のある剥片である。6は腹面左上半部に微細剥離痕がみられる。7は背面左側縁と下端部と腹面右下半部に微細剥離痕がみられる。

8~11は剥片である。8~11は剥片剥離の際に縦折れたものと思われる。ガラス質黒色安山岩にこのような剥離がみられ、同様の現象は1aユニットの第1~3ブロックにおいてもみられた。9も横折れではあるが、剥片剥離時に同時に割れたものと思われる。

打面が残置している6~8・10・11をみると、打面調整は行われておらず、頭部調整がわずかに行われていることが観察できる。

12・13は敲石である。12は厚みのある楕円形礫を素材として、上下両端部に敲打痕がみられる。上端部の2枚の剥離は、強い敲打により剥離されたものと思われる。13は小型の楕円形礫を素材として、上下両端部に敲打痕がみられる。

② 1 b ユニット第5ブロック (第68~70図、第11・18・19表、図版7・10)

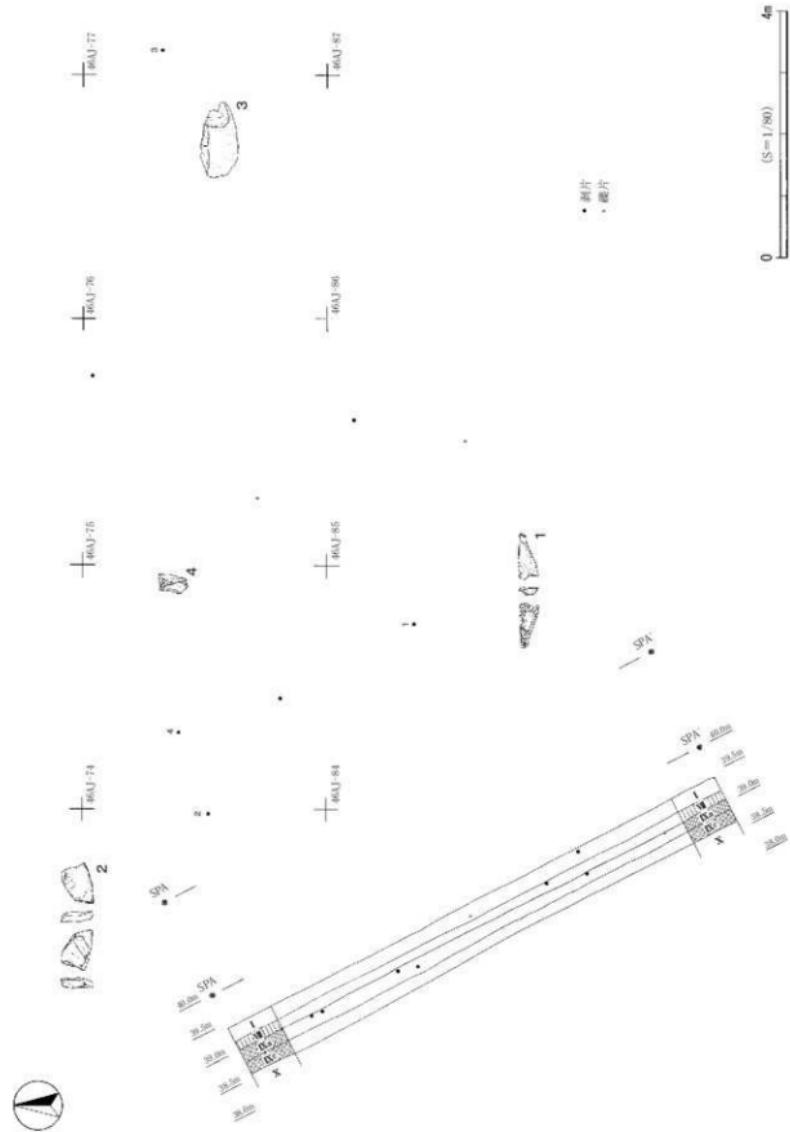
出土状況 1 b ユニット南西部の46AJ-73~75・77・84・85グリッドに分布している。6.1m×12.4mの範囲から9点の石器が出土した。西部に集中地点がみられ、東部から剥片が単独で出土している。IX a層からI層にかけて出土しており、IX a層上部~VII層に集中する。

出土遺物 器種組成は剥片7点、礫片2点で構成される。剥片の石材はガラス質黒色安山岩4点、硬質頁岩2点、玉髓1点で、礫片の石材は砂岩2点である。

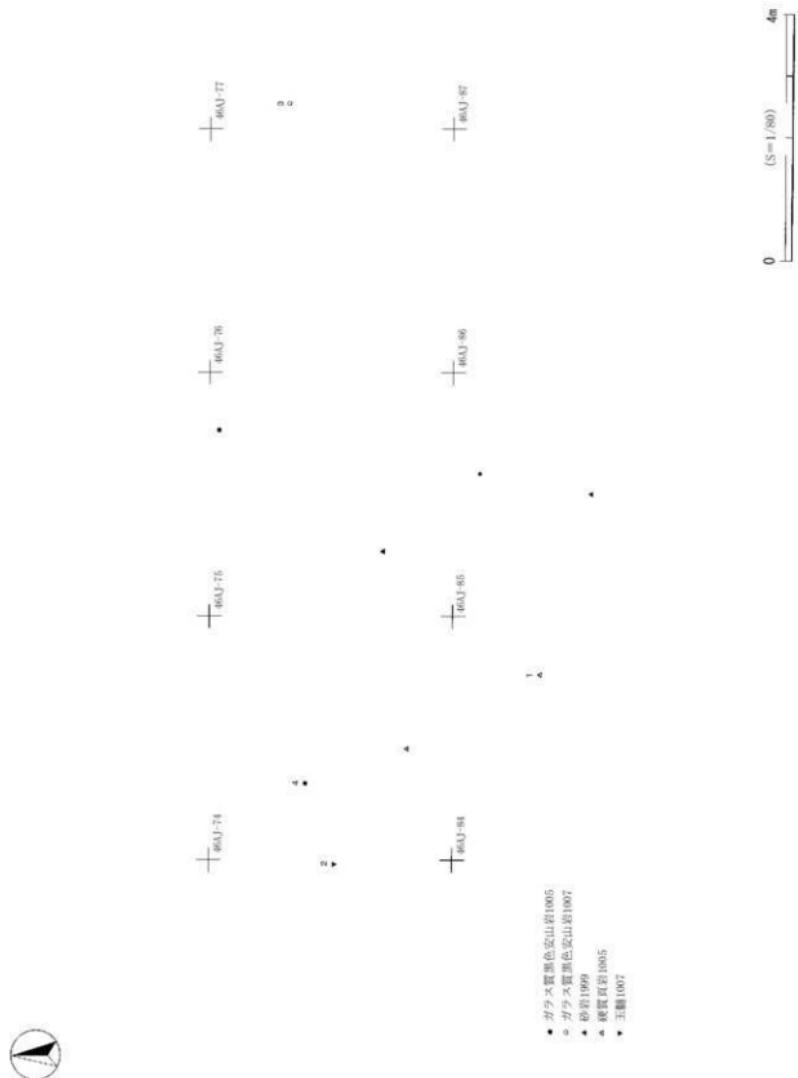
1~4は剥片である。いずれも打面調整は行われていない。規格的な剥片は剥離されていない。1・2は剥片剥離の際に縦方向に折れた資料である。1~3は横長剥片、4は縦長剥片である。

第11表 1 b ユニット第5ブロック組成表

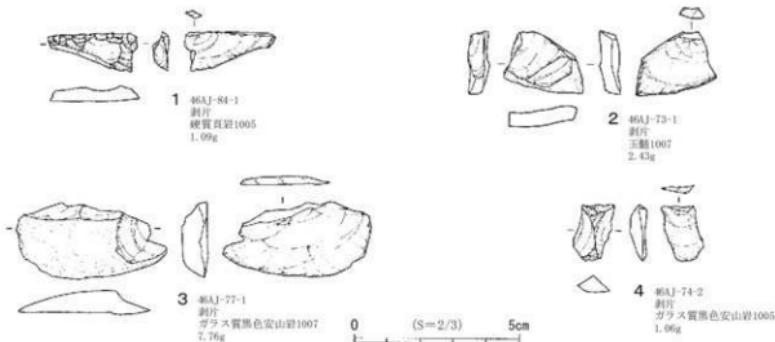
母岩	器種	母岩番号	剥片	礫片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩		1005	3		3	33.33	2.88	4.46
		1007	1		1	11.11	7.76	12.01
	合計		4		4	44.44	10.64	16.47
硬質頁岩		1005	2		2	22.22	1.43	2.21
玉髓		1007	1		1	11.11	2.43	3.76
砂岩		1999		2	2	22.22	50.10	77.55
全 体	点 数 合 計		7	2	9	100.00	64.60	100.00



第68図 1 b ユニット第5ブロック器種別分布



第69図 1 b ユニット第5ブロック母岩別分布



第70図 1 b ユニット第5ブロック出土石器

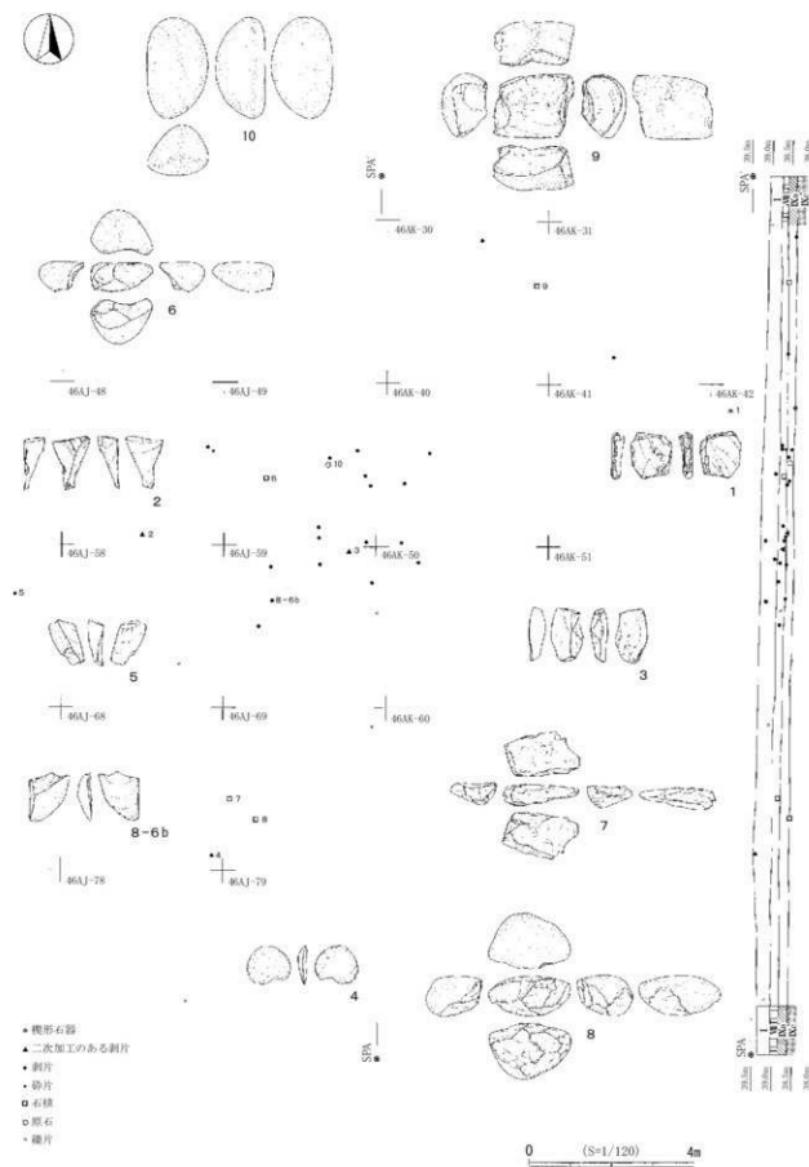
③ 1 b ユニット第6ブロック (第71~74図、第12・19表、図8・10)

出土状況 1 b ユニット南東部の46AJ-48・49・57~59・68・69・78、46AK-30・31・40・42・50グリッドに分布している。17.6m×18.8mの範囲から35点の石器が出土した。中央部・南西部・北東部の3か所の集中地点がみられる。中央部は密集しており、南西部・北東部は散漫に分布する。南西部では石核が2点近接して出土しており、北東部では楔形石器が1点出土している。北側に分布する第8ブロックとの接合資料が1個体(接1004)出土している。IXc層からI層にかけて出土しており、IXa層~VII層に集中する。

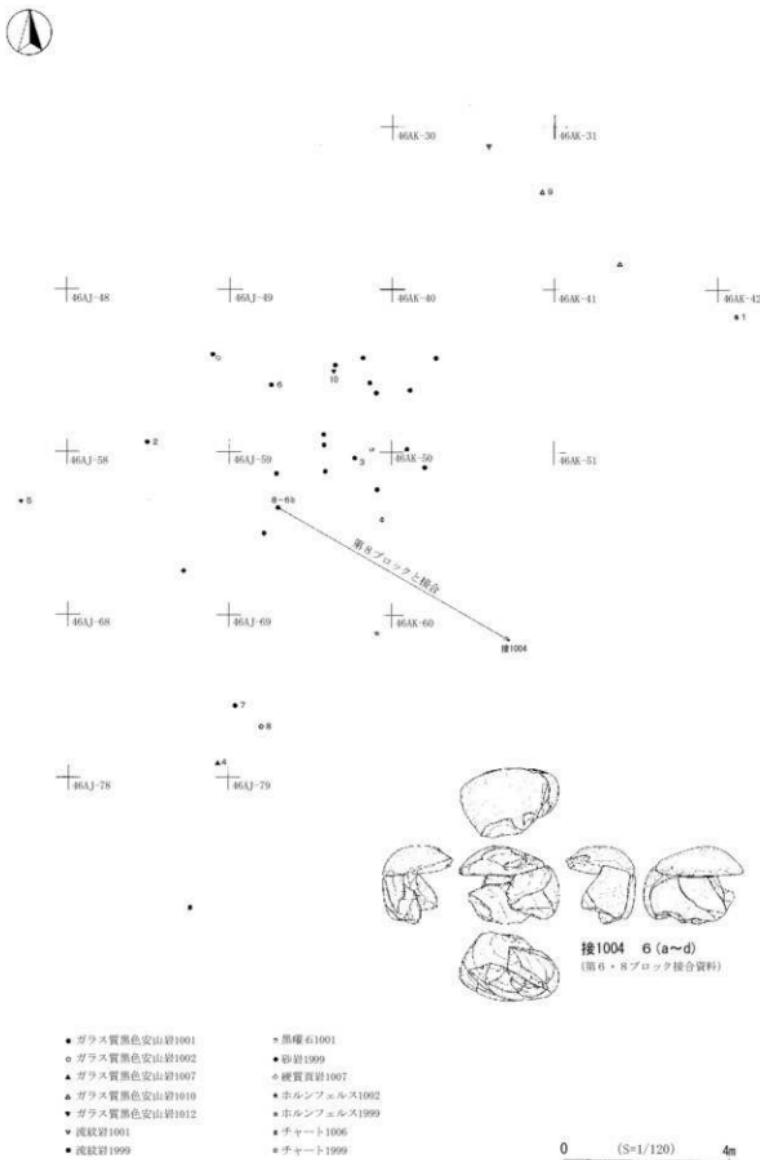
出土遺物 器種組成は楔形石器1点、二次加工のある剥片2点、剥片22点、碎片1点、石核4点、原石1点の石器類31点と礫片4点で構成される。石器類の石材は、ガラス質黒色安山岩26点、黒曜石1点、硬質頁岩1点、ホルンフェルス1点、チャート1点、流紋岩1点である。礫片の石材はホルンフェルス1点、チャート1点、砂岩1点、流紋岩1点である。

第12表 1 b ユニット第6ブロック組成表

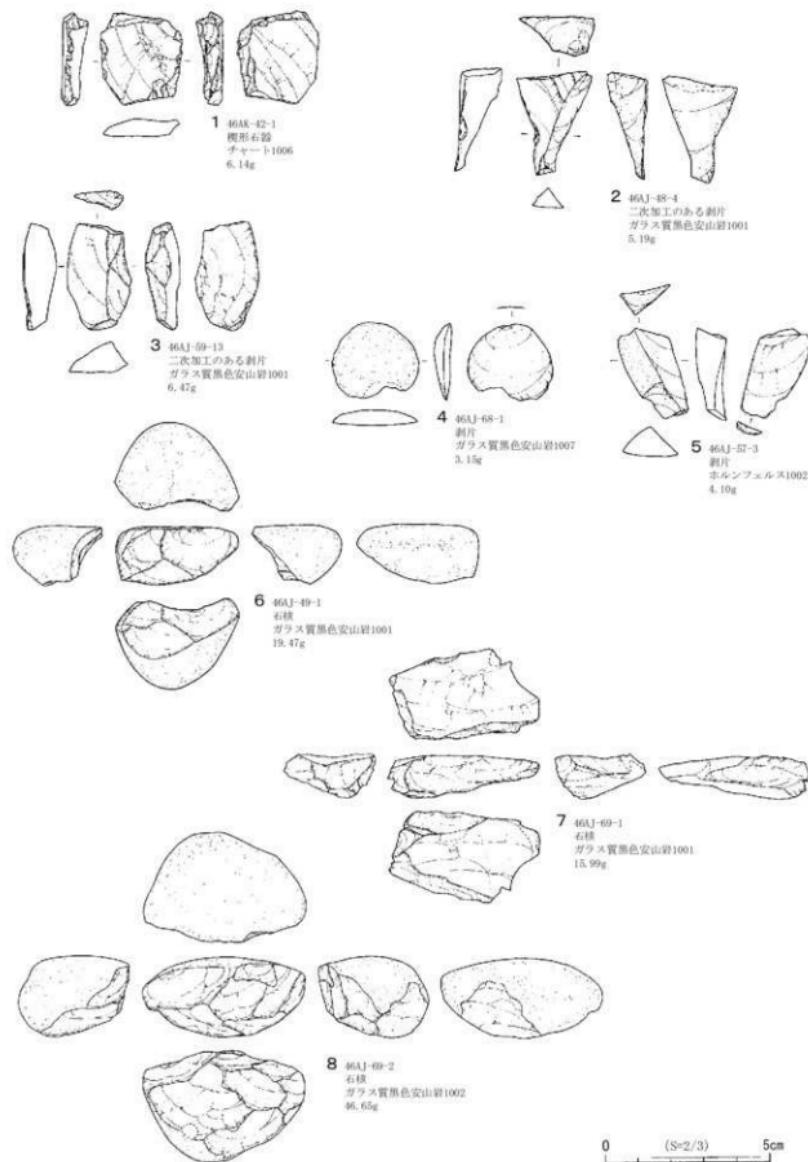
母岩	器種	母岩番号	楔形石器	二次加工のある剥片	剥片	碎片	石核	原石	礫片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
黒曜石		1001		1						1	2.86	0.77	0.19
ガラス質黒色安山岩		1001		2	16					20	57.14	136.72	34.56
		1002				1				1	2.86	46.65	11.79
		1006		1						1	2.86	0.98	0.25
		1007		1						1	2.86	3.15	0.80
		1010		1		1				2	5.71	75.08	18.98
		1012							1	2.86	94.88	23.99	
ガラス質黒色安山岩	合計		2	19		4	1			26	74.29	357.46	90.36
硬質頁岩		1007			1					1	2.86	0.23	0.06
ホルンフェルス		1002			1					1	2.86	4.10	1.04
		1999							1	2.86	6.37	1.61	
ホルンフェルス	合計			1					1	2	5.71	10.47	2.65
チャート		1006	1							1	2.86	6.14	1.55
		1999							1	2.86	0.51	0.13	
チャート	合計		1						1	2	5.71	6.65	1.68
砂岩		1999							1	2.86	2.45	0.62	
流紋岩		1001		1					1	2.86	0.66	0.17	
		1999							1	2.86	16.89	4.27	
流紋岩	合計			1					1	2	5.71	17.55	4.44
全体	点数合計		1	2	22	1	4	1	4	35	100.00	395.58	100.00



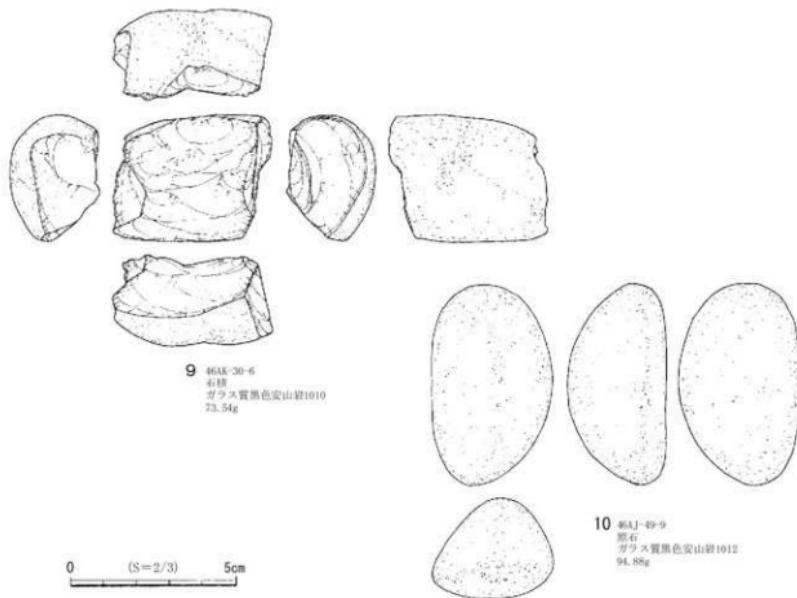
第71図 1 b ユニット第6ブロック器種別分布



第72図 1 b ユニット第6ブロック母岩別分布



第73図 1 b ユニット第6ブロック出土石器(1)



第74図 1 b ユニット第6ブロック出土石器(2)

1は楔形石器である。製品として搬入されている。節理面に沿って剥離された板状の剥片を素材として、上下両端を折断した後に、上下と左右両端から両極剥離が行われている。

2・3は二次加工のある剥片である。2は上面と右面を折断した後に、左側縁に細かい調整加工が施されている。3は横長剥片を素材として、右側縁に粗い調整加工が施され、左側縁下部に細かい調整加工が施されている。

4・5は剥片である。背面に自然面を大きく残しており、8・9のような石核から剥離された剥片と思われる。4は線状の打面から剥離された横長剥片である。5は縦長剥片で上下両端が折れている。

6～9は石核である。6は楕円形礫を素材としている。上面を打面として表面方向に横長剥片を剥離している。7は板状の剥片を素材としている。剥離順序は、上面を打面として裏面方向に横長剥片を剥離→表面を打面として左面方向に幅広の剥片を剥離→上面を打面として表面方向に横長剥片を剥離している。8は楕円形礫を素材としている。剥離順序は、下面を打面として裏面方向に横長剥片を剥離→表面を打面として右面方向に横長剥片を剥離→上面を打面として表面方向に横長剥片を剥離している。9は楕円形礫を素材としている。剥離順序は、表面を打面として右面方向に横長剥片を剥離→上面を打面として表面方向に横長剥片を剥離している。

10は原石である。ガラス質黒色安山岩製の楕円形礫である。6～9の石核は、ガラス質黒色安山岩製の楕円形礫を素材としており、原石は母岩の枯渇に備えて搬入されたものと思われる。

(4) 1 b ユニット第7ブロック (第75~77図、第13・19・20表、図8・11)

出土状況 1 b ユニット中央部の46AJ-19・26~29・36~38・46・47グリッドに分布している。10.3m × 15.2mの範囲から27点の石器が出土した。南西部・中央部・北東部の3か所の集中地点がみられる。南西部は密集しており、中央部・北東部は散漫に分布する。ナイフ形石器2点が中央部から出土し、石核1点が北東部から出土している。西に隣接する第4ブロックとの接合資料が1個体(接1001)出土している。

IX c層からI層にかけて出土しており、IX a層～VII層に集中する。

出土遺物 器種組成はナイフ形石器2点、二次加工のある剥片3点、剥片17点、石核1点の石器類23点と礫片4点で構成される。石器類の石材はガラス質黒色安山岩10点、珪質頁岩3点、硬質頁岩3点、玉髓3点、流紋岩3点、黒曜石1点である。礫片の石材は流紋岩2点、ホルンフェルス1点、チャート1点である。

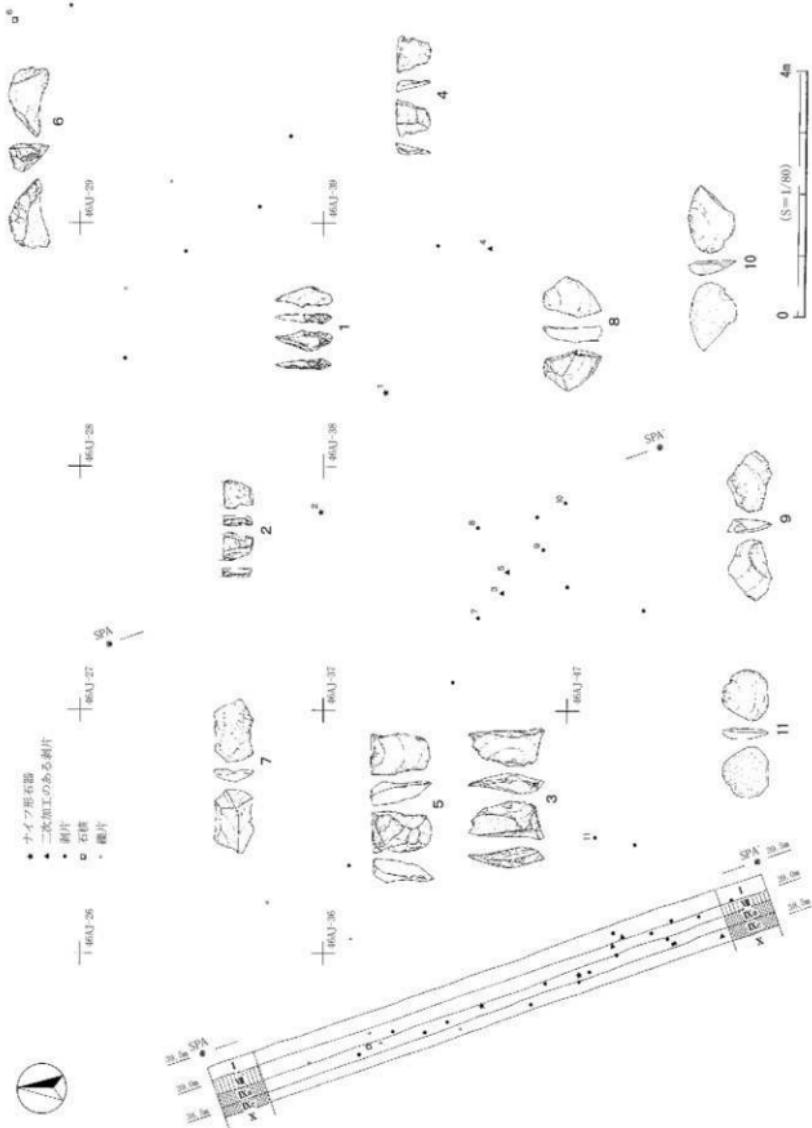
1・2はナイフ形石器である。どちらも製品として搬入されている。1は良質の硬質頁岩が用いられている。横長剥片を斜位に用いて、両側縁の下部に急角度の調整加工が施されており基部が丸みを持つ。左側縁中部には平坦で細かい調整加工が施されている。右側縁上部に素材の縁辺が残されており、先端が尖った形状をしている。切出形の形態を呈する。2は灰白色半透明の黒曜石が用いられている。縦長剥片を縦位に用いて、右側縁下部に急角度の調整加工、左側縁下部は平坦な細かい調整加工が施されている。素材の打面は残置している。器体中央部から破損しており全体形状は不明である。

3～5は二次加工のある剥片である。3は横長剥片を素材としている。剥離順序は、裏面を打面として表面左部を折断→表面左部の折断面を打面として裏面方向に急角度の調整加工→表面上部を打面として右面方向に鋸歯状の調整加工を施して先端部を尖らせている。4は縦長剥片を素材として裏面上部と表面右下部と下端部に平坦な細かい調整加工が施されている。5は厚みのある縦長剥片を素材としている。両側縁の下部に平坦な細かい調整加工が施されている。

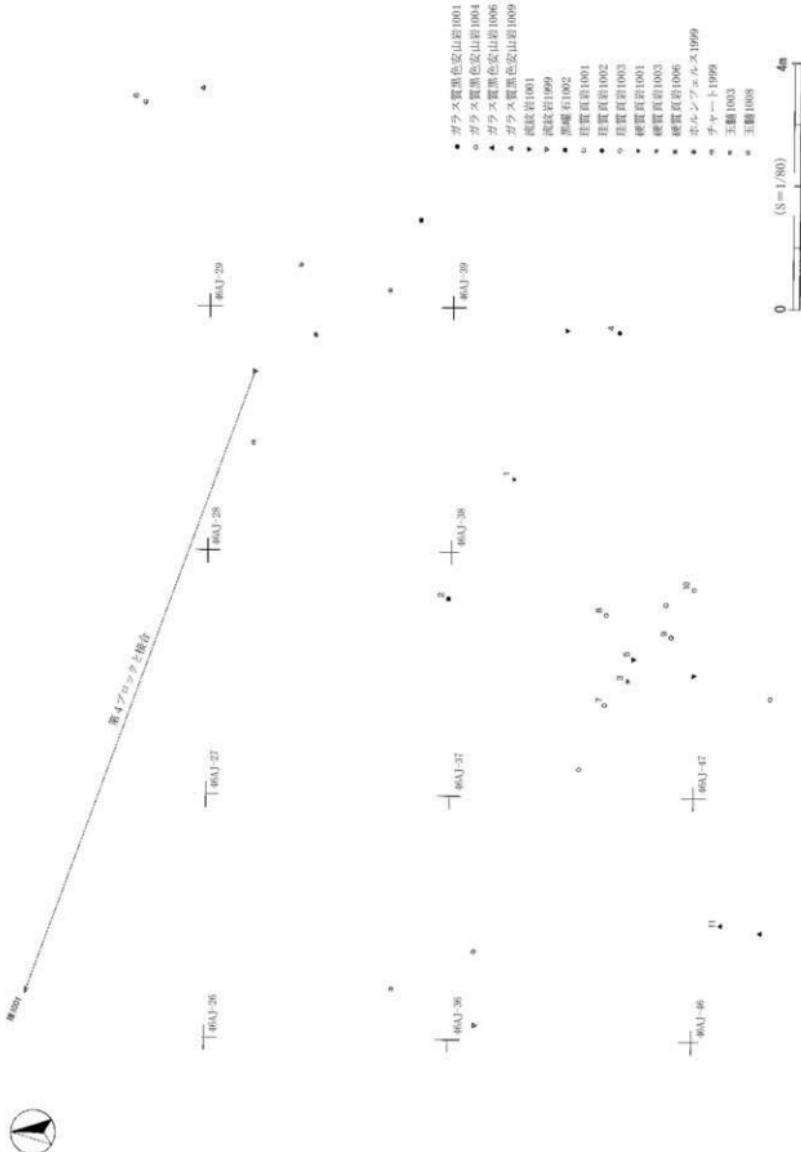
6は石核である。横長剥片を素材としている。剥離順序は、表面左部を打面として裏面方向に横長剥片

第13表 1 b ユニット第7ブロック組成表

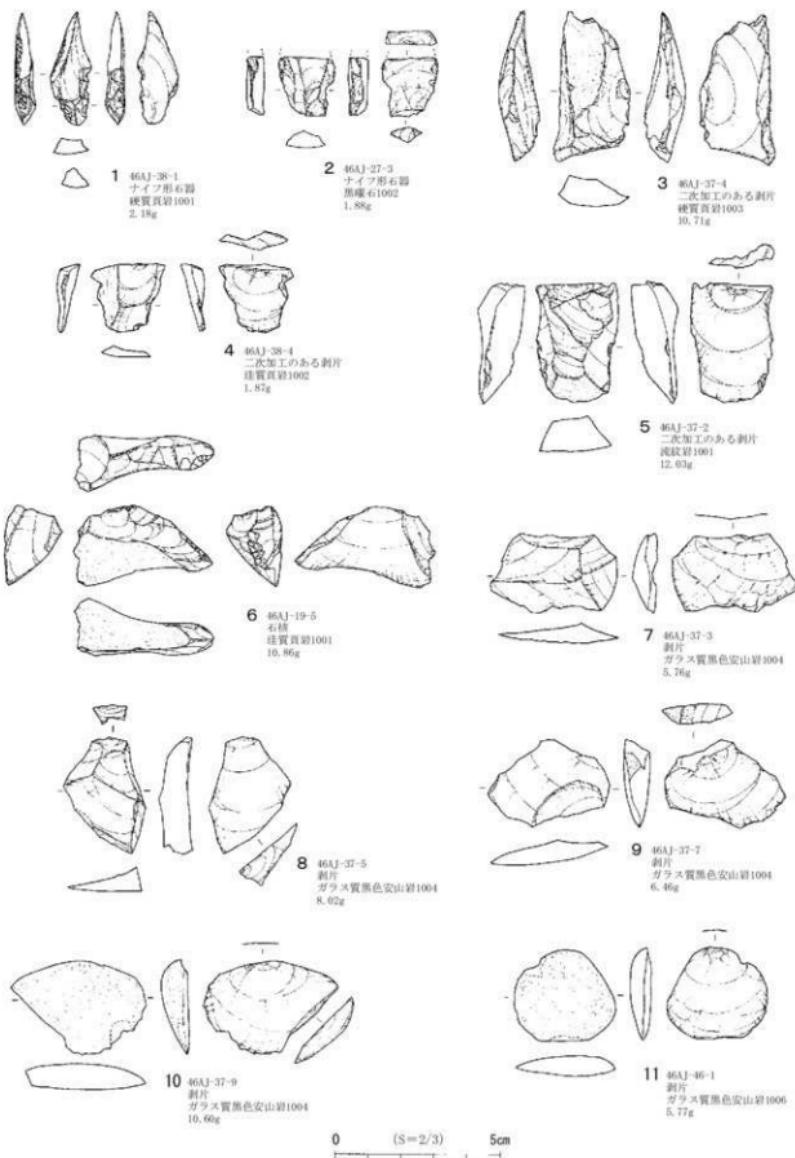
母岩	器種	母岩番号	ナイフ形 石器	二次加工の ある剥片	剥片	石核	礫片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
黒 曜 石		1002	1					1	3.70	1.88	1.29
ガラス質黒色安山岩		1001			1			1	3.70	2.83	1.94
		1004			6			6	22.22	39.60	27.14
		1006			2			2	7.41	6.28	4.30
		1009			1			1	3.70	0.87	0.60
ガラス質黒色安山岩	合計				10			10	37.04	49.58	33.98
珪質頁岩		1001				1		1	3.70	10.86	7.44
		1002		1				1	3.70	1.87	1.28
		1003			1			1	3.70	0.36	0.25
珪質頁岩	合計			1	1	1		3	11.11	13.09	8.97
硬質頁岩		1001	1					1	3.70	2.18	1.49
		1003		1				1	3.70	10.71	7.34
		1006			1			1	3.70	0.86	0.59
硬質頁岩	合計		1	1	1			3	11.11	13.75	9.42
玉髓		1003			1			1	3.70	0.61	0.42
		1008			2			2	7.41	4.63	3.17
玉髓	合計				3			3	11.11	5.24	3.59
ホルンフェルス		1999				1	1	1	3.70	20.20	13.84
チャート		1999					1	1	3.70	9.52	6.52
流紋岩		1001		1	2			3	11.11	13.70	9.39
		1999					2	2	7.41	18.96	12.99
流紋岩	合計			1	2		2	5	18.52	32.66	22.38
全體	点数合計		2	3	17	1	4	27	100.00	145.92	100.00



第75図 1 b ユニット第7ブロック器種別分布



第76図 1 b ユニット第7ブロック母岩別分布



第77図 1 bユニット第7ブロック出土石器

を剥離→上面を打面として表面方向に縦長剥片を剥離→表面右部を打面として右面方向に平坦な調整加工→表面右下部を打面として裏面方向に橢状の細長い調整加工が施されている。石核と分類したが、表面下部を尖らせた形状をしていることから二次加工のある剥片と分類することも可能である。

7~11は剥片である。すべてガラス質黒色安山岩が用いられており、打面調整と頭部調整は行われていない。7・10・11は線状の打面をしている。7・9~11は横長剥片である。8は縦長剥片で、剥片剥離した際に上部と下端部は、剥離時の衝撃により折れたと思われる。

⑤ 1 b ユニット第8ブロック (第78~82図、第14・20表、図版8・11)

出土状況 1 b ユニット北部の45AJ-77~79・86・87・89・96~99、45AK-80・90グリッドに分布している。9.8m×16.3mの範囲から22点の石器が出土した。北東部・南西部の2か所の集中地点がみられる。北東部は密集しており、南西部は散漫に分布する。南側に分布する第6ブロックとの接合資料が1個体(接1004)出土している。IX c 層からVII層にかけて出土しており、IX a 層に集中する。

出土遺物 器種組成は楔形石器2点、二次加工のある剥片2点、剥片12点、石核2点、原石1点の石器類19点と礫1点、礫片2点の礫・礫片3点で構成される。石器類の石材はガラス質黒色安山岩14点、トロトロ石3点、玉髓2点である。礫・礫片の石材はチャート2点、砂岩1点である。

1 (a + b) は楔形石器の接合資料である。扁平な楕円形礫を素材としている。剥離順序は、上下両端を打面として両極剥離→左右両端を打面として両極剥離している。この剥離により器体の中央部から1 a と1 b とに分割されている。

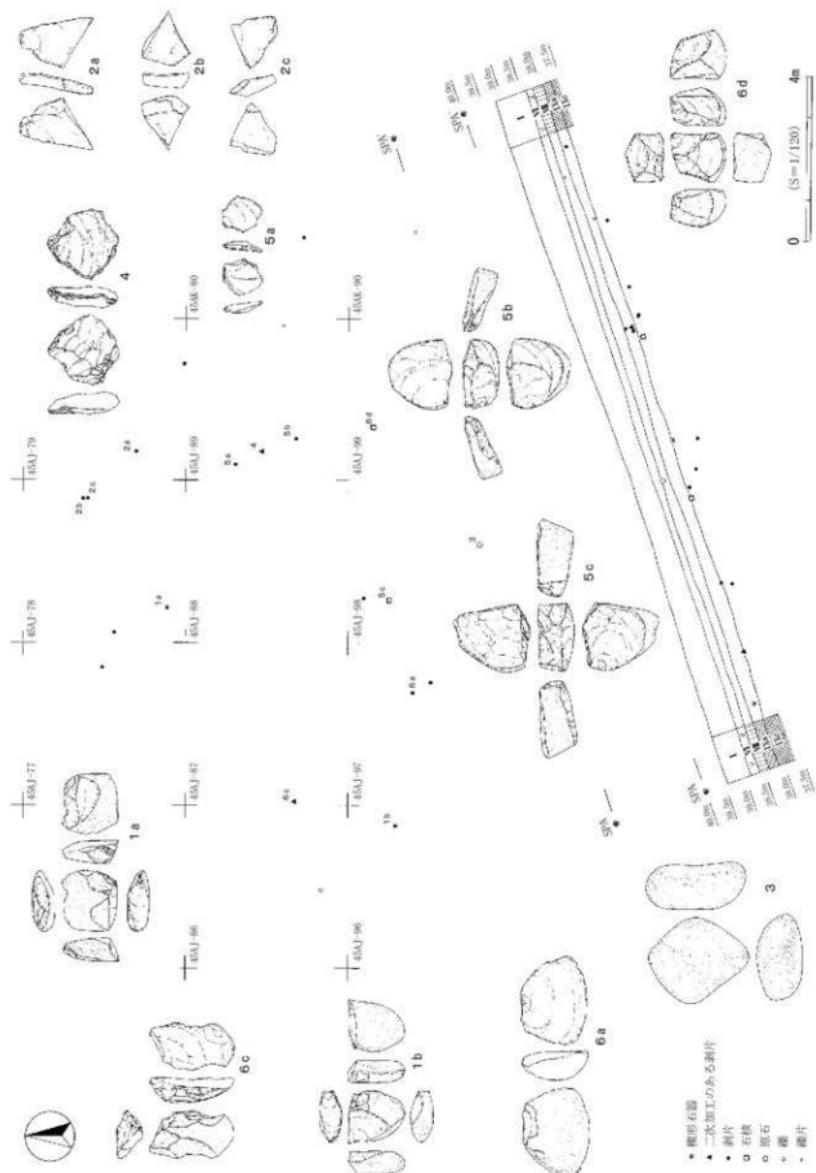
2 (a ~ c) は厚みのない縦長剥片を素材として、腹面を打面として三分割した接合資料である。

3は原石である。ガラス質黒色安山岩製の厚みのある楕円形礫が用いられている。5・6の接合資料で用いられている母岩と同じ形状をしていることから、母岩が枯渇した時に備えて搬入されたものと思われる。1 b ユニットでは第6ブロックにおいて、ガラス質黒色安山岩製の原石が持ち込まれ、1 a ユニットでは第1・2ブロックにおいて玉髓製の原石が持ち込まれている。第1文化層の石器群は、比較的小型の母岩から剥片を剥離し、調整加工のされた石器の割合が低い。母岩を浪費的に消費して母岩の枯渇に備えて原石を保持するという母岩消費形態であったと思われる。

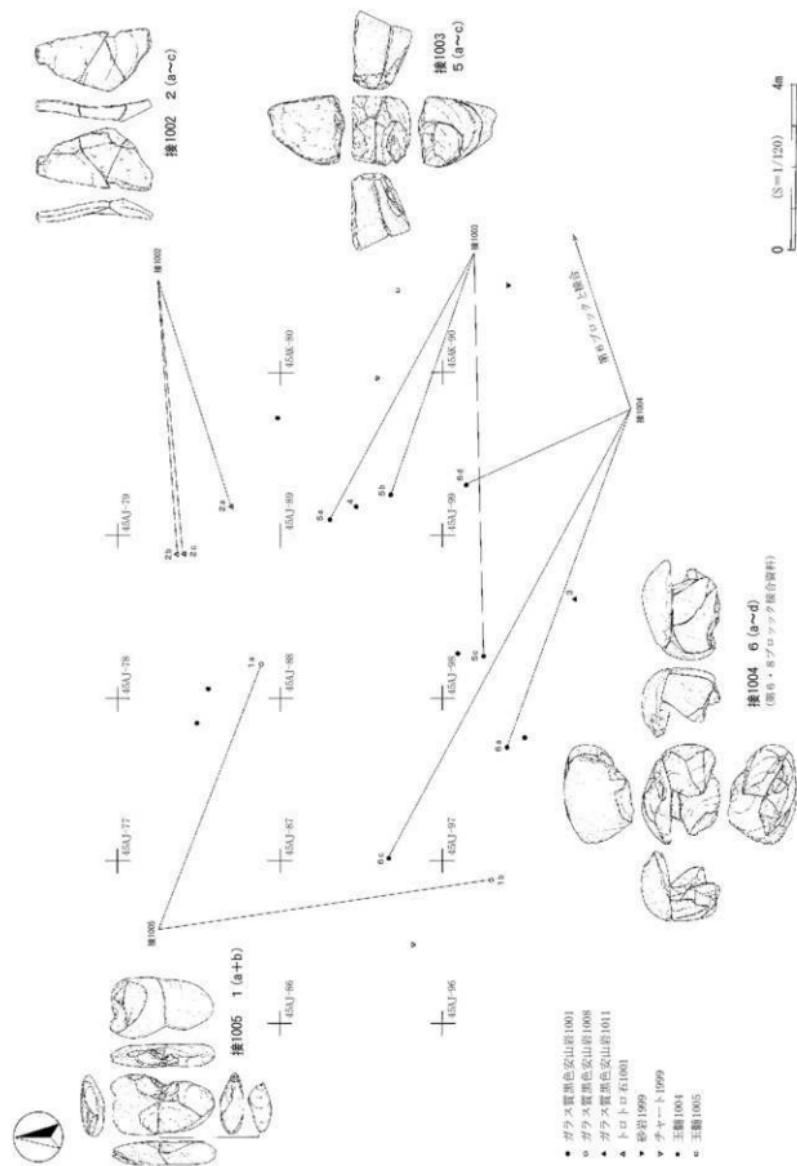
4は二次加工のある剥片である。横長剥片を素材としてほぼ全周に細かい調整加工が施され、上端部が尖った形状をしている。調整加工は両極剥離によって行われていた可能性もあり、楔形石器と分類することもできる。

第14表 1 b ユニット第8ブロック組成表

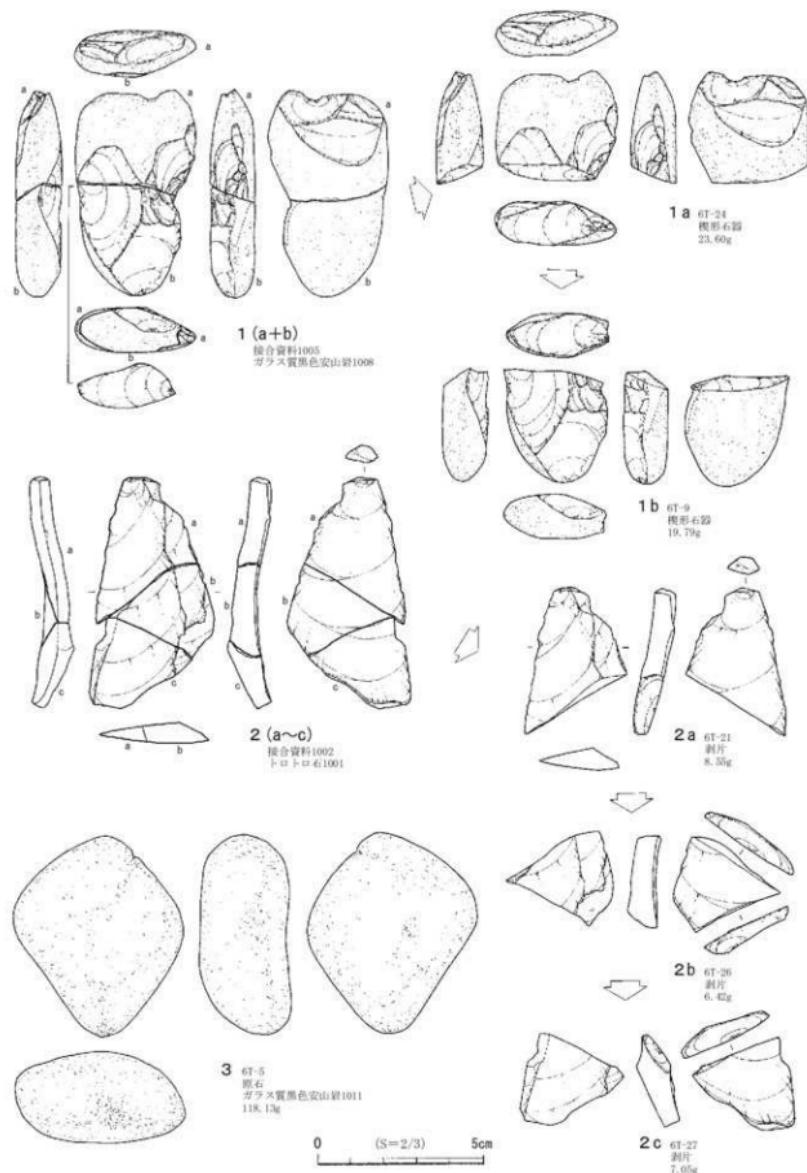
母岩	器種	母岩番号	楔形石器	二次加工のある剥片	剥片	石核	原石	礫	礫片	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
ガラス質黒色安山岩	1001			1	8	2				11	50.00	240.88	43.20
	1008	2								2	9.09	43.39	7.78
	1011						1			1	4.55	118.13	21.19
ガラス質黒色安山岩合計		2	1	8	2	1				14	63.64	402.40	72.17
トロトロ石	1001				3					3	13.64	22.02	3.95
玉	1004			1						1	4.55	20.55	3.69
	1005				1					1	4.55	1.30	0.23
玉髓合計		1	1							2	9.09	21.85	3.92
チャート	1999							1	1	2	9.09	95.38	17.11
砂岩	1999							1	1	4.55	15.96	2.86	
全体点数合計		2	2	12	2	1	1	1	2	22	100.00	557.61	100.00



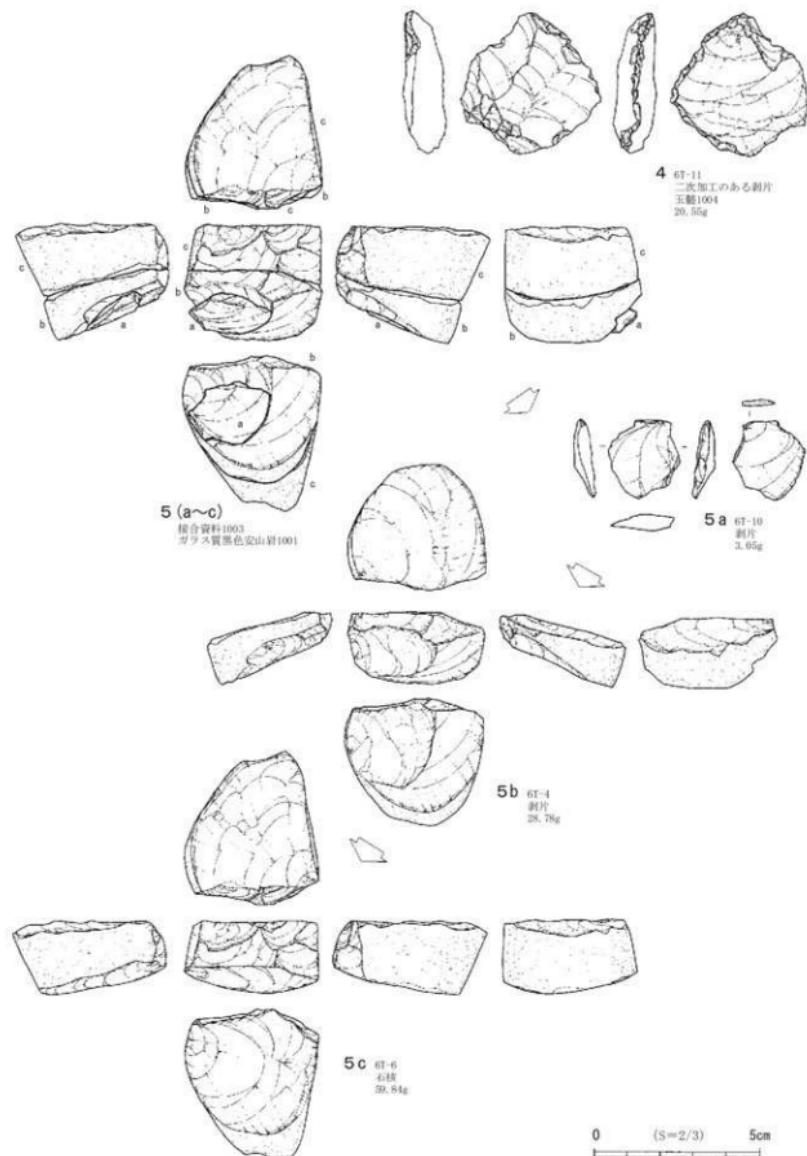
第78図 1 b ユニット第8ブロック器種別分布



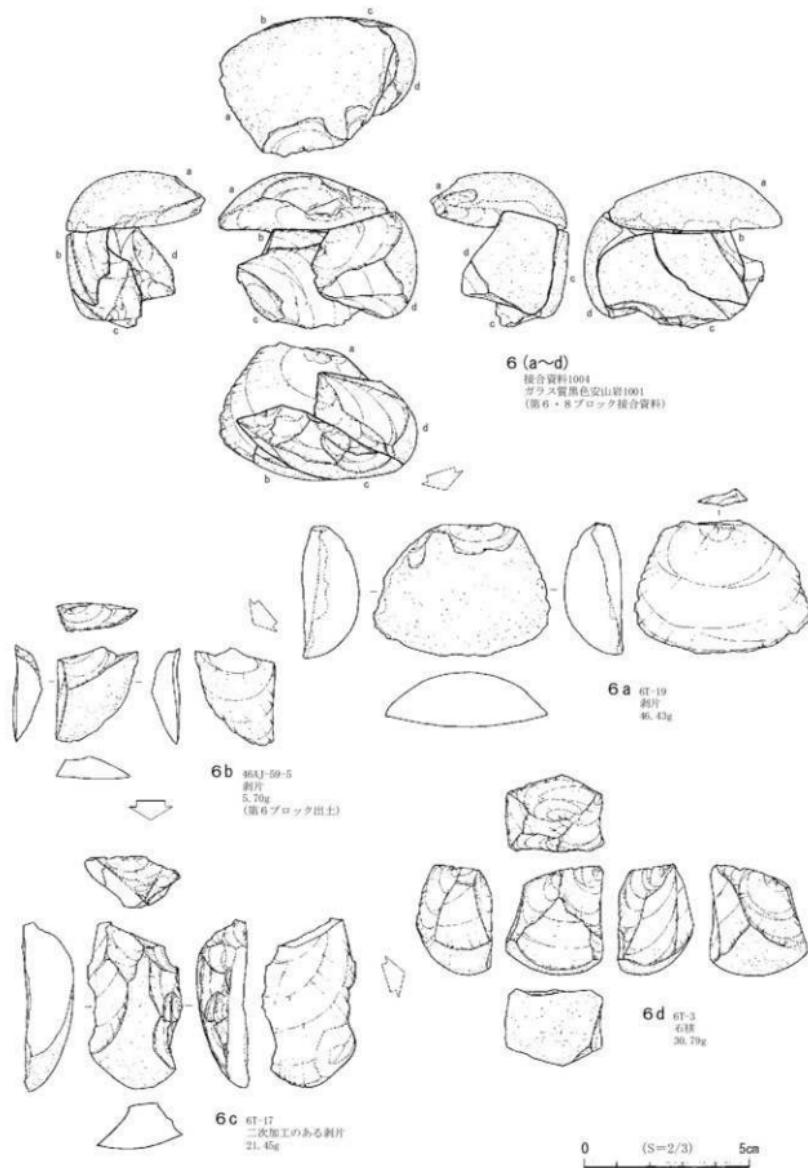
第79図 1 b ユニット第8ブロック母岩別分布



第80図 1 b ユニット第8ブロック出土石器(1)



第81図 1 b ユニット第8ブロック出土石器(2)



第82図 1 b ユニット第8ブロック出土石器(3)

5・6は接合資料である。5(a～c)は梢円形礫を素材としている。剥離順序は、上面の分割面を打面として表面方向に横長剥片を数枚剥離→表面下部を打面として下面方向に分割し、さらに横長剥片5aと5bを連続剥離→5cの石核は5bを剥離後に、再度上面に打面を転移して表面右方向に横長剥片を剥離している。本接合資料は、梢円形礫を繰り返し輪切り状に分割し、分割面を打面として横長剥片を剥離するという剥片剥離工程が観察できた。

6(a～d)は梢円形礫を素材としている。剥離順序は、表面上部を打面として6aの横長剥片を剥離→左面左下部を打面として6bと6cを連続剥離(6cは右面と上面に粗い調整加工が施されている)→6dの石核は上面を打面として裏面方向と表面方向に縦長剥片を剥離している。

(3) 第9ブロック (第83・84図、第15・20表、図版8・11)

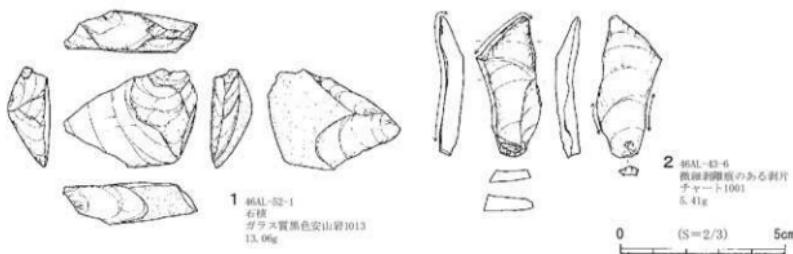
出土状況 1bユニットの約40m東側に単独で分布している。1bユニットとの接合関係がみられない。46AL-31・42・43・52グリッドに分布している。6.9m×7.5mの範囲から7点の石器が出土した。南東部に集中地点がみられ、北西部は剥片が単独で出土している。IXc層からVII層にかけて出土しており、IXa層～VII層に集中する。

出土遺物 器種組成は微細剥離痕のある剥片1点、剥片5点、石核1点である。石材組成はチャート3点、ガラス質黒色安山岩2点、黒曜石1点、玉髓1点である。

1は石核である。厚みのある剥片を素材としている。剥離順序は、上面左部を打面として裏面右下部方向に縦長剥片を剥離→裏面右上部を打面として上面方向に横長剥片を剥離→上面右部を打面として表面右

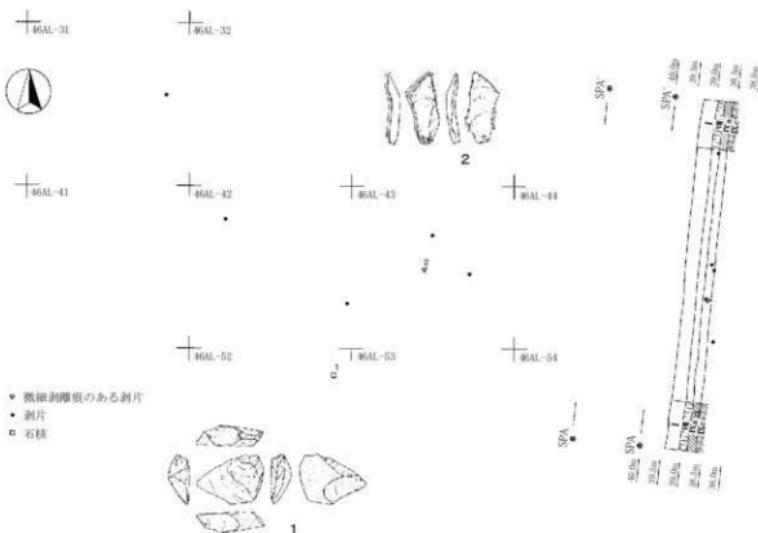
第15表 第9ブロック組成表

母岩	器種	母岩番号	微細剥離痕のある剥片	剥片	石核	点数合計	点数比 (%)	重量合計 (g)	重量比 (%)
黒曜石		1003		1		1	14.29	0.88	2.30
ガラス質黒色安山岩		1013			1	1	14.29	13.06	34.08
		1014		1		1	14.29	9.04	23.59
ガラス質黒色安山岩	合計			1	1	2	28.57	22.10	57.67
玉髓		1009		1		1	14.29	1.00	2.61
チャート		1001	1			1	14.29	5.41	14.12
		1002		1		1	14.29	2.90	7.57
		1003		1		1	14.29	6.03	15.74
チャート	合計		1	2		3	42.86	14.34	37.42
全体	点数合計		1	5	1	7	100.00	38.32	100.00

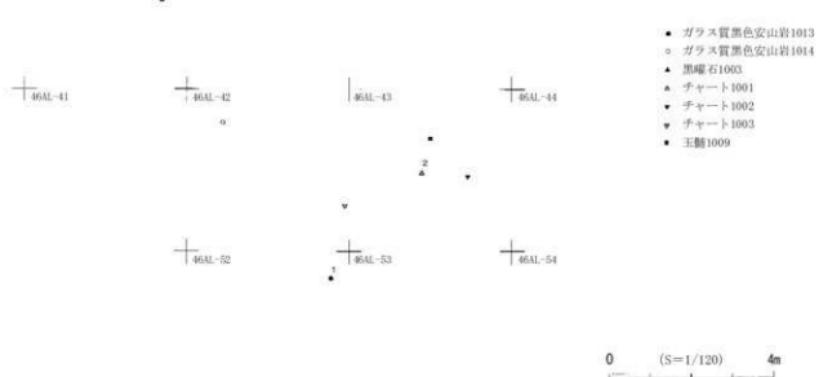


第83図 第9ブロック出土石器

〈器種別分布〉



〈母岩別分布〉



第84図 第9ブロック遺物分布

部方向に縦長剥片を剥離している。2は微細剥離痕のある剥片である。頭部調整が入念に施された縦長剥片を素材としている。左側縁上部と両側縁中央付近に微細剥離がみられる。

3 単独出土石器 (第85図、第16・20表、図版11)

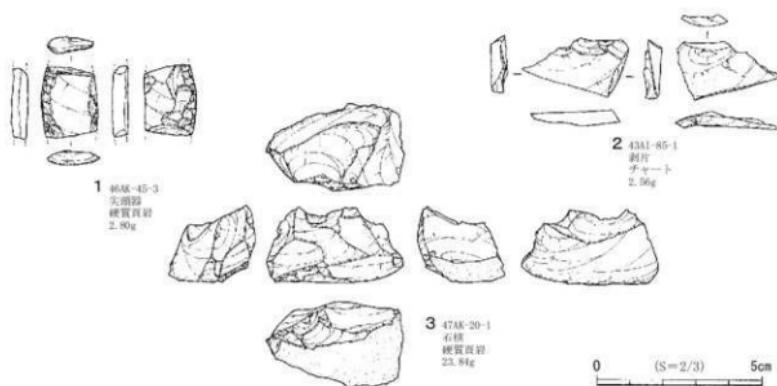
出土状況 いずれの文化層に帰属するか明確でなく、単独で出土したものを単独出土石器としてまとめて扱うこととする。8点が該当する。

出土遺物 器種組成は尖頭器1点、剥片4点、石核1点の石器類6点と礫片2点で構成される。石器類の石材は硬質頁岩2点、ガラス質黒色安山岩1点、玉髓1点、ホルンフェルス1点、チャート1点である。礫片の石材はチャート2点である。

1は尖頭器である。厚みのない縦長剥片を縦位に用いている。表面は周縁部、裏面は右半部に平坦な調整加工が施されている。上下両端は折れている。2は剥片である。頭部調整が施された横長剥片である。末端部は折れている。3は石核である。厚みのある横長剥片を素材としている。剥離順序は、表面上部を打面として上面方向に横長剥片を剥離→上面下部を打面として表面方向に横長剥片を剥離している。

第16表 単独出土器種石材組成表

石材 器種	尖	剥	石	礫	点 數 合 計
	頭				
	器	片	核	片	
ガラス質黒色安山岩		1			1
硬質頁岩	1		1		2
玉髓		1			1
ホルンフェルス		1			1
チャート		1		2	3
全 体 点 数 合 計	1	4	1	2	8



第85図 単独出土石器

4 まとめ（第86図）

石器出土総点数が209点で、9か所のブロックが検出された。1枚の文化層と単独出土石器8点が出土している。文化層の概要については、第47図のブロック・ユニット位置図、第2・3表の文化層ブロック別器種・石材組成表を参照していただきたい。本項では、第86図に掲載した旧石器時代主要石器をもとに石器群の様相をまとめることにする。

（1）第1文化層

IX a 層上部に生活面を持つと考えられる石器群である。総計201点出土した。第1～9ブロックの9か所の集中地點で構成される。調査区中央部と南部にそれぞれブロック群が形成されており、中央部を1aユニット、南部を1bユニットと呼称した。第9ブロックは1bユニットの東側に単独で分布している。

1aユニットの石器群は、15.4m×13.6mの範囲から70点出土し、第1～3ブロックの3か所の集中地點で構成される。ブロック間接合資料は、第1・2ブロックと第2・3ブロックの2個体である。重扇状ブロック群を形成している。主要石器は、石核（1～4）、原石（5～7）、敲石（12）である。11点出土した礫・礫片は、被熱により赤化しており、小型の流紋岩・砂岩・チャートが用いられている。ナイフ形石器などの製品は出土していない。5～7の楕円形の原石は、母岩が枯渇した際に備えて遺跡に持ち込んだものと思われる。8は盤状剥片石核から小型の横長剥片が量産されている。石器類の石材は、ガラス質黒色安山岩・玉髓・ホルンフェルスを主体とする。

1bユニットの石器群は、45.1m×39.5mの範囲から124点出土し、第4～8ブロックの5か所の集中地點で構成される。ブロック間接合資料は、第4・7ブロックと第6・8ブロックの2個体である。重扇状ブロック群を形成している。主要石器は、ナイフ形石器（13～16）、彫器（17）、楔形石器（18・19）、二次加工のある剥片（20～23）、石核（24～28）、原石（29・30）、敲石（34・35）である。ナイフ形石器は切出形を呈するもの（13・15）と柳葉形を呈するもの（14）で構成される。石器類の石材は、ガラス質黒色安山岩が半数近くを占め、次に玉髓・硬質頁岩が用いられている。礫・礫片の石材は、流紋岩・砂岩・チャートを主体とする。

第9ブロックは、6.9m×7.5mの範囲から7点の石器が出土した。微細剥離痕のある剥片（36）、石核（37）が出土した。

第1文化層に類似する石器群としては、重扇状ブロック群を形成する成田市東峰御幸畠西遺跡（空港No.61遺跡）エリア1¹⁾、袖ヶ浦市台山遺跡第1文化層²⁾があげられる。環状ブロック群よりも後出する段階の石器群と捉えられる。

（2）単独出土石器

いざれの文化層に帰属するか明確でないものを単独出土石器としてまとめた。尖頭器（38）は周縁加工の尖頭器でⅢ層下部～中部段階の石器と思われる。このほかに石核（39）が出土している。

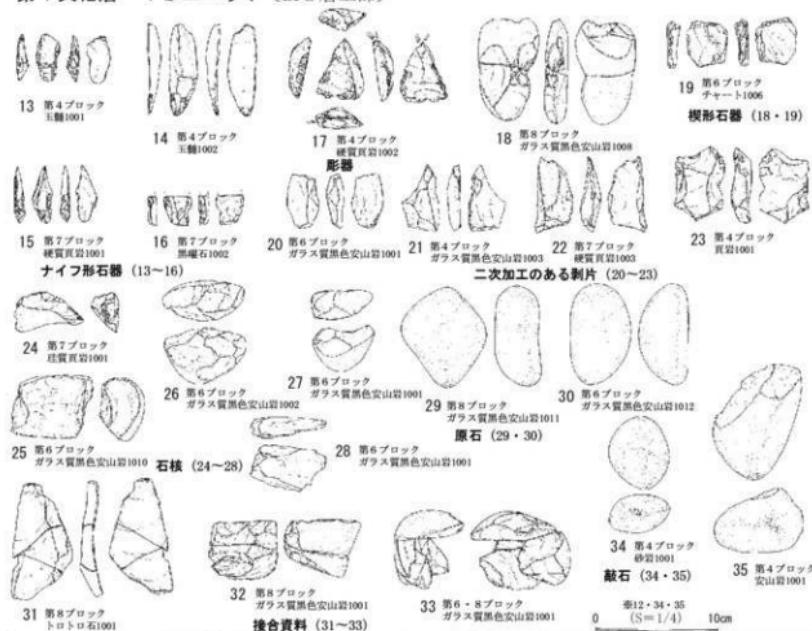
注1 水塚俊司ほか 2000『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIII－東峰御幸畠西遺跡（空港No.61遺跡）－』（財）千葉県文化財センター

2 新田浩三ほか 2002『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書10－袖ヶ浦市台山遺跡－』（財）千葉県文化財センター

第1文化層 1aユニット [IX a層上部]



第1文化層 1bユニット [IX a層上部]



第1文化層第9ブロック [IX a層上部]



第86図 旧石器時代主要石器

第17表 旧石器属性表(1)

文化層	ユニット	プロック	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	挿図番号	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	調査次数
1	1a	1	43AH-24	1	剥片	ホルンフェルス	1004			20.82	47.90	33.20	12.10	5
1	1a	1	43AH-24	2	破片	砂岩	1999			27.90	54.60	34.20	13.10	5
1	1a	1	43AH-24	3	破片	流紋岩	1999			4.30	32.30	16.50	6.90	5
1	1a	1	43AH-24	4	破片	砂岩	1999			37.85	43.40	43.00	23.00	5
1	1a	1	43AH-24	5	破片	砂岩	1999	55-12		84.56	58.30	33.00	36.10	5
1	1a	1	43AH-24	6	破片	砂岩	1999			4.98	27.90	22.20	7.10	5
1	1a	1	43AH-24	7	破片	砂岩	1999	1008		7.66	40.10	19.00	11.10	5
1	1a	1	43AH-25	1	剥片	流紋岩	1003	1011	51-4a	16.02	29.84	58.77	9.89	5
1	1a	1	43AH-25	2	剥片	流紋岩	1003	1011	51-4b	1.03	18.40	16.10	3.30	5
1	1a	1	43AH-33	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1018		51-3	8.56	33.50	21.60	14.40	5
1	1a	1	43AH-34	2	剥片	ホルンフェルス	1003	1010	53-10d	5.54	30.50	20.40	7.80	2
1	1a	1	43AH-34	3	剥片	玉髓	1010		51-1	1.86	20.30	19.09	5.09	5
1	1a	1	43AH-34	4	石核	玉髓	1010	1008	54-11b	175.89	83.10	67.20	29.00	5
1	1a	1	43AH-34	5	剥片	玉髓	1010	1008	54-11a	2.38	19.32	28.14	3.53	5
1	1a	1	43AH-34	6	剥片	ホルンフェルス	1003	1010	53-10e	11.78	36.30	31.90	12.00	5
1	1a	1	43AH-34	7	石核	玉髓	1014		51-6	21.41	30.98	26.81	28.21	5
1	1a	1	43AH-34	8	剥片	ホルンフェルス	1003	1009	52-9d	2.02	16.20	15.10	10.60	5
1	1a	1	43AH-34	9	剥片	ホルンフェルス	1003	1009	52-9c	12.66	35.40	23.90	14.10	5
1	1a	1	43AH-34	10	石核	ガラス質黒色安山岩	1019		51-5	19.15	51.85	29.00	14.90	5
1	1a	1	43AH-34	11	剥片	ホルンフェルス	1003	1010	53-10c	19.95	36.72	33.50	17.03	5
1	1a	1	43AH-34	12	敲石	流紋岩	1006		55-14	400.58	109.20	70.20	46.30	5
1	1a	1	43AH-34	13	原石	玉髓	1016		51-7	54.15	51.00	41.60	22.30	5
1	1a	1	43AH-34	14	剥片	ホルンフェルス	1003	1009	52-9b	23.91	30.52	67.10	15.57	5
1	1a	1	43AH-34	15	剥片	ホルンフェルス	1003	1010	53-10b	32.22	48.50	46.40	15.70	5
1	1a	1	43AH-34	16	破片	砂岩	1999	1008		26.20	34.60	26.60	19.00	2.5
1	1a	1	43AH-34	17	破片	砂岩	1999		55-13	104.17	87.10	46.90	24.40	5
1	1a	1	43AH-35	5	破片	チャート	1999			26.86	43.00	25.20	21.80	2.5
1	1a	1	43AH-43	2	剥片	トロトロ石	1002			0.75	15.20	12.10	4.10	2
1	1a	1	43AH-43	3	剥片	トロトロ石	1002			0.30	11.70	7.60	4.40	2
1	1a	1	43AH-43	4	剥片	トロトロ石	1002		51-2	0.75	22.10	13.20	3.40	2
1	1a	1	43AH-43	5	原石	玉髓	1015		51-8	23.97	37.50	24.60	18.40	2
1	1a	2	43AH-35	2	碎片	ガラス質黒色安山岩	1017			0.23	8.90	7.10	3.00	2.5
1	1a	2	43AH-35	3	剥片	ホルンフェルス	1003	1009	52-9a	11.34	33.52	50.36	8.52	2
1	1a	2	43AH-35	4	破片	流紋岩	1004			0.08	5.80	4.10	0.90	2.5
1	1a	2	43AH-36	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017			0.85	12.67	16.85	3.74	2.5
1	1a	2	43AH-36	3	石核	流紋岩	1002		58-12	18.43	29.57	38.75	14.72	2
1	1a	2	43AH-36	4	碎片	ガラス質黒色安山岩	1021			0.19	14.20	7.40	2.90	2.5
1	1a	2	43AH-44	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017			0.94	18.90	9.30	5.50	2
1	1a	2	43AH-44	3	剥片	玉髓	1010			1.79	18.26	15.80	8.40	2
1	1a	2	43AH-44	4	原石	玉髓	1013		58-13	4.93	27.70	20.20	7.50	5
1	1a	2	43AH-44	5	剥片	ガラス質黒色安山岩	1016		58-8	4.77	31.20	21.10	8.20	5
1	1a	2	43AH-44	6	剥片	チャート	1004		58-1	2.25	21.70	20.10	5.30	5
1	1a	2	43AH-45	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017		58-11	3.72	33.90	19.20	4.50	2
1	1a	2	43AH-45	3	破片	流紋岩	1004			0.34	14.30	5.20	6.10	2
1	1a	2	43AH-45	4	剥片	流紋岩	1005		58-2	1.19	23.70	10.70	6.10	5
1	1a	2	43AH-45	5	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017			0.65	17.70	11.00	4.30	2
1	1a	2	43AH-45	6	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017			0.88	15.30	8.70	5.20	2
1	1a	2	43AH-45	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017			0.29	17.80	7.10	1.80	2
1	1a	2	43AH-46	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017		58-10	16.43	47.40	23.30	14.10	5
1	1a	2	43AH-46	2	剥片	玉髓	1011	1007	59-15a	2.29	23.05	20.44	5.31	5
1	1a	2	43AH-54	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1015		58-4	2.25	23.20	19.20	4.90	5
1	1a	2	43AH-54	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1015		58-6	7.02	26.29	29.13	7.92	5
1	1a	2	43AH-54	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1015		58-5	12.42	36.35	39.16	10.60	5

第18表 旧石器属性表(2)

文化層	ユニット	プロック	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	剥因番号	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	調査次数
1	1a	2	43AH-55	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017	58-9	3.65	17.54	29.78	8.58	5	
1	1a	2	43AH-55	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1016	1013	59-14b	5.35	23.70	18.20	12.40	5
1	1a	2	43AH-55	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1016	58-7	7.69	26.46	29.44	8.50	5	
1	1a	2	43AH-56	1	剥片	緑色凝灰岩	1001	58-3	3.08	29.40	14.00	7.70	5	
1	1a	2	43AH-56	2	碎片	ホルンシエルス	1005			0.21	10.00	7.40	3.20	5
1	1a	2	43AH-56	3	石核	ガラス質黒色安山岩	1016	1013	59-14d	28.60	29.44	33.69	19.92	5
1	1a	2	43AH-56	4	剥片	ガラス質黒色安山岩	1016	1013	59-14c	1.01	14.35	24.09	3.32	5
1	1a	2	43AH-56	5	剥片	玉髓	1011	1007	59-15b	2.61	23.74	25.88	5.36	5
1	1a	3	43AH-54	4	剥片	ガラス質黒色安山岩	1016	1013	59-14a	17.72	52.90	33.70	9.10	5
1	1a	3	43AH-54	5	石核	チャート	1005		61-1	9.87	13.53	34.67	13.01	5
1	1a	3	43AH-54	6	剥片	ガラス質黒色安山岩	1020		61-3	2.21	23.20	17.40	7.20	5
1	1a	3	43AH-64	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1015	1012	61-2a	1.87	23.88	20.31	3.04	5
1	1a	3	43AH-64	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1017		61-4	7.14	26.08	32.68	9.06	5
1	1a	3	43AH-64	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1015			0.50	13.10	10.10	3.20	5
1	1a	3	43AH-65	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1020			1.31	21.30	10.90	7.80	5
1	1a	3	43AH-65	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1015	1012	61-2b	1.38	22.24	13.53	4.26	5
1	1a	3	43AH-65	4	碎片	玉髓	1012			0.08	12.60	8.70	1.70	5
1	1b	4	46AJ-34	1	ナイフ形石器	玉髓	1001		66-2	2.97	28.98	14.15	6.99	4
1	1b	4	46AJ-42	1	碎片	流紋岩	1001			0.20	12.80	8.80	1.50	3-4
1	1b	4	46AJ-42	2	硬片	流紋岩	1999			3.08	21.20	17.10	15.00	3-4
1	1b	4	46AJ-42	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1004		66-10	9.47	32.96	47.12	7.61	4
1	1b	4	46AJ-42	4	剥片	ガラス質黒色安山岩	1003		66-8	3.81	40.40	15.60	5.50	4
1	1b	4	46AJ-42	5	硬片	流紋岩	1999			50.03	47.90	36.50	23.00	4
1	1b	4	46AJ-42	6	硬片	安山岩	1002			130.50	69.50	54.60	36.20	4
1	1b	4	46AJ-42	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	1003		66-11	5.05	24.05	23.98	9.18	4
1	1b	4	46AJ-43	1	硬片	流紋岩	1999			6.10	25.70	21.20	12.20	3-4
1	1b	4	46AJ-43	2	敲石	砂岩	1001		67-13	109.91	59.86	48.90	30.44	4
1	1b	4	46AJ-43	3	硬片	流紋岩	1999			53.74	47.30	26.70	26.90	3-4
1	1b	4	46AJ-43	4	硬片	流紋岩	1999			18.15	45.30	26.20	14.40	3-4
1	1b	4	46AJ-44	1	硬片	流紋岩	1999			1.02	22.40	15.70	13.30	3-4
1	1b	4	46AJ-44	2	硬片	安山岩	1999			1.59	23.70	16.20	15.60	3-4
1	1b	4	46AJ-44	3	微細剝離痕のある剥片	玉髓	1006		66-7	4.53	41.80	12.40	10.00	4
1	1b	4	46AJ-45	1	剥片	真岩	1002			1.21	13.60	30.60	4.70	3-4
1	1b	4	46AJ-45	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1006		66-9	3.10	19.14	38.17	4.19	4
1	1b	4	46AJ-45	3	ナイフ形石器	玉髓	1002		66-1	5.88	55.51	17.36	5.55	4
1	1b	4	46AJ-52	1	微細剝離痕のある剥片	硬質真岩	1004		66-6	20.20	45.35	45.66	11.31	3
1	1b	4	46AJ-52	2	硬片	流紋岩	1999			9.29	35.80	19.90	12.20	3-4
1	1b	4	46AJ-52	3	硬片	流紋岩	1999	1001		13.62	34.40	29.40	12.00	3-4
1	1b	4	46AJ-52	4	硬片	流紋岩	1999			40.87	56.50	41.30	16.90	3-4
1	1b	4	46AJ-53	1	敲石	安山岩	1001		67-12	365.75	96.22	58.93	45.84	3
1	1b	4	46AJ-53	2	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	1003		66-3	7.07	24.02	39.98	6.92	3
1	1b	4	46AJ-53	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1003			4.85	29.90	19.50	10.30	3-4
1	1b	4	46AJ-53	4	硬片	ホルンシエルス	1999			1.15	14.70	13.85	4.93	3-4
1	1b	4	46AJ-53	5	硬片	チャート	1999			4.08	16.50	15.50	12.60	3-4
1	1b	4	46AJ-53	6	二次加工のある剥片	真岩	1001		66-4	17.37	37.55	37.78	11.34	3
1	1b	4	46AJ-53	7	硬片	流紋岩	1999			23.48	43.60	34.30	16.90	3-4
1	1b	4	46AJ-53	8	硬片	流紋岩	1999			0.32	10.80	10.10	4.00	3-4
1	1b	4	46AJ-53	9	彫器	硬質真岩	1002		66-5	10.79	38.06	27.98	10.01	4
1	1b	5	46AJ-73	1	剥片	玉髓	1007		70-2	2.43	24.60	17.40	4.80	4
1	1b	5	46AJ-74	1	剥片	硬質真岩	1005			0.34	10.70	10.30	3.00	3-4
1	1b	5	46AJ-74	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1005		70-4	1.06	17.20	11.00	5.30	3-4
1	1b	5	46AJ-75	1	硬片	砂岩	1999			17.44	27.00	26.10	18.00	3-4

第19表 旧石器属性表(3)

文化層	ユニット	プロック	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	擲出番号	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	調査次数
1	1b	5	46AJ-75	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1005			1.09	19.40	12.30	5.90	3・4
1	1b	5	46AJ-77	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1007	70-3	7.76	21.65	46.08	6.50	4	
1	1b	5	46AJ-84	1	剥片	硬質頁岩	1005	70-1	1.09	12.02	27.98	4.87	3	
1	1b	5	46AJ-85	1	礫片	砂岩	1999			32.66	34.50	29.40	27.20	3・4
1	1b	5	46AJ-85	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1005			0.73	14.20	17.90	3.30	3・4
1	1b	6	46AJ-48	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			3.70	20.52	30.74	6.05	8
1	1b	6	46AJ-48	4	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	1001	73-2		5.19	34.43	23.81	13.20	8
1	1b	6	46AJ-48	5	碎片	硬質頁岩	1007			0.23	7.17	12.00	2.49	8
1	1b	6	46AJ-49	1	石核	ガラス質黒色安山岩	1001	73-6	19.47	28.68	37.58	18.53	8	
1	1b	6	46AJ-49	5	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			1.42	19.18	17.28	5.17	8
1	1b	6	46AJ-49	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			0.81	20.49	9.90	4.04	8
1	1b	6	46AJ-49	8	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			4.27	24.08	30.97	6.16	8
1	1b	6	46AJ-49	9	原石	ガラス質黒色安山岩	1012	74-10	94.88	62.04	37.82	30.68	8	
1	1b	6	46AJ-49	10	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			5.64	33.68	28.70	8.05	8
1	1b	6	46AJ-49	11	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			5.47	22.63	34.69	8.99	8
1	1b	6	46AJ-49	13	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			10.23	39.50	34.77	6.85	8
1	1b	6	46AJ-49	14	剥片	黑曜石	1001			0.77	16.66	11.69	5.55	8
1	1b	6	46AJ-57	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1006			0.98	17.10	15.80	5.00	3・4
1	1b	6	46AJ-57	3	剥片	ホルンフェルス	1002	73-5		4.10	29.60	16.40	8.80	4
1	1b	6	46AJ-58	6	礫片	砂岩	1999			2.45	29.76	13.52	6.81	8
1	1b	6	46AJ-59	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			17.09	45.84	39.74	12.73	8
1	1b	6	46AJ-59	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			3.41	19.73	18.79	10.10	8
1	1b	6	46AJ-59	5	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001	1004	82-6b	5.70	27.98	29.01	8.15	8
1	1b	6	46AJ-59	6	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			7.06	26.61	28.16	7.16	8
1	1b	6	46AJ-59	10	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			1.78	18.88	26.02	4.21	8
1	1b	6	46AJ-59	12	礫片	チャート	1999			0.51	15.05	9.46	4.87	8
1	1b	6	46AJ-59	13	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	1001	73-3		6.47	20.79	32.55	10.43	8
1	1b	6	46AJ-68	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1007	73-4		3.15	23.34	26.35	4.92	4
1	1b	6	46AJ-69	1	石核	ガラス質黒色安山岩	1001	73-7		15.99	26.76	44.64	11.96	8
1	1b	6	46AJ-69	2	石核	ガラス質黒色安山岩	1002	73-8		46.65	37.07	50.32	23.76	8
1	1b	6	46AJ-69	5	礫片	ホルンフェルス	1999			6.37	30.32	19.98	21.89	8
1	1b	6	46AJ-78	1	礫片	流紋岩	1999			16.89	28.70	32.50	18.40	3・4
1	1b	6	46AK-30	6	石核	ガラス質黒色安山岩	1010	74-9		73.54	39.17	48.66	34.41	8
1	1b	6	46AK-30	8	剥片	流紋岩	1001			0.66	10.68	14.24	7.06	8
1	1b	6	46AK-31	5	剥片	ガラス質黒色安山岩	1010			1.54	35.55	12.10	5.68	8
1	1b	6	46AK-40	6	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			1.30	21.25	14.35	4.80	8
1	1b	6	46AK-40	8	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			12.47	29.30	38.01	11.52	8
1	1b	6	46AK-40	9	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			3.66	30.56	19.76	4.82	8
1	1b	6	46AK-42	1	楔形石器	チャート	1006	73-1		6.14	25.47	28.59	6.39	8
1	1b	6	46AK-50	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			5.59	28.64	31.55	6.95	8
1	1b	7	46AJ-19	5	石核	珪質頁岩	1001	77-6		10.86	43.65	29.06	14.96	8
1	1b	7	46AJ-19	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	1009			0.87	15.84	18.13	2.27	8
1	1b	7	46AJ-26	2	礫片	ホルンフェルス	1999			20.20	38.20	37.80	11.50	3・4
1	1b	7	46AJ-27	3	ナイフ形石器	黑曜石	1002	77-2		1.88	17.73	17.34	5.57	8
1	1b	7	46AJ-28	3	剥片	玉髓	1008			1.78	12.43	18.23	6.07	8
1	1b	7	46AJ-28	8	礫片	流紋岩	1999	1001	13.61	39.77	22.77	13.24	8	
1	1b	7	46AJ-28	9	剥片	硬質頁岩	1006			0.86	11.86	16.44	3.99	8
1	1b	7	46AJ-29	1	剥片	玉髓	1003			0.61	12.23	9.34	5.72	8
1	1b	7	46AJ-29	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			2.83	16.17	25.17	6.73	8
1	1b	7	46AJ-29	4	礫片	チャート	1999			9.92	34.88	21.56	10.16	8
1	1b	7	46AJ-36	1	礫片	流紋岩	1999			5.35	22.10	17.90	11.30	3・4
1	1b	7	46AJ-36	2	剥片	玉髓	1008			2.85	22.30	12.70	10.30	3・4

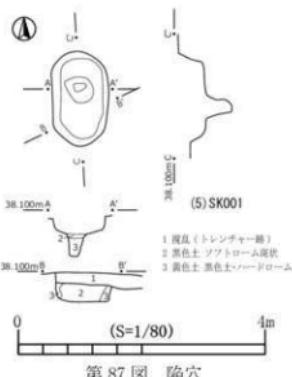
第20表 旧石器属性表(4)

文化期	ユニット	プロック	グリッド	遺物番号	器種	石材	母岩番号	接合番号	擲回番号	重量(g)	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	調査次数
1	1b	7	46AJ-37	1	剥片	珪質頁岩	1003			0.36	16.50	13.30	6.00	3・4
1	1b	7	46AJ-37	2	二次加工のある剥片	流紋岩	1001	77-5	12.03	36.21	26.07	12.56	4	
1	1b	7	46AJ-37	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1004	77-7	5.76	23.01	39.81	7.12	4	
1	1b	7	46AJ-37	4	二次加工のある剥片	硬質頁岩	1003	77-3	10.71	22.10	46.70	12.26	4	
1	1b	7	46AJ-37	5	剥片	ガラス質黒色安山岩	1004	77-8	8.02	34.63	25.60	9.89	4	
1	1b	7	46AJ-37	6	剥片	ガラス質黒色安山岩	1004			5.85	41.40	17.30	9.90	3・4
1	1b	7	46AJ-37	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	1004	77-9	6.46	27.21	37.06	7.66	4	
1	1b	7	46AJ-37	8	剥片	流紋岩	1001			0.51	11.40	16.40	3.10	3・4
1	1b	7	46AJ-37	9	剥片	ガラス質黒色安山岩	1004	77-10	10.60	28.94	42.01	8.40	4	
1	1b	7	46AJ-38	1	ナイフ形石器	硬質頁岩	1001	77-1	2.18	34.78	12.38	5.81	8	
1	1b	7	46AJ-38	3	剥片	流紋岩	1001			1.16	13.21	28.10	2.27	8
1	1b	7	46AJ-38	4	二次加工のある剥片	珪質頁岩	1002	77-4	1.87	21.77	23.07	4.84	8	
1	1b	7	46AJ-46	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1006	77-11	5.77	28.92	31.45	5.86	4	
1	1b	7	46AJ-46	2	剥片	ガラス質黒色安山岩	1006			0.51	9.10	22.70	2.90	3・4
1	1b	7	46AJ-47	1	剥片	ガラス質黒色安山岩	1004			2.91	24.30	20.60	7.80	3・4
1	1b	8	6T	3	石核	ガラス質黒色安山岩	1001	1004	82-6d	30.79	33.67	32.12	24.04	7
1	1b	8	6T	4	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001	1003	81-5b	28.78	39.60	42.54	14.02	7
1	1b	8	6T	5	原石	ガラス質黒色安山岩	1011		80-3	118.13	61.12	53.40	27.49	7
1	1b	8	6T	6	石核	ガラス質黒色安山岩	1001	1003	81-5c	59.84	17.90	41.19	21.60	7
1	1b	8	6T	7	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			6.24	32.54	26.99	7.59	7
1	1b	8	6T	9	楔形石器	ガラス質黒色安山岩	1008	1005	80-1b	19.79	33.39	32.56	13.83	7
1	1b	8	6T	10	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001	1003	81-5a	3.05	25.15	22.72	5.48	7
1	1b	8	6T	11	二次加工のある剥片	玉髓	1004		81-4	20.55	39.03	41.35	11.77	7
1	1b	8	6T	13	礫片	砂岩	1999			15.96	40.81	22.53	12.63	7
1	1b	8	6T	14	剥片	玉髓	1005			1.30	17.81	12.46	7.49	7
1	1b	8	6T	16	礫片	チャート	1999			21.65	48.86	25.23	17.33	7
1	1b	8	6T	17	二次加工のある剥片	ガラス質黒色安山岩	1001	1004	82-6c	21.45	44.94	29.15	15.40	7
1	1b	8	6T	18	礫	チャート	1999			73.73	54.32	47.55	25.80	7
1	1b	8	6T	19	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001	1004	82-6a	46.43	41.82	54.38	17.02	7
1	1b	8	6T	20	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			21.43	30.40	38.04	16.36	7
1	1b	8	6T	21	剥片	トロトロ石	1001	1002	80-2a	8.55	45.34	36.46	5.81	7
1	1b	8	6T	22	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			5.46	39.22	29.37	4.99	7
1	1b	8	6T	24	楔形石器	ガラス質黒色安山岩	1008	1005	80-1a	23.60	33.54	36.96	14.12	7
1	1b	8	6T	25	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			5.23	29.30	35.76	5.96	7
1	1b	8	6T	26	剥片	トロトロ石	1001	1002	80-2b	6.42	32.31	28.77	7.58	7
1	1b	8	6T	27	剥片	トロトロ石	1001	1002	80-2c	7.05	29.70	29.38	6.84	7
1	1b	8	6T	28	剥片	ガラス質黒色安山岩	1001			12.18	29.31	33.74	12.74	7
1	9	46AL-31	5	剥片	黒曜石	1003				0.88	11.40	13.28	8.99	8
1	9	46AL-42	2	剥片	チャート	1003				6.03	36.46	21.37	9.91	8
1	9	46AL-42	3	剥片	ガラス質黒色安山岩	1014				9.04	33.57	42.41	10.26	8
1	9	46AL-43	2	剥片	玉髓	1009				1.00	25.71	12.57	3.91	8
1	9	46AL-43	5	剥片	チャート	1002				2.90	25.38	21.63	6.61	8
1	9	46AL-43	6	橢円剥離痕のある剥片	チャート	1001		83-2		5.41	43.51	20.73	6.82	8
1	9	46AL-52	1	石核	ガラス質黒色安山岩	1013		83-1		13.06	28.76	43.00	12.46	8
単独	単独	43AI-85	1	剥片	チャート		85-2			2.56	16.99	32.83	4.91	5
単独	単独	46AK-45	3	尖頭器	硬質頁岩		85-1			2.80	22.06	18.11	5.14	8
単独	単独	47AK-20	1	石核	硬質頁岩		85-3			23.84	32.61	42.63	17.64	4
単独	単独	47AK-42	1	剥片	ホウケンフェルス					11.12	40.33	33.72	6.46	8
単独	単独	4T	3	剥片	玉髓					13.88	35.15	22.94	18.19	7
単独	単独	6T	8	礫片	チャート					64.46	49.89	36.19	28.92	7
単独	単独	6T	15	礫片	チャート					4.04	23.95	18.40	9.20	7
単独	単独	6T	23	剥片	ガラス質黒色安山岩					3.74	26.44	22.98	5.99	7

第3節 繩文時代

1 遺構 (第44・87図、図版7)

繩文時代の遺構配置は、第44図のとおりである。調査区中央部の43AH-67グリッドから(5)SK001の陥穴1基が検出された。(5)SK001は、43AH-67グリッドに位置する長楕円形の陥穴である。長軸1.52m、短軸0.90m、上部は擾乱がおよんでいたため、確認面から陥穴底面までの深さは0.41mである。長軸方位はN=5°-Eを指す。底面は平坦で、壁はわずかに開きながら立ち上がる。底部の中央よりやや北に偏して、深さ土坑底面からの深さ0.4m、上端径0.35mのピットが掘り込まれている。覆土はソフトロームが斑状に混ざる黒色土を主体とする。



第87図 陥穴

2 遺物

繩文時代の土器・石器は、遺物包含層から出土した。

(1) 繩文土器 (第88・89図、図版6・30)

確認調査および本調査によって出土した繩文土器を早期・前期・中期・晩期の4群に大別し記載することにする。中期の加曾利E I式土器が主体を占める。

第1群 早期の土器 (第88図1~6)

1~5は夏島式土器である。LR撚糸文が縦位に施されている。1・2は口縁部破片で口唇部が肥厚している。胎土には砂粒が多く含み、焼成が良好である。3~5は胴部破片である。6は田戸下層式土器である。器厚が厚く、口縁部下半には横位に爪形文が施されている。

第2群 前期の土器 (第88図7~9)

7~9は黒浜式土器である。いずれも胴部破片で、羽状繩文が施されている。

第3群 中期の土器 (第88・89図10~49)

10~14は五領ヶ台式から阿玉台直前型式のものをまとめた。10~12は縦位に細線文が施されている。13は平線口縁をなし、頸部に三角印刻文が施されている。14は隆起線が施されている。

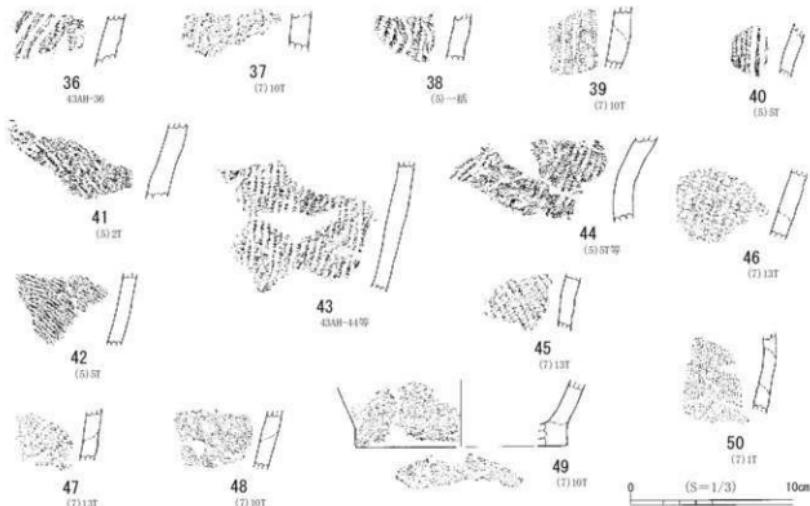
15は阿玉台I b式土器である。角押文の弧線が施されている。16~19は阿玉台I b~II式のものをまとめた。16・17は同一個体である。波状口縁をなし、口縁部に円環状の隆帯が貼り付けられている。口唇断面は角頭状を呈している。18は三角形刻みが横位に施されている。19は波状口縁で、口唇部上端に刻み目が施されている。20は阿玉台III~IV式である。胴部に条線文が施されている。

21~23は中期中葉のものをまとめた。頸部に帶状の隆帯が貼り付けられている。21はくの字に外へ張り出す器形を呈する。

24~38は加曾利E I式土器である。本遺跡の主体を占める。24・25は波状口縁で、口唇部上端に沈線をめぐらしている。24は口縁部には隆起線で満巻文が施されている。25は口縁部に太い沈線で波状文が施されている。26・27は口縁部に隆帯が横位に貼り付けられている。27は2本一組の隆線が満巻状に施されている。28は環状把手である。把手部上端と下部に隆線が満巻状に施されている。29・30は口縁部と胴部の



第88図 繩文土器(1)



第89図 繩文土器(2)

境に沈線をめぐらしている。31・32は波状に沈線が施されている。33は縦位と横位の2本の沈線によって区画されている。34～36は太い沈線、37は細い沈線、38は蛇行沈線が懸垂されている。

39・40は加曾利E II式土器である。沈線が口縁部から胴部にかけて懸垂されている。

41～49は加曾利E I式と思われるものをまとめた。41～47は胴部破片である。41・42がL R 繩文、43～47がR L 繩文が施されている。48は無文の胴部破片である。49は平底の底部である。

第4群 晩期の土器 (第89図50)

50は撚糸文が縦位に施された粗製土器である。千網式土器と思われる。

(2) 繩文石器 (第90図、図版7・11)

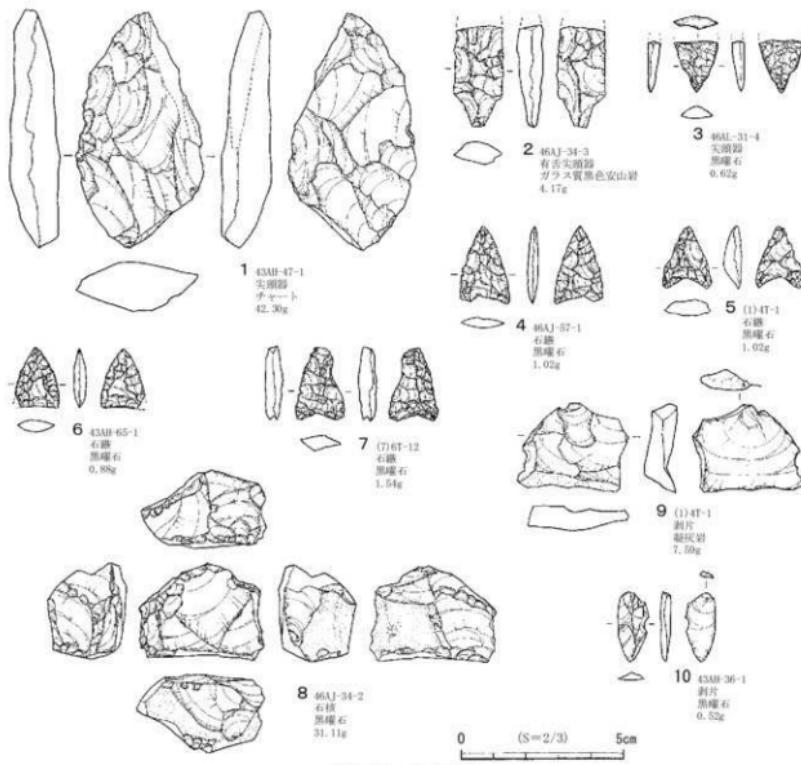
遺構外から出土した繩文石器を10点図示した。遺構内から石器は出土しなかった。

1は尖頭器である。厚みのある剥片を素材として表裏両面のほぼ全面に平坦剝離が施されている。素材の主要剝離面は裏面の右中央部にわずかに残っている。表面左上部は発掘時に折れて破損している。2は有舌尖頭器である。器体の中央部付近から破損しており基部が残存している。表面全面に平坦な調整加工が施されている。3は尖頭器である。基部がとがった形状をしていることから、有舌尖頭器と分類することも可能であるが、2のような明確な舌部はみられない。器体の中央部から折れている。

4～7は石鏃である。いずれも黒曜石が用いられ、脚部の抉りがわずかにみられる。4は全体形状が二等辺三角形を呈し、平坦な調整加工が全面に施されている。5・6は全体形状が正三角形を呈する。5は出土した石鏃のなかで脚部の抉りが比較的深い。7は先端部付近が湾曲していることから、先端部が破損

したものを再加工したものと思われる。

8は石核である。良質で夾雜物の少ない漆黒の黒曜石が用いられている。右面・裏面・下面に自然面がみられ、角礫を素材としている。打面転移を頻繁に繰り返しながら横長剥片を剥離している。9・10は剥片である。9は横長剥片で良質の凝灰岩が用いられている。10は縦長剥片である。



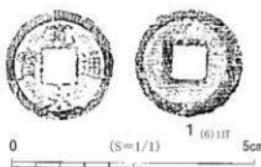
第90図 繩文石器

第4節 近世

遺物

近世銭貨（第91図、図版30）

寛永通寶である。背面は無文である。2.21g、外縁外径22.7mm、外縁内径18.8mm、内郭外幅7.8mm、内郭内幅7.0mm、外縁厚1.0mm、文字面厚0.8mmである。(6)11トレンチから出土した。

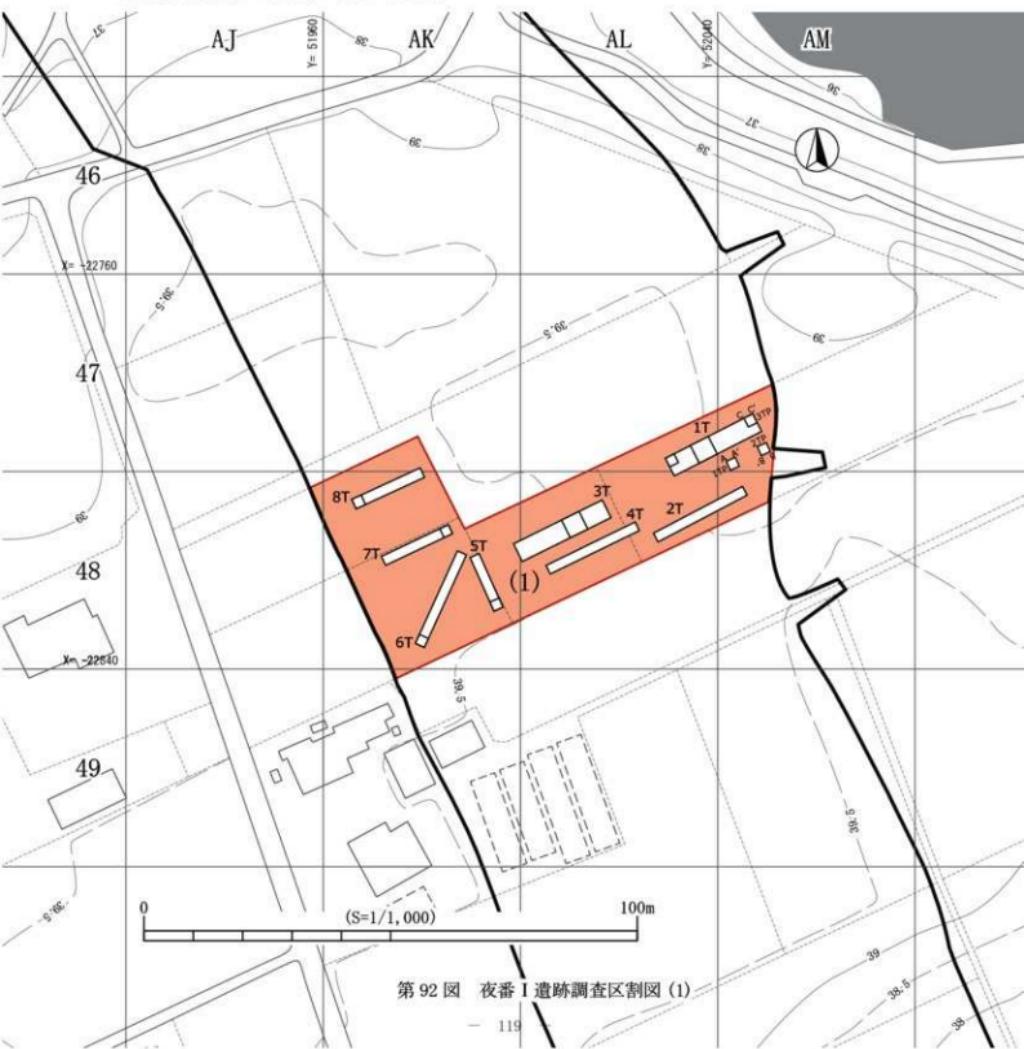


第91図 銭貨

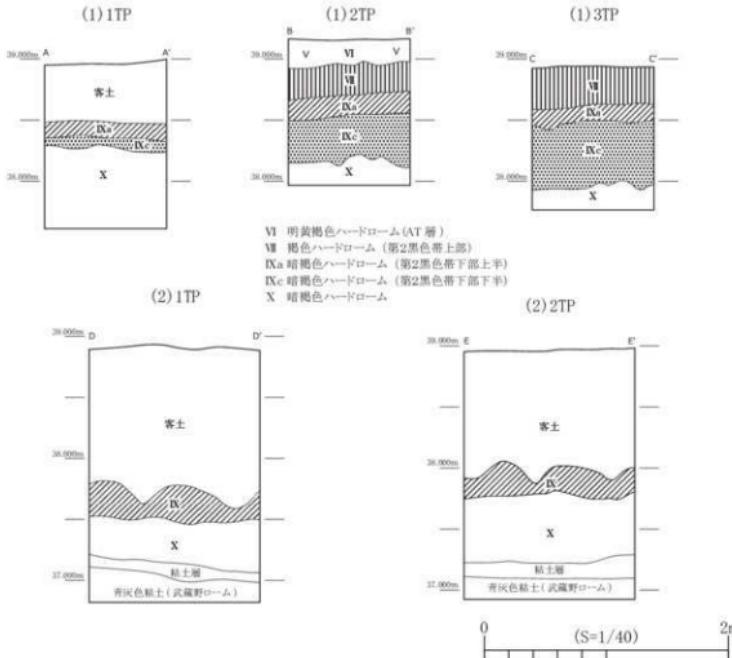
第9章 夜番I遺跡

第1節 遺跡の概要（第3・92～94図、図版8）

成田市（旧香取郡大栄町）川上245-1931の一部ほかに所在する夜番I遺跡は、尾羽根川最上流域左岸、標高39m前後の台地上に立地する（第3図）。谷津の谷頭の西方地点で、夜番II遺跡に南接する位置にあり、栗山川流域との分水界の北辺にあたる。







第94図 夜番I遺跡基本土層図

本書では、平成26年度および平成27年度に実施した第1・2次調査（計4,786m²）の成果を報告する。調査区割およびトレンチ配置は第92・93図のとおりで、2地点は南北に約230m離れている。調査対象範囲を大グリッド表記で記すと、北方の(1)が47AK~47AM、48AK~48AM、南方の(2)が53AO、54AM~54AOとなる。

第1次調査は、標高39m前後の台地上2,394m²を対象として実施した。トレンチ調査の結果、広範囲において烟作のトレンチャによる擾乱をうけていることが判明し、上層で、縄文土器と石器、古墳時代土師器が少量出土したものの遺構は検出されず、確認調査の範囲で調査を終了した（第92図）。下層では、擾乱中から石器の剥片が出土したため、出土地点を中心に、大きめのグリッドを2か所設定したが、遺構・遺物とも検出せず、確認調査の範囲で調査を終了した。

第2次調査は、遺跡南端部に近い標高39m前後の台地上2,392m²を対象として実施した。トレンチ調査の結果、縄文時代の石器および中世の石製品が少量出土したものの、遺構は検出されなかった。また、下層においても、遺構・遺物ともに検出しなかったことから、確認調査の範囲で調査を終了した（第93図）。基本層序は、第94図のとおりである。

第2節 遺構と遺物

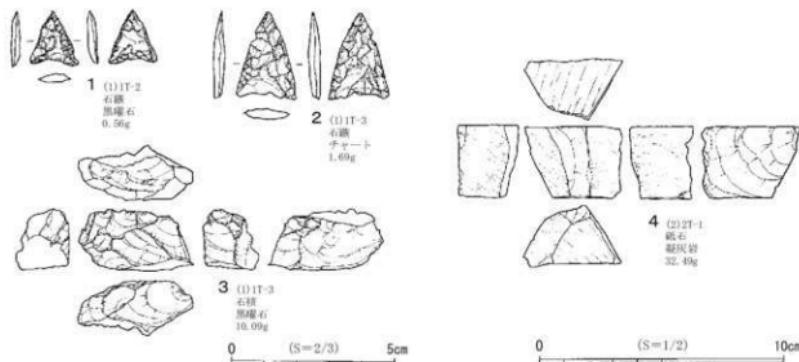
実測図として図示できたものは、上層のトレンチ調査から出土した4点の石器である。

出土石器（第95図、図版12）

1～3は縄文石器である。第1次調査の1トレンチから出土している。
1・2は石鏃である。1は厚みのない幅広の剥片を素材として、周縁部に平坦な調整加工が施されている。小型で全体形状が正三角形を呈し、脚部の抉りが浅い。黒曜石が用いられている。2は平坦剥離が器体のほぼ全面に施されている。全体形状が二等辺三角形を呈し、脚部の抉りが浅い。チャートが用いられている。

3は石核である。黒曜石が用いられている。打面転移を頻繁に繰り返しながら剥片を剥離している。剥離順序は裏面上部を打面として上面方向に横長剥片を剥離→上面を打面として裏面方向に剥片を剥離→右側縁下部を打面として下面方向に縦長剥片を剥離→下面左部を打面として表面方向に縦長剥片を剥離→上面を打面として表面方向に小型の剥片を剥離している。

4は砥石である。第2次調査の2トレンチから出土している。表面中央部と裏面は折断され、上面は斜め方向の線状痕がみられることから鋸などで切断されたものと思われる。研磨痕が顕著な面は両側面と下面である。凝灰岩が用いられている。時期は明確ではないが、形態的な特徴から、中世のものである可能性が高い。



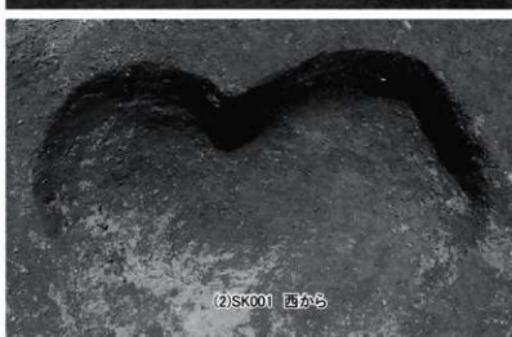
第95図 上層出土石器

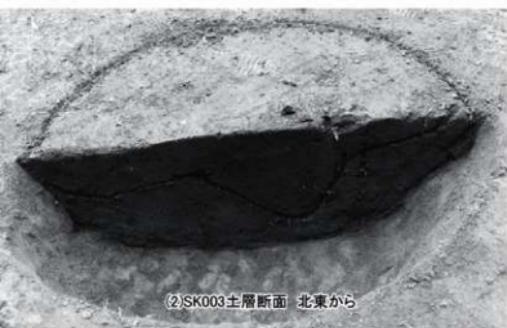
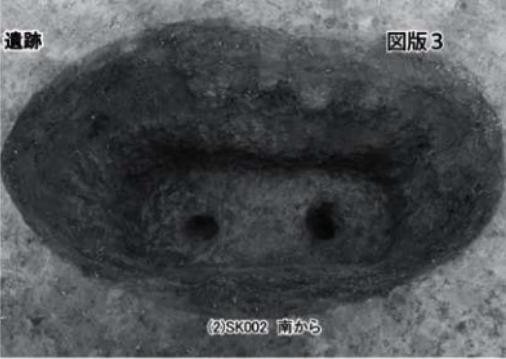
写 真 図 版

図版1



遺跡周辺航空写真(昭和58年6月撮影)





辰巳ヶ入遺跡

(1)SK001土層断面 南西から

(1)SK001 南東から

(1)I3TP土層断面 北西から

(1)基本土層

水の上Ⅰ遺跡

(1)3T 西から

一坪田入Ⅱ遺跡

(1)遠景 南西から

(1)竹東塙 南から

一坪田入Ⅱ遺跡

図版5

(1)地山と埋土の境界 東から

(1)3T東端 南から

(2)遺構 北西から

(2)南西部分遺物出土状況 西から

(2)南東部分遺物出土状況 西から

(2)遺構検出状況 西から

(2)SK001土層断面 南東から

(2)SK001 南東から





(8)1bユニット第6ブロック東部 南東から

(8)1bユニット第7ブロック東部 南から

(4)1bユニット第7ブロック西部 西から

(7)1bユニット第8ブロック 北東から

(9)1bユニット第8ブロック南方土層断面 北から

(8)第9ブロック東部 南東から

(2)1TP土層断面 南西から

(2)2TP土層断面 北西から

旧石器 第1文化層 1aユニット

第1ブロック



第2ブロック



夜番II遺跡旧石器時代出土石器(1)

図版10

旧石器 第1文化層1bユニット

第4ブロック



第5ブロック



第6ブロック



夜番II遺跡旧石器時代出土石器(2)

旧石器 第1文化層 1b ユニット

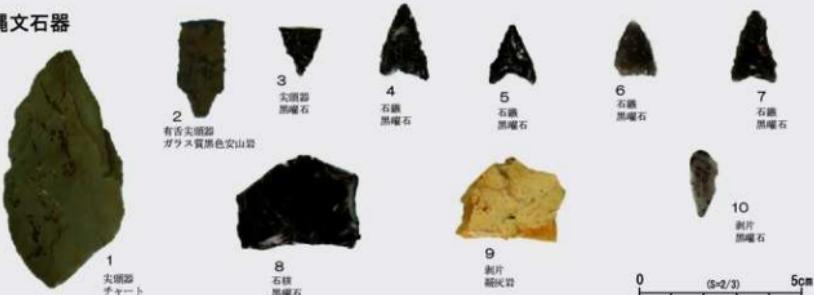
第7ブロック



第8ブロック

第1文化層
第9ブロック

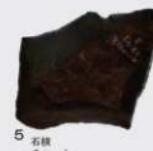
単独出土石器



夜番II遺跡旧石器時代出土石器(3)・縄文時代出土石器

図版12

大安場I遺跡



一坪田入II遺跡



34 磨石
安山岩

35 磨石
砂岩

夜番I遺跡



0 (S=1/2) 10cm

0 (S=2/3) 5cm

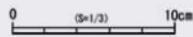
大安場I・大安場V・一坪田入II・夜番I遺跡出土上層石器



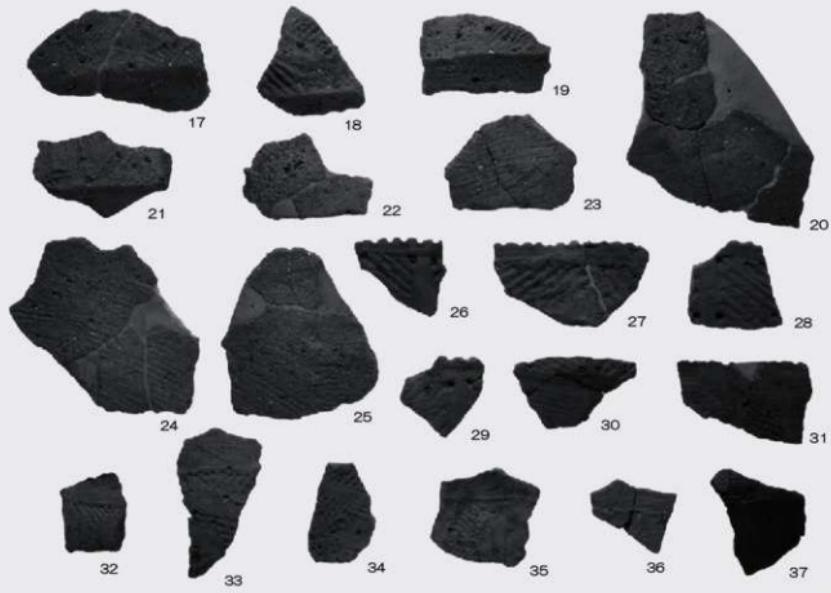
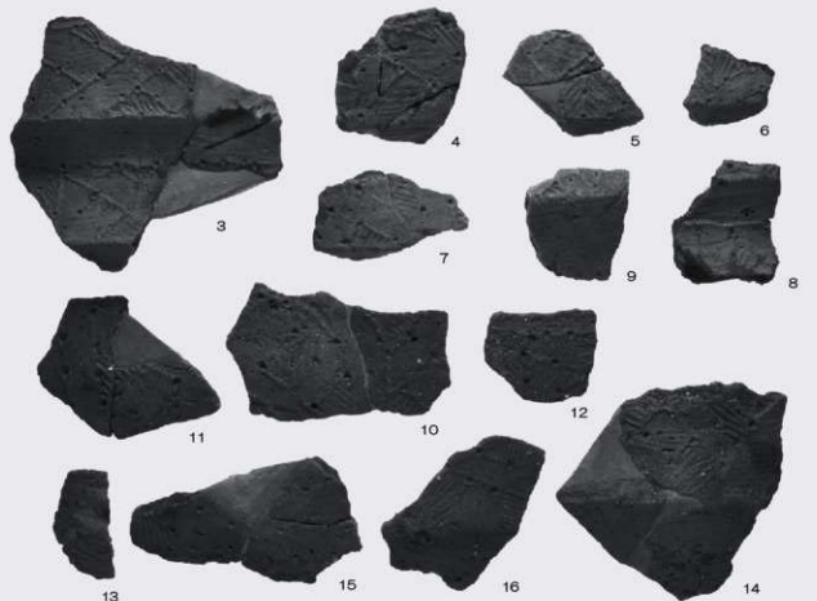
1



2

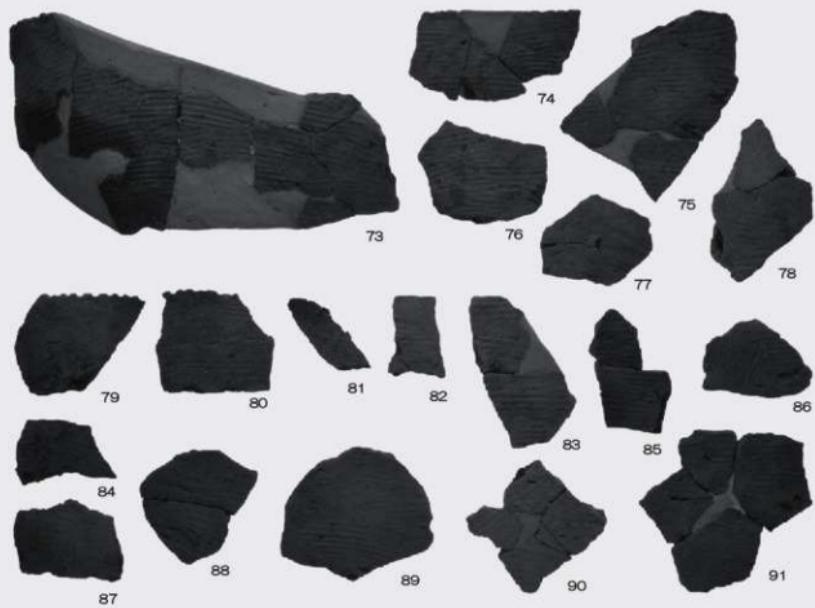
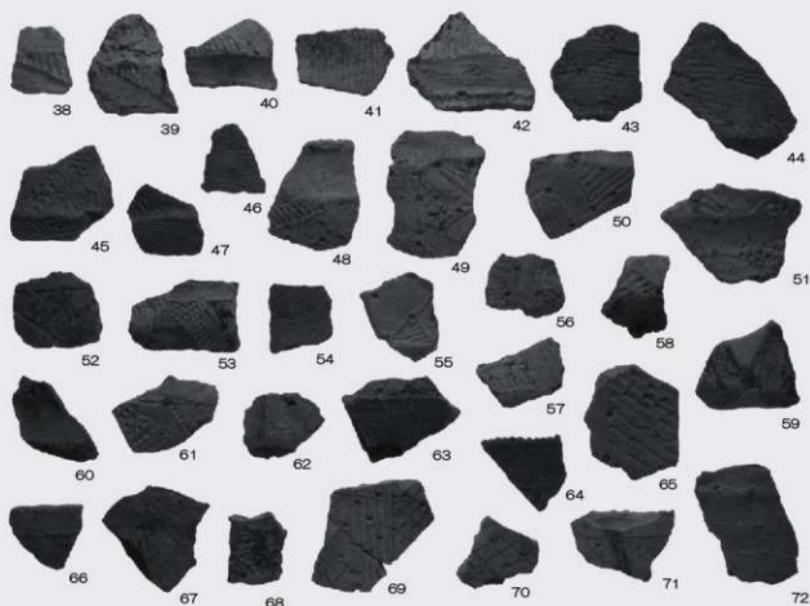


大安場 I 遺跡出土縄文土器(1)



0 (S=1/3) 10cm

大安場 I 遺跡出土縄文土器 (2)



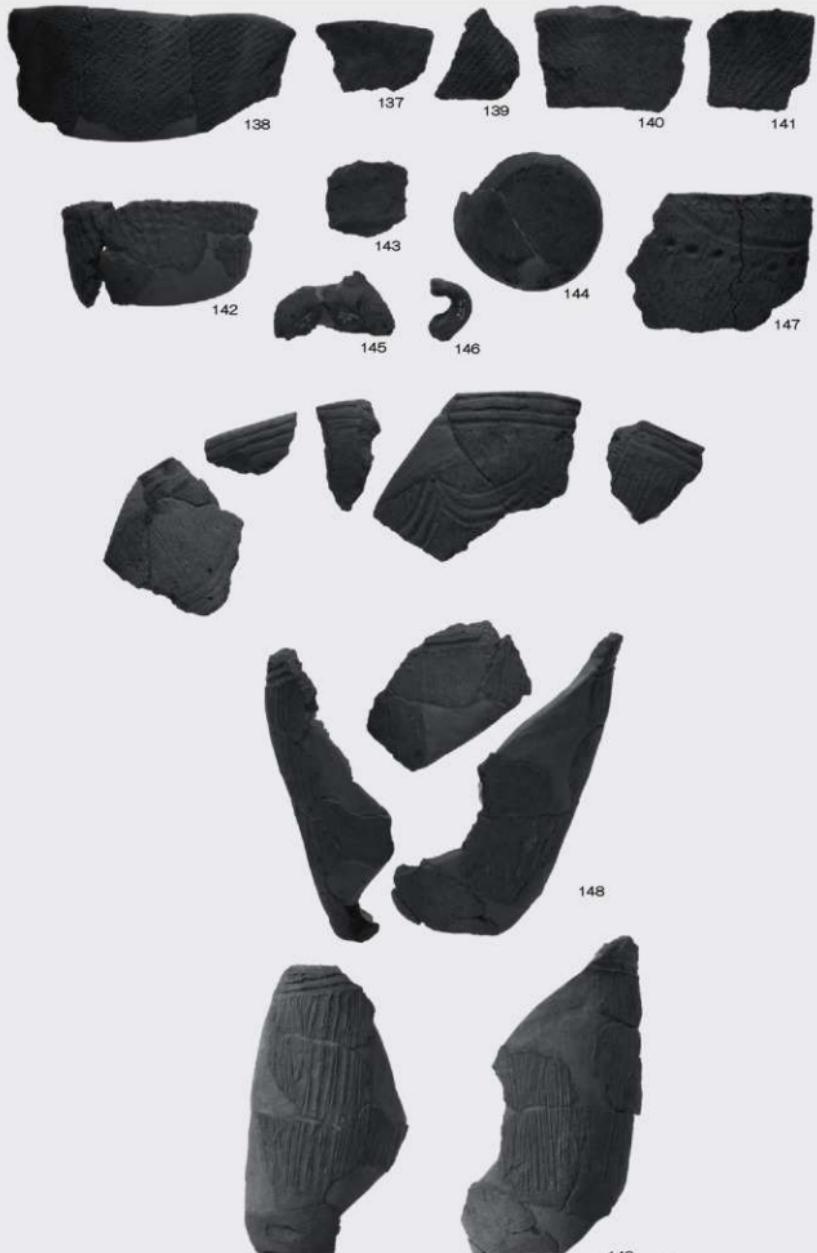
0 (S=1/3) 10cm

大安場 I 遺跡出土縄文土器 (3)

図版16



大安場 I 遺跡出土縄文土器(4)



大安場 I 遺跡出土縄文土器(5)

大安場 I 遺跡



149

150



151

152

153

154

水の上 I 遺跡

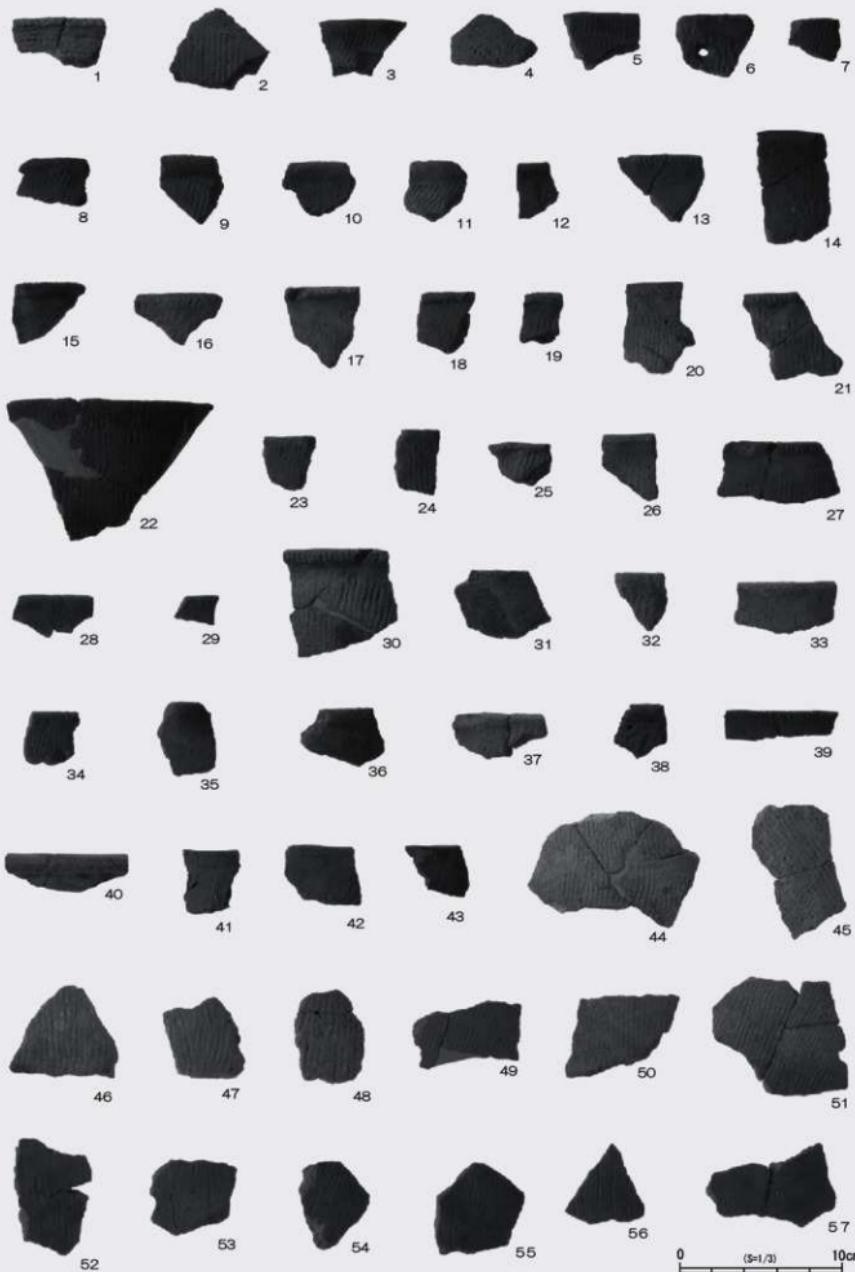


1

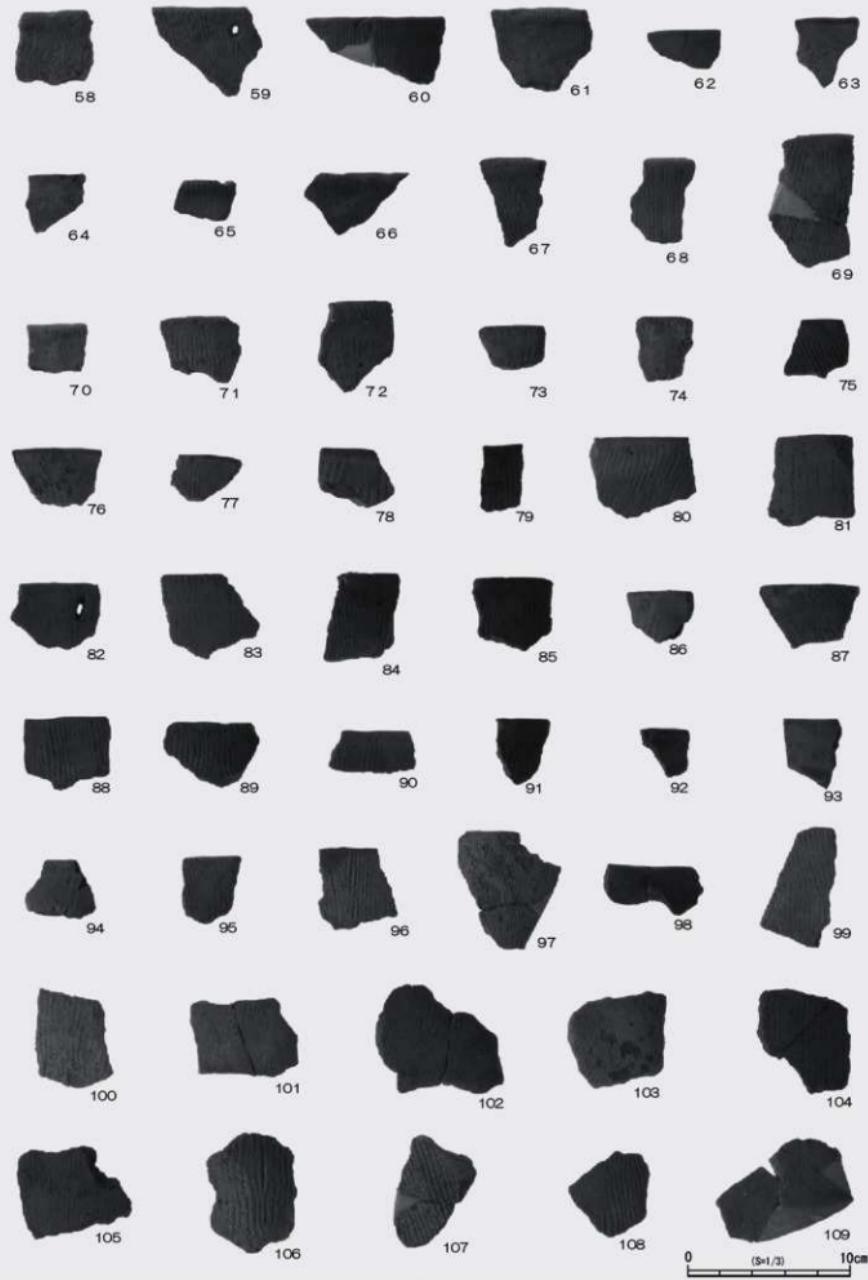
2



大安場 I 遺跡出土縄文土器(6)・水の上 I 遺跡出土縄文土器

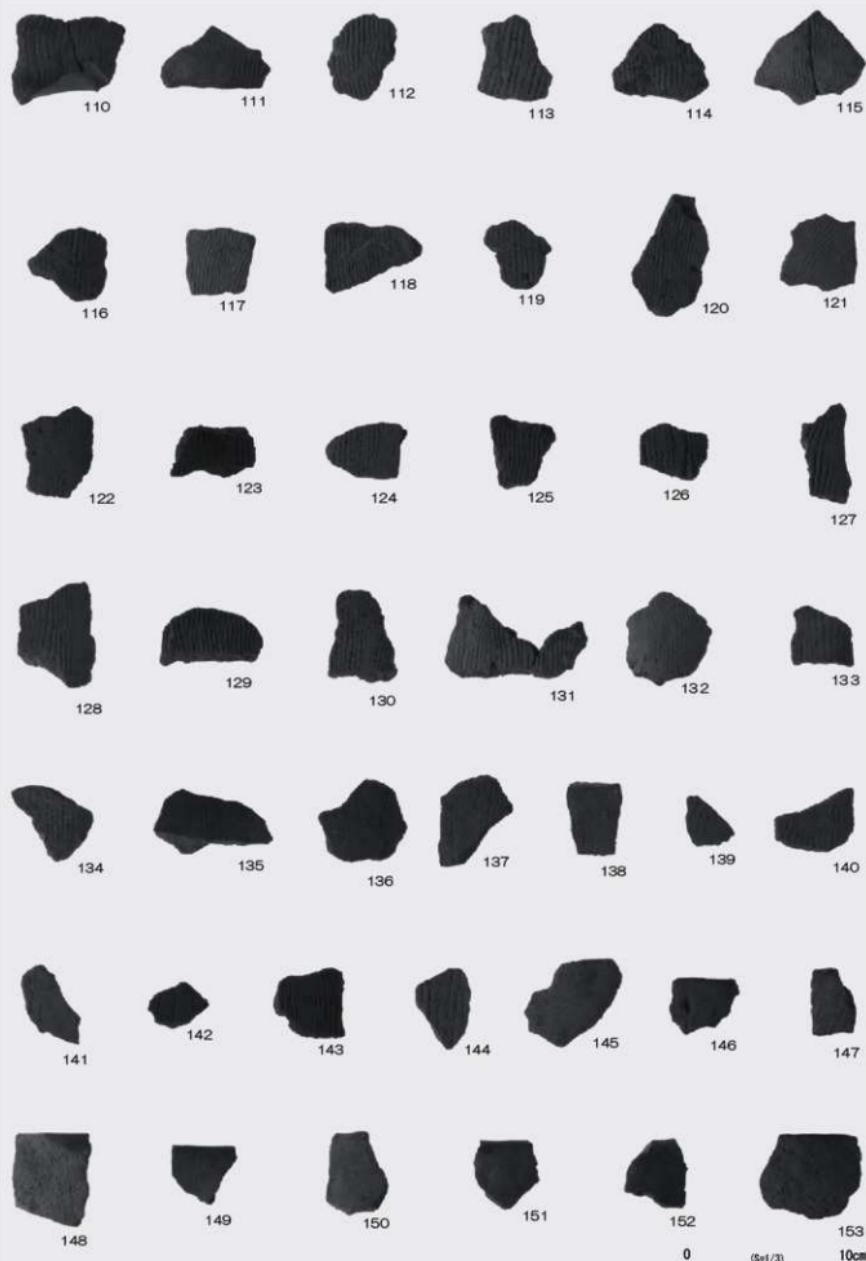


一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(1)



一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(2)

0
(Scale 1/3)
10cm



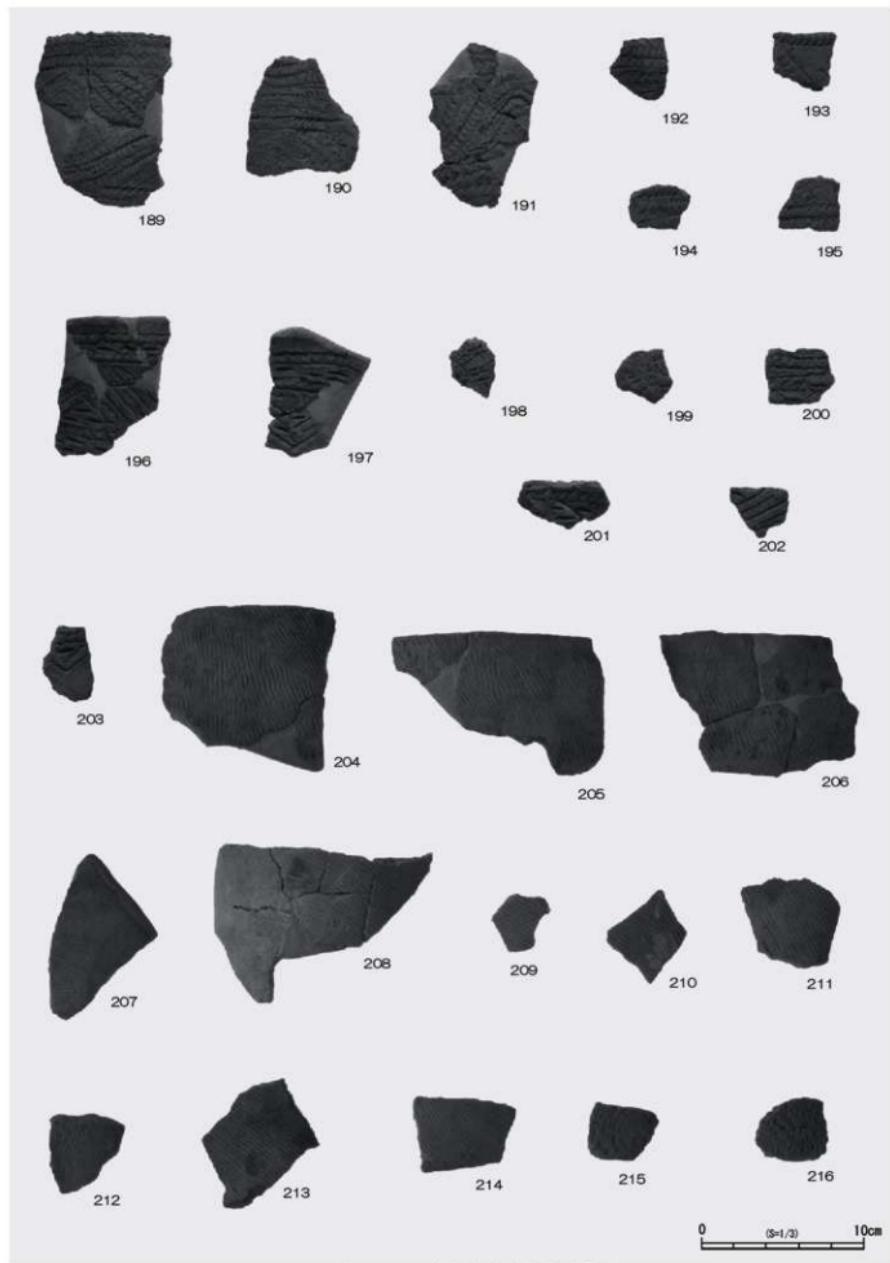
0 (Scale 1/3) 10cm

一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(3)

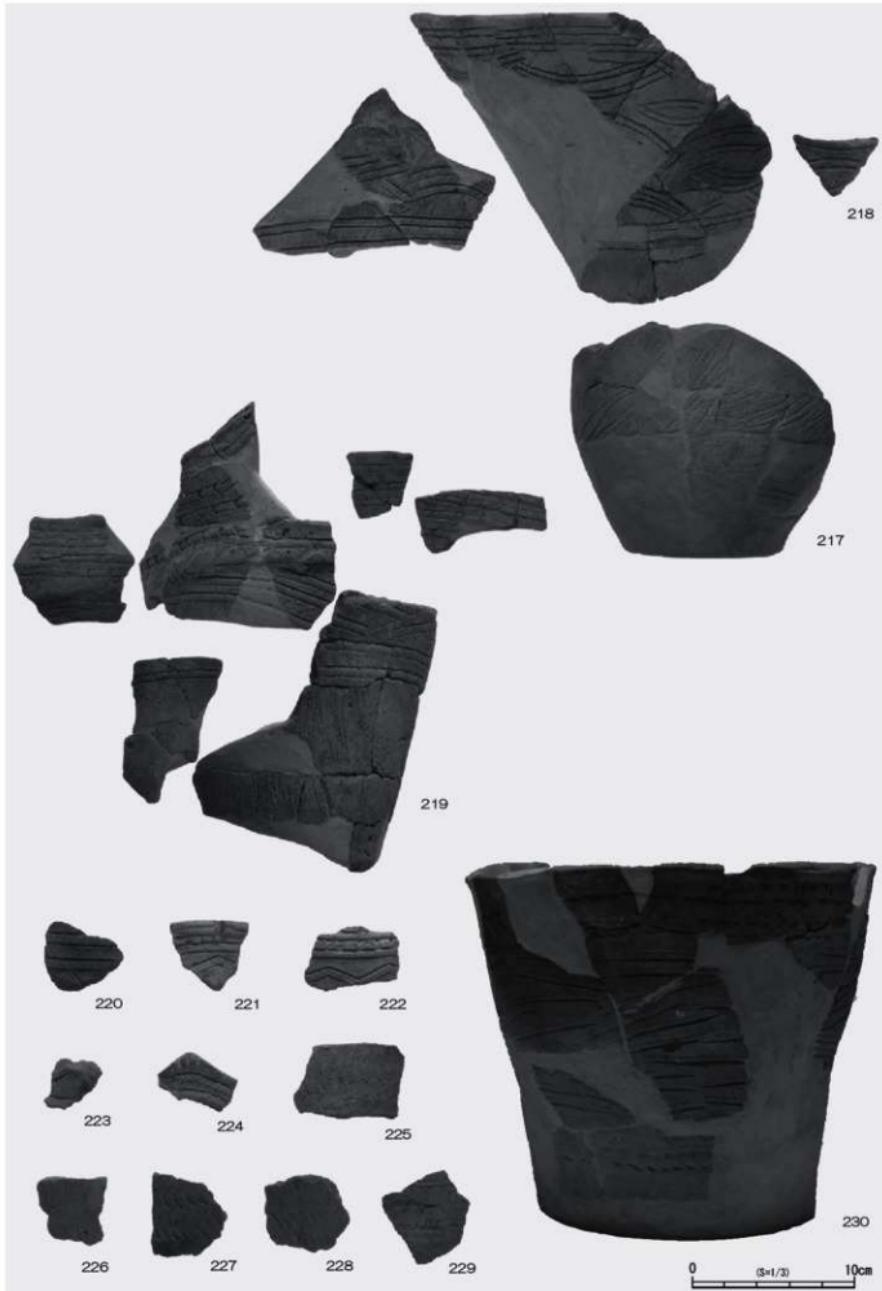


一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(4)

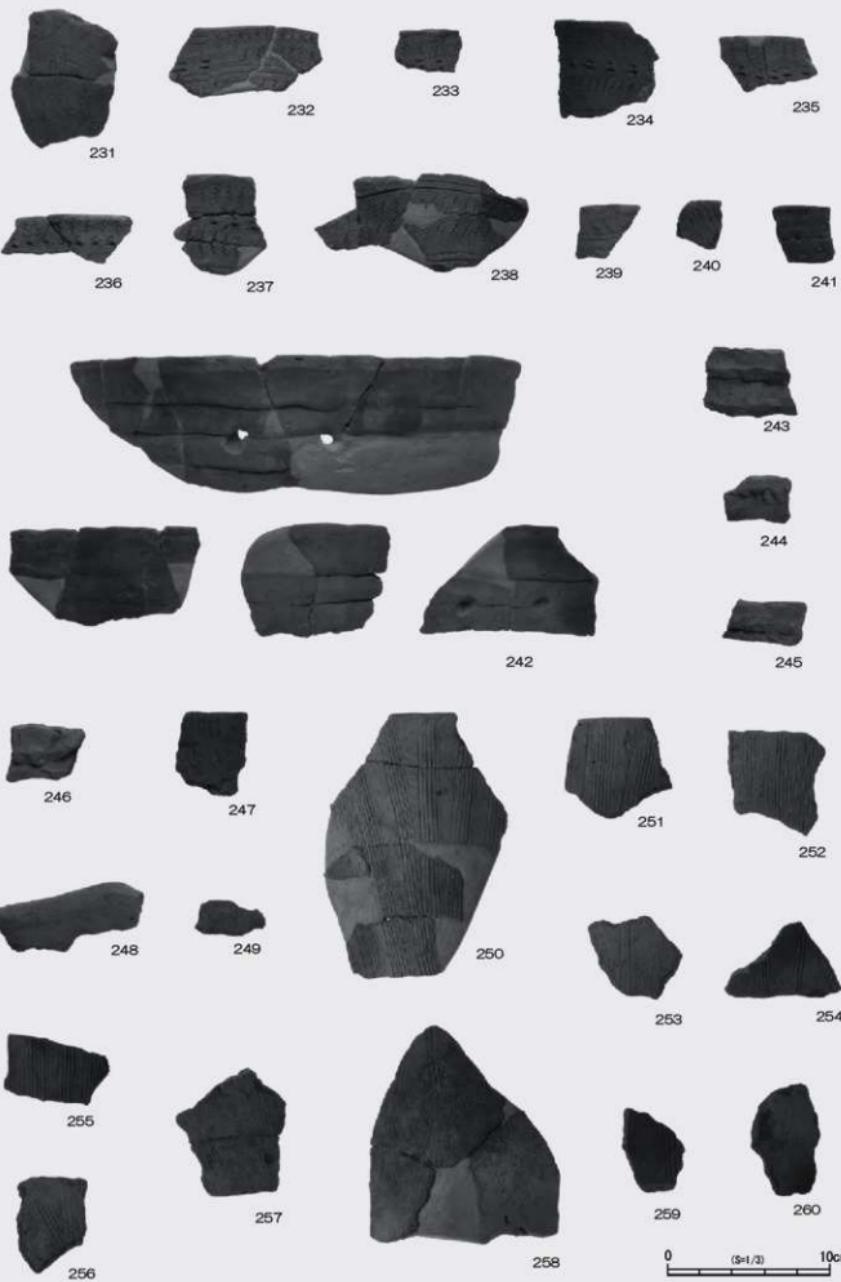
0 (S=1/3) 10cm



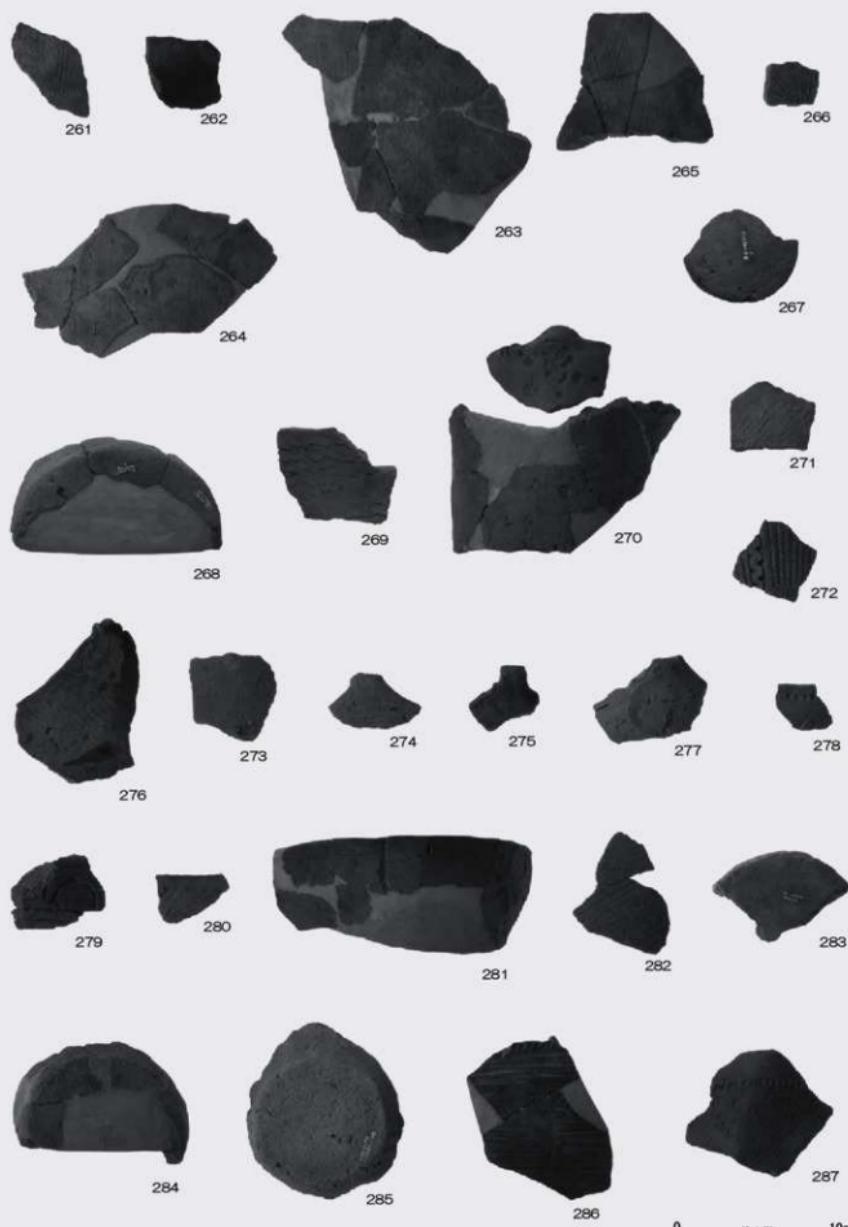
一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(5)



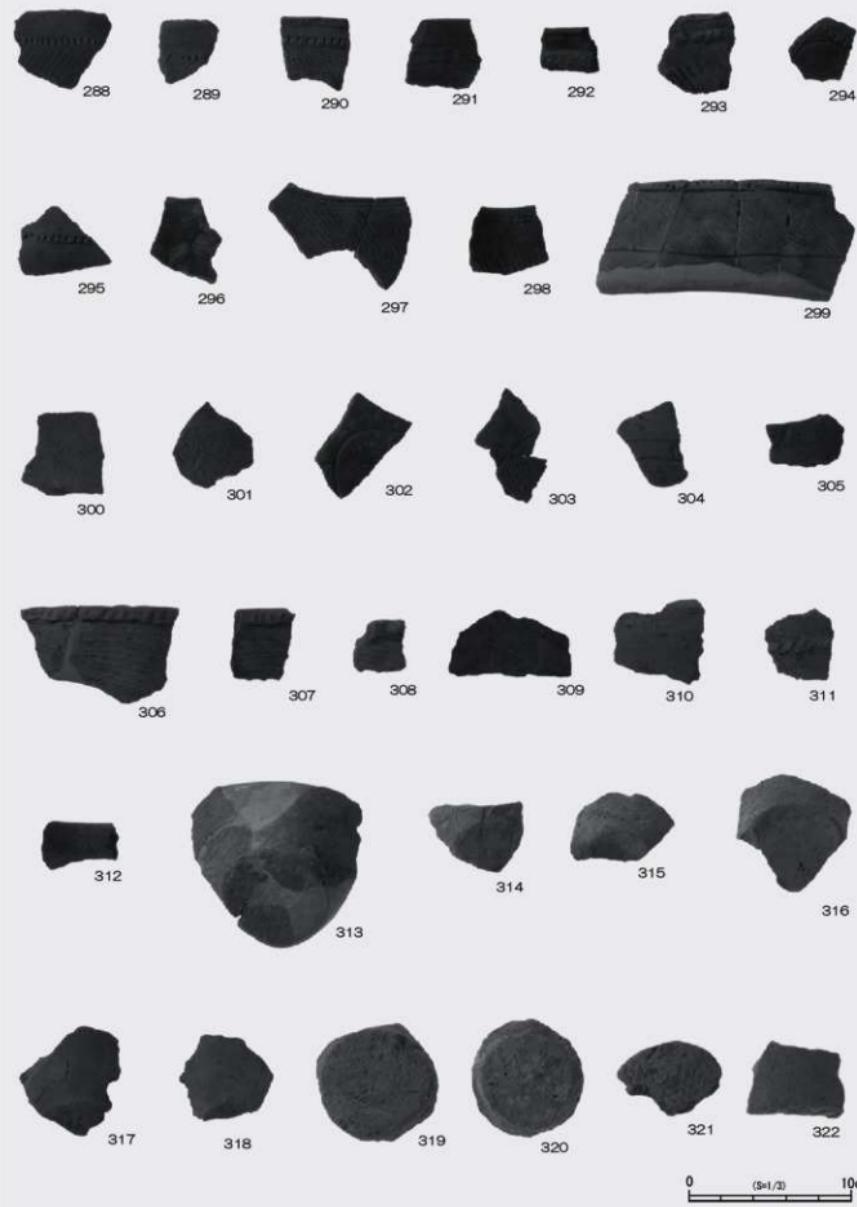
一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(6)



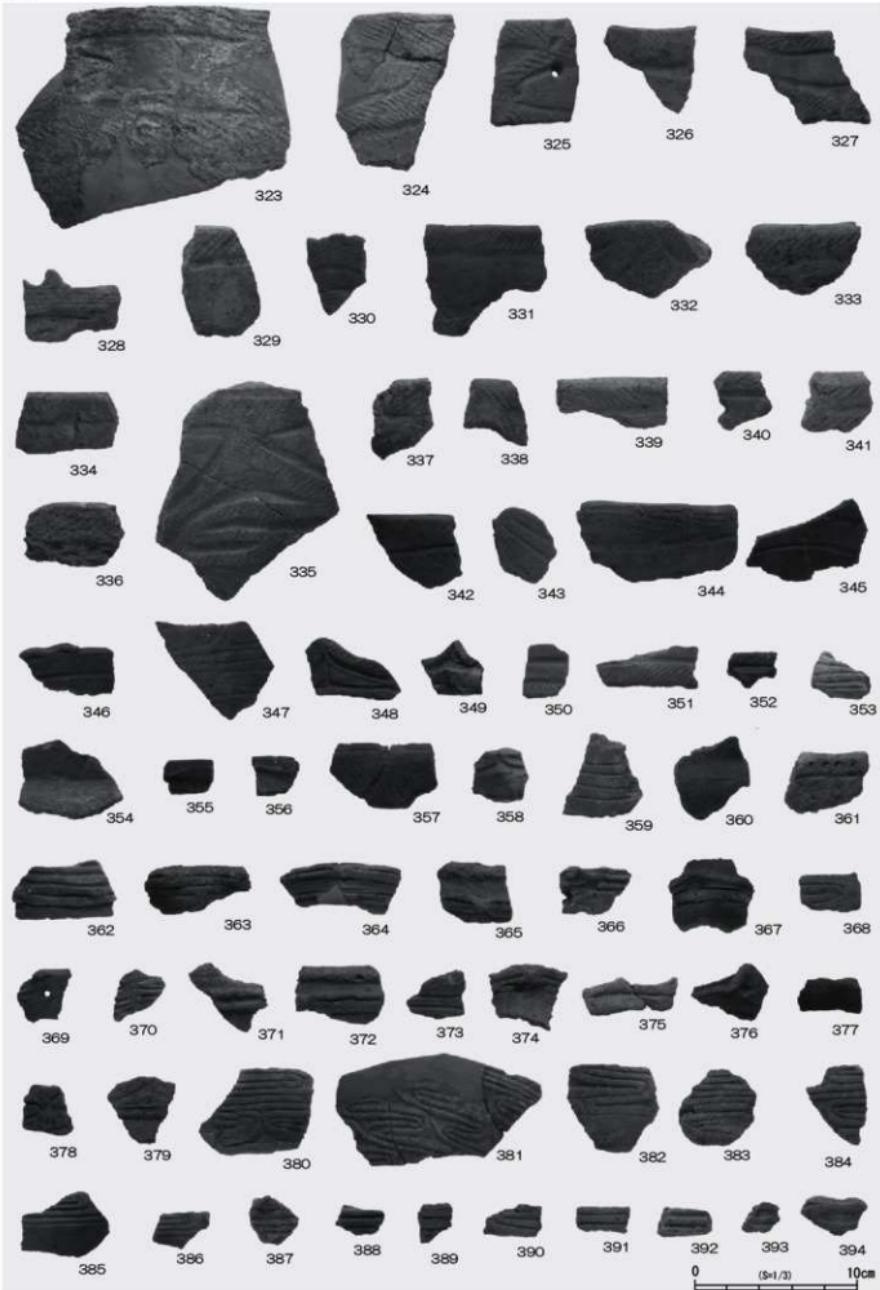
一坪田入Ⅱ遺跡出土繩文土器(7)



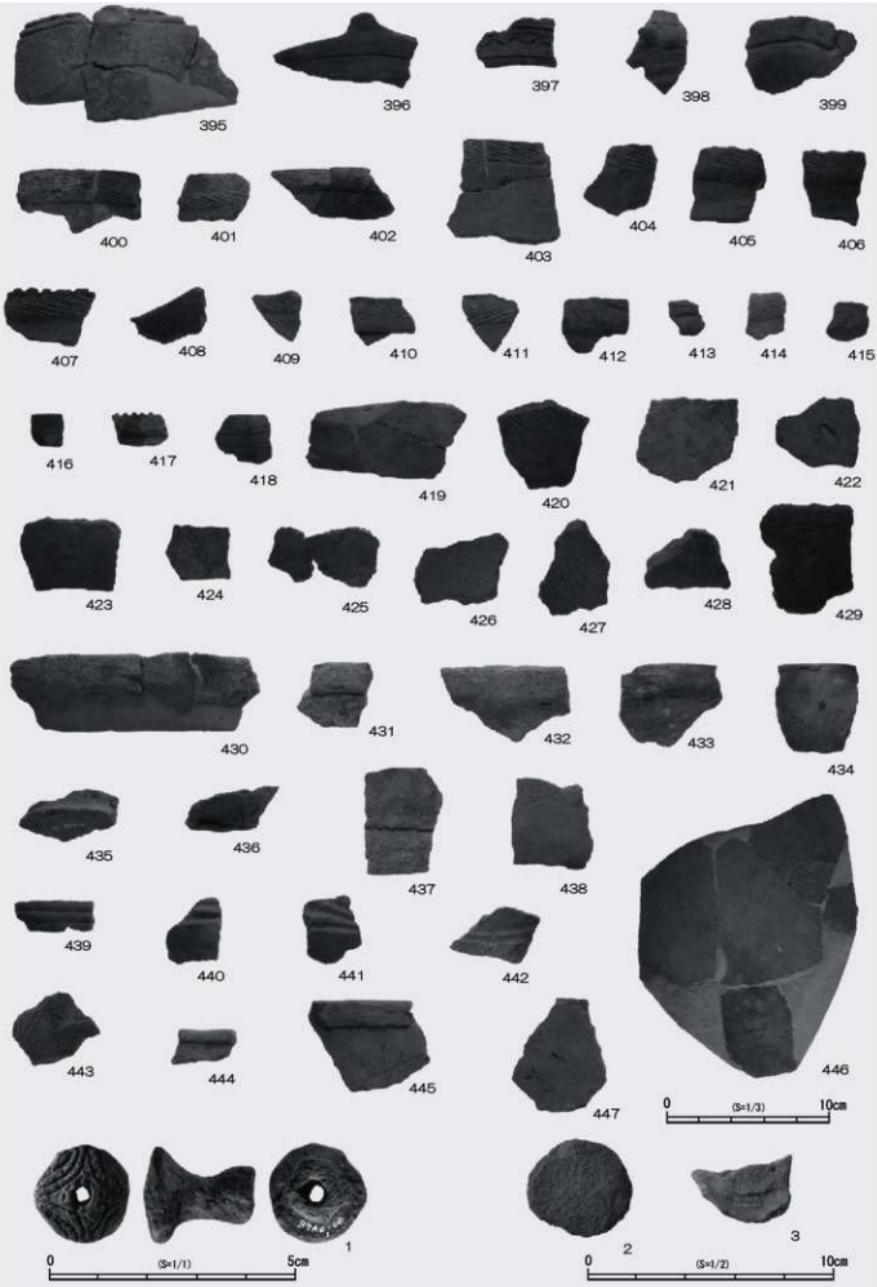
一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(8)



一坪田入Ⅱ遺跡出土繩文土器(9)

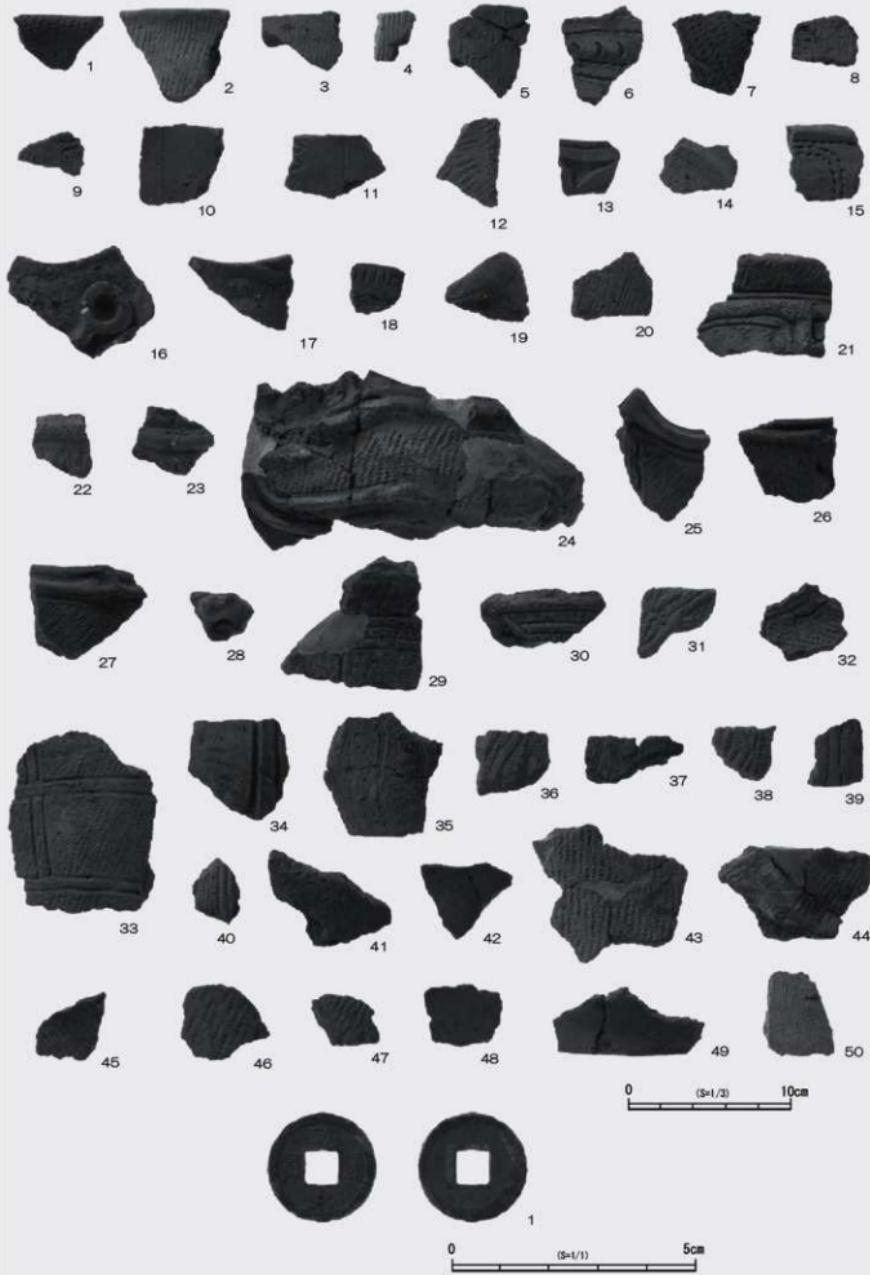


一坪田入Ⅱ遺跡出土縄文土器(10)



一坪田入II遺跡出土縄文土器(11)・土製品

図版30



夜番II遺跡出土繩文土器・錢貨

報告書抄録

ふりがな	しゅとけんちゅうおうれんらくじどうしゃどまいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ						
書名	首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書						
副書名	成田市大安場Ⅰ遺跡・辰巳ヶ入遺跡・大安場Ⅳ遺跡・大安場Ⅴ遺跡・水の上Ⅰ遺跡・一坪田入Ⅱ遺跡・夜番Ⅱ遺跡・夜番Ⅰ遺跡						
巻次	34						
シリーズ名	千葉県教育振興財團調査報告						
シリーズ番号	第776集						
編著者名	新田浩三・城田義友・大久保奈奈						
編集機関	公益財團法人 千葉県教育振興財團						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL043-424-4848						
発行年月日	西暦2019年2月15日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所取遺跡名	コード	経緯度		調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	北緯	東經				
成田市吉岡字大安場 (1)・(2)	12211 092	35度 48分 33秒	140度 23分 39秒	20150302 ~ 20161028	14,117m ²		
成田市吉岡字大安場 (1)	12211 095	35度 48分 29秒	140度 23分 45秒	20150707 ~ 20150807	2,642m ²		
成田市吉岡字大安場 (1)	12211 093	35度 48分 16秒	140度 24分 04秒	20150413 ~ 20150508	3,110m ²		
成田市吉岡字大安場 (1)	12211 094	35度 48分 13秒	140度 24分 06秒	20150512 ~ 20150609	2,324m ²	道路建設に伴う埋蔵文化財調査	
成田市水の上 (1)	12211 096	35度 48分 05秒	140度 24分 11秒	20150817 ~ 20150924	854m ²		
成田市多良貝 (1)・(2)	12211 090	35度 47分 50秒	140度 24分 19秒	20141201 ~ 20150302	2,101m ²		
成田市川上 (1)~(8)	12211 089	35度 47分 40秒	140度 24分 26秒	20141215 ~ 20160831	16,637m ²		
成田市川上 (1)・(2)	12211 091	35度 47分 28秒	140度 24分 36秒	20150203 ~ 20150630	4,786m ²		
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大安場Ⅰ遺跡 (1)・(2)	包蔵地	縄文時代	陥穴2基、土坑9基	縄文土器・石器	縄文時代早期の鶴ガ島台式土器を主体とする。		
辰巳ヶ入遺跡 (1)	包蔵地	縄文時代	陥穴1基	縄文土器・石器			
大安場Ⅳ遺跡 (1)	包蔵地	奈良・平安時代		土師器			
大安場Ⅴ遺跡 (1)	包蔵地	縄文時代		縄文土器・石器			
水の上Ⅰ遺跡 (1)	包蔵地	縄文時代		縄文土器			
一坪田入Ⅱ遺跡 (1)・(2)	包蔵地	縄文時代	陥穴1基	縄文土器・石器、土製耳飾、石製块状耳飾	縄文時代晩期の千網式土器がまとまって出土した。		
夜番Ⅱ遺跡 (1)~(8)	包蔵地	旧石器時代	石器集中地点9か所	ナイフ形石器・尖頭器・楔形石器・彫器・敲石	IX層上部から重扇状ブロック群が2か所検出された。		
夜番Ⅰ遺跡 (1)・(2)	包蔵地	縄文時代	陥穴1基	縄文土器・石器	縄文時代中期の加曾利E I式土器を主体とする。		
要約	今回報告する8遺跡は、成田市（旧香取郡大栄町）に所在し、利根川水系根本名川支流の尾羽根川上流域を囲むように標高33m~40mの台地上に立地している。旧石器時代では、夜番Ⅱ遺跡からIX層上部出土の重扇状ブロック群が出土し、ナイフ形石器・楔形石器・彫器を伴う良好な石器群が検出された。縄文時代では、7遺跡から包含層が検出された。早期から晩期までの遺物が出土しているが、遺構数は希薄である。その中にあって、大安場Ⅰ遺跡から早期の鶴ガ島台式土器、一坪田入Ⅱ遺跡から晩期の千網式土器、夜番Ⅱ遺跡から中期の加曾利E I式土器がまとめて出土した。						

千葉県教育振興財団調査報告第 776 集

首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 34

—成田市大安場 I 遺跡・辰巳ヶ入遺跡・大安場 IV 遺跡・大安場 V 遺跡・
水の上 I 遺跡・一坪田入 II 遺跡・夜番 II 遺跡・夜番 I 遺跡—

平成 31 年 2 月 15 日発行

編 集 公益財団法人 千葉県教育振興財団

発 行 東日本高速道路株式会社
千葉市美浜区若葉 2-9-3

公益財団法人 千葉県教育振興財団
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 株式会社 弘 文 社
市川市市川南 2-7-2
